

上泉唐ノ堀遺跡 上泉新田塚遺跡群

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2011.11

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

二〇一一年

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



上泉唐ノ堀遺跡 上泉新田塚遺跡群

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2011.11

国 土 交 通 省

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群は群馬県前橋市上泉町に所在し、国土交通省による一般国道（上武道路）改築工事に伴い、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって平成18～20年度にかけて発掘調査が行われました。2つの遺跡からは、旧石器時代から縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世に至る遺構と共に多数の遺物が発見されました。

本書は、2つの遺跡の縄文時代以降の調査成果をまとめたものです。

上泉唐ノ堀遺跡は、工事工程により分けた7工区と8工区にまたがっています。縄文時代では住居1軒が検出され、7工区ですでに報告されている集落の西縁辺部を明らかにすることができました。

上泉新田塚遺跡群では、縄文時代前期の住居11軒、古墳時代の住居1軒、奈良・平安時代の住居4軒のほか、土坑、溝、堀、道、井戸などが検出され、前橋市指定史跡『新田塚古墳』の周堀や新たに隣接する古墳1基を検出することができました。縄文時代前期の集落は、赤城山麓地域における縄文集落の変遷過程を解明していく上で貴重な資料です。堀は、カラノボリと伝承されてきたもので規模の大きさを知ることができました。伝承のとおりであるならば、沼を経由して赤城山麓の中腹にまでたどることができます。掘削された時代はいつなのか、目的は何かと課題を提起したものといたします。

最後に発掘調査から報告書の作成まで、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等からは種々、ご指導を賜りました。このたび、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表しますとともに、併せて本報告書が地域の歴史を解明する上で、多くの皆様に活用されることを願ひまして、序といたします。

平成23年11月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その3）による、上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 上泉唐ノ堀（かみいずみ からのほり）遺跡は、群馬県前橋市上泉町2470番地ほかに所在する。
調査対象面積6,808.40m²である。遺跡略称は「J K 52b」である。
上泉新田塚（かみいずみ につたづか）遺跡群は、同上泉町2062- 1 番地ほかに所在する。
調査対象面積は14,578.42m²である。遺跡略称は「J K 53」である。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間
平成18年度：平成18年7月1日～平成19年3月31日
平成19年度：平成19年4月1日～平成19年5月31日
平成20年度：平成20年4月1日～平成20年6月30日
- 6 調査体制は次のとおりである。
平成18年度 飯塚卓二主任専門員（総括）、木津博明主任専門員（総括）、桜岡正信専門員（総括）長澤典子調査研究員
遺跡掘削請負工事：須賀工業株式会社
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社、自然科学分析 古環境研究所
平成19年度 木津博明主任専門員（総括）、山田精一主任調査研究員
遺跡掘削請負工事：須賀工業株式会社
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社
平成20年度 木津博明主席専門員、齋藤 聡主任調査研究員
遺跡掘削請負工事：シン・コンサル株式会社
委託：地上測量、航空写真撮影：技研測量設計株式会社
- 7 整理事業の体制・期間は次のとおりである。
平成21年度 整理期間 平成21年3月1日～平成21年3月31日
整理担当 女屋和志雄上席専門員
平成22年度 整理期間 平成22年4月1日～平成23年3月31日
整理担当 女屋和志雄上席専門員
平成23年度 整理期間 平成23年4月1日～平成23年6月30日
整理担当 神谷佳明上席専門員
- 8 本書作成の担当は次のとおりである。
編集 女屋和志雄、神谷佳明 デジタル編集 齊田智彦（主任調査研究員）
執筆 第3章・4章縄文時代遺物観察表 橋本 淳（主任調査研究員）・同石器観察表 岩崎泰一（上席専門員）、
第4章古墳時代以降遺物観察表 大西雅広（上席専門員）、金属製品 笹澤泰史（主任調査研究員）
第6章岩手県立博物館 赤沼英男 第7章第3～5節節岩崎、群馬県教育委員会 津島秀章（主幹）
遺物写真撮影 佐藤元彦（補佐） 保存処理 関 邦一（補佐） ほかは木津、女屋
- 11 出土石器・石製品の石材鑑定は、飯島静男氏（群馬地質研究会会員）にお願いした。

- 12 出土鉄製品の分析は、岩手県立博物館に委託して実施した。
- 13 出土遺物及び発掘調査に係わる資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 14 発掘調査並びに整理作業のあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。
(敬称略)
- 前原 豊 小島純一 山下歳信 能登 健 (以上前橋市教育委員会) 坂爪久純 (伊勢崎市教育委員会)
群馬県教育委員会 前橋市教育委員会

凡 例

- 1 グリッドの設定、座標値の表記は、国家座標第IX系（世界測地系）を用いた。図中のグリッド番号は、Xグリッド、Yグリッドの交点を示したもので、グリッド番号は南東交点を基準とする。
- 2 遺構断面図、等高線図に記した数値は標高を表し、単位はmである。方位は座標北真北方向角は+0° 25' 18"である。
- 3 挿図の縮尺は、記載のない限り以下のとおりである。
遺構 1/60を基本とし、各挿図中に縮尺を示した。
遺物 1/3を中心とし、小型品は1/2、大型品は1/4を基本とした。各挿図中に縮尺を示した。
- 4 遺物観察表にある状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で示した。ただし全体が想定できない場合は何分の一以下と表記した。
- 5 縄文土器のうち断面の黒丸（●）は胎土に繊維混入を表す。
遺物出土状況図で黒丸（●）は土器を、黒三角（▲）は石器を表す。
遺構図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



- 6 石器図面の線と拓本の表現は、次のことをさしている。
石斧刃部側の摩耗痕は縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕は横位定規線で図示した。磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他斜位定規線は線條痕の走行を示す。
石皿は、使用部の摩耗および再生状態（再敲打）を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。台石は打痕・摩耗痕を含む礫面の状態を表現するため、同様に拓本を使用した。
- 7 本書内で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』（平成9年版）に準拠した。
- 8 テフラの呼称として、次の略語を使用する。
- | | | | | | |
|-------|--------|-------------|-----------|---------|---------------|
| 浅間A軽石 | 略称As-A | 1783年（天明3年） | 浅間-大窪沢軽石 | 略称As-ok | （約1.7万年前） |
| 浅間B軽石 | 略称As-B | 1108年（天仁元年） | 浅間-板鼻褐色軽石 | 略称As-BP | （約1.9～2.3万年前） |
| 浅間C軽石 | 略称As-C | 4世紀初頭 | | | |
- 9 本書で使用した地図は、下記のものを使用した。
- 第1図 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所作成「一般国道17号上武道路」2004作成パンフレット使用
第2図 国土地理院発行地形図五万分の一「前橋」平成10年3月1日発行に加筆
第4図 国土地理院発行地勢図二十万分の一「宇都宮」平成18年4月1日発行
第5図 前橋市役所発行現形図
第7図 国土地理院発行地形図二万五千分の一「渋川」平成14年10月1日発行 「前橋」平成9年10月1日発行
「鼻毛石」昭和56年7月30日発行 「大胡」平成8年11月1日発行

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 調査に至る経過	第7章 調査のまとめ……………129
第1節 上武道路について……………1	第1節 上泉唐ノ堀遺跡の変遷と特徴……………129
第2節 調査に至る経過……………2	第2節 上泉新田塚遺跡群の変遷と特徴……………129
第3節 8工区の遺跡一覧……………2	第3節 上泉新田塚遺跡群 出土石器について……………133
第2章 遺跡の立地と環境	第4節 上泉唐ノ堀遺跡の 出土石器について……………135
第1節 遺跡の立地……………5	第5節 黒色安山岩製石器の原産地分析……………137
第2節 歴史的環境……………10	遺物観察表……………139
第3章 調査の方法と経過	遺構一覧表……………168
第1節 調査の方法……………19	写真図版
第2節 基本土層……………20	報告書抄録
第3節 調査の経過……………21	奥付
第4節 整理作業の経過……………22	付図1 上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群全体図 1:500
第4章 上泉唐ノ堀遺跡の調査	
第1節 概要……………23	
第2節 検出された遺構と遺物……………23	
第5章 上泉新田塚遺跡群の調査	
第1節 概要……………29	
第2節 縄文時代……………30	
第3節 古墳時代……………93	
第4節 奈良・平安時代……………106	
第5節 中世・近世……………117	
第6章 自然科学分析……………123	
上泉新田塚遺跡群2号墳出土刀子の 金属考古学的調査……………123	

挿図目次

第1図	上武道路 路線図	1	第52図	542・543・560・561・625・626・649・660・668～671・673・678・682・683・684号土坑遺構図	74
第2図	上武道路8工区遺跡位置図	4	第53図	685～688号土坑遺構図、61・63・64・65・74・99・109号土坑遺物図	75
第3図	地形区分図	5	第54図	117・118・156・172・179・180・181・183・190・191号土坑遺物図	76
第4図	遺跡位置図	6	第55図	201・214・219・222・243・255・256・259号土坑遺物図	77
第5図	調査区位置図	7	第56図	259・290・302・312・324・329・336・337・338号土坑遺物図	78
第6図	赤城山南麓の地形	8	第57図	340・374・538・542・543・557・560・561・660・670・678・682・684・685号土坑遺物図	79
第7図	周辺遺跡位置図	15	第58図	685・686・687・688号土坑遺物図	80
第8図	用地区画番号図	19	第59図	688号土坑3 有孔石製品遺物図	81
第9図	グリッド配置図	20	第60図	1・2号集石遺構図、2号集石遺物図	82
第10図	基本土層柱状図	20	第61図	遺構外遺物図(1)土器	83
第11図	1号住居遺構図・遺物図	24	第62図	遺構外遺物図(2)土器	84
第12図	58・63・67・133・180・235・251・252・253号土坑遺構図、遺構外遺物図(1)	26	第63図	遺構外遺物図(3)土器	85
第13図	遺構外遺物図(2)	27	第64図	遺構外遺物図(4)土器	86
第14図	1号溝・1号道遺構図	28	第65図	遺構外遺物図(5)土器	87
第15図	5号住居遺構図(1)	30	第66図	遺構外遺物図(6)土器	88
第16図	5号住居遺構図(2)・遺物図(1)	31	第67図	遺構外遺物図(7)土器	89
第17図	5号住居遺物図(2)	32	第68図	遺構外遺物図(8)石器	90
第18図	6号住居遺構図・遺物図(1)	33	第69図	遺構外遺物図(9)石器	91
第19図	6号住居遺物図(2)	34	第70図	遺構外遺物図(10)石器	92
第20図	7号住居遺構図・遺物図	35	第71図	3号住居遺構図(1)	94
第21図	8号住居遺構図(1)	36	第72図	3号住居遺構図(2)・遺物図(1)	95
第22図	8号住居遺構図(2)・遺物図(1)	37	第73図	3号住居遺物図(2)	96
第23図	8号住居遺物図(2)	38	第74図	1号墳遺構図(1)・遺物図	98
第24図	8号住居遺物図(3)	39	第75図	1号墳遺構図(2)	99
第25図	8号住居遺物図(4)	40	第76図	1号墳遺構図(3)	100
第26図	9号住居遺構図	40	第77図	2号墳遺構図(1)	101
第27図	9号住居遺物図	41	第78図	2号墳遺構図(2)	102
第28図	10号住居遺構図(1)	41	第79図	2号墳遺構図(3)	103
第29図	10号住居遺構図(2)・遺物図(1)	42	第80図	2号墳遺構図(4)主体部掘り方	104
第30図	10号住居遺物図(2)	43	第81図	2号墳遺物図	105
第31図	11号住居遺構図(1)	44	第82図	1号住居遺構図(1)	106
第32図	11号住居遺構図(2)・遺物図(1)	45	第83図	1号住居遺構図(2)	107
第33図	11号住居遺物図(2)	46	第84図	1号住居遺物図	108
第34図	11号住居遺物図(3)	47	第85図	2号住居遺構図	108
第35図	11号住居遺物図(4)	48	第86図	4号住居遺構図(1)	109
第36図	11号住居遺物図(5)	49	第87図	4号住居遺構図(2)・遺物図(1)	110
第37図	12号住居遺構図(1)	50	第88図	4号住居遺物図(2)	111
第38図	12号住居遺構図(2)・遺物図(1)	51	第89図	16号住居遺構図(1)	112
第39図	12号住居遺物図(2)	52	第90図	16号住居遺構図(2)・遺物図	113
第40図	12号住居遺物図(3)	53	第91図	1・2・3・4号道遺構図(1)	115
第41図	12号住居遺物図(4)	54	第92図	1・2・3・4号道遺構図(2)	116
第42図	14号住居遺構図・遺物図(1)	55	第93図	1号溝・1号堀遺構図	118
第43図	14号住居遺物図(2)	56	第94図	2号堀遺構図	119
第44図	15号住居遺構図	57	第95図	2・3・4・5・6号溝遺構図、2号溝遺物図	120
第45図	17号住居遺構図(1)	57	第96図	4・6号溝遺構図	121
第46図	17号住居遺構図(2)・遺物図	58	第97図	1号井戸遺構図	122
第47図	1a・34・56・61・63・64・65・73・74・99・100・109・110号土坑遺構図	69	第98図	遺構外遺物図	122
第48図	117・118・156・157・172・178～181・183・187・190・191号土坑遺構図	70	第99図	調査試料の組織観察結果	127
第49図	201・213・214・219・222・227・230・235・239・243・255・256・259・273・313・290・300・301号土坑遺構図	71	第100図	抽出した試料に含有されるNi・Co・Cu三成分比	128
第50図	302・304・312・316・317・322～330・334・336・337・338号土坑遺構図	72	第101図	遺構全体図(1:1,000)	132
第51図	335・340・341・343・344・345・354・368・374・375・519・538・540・550・557号土坑遺構図	73			

表目次

第1表	上泉唐ノ堀遺跡 土坑一覧表	24	第9表	上泉唐ノ堀遺跡 縄文土器観察	147
第2表	非金属介在物中に混在する鉱物相のEPMAによる定量	128	第10表	上泉新田塚遺跡群 縄文土器観察	147
第3表	調査試料の化学組成	128	第11表	上泉新田塚遺跡群 遺物観察表	165
第4表	上泉新田塚遺跡群 出土石器石材一覧表	136	第12表	上泉新田塚遺跡群 金属製品観察表	167
第5表	上泉新田塚遺跡群 住居出土石器一覧表	136	第13表	上泉新田塚遺跡群 住居一覧表	168
第6表	黒色安山岩礫の薄片観察結果	138	第14表	上泉新田塚遺跡群 土坑一覧表	168
第7表	上泉唐ノ堀遺跡 石器観察表	139	第15表	上泉新田塚遺跡群 溝・道・堀一覧表	170
第8表	上泉新田塚遺跡群 石器観察表	139			

写真目次

- PL. 1 上武道路 路線(1) 上泉唐ノ堀遺跡～五代砂留遺跡群
上武道路 路線(2) 芳賀東部団地遺跡～胴城遺跡
- PL. 2 上武道路 路線(3) 堤遺跡～上細井五十嵐遺跡
上武道路 路線(4) 上細井・青柳・日輪寺地区
- PL. 3 上武道路 路線(5) 上細井地区
上武道路 路線(6) 関根地区～国道17号地区
- PL. 4 上泉唐ノ堀遺跡全景 南
上泉唐ノ堀遺跡 1号溝と1号道全景 南東
- PL. 5 縄文確認調査全景
遺構の確認作業
住居の調査風景
堀調査の作業風景
47区 西壁土層断面 北東
47区 北壁土層断面 南東
- PL. 6 上泉唐ノ堀遺跡1号住居全景 南東
1号住居掘り方全景 南東
1号住居床下ピットセクション 南
58号土坑全景 北東
63号土坑全景 北東
67号土坑全景 北
133号土坑全景 北
180号土坑全景 北
- PL. 7 251号土坑全景 北
252号土坑全景 南
253号土坑全景 南
1号溝及び1号道全景 南
1号溝及び1号道全景 西
1号道西壁セクション 東
1号溝東壁セクション 西
1号溝西壁セクション 東
- PL. 8 上泉新田塚遺跡群 22～37区全景 北西
上泉新田塚遺跡群 1号堀と新田塚古墳 南西
- PL. 9 上泉新田塚遺跡群 市道から西を望む 北東
上泉新田塚遺跡群 31～37区 南
- PL. 10 1号住居全景 南西
1号住居確認状況 南西
1号住居掘り方全景 南西
1号住居カマド全景 南西
1号住居カマド掘り方全景 南西
- PL. 11 2号住居全景 西
3号住居全景 西
- PL. 12 4号住居全景 西
4号住居掘り方全景 西
4号住居B-B'セクション 西
3号住居掘り方全景 西
4号住居カマド掘り方全景 西
- PL. 13 5・7号住居全景 北東
5号住居埋設土器断ち割り 南
6号住居遺物出土状況 北西
8号住居掘り方全景 北
6号住居炉全景 北東
- PL. 14 6号住居全景 南西
8号住居炉全景 東
688号土坑遺物出土状況 北東
8号住居遺物出土状況 北
9号住居全景 南西
- PL. 15 9号住居No.1埋甕全景
9号住居No.3埋甕断ち割り
9号住居No.4埋甕断ち割り
10号住居全景 南西
11号住居遺物出土状況 北東
10号住居炉全景 南西
11号住居遺物出土状況 北東
11号住居遺物出土状況 東
- PL. 16 11号住居全景 北東
11号住居埋甕出土状況 北東
14号住居全景 北
12号住居遺物出土状況 西
12号住居炉全景 南
- PL. 17 12号住居全景 南西
14号住居炉全景 北
14号住居炉遺物出土状況 北
14号住居遺物出土状況 南
15号住居全景 北
- PL. 18 16号住居全景 北西
16号住居掘り方全景 北西
16号住居カマド全景 西
16号住居カマド全景 西
16号住居カマド掘り方全景 西
- PL. 19 17号住居全景 北
1a号土坑全景 北
34号土坑全景 西
61号土坑全景 西
65号土坑全景 北
74号土坑全景 北
109・110号土坑全景 北
115号土坑全景 北
- PL. 20 63・117・118号土坑全景 北
156号土坑全景 北
171・172・173号土坑全景 北東
180号土坑全景 北東
181号土坑全景 南東
183号土坑遺物出土状況 北
183号土坑全景 北
187号土坑全景 東
- PL. 21 191号土坑全景 北東
214号土坑全景 南東
243・300号土坑全景 北
256号土坑全景 北
302号土坑全景 北
325号土坑全景 北
334号土坑全景 北
338号土坑全景 南西
- PL. 22 340号土坑全景 東
343号土坑全景 北
670号土坑全景 北
682号土坑全景 北東
683・684号土坑全景 北東
685号土坑全景 北
1号井戸全景 南西
1号溝全景 南西

PL.23	2号溝全景 北東 4・6号溝全景 南西 1号堀全景 南西 1号堀全景 南西 1号堀セクション 南西 2号堀を含む市道西全景 南 2号堀全景 南西	PL.28	上泉唐ノ堀遺跡 1号住居・遺構外出土遺物 上泉新田塚遺跡群 5号住居出土遺物
PL.24	2号堀全景 北東 2号堀北セクション 南西 1号道全景 北 1号道全景 北	PL.29	上泉新田塚遺跡群 5・6号住居出土遺物
PL.25	1号道全景 北 1号道C-C'セクション 南 2号道A-A'セクション 南 2号道全景 南 2号道全景 北 3号道全景 北 4号道全景 北	PL.30	上泉新田塚遺跡群 6・7・8号住居出土遺物
PL.26	1号墳地山採掘坑全景 南 1号墳道路西周堀全景 南 1号墳地山採掘坑全景 北 1号墳地山採掘坑底面遺物出土状況 南西 1号墳地山採掘坑壁内遺物出土状況 北東 1号墳地山採掘坑セクション 南 1号墳地山採掘坑セクション 南西 1号墳地山採掘坑セクション 南西	PL.31	上泉新田塚遺跡群 8号住居出土遺物
PL.27	1号墳地山採掘坑内セクション 南東 1号墳地山採掘坑内B-B'セクション 南東 2号墳全景 南 2号墳石室全景 南 2号墳全景 南 2号墳全景 東 2号墳遺物出土状況 北 2号墳石室掘り方全景 南	PL.32	上泉新田塚遺跡群 8・9・10号住居出土遺物
		PL.33	上泉新田塚遺跡群 10・11号住居出土遺物
		PL.34	上泉新田塚遺跡群 11号住居出土遺物
		PL.35	上泉新田塚遺跡群 11号住居出土遺物
		PL.36	上泉新田塚遺跡群 11・12号住居出土遺物
		PL.37	上泉新田塚遺跡群 12号住居出土遺物
		PL.38	上泉新田塚遺跡群 14・17号住居・61号土坑出土遺物
		PL.39	上泉新田塚遺跡群 63・64・65・74・99・109・117・118・156・ 172・179・180・181・183号土坑出土遺物
		PL.40	上泉新田塚遺跡群 181・190・191・201・214・219・222・243・ 255・256・259・290・302号土坑出土遺物
		PL.41	上泉新田塚遺跡群 312・324・329・336・337・338・340・374・ 538・542・543・557・560・561・660・ 670・678・682・684・685号土坑出土遺物
		PL.42	上泉新田塚遺跡群 686・687・688号土坑・2号集石・ 遺構外出土土器1～22
		PL.43	上泉新田塚遺跡群 遺構外出土土器23～78
		PL.44	上泉新田塚遺跡群 遺構外出土土器79～142
		PL.45	上泉新田塚遺跡群 遺構外出土土器143～170
		PL.46	上泉新田塚遺跡群 遺構外出土土器171～199
		PL.47	上泉新田塚遺跡群 遺構外出土土器200～210・ 遺構外出土土器1～31
		PL.48	上泉新田塚遺跡群 遺構外出土土器32～57
		PL.49	上泉新田塚遺跡群 3号住居・1号墳・2号墳出土遺物
		PL.50	上泉新田塚遺跡群 2号墳・1・4号住居出土遺物
		PL.51	上泉新田塚遺跡群 4・16号住居・2号溝・遺構外出土遺物
		PL.52	黒色安山岩薄片の偏光顕微鏡写真

第1章 調査に至る経過

第1節 上武道路について

上武道路は、一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に取り付く延長40.5kmの道路である。現道の西からは、前橋渋川バイパスが計画されて、さらに、その先には鯉沢バイパス、上信自動車道と続き、新たな交通幹線網となるよう期待が込められている。

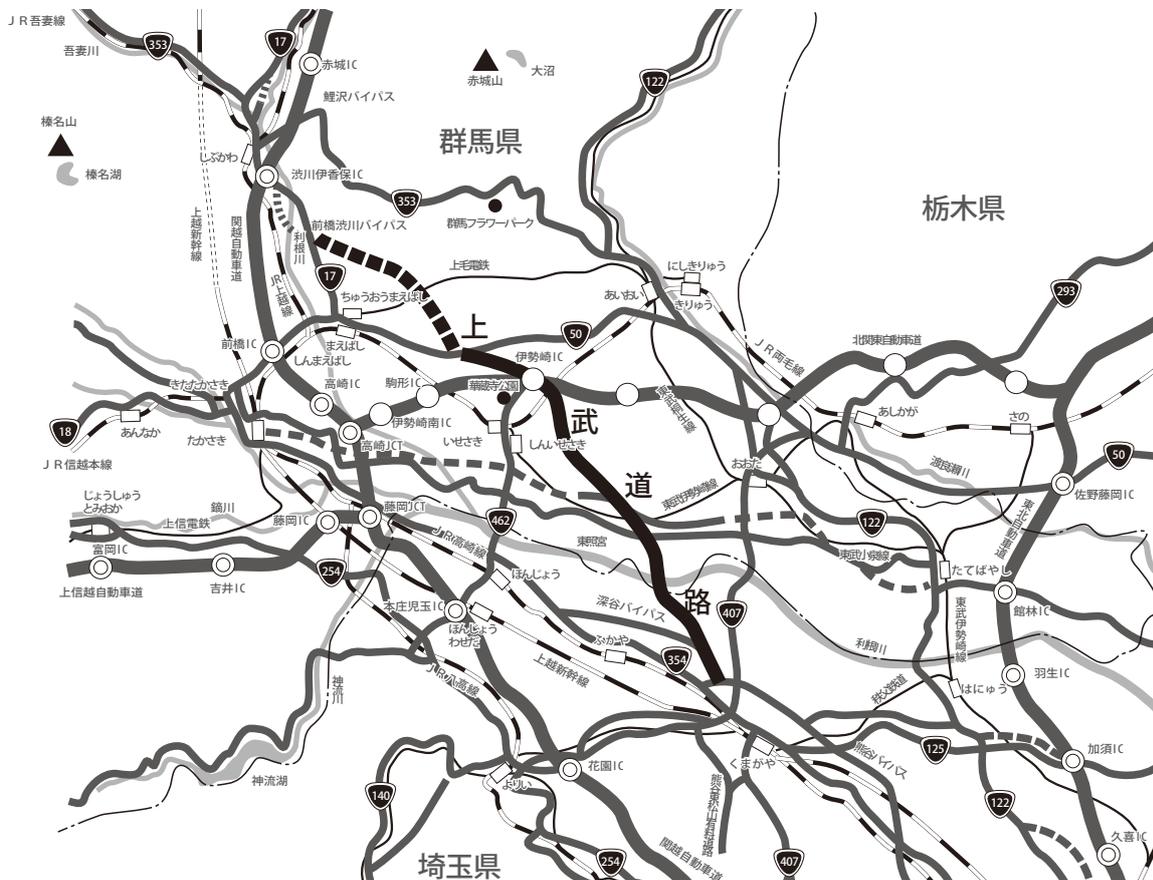
平成10年には、前橋渋川バイパスを含めて地域高規格道路『熊谷渋川連絡道路』として計画路線の指定を受け、群馬県では『幹線交通乗り入れ30分構想』の中で幹線のひとつに位置づけている。事業の着手は、昭和45年度である。平成4年2月までには、起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用されている。供用区間が北に延伸するとともに交通量は年々増大、引き続いて終点までの

13.1km区間の着工に期待が高まっている。

まず、実現したのが、国道50号から前橋市荻窪町までの4.9km区間、これが7工区である。7工区は、平成元年度に着手され、平成20年6月に暫定2車線で供用されている。これで、いよいよ残されたのが終点までの8.2km区間で、8工区である。

前後した動きには、まず平成5年3月上信越自動車道藤岡・佐久間が開通し、平成7年11月北関東自動車道高崎・伊勢崎間の起工、さらに平成9年10月の長野新幹線開業と続いている。これらは、先述した県が提唱する構想実現に向けた動きで、上武道路の建設に弾みを付けることにもつながっている。

8工区については、平成13年度に事業着手、平成24年度までに前橋市芳賀地区までの開通が予定されていて、上武道路の全線についても平成29年度の開通をめざしている。



第1図 上武道路 路線図（高崎河川国道事務所「一般国道17号上武道路」（平成16年）より作成）

第2節 調査に至る経過

7工区の調査は、上泉唐ノ堀遺跡を最後にして、平成16年度末ですべてが終了した。工事も急ピッチで進んでいて、主要地方道前橋・赤堀線までの供用が間近に迫っていた。さらに同年度には、前橋渋川バイパスが着工されている。これで8工区は、開通した部分と前橋渋川バイパスとの間にはさまれた格好となり、地元からの着工を待ち望む声が一段と強まる。

上武道路沿いでは、全線の開通を前提にして各種の開発が進められてきた。開通部分ではもちろんのこと、未開通の8工区も例外ではなく、昭和50年代から住宅団地、工業団地の造成が始まり、最近では大規模な商業店舗の進出も相次いでいる。

8工区が建設に向けて動き出すのは、平成18年度に入ってからである。起点側から用地の買収が始まる。それまで路線測量のほかに、国土交通省による関係機関との調整や地元への協力要請が重ねられてきていた。買収の交渉には国土交通省自身と群馬県土地開発公社があたり、応じる動きがみられるようになった。

調査を実施するにあたっては、協定書ならびに受委託契約書を締結する必要がある。そのための協議は、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、まず協定書は平成18年2月16日付け「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その3）の実施に関する協定書」（以下、「協定書」という。）として締結される。これにより、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を実施することが正式に決定する。

早速、群馬県教育委員会は、次のような日程で試掘調査を実施して調整に入る。

平成18年4月25・26日 前橋市上泉町新田塚地内で古墳の周堀確認を目的に実施。周堀を検出する。

同年5月17・18日 前橋市上泉町で実施。縄文時代の土坑や剥片石器を検出。群馬県教育委員会は、これらの内容をもって遺跡であると判断し、記録保存すべきであることを国土交通省、前橋市教育委員会に伝えている。

この時点では、取得できた用地は上泉唐ノ堀遺跡の一

部で虫食いの状態であった。そこで発掘調査の開始時期を変更するため、平成18年6月20日には「協定書」変更（第1回）の締結をして対応した。協定期間は平成18年7月1日～平成29年3月31日である。上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群の発掘届けの提出。国土交通省との調整会議、用地取得の確認を経て、平成18年7月から上泉唐ノ堀遺跡の調査を開始するに至った。

平成18年9月19日には、国土交通省関東地方整備局長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で、発掘調査受委託契約書の締結をしている。

こうした協議を経て調査するための条件が整えられ、平成18年10月25日付けで、上泉新田塚遺跡群の発掘届けが提出されている。平成23年6月1日現在で、平成18年6月20日の変更協定に基づいて、埋蔵文化財の発掘調査及び整理事業が実施されている。

第3節 8工区の遺跡一覧

路線は、南麓の丘陵部を横断して、最後に水田地帯に下りて現道に接続する。調査への関心とすれば、次のようなことがあげられる。

まず、路線の大半を占める丘陵部畑作地帯には、いつの時代の、どんな遺構があるのか。前橋市や富士見村による、これまでの調査では多くの成果があげられている。今回の調査でも、これにならうのかどうかである。

次いで、桃ノ木川沿いの水田地帯では、まずはどんな遺構があるのか。前橋渋川バイパス田口上田尻・下田尻遺跡の調査では、予想を超えた遺構量と年代の上限が弥生時代にまで遡るといふ成果があげられている。この遺跡には8工区の終点を取り付くだけに、同じ状況であるのか期待するものは大きい。

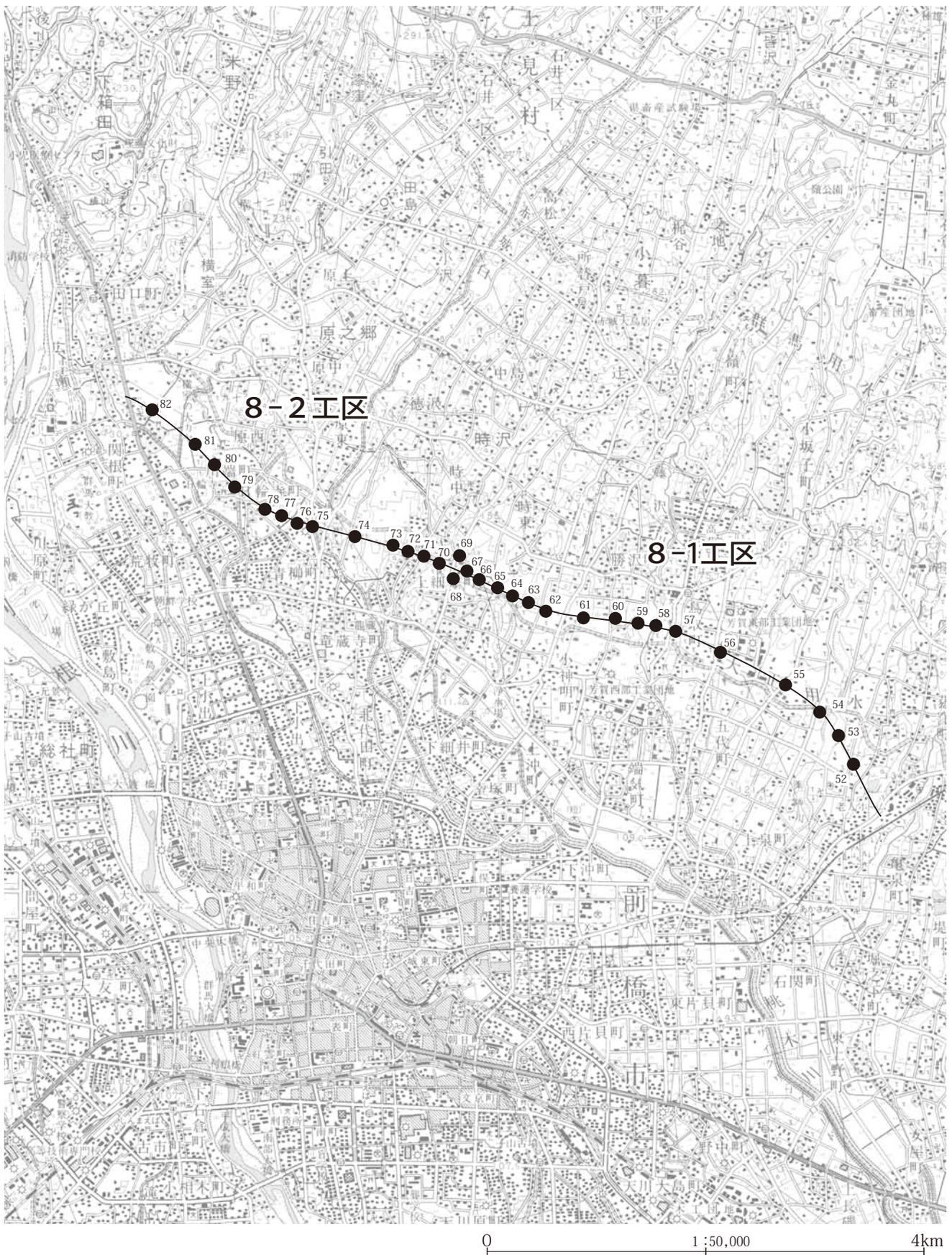
調査が予定されている遺跡は、31遺跡、面積にして約40万 m^2 である。遺跡が連続しているのはこれまでどおりであるが、7工区との違いは低地の面積が少ないことである。南北方向の台地に直交するからでもあるが、河川が少ないので未発達でもある。標高は、東西の両端が135m前後のほかは140m前後と一定している。河川は、東から藤沢川、竜の口川、赤城白川、細ヶ沢川が主なところで、山頂に近い赤城白川をのぞけば、標高500m台の中腹が水源でどれも水量に乏しい。

交差する道路は、主要地方道前橋赤城線（通称赤城県道）、一般県道津久田停車場前橋線があり、前者が8工区を二分する。東が8-1工区、西が8-2工区である。

調査は、東端から始めて平成26年度に終了させる予定である。遺跡名につくJKは、これまでの調査で使われてきた略称で、Jが上武、Kが国道を指している。番号は、7工区の最終番号52に続けたものである。ただしJK52は、上泉唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、JK52bをつけて7工区と区別している。また、JK59鳥取塚田遺跡は、藤沢川右岸沿いの低地に水田を推定していたが、試掘調査をした結果、遺構はなく除外されたがそのままとした。

8工区の地区割は、世界測地系 $X=45,000$ 、 $Y=-63,000$ を基準にして設定する。1kmごとが地区、100mごとが区で、起点側から終点に向かって第1地区から第13地区に分ける。

- | | | | |
|----------|---------------------------------------------|--------|----------------------------------------------|
| J K 52 b | 上泉唐ノ堀（かみいずみからのほり）遺跡
前橋市上泉町平成18～20年度調査 | J K 63 | 東田之口（ひがしたのくち）遺跡
前橋市上細井町平成20年度調査 |
| J K 53 | 上泉新田塚（かみいずみにったづか）遺跡群
前橋市上泉町平成18～20年度調査 | J K 64 | 丑子（うしご）遺跡
前橋市上細井町平成20年度調査 |
| J K 54 | 上泉武田（かみいずみたけだ）遺跡
前橋市上泉町・五代町平成19年度調査 | J K 65 | 上細井五十嵐（かみほそいいがらし）遺跡
前橋市上細井町平成20・21年度調査 |
| J K 55 | 五代砂留（ごだいすなどめ）遺跡群
前橋市五代町平成19年度調査 | J K 66 | 天王（てんのう）遺跡
前橋市上細井町平成20・21年度調査 |
| J K 56 | 芳賀東部団地（はがとうぶだんち）遺跡
前橋市五代町・鳥取町平成18～20年度調査 | J K 67 | 東紺屋谷戸（ひがしこんやがいと）遺跡
前橋市富士見町時沢平成20・21年度調査 |
| J K 57 | 鳥取松合下（とっとりまつあいた）遺跡
前橋市鳥取町平成20年度調査 | J K 68 | 上町（かみちょう）遺跡
前橋市上細井町平成21年度調査 |
| J K 58 | 胴城（どうじょう）遺跡
前橋市鳥取町平成19・20年度調査 | J K 69 | 時沢西紺屋谷戸（ときざわにしこんやがいと）遺跡
前橋市富士見町時沢平成21年度調査 |
| J K 59 | 鳥取塚田（とっとりつかだ）遺跡
前橋市鳥取町・勝沢町調査除外 | J K 70 | 王久保（おうくぼ）遺跡
前橋市上細井町・富士見町時沢平成21年度調査 |
| J K 60 | 堤（つつみ）遺跡
前橋市勝沢町平成20年度調査 | J K 71 | 上細井新田上（かみほそいしんでんかみ）遺跡
前橋市上細井町 |
| J K 61 | 小神明勝沢境（こじんめいかつさわさかい）遺跡
前橋市小神明町平成20年度調査 | J K 72 | 上細井中島（かみほそいなかじま）遺跡
前橋市上細井町平成21年度調査 |
| J K 62 | 小神明富士塚（こじんめいふじづか）遺跡
前橋市小神明町・上細井町平成20年度調査 | J K 73 | 上細井蟬山（かみほそいせみやま）遺跡
前橋市上細井町平成21年度調査 |
| | | J K 74 | 山王・柴（さんのう・しば）遺跡群
前橋市上細井町・青柳町平成22・23年度調査 |
| | | J K 75 | 引切塚（ひきりづか）遺跡
前橋市青柳町 |
| | | J K 76 | 青柳宿上（あおやぎやどうえ）遺跡
前橋市青柳町 |
| | | J K 77 | 日輪寺諏訪前（にちりんじすわまえ）遺跡
前橋市日輪寺町 |
| | | J K 78 | 諏訪（すわ）遺跡
前橋市上細井町・青柳町 |
| | | J K 79 | 川端根岸（かわばたねぎし）遺跡群
前橋市川端町 |
| | | J K 80 | 川端山下（かわばたやました）遺跡
前橋市川端町 |
| | | J K 81 | 川端細ヶ沢（かわばたこまがさわ）遺跡
前橋市川端町 |
| | | J K 82 | 関根（せきね）遺跡群
前橋市関根町平成23年度調査 |



第2図 上武道路8工区遺跡位置図（国土地理院発行地形図「前橋」平成10年3月1日発行使用）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群、2つの遺跡は、前橋市街地の北東、上泉町2479番地ほかに所在する。前橋市は、赤城山、榛名山の両火山を背にして南に関東平野を望むところに位置する。地形、地質の特徴から、北東部の「赤城山斜面」、南西部の「前橋台地利根川右岸」、南部から南西部にかけての「前橋台地利根川左岸」、東部の「広瀬川低地帯」という4つの地域に分けられている（第3図 市内の地形区分図）。

前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火による火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層からなっている。前橋台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央を利根川が貫流している。その流路は「応永の変流」という室町時代中頃以降のものといわれ、それ以前には現在の広瀬川流域を流れていたと推定されている（『前橋市史』第1巻1971）。

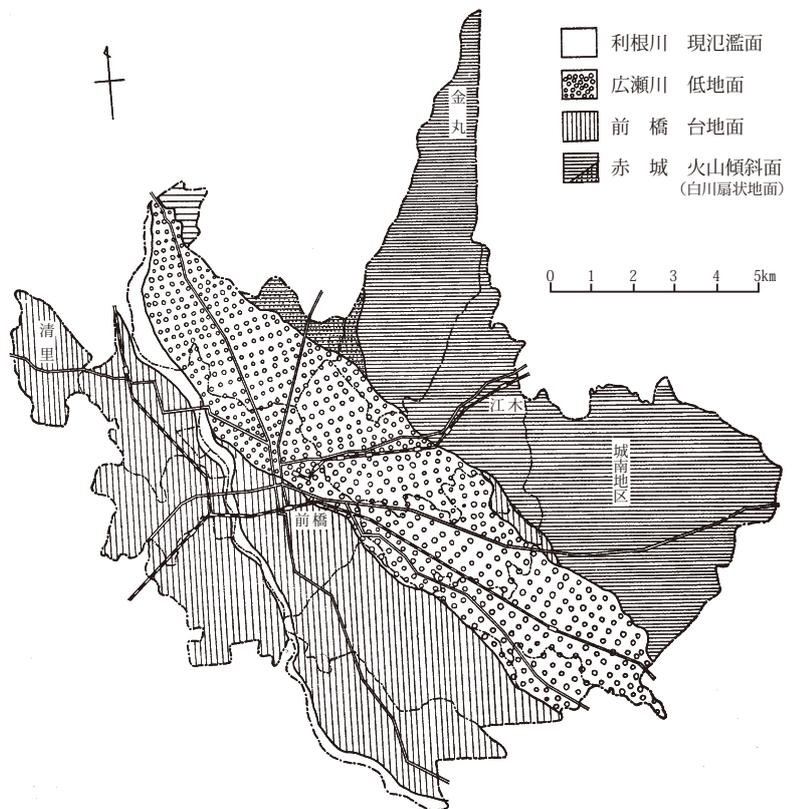
遺跡は、赤城山斜面でも広瀬川低地帯まで2kmという位置にある。寺沢川と藤沢川との間に広がる樹枝状に開析された台地の一角で、標高は台地上が132～140m、谷地との比高差は約5mである。

西の谷地は幅が50～70m、付近では一般的な規模で桃ノ木川の支流荻窪川が流れている。1級河川ではあるが、長さは4km足らずである。東はY字形に分岐する谷地があり、分岐点には堰き止めてできた新田塚沼がある。現在、谷地は水田となっているが、明治10年前後に編纂された『上野国郡村誌』では水利不便なりの記述が目立つ。田植えができたのは、昭和27年大正用水、昭和43年群馬用水が完成して初めてという所もあるほどで、台地上に至っては戦後に開墾された所もある。水田適地の少ないことに加えて、郡村誌のとおり絶対的な水の不足が原因である。用水が通水するまで、その不足を補っていたのが谷地に作られた溜池である。遺跡の周囲には次郎坊沼、宝ヶ池など、谷地にひとつ程度と高い割合で点在している。止水方法の違いで堤、溜り、池、沼と呼び分けられているが水路で結ばれ、現在でも谷地田には欠

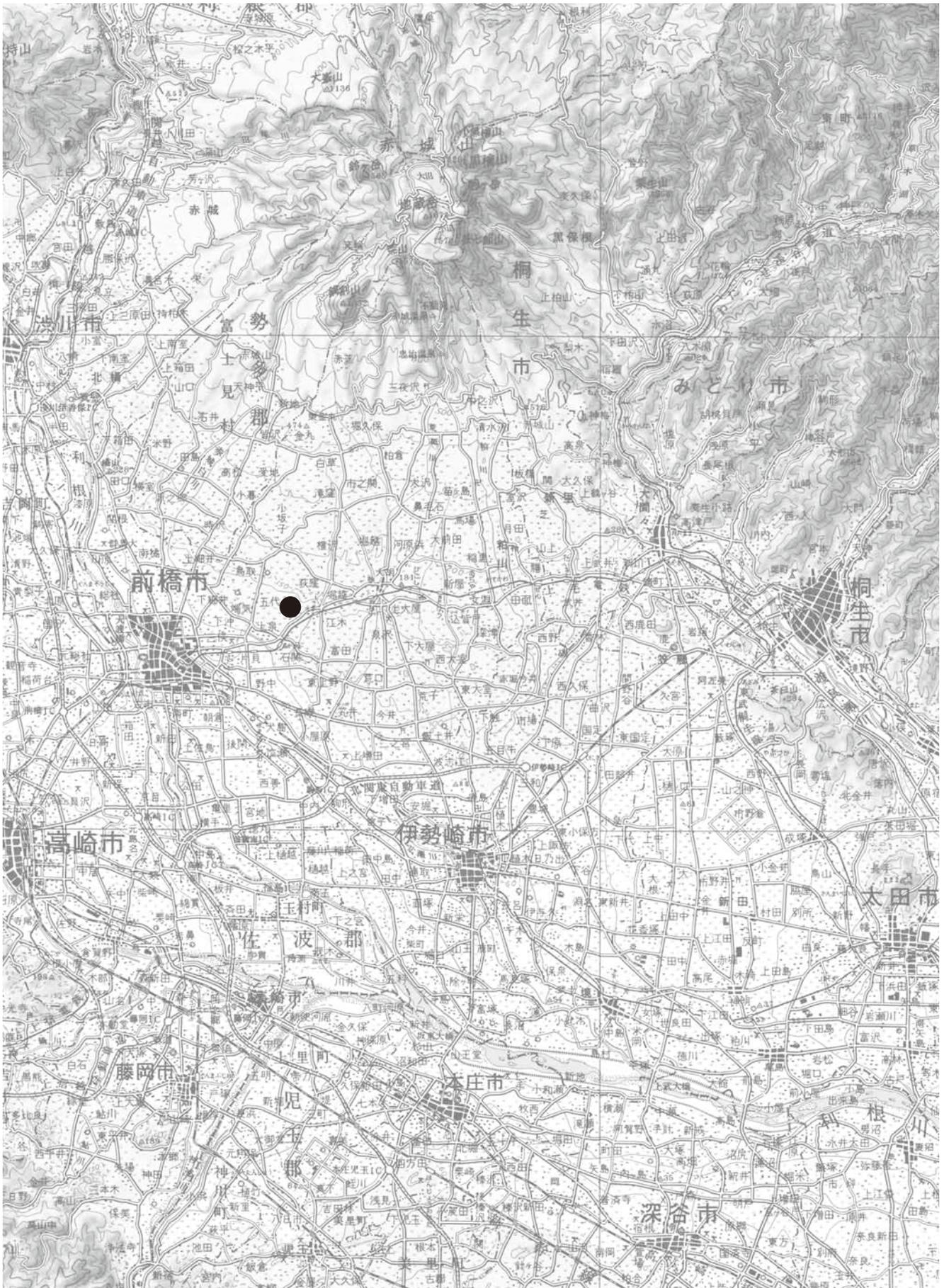
かせぬ水源となっている。

昭和50年代まで、南麓は県内を代表する「養蚕地帯」である。南面する地形と桑の生育に適した土壌であること、製糸や織物の生産地に近いことが普及した理由である。その養蚕も従事する戸数は減る一方で、現在では数え切れるほどにまで落ち込んでいる。

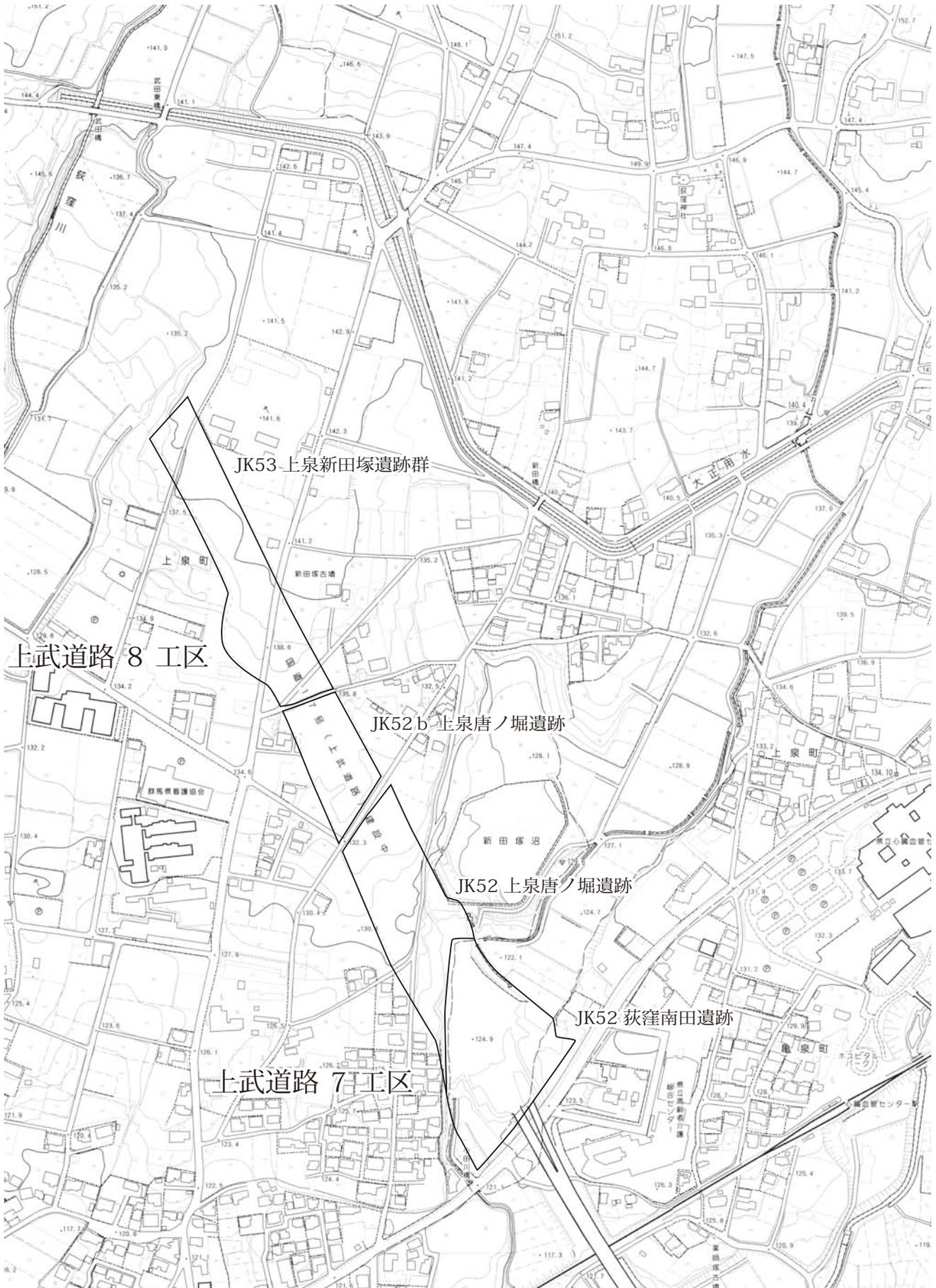
しかし、市街化調整区域が多いために、開発は規制され、転換を図ることができない。そのため、地域活性化の起爆剤として上武道路に寄せる期待は大きい。早くも昭和50年代、芳賀地区の路線沿いには芳賀北部・芳賀東部・芳賀西部の各団地が造成されている。最近では、芳賀東部団地の南に五代南部工業団地が造成されている。いずれも上武道路の開通を予定して計画されたもので、開通後は一層の変貌が予想される。そんな中で、平成20年5月富士見村が前橋市に編入合併し、南麓から『和名抄』以来の地名「勢多郡」が消えている。



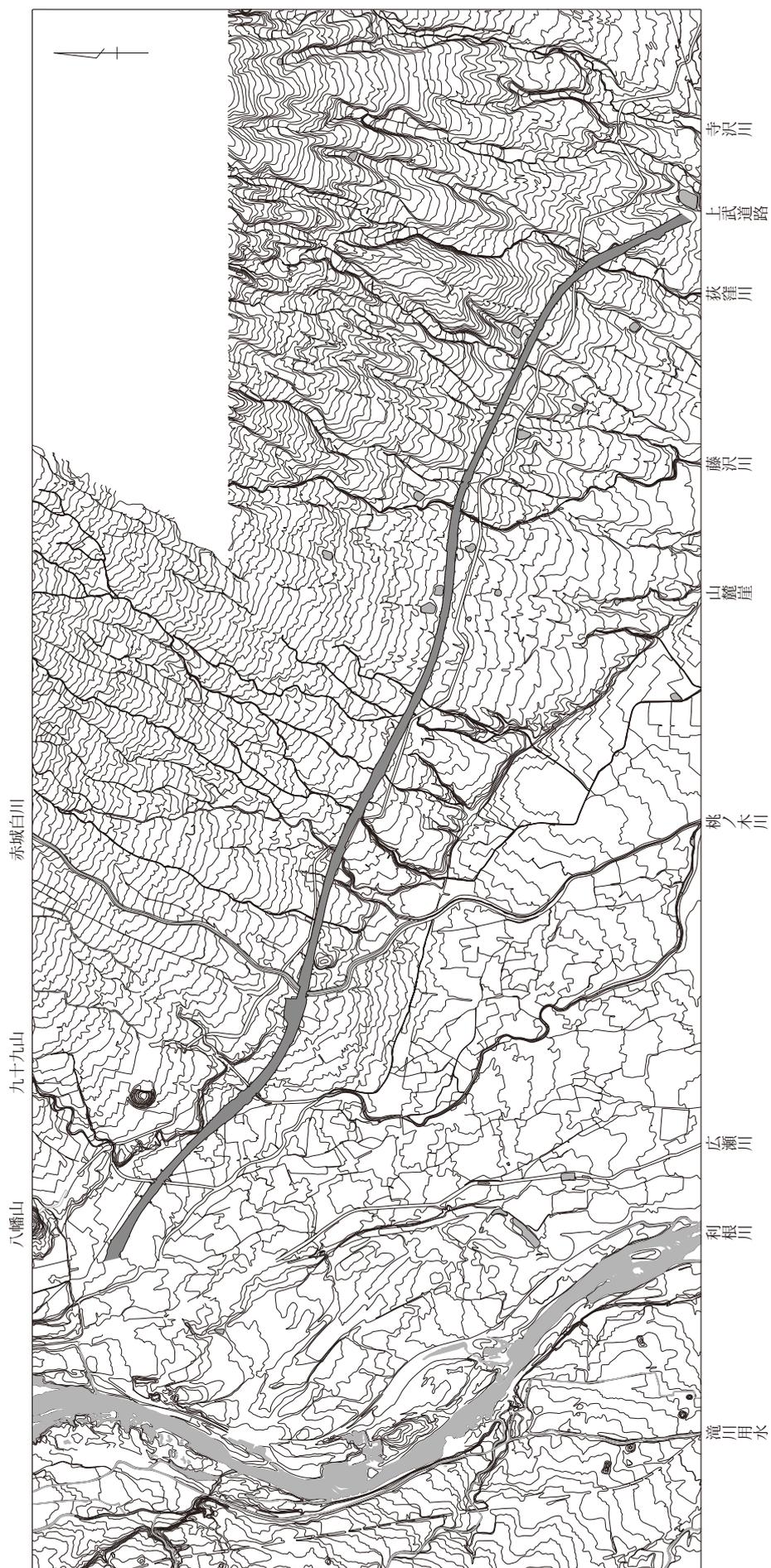
市内の地形区分図（前橋市史第1巻（1971）による）
第3図 地形区分図



第4図 遺跡位置図（国土地理院発行地勢図「宇都宮」平成18年4月1日発行使用 1/200,000）



第5図 調査区位置図 (前橋市現形図平成21年発行より作成 1/5,000)



第6図 赤城山麓の地形（昭和43年前橋市都市計画図をもとに作成 1/40,000）



赤城山南麓、前橋市上泉町上空から望む 平成13年撮影

第6図は、上武道路が通過する南麓の地形を知るために前橋都市計画図（昭和43年前橋市役所）より作成したものである。東西が9.5km、利根川の西から南麓の中央に近い寺沢川付近まで、南北が4.2km、最高点が嶺公園の標高360m付近から市街地の北部桃ノ木川沿いの標高110m付近までの範囲である。等高線は2m間隔で、これをトレースしたものに上武道路8工区路線、河川、用水、溜池を加えている。縮尺は4万分の一である。欄外には河川名のほか、山麓崖等を表記している。

市内の地形は、次の4つに区分されている（第3図『前橋市史』第1巻1971）。

- 1 赤城火山斜面
- 2 広瀬川低地面
- 3 前橋台地面
- 4 利根川現氾濫原

山麓崖の北東側が赤城火山斜面、南西側が広瀬川低地面、桃ノ木川の左側が前橋台地である。

赤城火山斜面は、藤沢川を境にした東西で様相が異なる。東側が後期更新世の大胡火砕流堆積物で、輻射谷の発達する起伏に富んだ地形である。谷は上流まで水田として利用されていて、溜池が多いのも水田への灌漑のためである。

西側は、後期更新世～完新世の山麓堆積物で白川扇状地と呼ばれている。赤城白川沿いが新期の扇状地、その

外側が古期の扇状地である。山麓崖は扇状地の南端にあたるが、新期になると赤城白川の西側が広瀬川低地面の中にまでせり出している。

広瀬川低地面が旧利根川の流路で、現在は広瀬川、桃ノ木川が東南流している。広瀬川は、利根川との間にある複数の流路跡を経て東へと移り、現在地に落ち着いたものとみられる。桃ノ木川は、蛇行を繰り返して自然堤防を発達させている。

上武道路は、図の中央部付近を横断している細い帯で、東端のJK52b上泉唐ノ堀遺跡、JK53上泉新田塚遺跡群から、西端のJK82関根遺跡群まで26の遺跡が続いている（第2図）。藤沢川を境にした東西の違いは、遺跡分布にもあり、東では旧石器時代以降各時代連続しているのに、西の白川扇状地では遺跡が縄文時代中期後半から増えるという指摘されている（第2章第2節参照）。これは扇状地の安定が要因で、新期の遺跡の形成にも深く影響したものとみられる。

JK72上細井中島遺跡では縄文時代早期の住居1軒が検出されている。一例ではあるが、新期の扇状地の下に縄文時代中期以前の遺跡が包含されている可能性を示すものである。山王・柴遺跡群では旧石器が出土したとの最新情報もあり、扇状地に被覆されていない細ヶ沢川寄りになると遺跡の分布にも変化がみられる。

第2節 歴史的環境

有末武夫氏の分類によれば、本遺跡がある前橋市桂萱地区は山麓地形である(1984)。標高が132m～140m、「ヤマ」と呼ぶには平坦で、「ノ」とするには細い谷筋が無数に発達している。本遺跡を起点として、東はおよそ荒砥川、西は利根川の範囲について歴史的な環境を述べる(第7図 周辺遺跡位置図)。

旧石器時代

上武道路7工区では、ほぼすべての遺跡から遺物が出土し、その成果が2冊の報告書にまとめられている(2008、2010)。その内容からは、国道50号以北での傾向を占うことができる。出土層位は暗色帯だけが最も多く、上層までの間に2面、3面となる遺跡も複数ある。また暗色帯から八崎軽石層の下位までの間で、結晶質片岩類が出土した遺跡が複数ある。遺物か、自然の礫とするかで検討を重ねているが、結論は得られていない。南麓では搬入以外あり得ないとする見解と、基盤に片岩類が含まれているとする2つの見解があり、前期旧石器問題とも関連して、さらに検討が必要である。

8工区でも藤沢川までは各遺跡で遺物の出土があり、7工区と同じ状況が続いている。本報告の2遺跡のほかにも上泉武田遺跡(68)、五代砂留遺跡群(69)、芳賀東部団地遺跡(70)、胴城遺跡(72)がある。詳細はこれからであるが、暗色帯からの出土が多い。隣接の地域でも、似た地形であることから遺跡が多く分布するとみることができる。平成23年度の調査では、赤城白川沿いにある山王・柴遺跡群でナイフ形石器の出土が報告されている(当事業団ホームページ平成23年4月最新発掘情報参照)。

鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡(20)では、浅間黄色軽石層下で硬質頁岩製石器が出土している。県内でも調査例が少ない時期だけに注目の遺跡である。舌状台地の縁辺部にあり、暗色帯から遺物が出土した遺跡に比べて低い。この立地にも注目をしておきたい。北西1kmの堤遺跡(73)は、縄文時代草創期の槍先形尖頭器を製作していたのではないかとみられ、分析が待たれる。荒砥北三木堂遺跡(1991・1992)に次ぐ資料である。さらに第7図よりも北になるが、竜ノ口川沿いの龍ノ口遺跡では舟底形石核が出土し

ている(原田・中東1985・1986)。また、芳賀西部団地遺跡(3)の報告書では、縄文時代草創期、前橋市内出土の有舌尖頭器15点が集成され、本遺跡周辺では表採を含め5遺跡がある(1991)。

縄文時代

住居60軒が検出された芳賀東部団地遺跡(4)を筆頭にして、本遺跡の周辺では多くの調査例がある。台地の規模や河川との関係に係わらず、遺跡が分布する密度は高い(鬼形1985)。前期では黒浜式～諸磯b式が多く、芳賀東部団地遺跡のほかに川白田遺跡(42)で住居が22軒と、まとまった内容を見ることができる。

上泉新田塚遺跡群(1)のような前期前半では、第7図の北東にあたる旧大胡町で調査された遺跡が多い。周辺では稀であるが、7工区にある江木下大日遺跡をあげることができる。前期でも時期により若干の標高差があって、前半のものが標高160m以上の高い位置に多いようにみられる。早期は、遺物が断片的に出土している。

中期では前半が稀で、加曾利E式～後期前半の遺跡が多い。立地は前期と変わらず、九料遺跡(8)、芳賀北曲輪遺跡(15)など敷石住居が多くみられる。五代伊勢宮遺跡(25)は、中期中葉～後半にかけての住居と土坑が環状になる、数少ない例である(高崎市教育委員会・前橋市教育委員会2010)。

広瀬川低地帯にあるのが西新井遺跡で、表採した耳栓だけでも100点以上という、後期～晩期の資料が報告されている(設楽1984)。低地への進出が当然視されている時期でもあり、この地域でも検証を進めていくべきであろう。低地への注意を喚起する遺跡である。

弥生時代

第7図よりも西1kmにある旧富士見村田中田遺跡では、中期後半～後期の遺物だけが出土していて、近くに遺構が推定されている。荒砥川以西の近隣で知ることができる、最も古い資料である。

端気着帳遺跡(13)では、後期樽式の住居に古墳時代前期の方形周溝墓が重複している。広瀬川低地帯と接している崖際にあり、広瀬川低地帯、そこに注ぎ込む谷地の両方で水田耕作が可能な立地である。小神明勝沢境遺跡(74)でも覆土に浅間C軽石が堆積する住居が検出さ

れていて、ここでは舌状の台地にはさまれた谷地にあることが注意されている（群埋文2009）。

赤城山麓の西麓では、見立溜井遺跡、田尻遺跡などで弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の集落が検出されており、遺跡が分布する密度は高いとみられている（赤城村教育委員会ほか2001）。関心は、その分布密度が途切れることなく、この時期の遺跡が多い東の荒砥地域まで続いているのかどうかにある。上武道路の調査は、これを知る格好のトレンチで、7工区では荒砥川を越すと遺跡が減ってしまっただけに、中間地域となる8工区への関心には高いものがある。

沿線のこれまでの調査では、数の割には少なく住居を検出しているには倉本遺跡（7）、湯気遺跡（11）だけである。ただ調査が圃場整備によるもので、範囲もトレンチだけと限られている。台地上だけを対象としがちで小神明勝沢境遺跡（74）が示すように、低地にまで調査の手を広げれば多くなるのかという状況である。

前橋渋川バイパスの田口下田尻遺跡では、ムラは弥生時代までさかのぼる（群埋文2006）。あえて山にまで入ってするのよりは、河川沿いに集落を構えて開墾していたとみた方が、当時の流れにかなっているのかもしれない。ここにだけ限定されていたのか、それとも数ある中のひとつであるのか、8工区が通過するところでもあり今後期待したい。

古墳時代

居住域 昭和48年に開始された芳賀北部団地遺跡以来、調査例は確実に増加している。芳賀東部団地遺跡（4）のように4世紀から継続する伝統集落と、6世紀前後から始まる第1次新開集落とがある。

4世紀代の集落は、台地上とその縁辺部の低地という2つの立地傾向がある。前者の代表が芳賀東部団地遺跡で、耕地を意識しているのであろう台地の端に寄っている。後者は五代砂留遺跡群（69）である。8軒の住居が谷頭にある微高地のような所で検出され、芳賀東部団地遺跡とは明らかに立地が違っている。同様な立地は小神明勝沢境遺跡の例もあり、これまで見過ごされてきた所ではないか。今後は単純に台地と低地に二分して見るのではなく、視点を変えることも必要ではないか。代表として挙げた2遺跡に共通するのは、単口縁台付甕が主で、

S字状口縁のものは客体的な存在である。

5世紀は、芳賀東部団地遺跡、五代中原遺跡（26）にまとまった資料があり、至近距離にある芳賀西部団地遺跡の初期群集墳に対応するものであろう。なお周辺に古墳が点在していて、4世紀代の状況に一層の安定感が加えられたとみてよいだろう。

6世紀前後の遺跡は、広瀬川低地帯に向いているのかのように崖際に多く、大正用水付近まで広がりを持っている。立地傾向は、これまでと変わらないが遺跡の数は増えている、そのまま7世紀代に継続している。正円寺古墳（59）と桂萱大塚（55）、オブ塚（33）など、6世紀初頭からの古墳の動向とも齟齬はない。

生産域 水田を調査した遺跡はない。7工区では、荒砥川までは水田が複数の面で検出されている。富田大泉坊A遺跡（群埋文2006）もその一つで、浅間C軽石下を最古とする3面が調査されている。しかし遺構の残りが良いのは大泉坊川沿いまでで、西の萱野II遺跡（62）では、プラント・オパール分析による可能性があるにとどまる。耕作土が薄く、鍵層となる火山灰もはっきりとしない。この傾向は、さらに西の遺跡まで続いている。

しかし検出されたほとんどの集落は、水田を意識したかのように低地に面している。分析の数値は低いがあくまでも水田が主で、これに畠作が次ぐという考えでいいのか検討が必要である。

西麓では、見立溜井遺跡で小区画水田が検出されている（赤城村教育委員会2008）。第7図の範囲では、竜ノ口川沿いでの試掘で小区画水田ではないかと結果が報告されている。本調査にならず詳細は不明であるが、今後可能性を示唆するものである。

墓域 『上毛古墳綜覧』（1933）には調査区がある桂萱村で79基、隣接する大胡町41基、荒砥村356基、木瀬村19基、芳賀村64基と南橋村45基が記載されている。西田遺跡（9）、小坂子油田I遺跡（43）のように、調査ごとにある追加も数基程度の数で、今後も『綜覧』で見ると傾向に変化はないであろう。分布傾向としては、小河川に沿って数基ずつかたまっているものもあれば、その間に点在しているものもあって、分散している。この背景には、ひとつに荒砥村のように独立丘がないため群集しにくかったのではないかと。

五代大日塚古墳（30）は、明治38・39年開墾中に鏡、

鏡板、轡、刀身、鏝等が出土。遺物は皇室博物館ほかに収蔵されている。芳賀西部団地遺跡（3）では32基の綜覧漏れ古墳が検出されている。5世紀末～6世紀初頭の初期群集墳である。前方後円墳は、昭和26年オブ塚（33）が、昭和32年正円寺古墳（59）が調査されている。新田塚古墳（28）は、直径が40mの大型円墳である。古墳群は、荻窪川沿いに上泉古墳群、檜峯古墳群がある。数は10基を越す程度で、円墳で構成されている。端気着帳遺跡（13）では方形周溝墓が検出されている。

奈良・平安時代

居住域 芳賀東部団地遺跡（4）は、3つの台地にまたがり、住居、掘立柱建物など多数が検出されている。集落は、8世紀中頃にはじまり11世紀後半まで継続する。大型住居を中心として、水田を意識して低地に面している。律令制と結びついた有力者が中心にいて、谷地田を基盤とした集落の変遷が描かれている。隣接している芳賀北部団地遺跡（2）、五代南部工業団地遺跡群（21～27）でも、集落の構成や変遷は似ており、さらに荻窪鰯塚（36）、荻窪東爪（37）、荻窪倉兼・同Ⅱ（38・39）の各遺跡などでも、傾向としては変わらない。9世紀をピークとした、第二次新開集落の姿がそこにはある（粕川村教育委員会1985）。

こうした台頭と関連しているのか、一般の集落ではなじみのない遺物も出土している。松峯遺跡（14）の62号住居の奈良三彩の小壺、五代竹花遺跡（23）の和同開珎、神功開寶、五代砂留遺跡群（69）の長年大寶である。松峯遺跡からは鉄製の匙状品や「宅」と墨書された坏も出土している。これらの遺跡は1km四方の範囲にあり、周辺で墨書土器の出土する割合も高いように見受けられる。芳賀東部団地遺跡からは、「春日部□麻呂」や「勢多郡□五百□都□」と線刻された石製紡錘車も出土している。前橋台地とは変わらない状況である。

『和名抄』にある勢多郡には、勢多郡少領上毛野朝臣足人の存在から南麓を充て、大室古墳群以来上毛野氏本貫の地とみている（尾崎1970）。論拠はおもに文献で、考古学的には決め手を欠いている。

深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、深沢、時沢、藤沢（高山寺本）の郷があり、芳賀郷だけが墨書「芳郷」が出土した二之宮洗橋遺跡付近に推定されている（群埋

文1994）。桂萱郷、真壁郷は言及されているが、所在地を特定するまでにはいたっていない（松田2002）。これほど南麓を調査していながら、なぜ手掛かりが少ないのかと感じてしまう状況である。調査時には勢多郡衙かと期待された上西原遺跡も寺院とするのが有力で、郷の所在地同様、郡衙も特定されていない。

生産域 水田は、荒砥川の西側となると限定され、一様に遺存状態も悪い。荻窪南田遺跡（66）では浅間B軽石に覆われた水田が検出されている。アゼは谷地の中央だけ、その両側、台地の際までは削り込んで段差をつけて区画している。アゼ部分だけで終わるところを、可能な限り広げるための工夫で、広瀬川低地帯にある茶木田遺跡（54）、石関西田Ⅱ遺跡（58）にはない、谷戸田と呼ばれる谷筋独特のものである。ただ、これが谷筋の多くで見られるのかといえば否定的で、8工区内では谷地の調査が稀なため断定はできないが、畠とともに検出された遺跡はない。後世の耕作で攪拌されていることも考えられるが、小神明勝沢境遺跡の浅間B軽石に覆われた谷地も、江木下大日遺跡のように花粉分析の数値は低く、水田の存在は否定的である（2009）。同様な結果は鳥取福蔵寺遺跡（19）でも得られている。畠作が主体なために水田がないのか、検討を続ける必要がある。

生産分野での注目は製鉄遺構である。芳賀東部団地遺跡の小鍛冶遺構は、9世紀前半のもので8世紀にまで遡る可能性がある。南麓で遺構が急増する時期とは重なり、技術者の集団がここにも配置された可能性が考えられている。砂鉄だとすれば原料の入手先がどこになるのか、拠点となる集落から供給を受けた生産なのかと、遺跡分布には分析が必要である。

山に近く、台地が多いという土地柄からすれば木材が利用しやすい。炭はもちろんのこと、漆、紡錘車から推定する養蚕、布の生産までが可能である。水田が乏しい中、生業を明らかにすることは課題である。

尾崎喜左雄氏は、赤城山、赤城神社を信仰の対象として高く位置づけている（尾崎1970）。暮らしに不可欠の水を恵み、祖霊が住むという理由からである。農耕が普及する古墳時代から意識され、この時代になると修行の場となり山上多重塔や、さらに高い所に宇通廃寺が作られている。本遺跡周辺では、今のところ寺院や信仰に関する遺構はない。松峯遺跡（14）から出土している三彩

小壺を、どう解釈するのも一つの切り口であろう。

中世

大胡郷は、広瀬川低地帯にある桃ノ木川沿いを底辺に荒砥川の大胡付近を頂点とした範囲と考えられている。長楽寺文書や彦部文書で大胡郷を冠した在家のあったことが分かるのと、『念仏往生伝』で大胡氏が居住していたとみられるからである。

大胡氏は、瀧名氏系武士団のひとりで足利成行の三男重俊を祖とする。源頼朝の御家人となった重俊の子孫ということで、「大胡太郎跡」として活躍している。『念仏往生伝』に名前があるのもその一つで、第四十六「上野国大胡小四郎秀村」の段では隆義、実秀、秀村三代に渡る篤信ぶりが伝えられている。南麓で赤城塔をはじめ石造物が多いのは、浄土教の普及と、それに一役買った大胡氏などの存在が大きいとしている（近藤1978）。

在家があるのは、桃ノ木川沿いの広い範囲である。文書は建武二年（1335）、応安六年（1373）等の年代で、重俊からは時代も大分下る。大胡治部少輔秀重のほか藤原氏、新田氏の名前もある。西は細井・青柳の御厨、東は大室・瀧名の荘園である。現在ある地名と一致もしているようで、開発が進んだ状況とみてよいのだろうか。関心は、今のところ検出されていない在家や類似した遺構が、どう確かめられるのかである。

『和名抄』勢多郡の中に大胡はないが、茂木山神Ⅱ遺跡からは「大兒万財□」と墨書された土器が出土し、山ノ上碑にある大胡臣と関連するのかと注目されている（大胡町教育委員会2001）。荒砥川沿いには遺跡が集中していて、堀越古墳、天神風呂遺跡と注目される遺跡が多い。大胡町養林寺は大胡氏の居館跡と推定され、隣接する長善寺には大胡太郎の墓と伝えられる石塔が残されている。本遺跡の周辺では、宝禅寺（53）に康永四年（1345）銘異形板碑があり、善勝寺（52）には仁治四年（1243）鉄造製阿弥陀如来座像がある。

城館は、嶺城（45）、小坂子要害城（46）、小坂子城（47）、勝沢城（48）、荻窪城（49）を取り上げたが、大胡城との関係で説明されることが多く、上泉城（50）は大胡一族といわれる剣聖上泉伊勢守の居城として有名である。

近世

慶長五年庚子正月五日牧野康成の快乗院あて書状をもとに、江木村の谷地を新田に開発する様子が復元されている（築瀬1999）。本遺跡のまわりでは、戦後に開墾したところもある。その原因は食糧増産に応じたからだけではなく、水が不足していたために耕作が放棄されていたとみる方があっている。南面して広いのは魅力ではあるが、川となると山頂からは粕川の1本だけ、ほか数があっても水量に乏しい。水をいかに確保するか、必要な量がまかなえるのかである。

明治の初めではあるが、『上野国郡村誌』（1978）には水利干にして水に苦しむという記載が目立つ。租税軽減策で過大に申告したのかもしれないが、水不足は深刻であったようである。

古代の頃より水の確保をめぐる数々の工夫と努力が重ねられたのであろう。その最大の遺跡と呼べるのが女堀（61）である。前橋市上泉町で取水し、旧東村国定までの灌漑用水で全長13kmにも及ぶという巨大さである。このうち1.5kmが調査され、1128年浅間山の噴火から間もないころに掘削されたが、未完に終わったと考えられている（峰岸・能登1981）。しかし、いまだに取水口と未完説に対して検討が重ねられている（飯島2009）。それによれば、取水口は現在の利根川にまで達するという説、山麓斜面を下る藤沢川の2説がある。

広瀬川低地帯での調査

昭和58年青柳寄居遺跡で平安時代の水田とその下層から集落跡が検出された（前橋市教育委員会）。断片的に知られてはいたが、これが広瀬川低地帯（以下低地帯）ではじめてとなる本格的な調査で、翌59年には茶木田遺跡（54）、昭和63年から平成4年にかけて、国道50号拡幅に伴い東西2kmにわたる範囲が野中天神遺跡、小島田八日市遺跡、今井白山遺跡として調査されている。これにより低地帯では、広い範囲に開発の手が及んでいることは決定的となり、古墳時代にさかのぼる可能性まで出てきた。微高地に集落を構え、周囲の低地で開墾を繰り返すといった様子が推定できる。

平成2年には、国道50号に面して伊勢遺跡、棗遺跡が調査されている。ともに6世紀代までさかのぼる集落である。真っ先に浮かぶのが北1kmにある桂萱大塚古墳

(55)との関連で、『上毛古墳綜覧』によれば、低地帯には前方後円墳が桂萱大塚古墳以外にも点々とあり、低地帯への注意が促されている(小林2002)。

平成9年には、国道50号の北、石関西築瀬遺跡(56)、西片貝源田島遺跡(57)が調査されている。前者では5世紀、7～8世紀の集落が検出され、周囲には平安時代の水田がある。平成12年には、北に隣接する石関西田Ⅱ遺跡(58)が調査されている。寺沢川と旧利根川との合流点にあたり、それを望む台地上には6世紀初頭の正円寺古墳(59)がある。検出された水田と畠は平安時代のものであるが、石関西築瀬遺跡の5世紀代の集落に対応する生産の場があると考えられている。

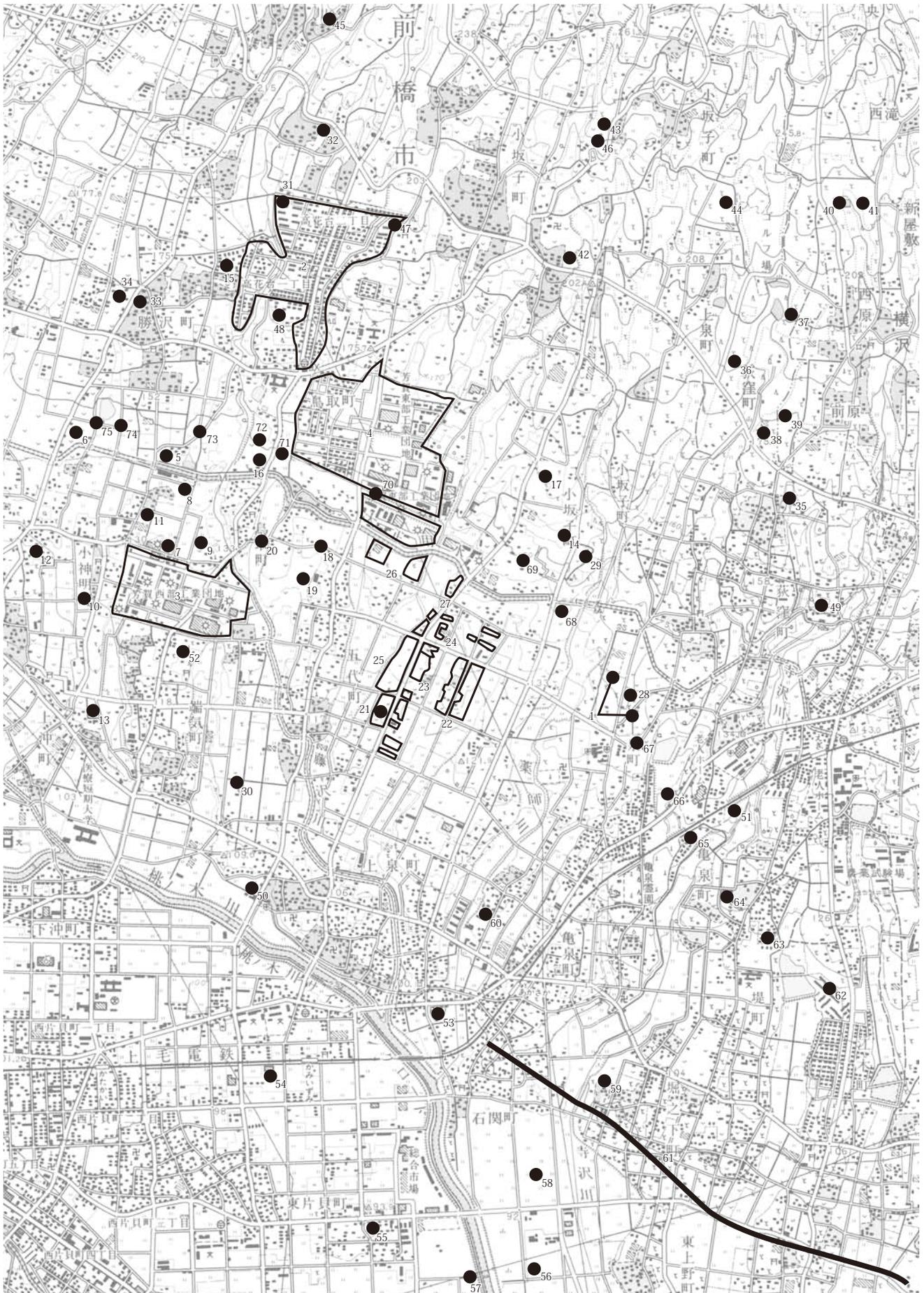
参考文献

勢多郡誌編纂委員会『勢多郡誌』昭和33年(1958)
前橋市『前橋市史』第一巻 昭和41年(1966)
大胡町『大胡町誌』昭和61年(1986)
群馬県『群馬県史』通史編1 平成2年(1990)
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬県遺跡大事典』平成11年(1999)
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬の遺跡』1～7 平成17・18年(2005・2006)
有末武夫『群馬県の地誌—地誌学の原点とその展開』有末武夫先生退官記念会実行委員会 昭和59年(1984)
原田恒弘・中束耕志『勢多郡富士見村龍ノ口遺跡試掘調査報告Ⅰ・Ⅱ』『群馬県立博物館調査報告書』第1号・第2号 昭和60・61年度(1985・1986)
財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『荒砥北三木堂遺跡』平成3・4年(1991・1992)
鬼形芳夫「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21 昭和60年(1985)
勢多郡町村教委事務研究会社会教育部文化財部会・赤城村教育委員会『赤城山麓の縄文のあけぼの—縄文時代前期を中心に—』平成12年(2000)
高崎市教育委員会・前橋市教育委員会「東国千年の都—前橋・高崎の縄文時代」平成22年(2010)
設楽博己「前橋市上沖町西新井遺跡表面採集資料(上)」『群馬考古通信』第9号 昭和59年(1984) 群馬県考古学談話会
赤城村教育委員会・赤城村歴史資料館『赤城山麓の弥生びと—樽遺跡発見70年—』平成13年(2001)
群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』28 平成20年度事

業概要 平成21年(2009)

齋藤 聡「思わぬところに古代集落—低地の中のムラ・田口下田尻遺跡—」『埋文群馬』No.45 平成16年(2006)
小林 修「赤城山西南麓における後期首長墓の展開」『群馬考古手帳』12 群馬土器観の会 平成14年(2002)
粕川村教育委員会『粕川村の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—』昭和60年(1985)
松田 猛「古代勢多郡の地名と氏族」『赤城村歴史資料館紀要』第4集 赤城村教育委員会・赤城村歴史資料館 平成14年(2002)
尾崎喜左雄『上野国の信仰と文化』尾崎喜左雄著書刊行会 昭和45年(1970)
岩澤正作『上毛電鉄沿線概観』昭和6年(1931)
中澤充裕「群馬県前橋市桧峯遺跡の奈良三彩小壺」『考古学雑誌』68巻4号 昭和58年(1983)
尾崎喜左雄『上野国長楽寺文書の研究』尾崎喜左雄著書刊行会 平成4年(1992)
前原 豊「赤城山麓の墓」『よみがえる中世』5 浅間火山灰と中世の東国3 平凡社 昭和63年(1988)
近藤義雄「金沢文庫本「念仏往生伝」成立の背景」『信濃』30巻5号 昭和53年(1978) 近藤義雄『上州の神と仏』(煥乎堂平成8年1996)に所収
大胡町教育委員会『茂木山神Ⅱ遺跡』平成13年(2001)
尾崎喜左雄『上野三碑の研究』尾崎喜左雄著書刊行会 昭和55年(1980)
山崎 一『群馬県古城址の研究』上巻昭和46年(1971)、下巻昭和47年(1972)、補遺篇上巻昭和54年(1979)、下巻昭和54年(1979)
築瀬大輔「赤城山麓「江木谷」の中世的景観—記録と記憶による景観復元の試み—」『群馬歴史民俗』第20号 群馬歴史民俗会 平成11年(1999)
峰岸純夫・能登 健「赤城山南麓の開発と遺構」(女堀)『アバーンクボタ』19 特集利根川 昭和56年(1981)
飯島義雄「灌漑用水遺構 女堀の赤城山南麓への引水経路の検討」『研究紀要』27 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 平成21年(2009)
広瀬桃木両用土土地改良区『広桃用水史』平成6年(1994)
『上野国郡村誌2 勢多郡(2)』昭和53年(1978) 群馬県文化事業振興会

後に付くカッコ内の番号は、周辺遺跡一覧表の番号と対応する。参考とした文献もあわせて掲載している。



第7図 周辺遺跡位置図（国土地理院1/25,000地形図「澁川」平成14年10月1日発行 「前橋」平成9年10月1日発行 「鼻毛石」昭和56年7月30日発行 「大胡」平成8年11月1日発行使用）

第2章 遺跡の立地と環境

上泉唐ノ堀・新田塚遺跡群周辺遺跡

遺跡 No.	遺 跡 名	調査年度	時代・遺 構 の 種 類 及 び 数	文献 No.
1	上泉唐ノ堀遺跡・ 上泉新田塚遺跡群	平成18・20 平成18～20	縄文：住居1軒、土坑9基 近世：溝1条、道1条 縄文：住居11軒、土坑95基 古墳：住居1、古墳2 奈良・平安：住居4、溝6条、堀2条、道4条、井戸1基	
2	芳賀北部団地遺跡	昭和48・49	縄文：住居34（うち敷石住居4）、配石遺構17 奈良・平安：住居237、掘立柱建物8、製鉄遺構3、溝28、井戸5、ピット20	1
3	芳賀西部団地遺跡	昭和50	縄文：住居7、ピット8、配石遺構2 古墳：古墳31、埴輪棺1 中・近世：土坑27	2
4	芳賀東部団地遺跡	昭和51～55 平成9	縄文：住居60（うち敷石住居6）、ピット140、配石遺構4 古墳：住居70、古墳4 奈良・平安：住居413、掘立柱建物約207、鍛冶・精錬址5、その他671、落ち込み3	3
5	富士塚下遺跡	昭和57	奈良：住居1 平安：住居1 中世：溝3	4
6	下田遺跡	昭和57	縄文：住居5、ピット4 古墳：住居1 平安：住居1 中世：土坑12、溝9、ピット群2 近世：環濠1、墓壇1、ピット群1、井戸12 時期不明：ピット3	4
7	倉本遺跡	昭和58	弥生：住居2 中・近世：溝2（環濠の北辺と南辺か）、ピット21	5
8	九料遺跡	昭和58・ 60・61	縄文：住居7（うち敷石住居3）、集石1 古墳：住居67、土坑29、掘立柱建物1、ピット9 奈良・平安：住居4 中・近世：墓8、井戸4 時期不明：住居1、土坑6、掘立柱建物1、ピット11、溝9、水路2、河川4	5・7・ 8
9	西田遺跡	昭和58	縄文：住居3 古墳：住居4、6世紀中頃円墳4 横穴式石室、6世紀中頃帆立貝式古墳1、溝3、道1、集石2、ピット31	5
10	大明神遺跡	昭和58	古墳：住居2、溝2 近世：溝3、井戸1 古墳～近世：土坑6	5
11	湯気遺跡	昭和60	弥生：住居1 古墳：住居4 奈良・平安：住居7 時期不明：掘立柱建物3、ピット、土坑、溝、井戸	7
12	谷向遺跡	昭和59	時期不明：井戸3、溝3、ピット51、集石遺構1、土坑10	6
13	端気着帳遺跡	昭和57	縄文：住居2、ピット1 弥生：方形周溝墓2、ピット1、溝状遺構1 古墳：住居16	9
14	松峯遺跡	昭和56	古墳：住居11 奈良・平安：住居65 奈良三彩小壺 時期不明：掘立柱建物1、ピット2（国分期）	10
15	芳賀北曲輪遺跡	昭和63	縄文：住居24（うち敷石住居4、配石住居1）、土坑21、風倒木1 古墳：古墳6 時期不明：井戸1、道1	11
16	芳賀北原遺跡	平成3	縄文：土坑1 古墳：住居3 平安：住居6 時期不明：土坑2	12
17	五代檜峯Ⅱ遺跡	平成9	古墳：住居2、焼土坑1、土坑8	13
18	鳥取東原遺跡	平成9	古墳：住居1、土坑7 江戸：埋葬施設1	14
19	鳥取福蔵寺遺跡	平成9	縄文：住居2、落ち込み2 古墳～平安：住居41（製鉄遺構1）、土坑83、掘立柱建物1、井戸2	15
20	鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡	平成10	旧石器細石器文化層 縄文：住居6 古墳～平安：住居44 縄文～中世：土坑84、掘立柱遺構9、鍛冶工房1、溝5、井戸1	16
21	五代江戸屋敷遺跡	平成12	縄文：土坑1 古墳：住居44、方形周溝墓2、周溝状遺構1 奈良・平安：住居12、掘立柱建物1、ピット87、井戸1 中世：地下式土坑2、溝1	17
22	五代木福Ⅰ遺跡	平成12	縄文：住居1、ピット6、配石遺構3 古墳：住居35、土坑8 奈良・平安：掘立柱建物19、土坑2、ピット220 中世・近世：土坑11、溝8	18
	五代木福Ⅱ遺跡	平成12	縄文：配石1 古墳：住居61 奈良・平安：住居114、掘立柱建物16 中世：地下式土坑2、溝2、井戸6 近世：溝6	19
	五代木福Ⅲ遺跡	平成15	古墳：住居14 奈良：住居15 平安：住居8 古墳・奈良：掘立柱建物12 古墳～中・近世：ピット294、溝10、井戸4、土坑73 時期不明：竪穴状遺構1、周溝状遺構1	25
	五代木福Ⅳ遺跡	平成16	古墳：住居1 奈良・平安：住居17、掘立柱建物5、土坑21 中世以降：溝4	26
23	五代竹花遺跡	平成12	縄文：住居2 古墳：住居5、土坑1 奈良・平安：住居11、土坑3、ピット254 近世・現代：溝2	18
	五代竹花Ⅱ遺跡	平成15	縄文：住居1、土坑19 古墳：住居2、土坑8 奈良：住居5 平安：住居12 奈良・平安：掘立柱建物3 中世：地下式土坑1 近世以降：道路4 時期不明：竪穴状遺構3、周溝状遺構1、土坑77、ピット236、井戸3	25
24	五代深堀Ⅰ遺跡	平成12	縄文：住居1 奈良・平安：住居2、掘立柱建物3、ピット29（奈良～中世）	19
	五代深堀Ⅱ遺跡	平成13	縄文：住居1、土坑2 古墳：住居2 奈良・平安：住居7	21
	五代深堀Ⅲ遺跡	平成16	縄文：住居3、土坑14、溝2、落ち込み2 奈良・平安：住居29、掘立柱建物5、土坑2、井戸3	26
25	五代伊勢宮Ⅰ遺跡	平成12	古墳：住居3 奈良・平安：住居3、ピット1 中世・近世：土坑1、溝1	18
	五代伊勢宮Ⅱ遺跡	平成13	縄文：住居7、土坑26 古墳：住居10、竪穴状遺構2、土坑7、ピット490 奈良・平安：住居5、掘立柱建物3 近世：溝4	20
	五代伊勢宮Ⅲ遺跡	平成13	縄文：土坑1 奈良・平安：住居3 中世・近世：土坑66、溝3、井戸3、地下式土坑5	21
	五代伊勢宮Ⅳ遺跡	平成13	縄文（中期）：住居3、土坑194 奈良・平安：住居1	21
	五代伊勢宮Ⅴ遺跡	平成14	縄文：住居12、土坑43 古墳：小石塚1 古墳～奈良・平安：住居53、掘立柱建物6 土坑38、ピット163 中・近世：竪穴状遺構5、溝6、井戸2	22
	五代伊勢宮Ⅵ遺跡	平成14	縄文：住居22、土坑753 古墳～平安：住居22、鍛冶工房1 古墳～近世：土坑311、ピット336 奈良～近世：掘立柱建物3 近世：道路1 時期不明：井戸2、竪穴状遺構1	23
	五代伊勢宮遺跡（1）	平成18	縄文：住居3、土坑40 古墳：住居9 古墳以降：住居2 奈良・平安：住居12、掘立柱建物2 平安～近代：溝10、土坑54	27
	五代伊勢宮遺跡（2）	平成20	縄文：土坑6 平安：住居1 時期不明：掘立柱建物1、土坑5、溝1 近代：道路1	28
26	五代中原Ⅰ遺跡	平成13	縄文：住居2 古墳：住居5、土坑1 奈良・平安：住居11、土坑3、ピット254 近世・現代：溝2	21
	五代中原Ⅱ遺跡	平成14	縄文：住居4 古墳：住居35 古墳後期～近世：ピット58、掘立柱建物3 近世以降：土坑25、道路4 時期不明：風倒木3	23
	五代中原Ⅲ遺跡	平成15	古墳：住居45、土坑55、ピット57	24
27	五代山街道Ⅰ遺跡	平成15	縄文：住居9、土坑8 古墳：住居1 平安：住居2、掘立柱建物1	24
	五代山街道Ⅱ遺跡	平成15	縄文：土坑11 時期不明：溝1	24

遺跡 No.	遺 跡 名	調査年度	時代・遺 構 の 種 類 及 び 数	文献 No.
28	新田塚古墳		7世紀代の円墳 直径約45m 高さ5m 上毛古墳総覧桂萱村第51号	29
29	檜峯古墳	昭和28	7世紀代の円墳 自然石乱石積み両袖型横穴式石室 上毛古墳総覧桂萱村第29号	29
30	五代大日塚古墳	明治38・39	6世紀末～7世紀前半の前方後円墳 横穴式石室 上毛古墳総覧芳賀村第11号 鏡・鏡板・轡・鏝・刀身等出土	29
31	桂正田稲荷塚古墳		7世紀後半の方墳 横穴式石室 上毛古墳総覧芳賀村第60号	29・30
32	東公田古墳	昭和56	7世紀後半の円墳 上毛古墳総覧芳賀村第59号 群馬県教育委員会調査	29
33	オブ塚古墳	昭和26	6世紀後半の前方後円墳 全長35m 自然石乱石積み袖無型横穴式石室 上毛古墳総覧芳賀村第48号 群馬大学調査	29
34	オブ塚西古墳	昭和34	6世紀中葉前後 墳丘をもたない小型の竪穴式石槨、箱式棺状石室 上毛古墳総覧記載漏 群馬大学調査	29・30
35	ほっこし塚古墳	平成6	7世紀代の円墳 上毛古墳総覧桂萱村第58号	29
36	荻窪鱒塚遺跡	平成13	奈良・平安：住居10、掘立柱建物10（1号掘立柱建物は布堀りをもつ）	31
37	荻窪東爪遺跡	平成13	縄文前期：住居2	31
38	荻窪倉兼遺跡	平成13	奈良・平安：住居29、掘立柱建物12、その他	32
39	荻窪倉兼Ⅱ遺跡	平成14	奈良・平安：住居36、掘立柱建物10、溝4	32
40	横沢倉山遺跡	平成12	奈良・平安：住居2、鍛冶遺構1、土坑8	33
41	横沢大塚遺跡	平成12	縄文：土坑3 古墳：古墳2 時期不明～近世：溝状遺構1	33
42	川白田遺跡	平成10	縄文：住居22、土坑338、埋設土器3、集石2 近世：土坑2、井戸3、畑1、溝2	34
43	小坂子湯田Ⅰ・Ⅱ遺跡	平成8	縄文：陥し穴3 古墳：7世紀代円墳3、小石槨1 奈良・平安：溝1 時期不明：風倒木1	35
44	小坂子一木峯遺跡	平成16	縄文：土坑1、竪穴状遺構1 奈良・平安：住居8 時期不明：溝2、ピット50	36
45	嶺城跡		中世の城郭、16世紀 丘城	37
46	小坂子要害城跡		中世の城郭、16世紀 丘城	37
47	小坂子城跡		中世の城郭、16世紀 丘城 嶺城の支城か	37
48	勝沢城跡		中世の城郭、16世紀 平城 嶺城の支城か	37
49	荻窪城跡		中世の城郭、16世紀 丘城	37
50	上泉城跡		中世の城郭、16世紀後半 平城 大胡城の支城	37
51	亀泉薬師塚古墳	昭和48	6世紀頃、円墳 無袖型横穴式石室 上毛古墳総覧記載漏	38
52	善勝寺		鉄造阿弥陀如来坐像 仁治四年太才癸二月日 大勸進僧心禪 為法界衆生平等利益也（1243年）鑄造	
53	宝禅寺		異型板碑 康永第四曆乙酉二月日庵主覚明（1345年）	
54	茶木田遺跡	昭和59	奈良・平安：住居10、土坑4、柱穴状ピット8、焼土遺構1 中世：井戸1、溝3	39
55	桂萱大塚古墳	昭和32	6世紀後半の前方後円墳 上毛古墳総覧桂萱村第9号 群馬大学調査	29
56	石関西薬瀬遺跡	平成6	古墳：住居9、土坑1 奈良：住居9 時期不明：畝状遺構 その他：住居1、掘立柱建物3、土坑11、溝5	40
57	西片貝源田島遺跡	平成6	中世：火葬墓1、集石1	40
58	石関西田Ⅱ遺跡	平成12・13	古墳：踏み分け道3、旧河道1 平安：住居16、As-B下水田3、As-B混土下水田1、畠11 中・近世：溝41、土坑22、井戸4、旧河道3	41
59	正門寺古墳	昭和32	6世紀前半の前方後円墳 全長65m 自然石乱石積み両袖型横穴式石室（くびれ部：竪穴式石槨）上毛古墳総覧桂萱村第66号	29・30
60	上泉太郎三前遺跡	平成10	縄文：住居5 平安：住居2	42
61	女堀	昭和50～55	灌漑用水路 国指定史跡 全長13Km	43
62	萱野Ⅱ遺跡	平成13～15	縄文：住居15、掘立柱建物3、土坑125、埋設土器2、ピット13 古墳：古墳2、水田想定地 奈良：住居5 平安：住居5、土坑11、ピット7	44
63	堤沼上遺跡	平成14～16	古墳：住居6 奈良・平安：住居34 平安：住居5、掘立柱建物18、土坑56、溝9、井戸1、道3、ピット164、田畑、水田	45
64	亀泉坂上遺跡	平成14～16	縄文：住居6、土坑73、ピット45 古墳：住居21、土坑12、土器集中1、畠1、溝1、古墳1 平安：溝4、道8、水田 江戸：溝10、道1、畑1	46
65	亀泉西久保Ⅱ遺跡	平成14～16	縄文：土坑2、配石遺構1 古墳：水田1 奈良・平安：住居6、土坑6、溝8、道3、水田 中・近世：溝4 時期不明：土坑16、ピット34	47
66	荻窪南田遺跡	平成14	縄文：土坑1 奈良・平安：溝13、道2、水田1 中・近世：土坑2、溝6、道6、焼土1	47
67	上泉唐ノ堀遺跡	平成14～16	縄文：住居16、土坑208、配石1、掘立柱建物7、柵列1、遺物集中部1 奈良以降：住居15、土坑4、掘立柱建物10、柵列3、ピット30、溝9 時期不明：ピット33	48
68	上泉武田遺跡	平成19	平成19年度調査 年報27	49
69	五代砂留遺跡群	平成19	平成19年度調査 年報27	49
70	芳賀東部埴地遺跡	平成19・20	平成19・20年度調査 年報27・28	49・50
71	鳥取松合下遺跡	平成20	平成20年度調査 年報28	50
72	胴城遺跡	平成19・20	平成19・20年度調査 年報27・28	49・50
73	堤遺跡	平成20	平成20年度調査 年報28	50
74	小神明勝沢境遺跡	平成20	平成20年度調査 年報28	50
75	小神明富士塚遺跡	平成20・21	平成20・21年度調査 年報28・29	50・51

文献

- 1 井野誠一「芳賀北部団地Ⅰ遺跡」芳賀団地遺跡群第5巻 前橋市教育委員会 1994・1974
- 2 井野誠一「芳賀西部団地遺跡」芳賀団地遺跡群第4巻 前橋市教育委員会 1991
- 3 中澤充裕・唐沢保之「芳賀東部団地遺跡Ⅰ」芳賀団地遺跡群第1巻 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984
林 喜久夫・前原照子・井野誠一「芳賀東部団地遺跡Ⅱ」芳賀団地遺跡群第2巻 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988
井野誠一「芳賀東部団地遺跡Ⅲ」芳賀団地遺跡群第3巻 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990
飯田祐二・佐藤則和「芳賀東部団地遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 4 前原照子「小神明遺跡群」前橋市教育委員会 1983
- 5 井野修二「小神明遺跡群Ⅱ」前橋市教育委員会 1984
- 6 唐沢保之・井野修二「小神明遺跡群Ⅲ」前橋市教育委員会 1985
- 7 桑原 昭・原田和博ほか「小神明遺跡群Ⅳ」前橋市教育委員会 1986
- 8 桑原 昭・新保一美「小神明遺跡群Ⅴ」前橋市教育委員会 1987
- 9 松村親樹「端気遺跡群Ⅰ」前橋市教育委員会 1983
- 10 中澤充裕・杉浦つや子「桧峯遺跡」前橋市教育委員会 1982
- 11 金子正人・長島郁子「芳賀北曲輪遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990
- 12 鈴木雅浩・狩野吉弘「芳賀北原遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992
- 13 坂口好孝・眞塩明男「五代檜峯Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 14 坂口好孝・眞塩明男「鳥取東原遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 15 坂口好孝・眞塩明男「鳥取福蔵寺遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 16 林 信也・福田貫之「鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999
- 17 齋木一敏・須藤友子「五代江戸屋敷遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001
- 18 長井正欣ほか「五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001
- 19 荻野博巳・齋木一敏「五代木福Ⅱ遺跡・五代深堀Ⅰ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001
- 20 高橋一彦・倉品敦子「五代伊勢宮Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002
- 21 金子正人・荻野博巳ほか「五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002
- 22 近藤雅順「五代伊勢宮Ⅴ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003
- 23 荻野博巳・板垣 宏・権田友寿「五代伊勢宮Ⅵ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003
- 24 倉品敦子・高橋 亨・小林和美「五代中原Ⅲ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2004
- 25 齋木一敏・倉品敦子ほか「五代竹花Ⅱ遺跡・五代木福Ⅲ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2004
- 26 高橋 亨・小嶋 尚「五代木福Ⅳ遺跡・五代深堀Ⅲ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005
- 27 鈴木雅浩・権田友寿・山口知宏「五代伊勢宮遺跡（1）」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2007
- 28 山下歳信・岩丸展久・権田友寿「五代伊勢宮遺跡（2）」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009
- 29 前橋市史編さん委員会「前橋市史」第一巻 前橋市 1971
- 30 群馬県史編さん委員会「群馬県史」資料編3 原始古代3 群馬県 1881
- 31 小峰 篤・横澤真一「荻窪塚遺跡・荻窪東爪遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002
- 32 小峰 篤・横澤真一・平野岳志・小林和美「荻窪倉兼遺跡・荻窪倉兼Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003
- 33 藤坂和延「横沢芳山遺跡・横沢大塚遺跡」大胡町教育委員会 2002
- 34 大賀 健ほか「川白田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 35 荻野博巳「小坂子湯田Ⅰ・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997
- 36 小峰 篤ほか「小坂子一木峯遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005
- 37 群馬県教育委員会事務局文化財保護課「群馬県の中世城館跡」群馬県教育委員会 1989
- 38 阿久津宗二「亀泉薬師塚古墳」前橋市教育委員会 1973
- 39 唐沢保之「茶木田遺跡」前橋市教育委員会 1985
- 40 斉藤和之・奥富雅之ほか「石関西築瀬遺跡・西片貝源田島遺跡」石関西築瀬遺跡調査会 1996
- 41 根岸 仁「石関西田Ⅱ遺跡」群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第306集 2002
- 42 新保一美「上泉太郎三前遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998
- 43 鹿田雄三「女堀遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 44 洞口正史・新井英樹「萱野Ⅱ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第402集 2007
- 45 女屋和志雄・高島英之「堤沼上遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第423集 2008
- 46 女屋和志雄「亀泉坂上遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第445集 2008
- 47 徳江秀夫「亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第420集 2008
- 48 関口博幸・新井 仁「上泉唐ノ堀遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第510集 2010
- 49 「年報27」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007
- 50 「年報28」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008
- 51 「年報29」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 調査区・グリッドの設定

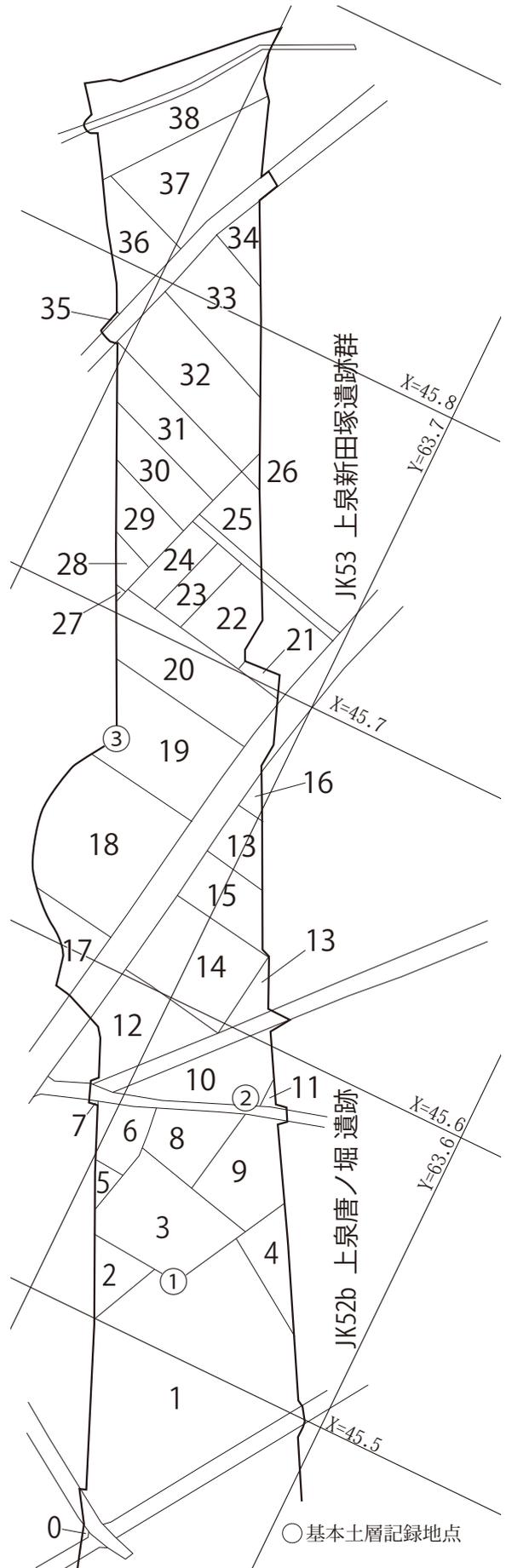
調査区は、横断する市道で5つの区画に仕切られ、その中のひと筆ごとに国土交通省により東から1～37の番号が付けられている。1～9が上泉唐ノ堀遺跡、10～37が上泉新田塚遺跡群である（第8図）。

グリッドは、国家座標第IX系（世界測地系）を用いて $X=45.000$ 、 $Y=63.000$ を基準に設定した。これは上武道路調査予定地の統一仕様で1km四方を地区、その中の100m四方を区とし、さらに区の南東隅を基点に5mごとにX軸が南から1～20、Y軸が東から西にA～Tをつけて小区画に細分した。位置を特定するには、例えば第1地区68G-1グリッドと表記した（第9図）。

この表記は、遺構の位置の特定、遺構図の作成や遺物の取り上げ、遺物への注記など諸作業で使われている。ただし、地区は、諸記録の管理上の扱いで、遺物や図面等記録類への記入は省略した。これに代わり、上武道路のこれまでの仕様にならい遺跡略称「JK」を使用した。Jは上武、Kは国道の略称である。上泉唐ノ堀遺跡は、7工区分「JK52」と区別するため「JK52b」とした。上泉新田塚遺跡群は、「JK53」である。また、8工区は、主要地方道前橋赤城線を境に8-1工区、8-2工区に分けられている。

2 遺構の確認面

調査は、攪乱箇所などの一部を除いて上下2面で行った。1面目がAs-Cの混入した土層で、遺構の大半はこの時に検出されている。2面目は、漏れを確認する意味も兼ねてローム漸移層下位からソフトローム層上位で行った。縄文時代の土坑や遺物包含層などを検出することができた。なお、表土や2面目の掘削には、重機を各所で使用した。掘削面は、調査区の一画でローム層までの堆積状況を確認して決定した。



第8図 用地区画番号図 (1/2,000)

3 記録仕様

遺構平面図は、縮尺1/20を原則とし、適宜1/10～1/100の縮尺をあわせて使用した。断面図は、縮尺1/20を原則とした。遺物の取り上げは、遺構毎を原則とし、ほかには5m単位のグリッドで取り上げるか、作業の内容によっては調査区単位とした。

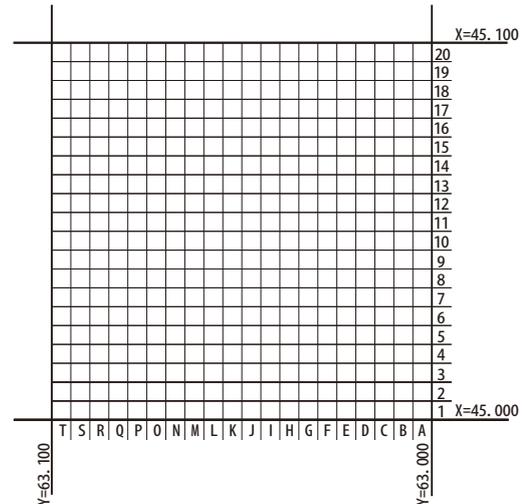
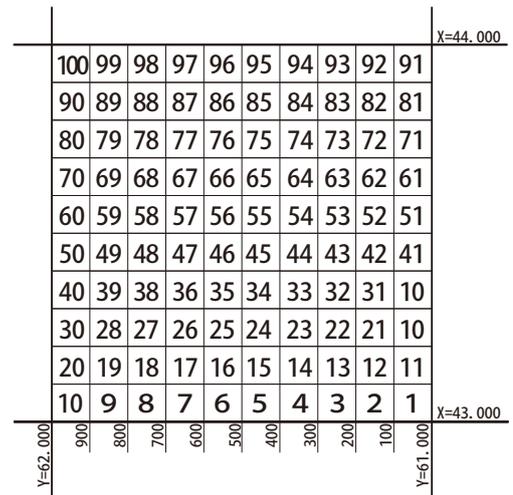
遺構の写真撮影は、35mmデジタル、6×9サイズフィルムを使用した。空中写真撮影には、6×6サイズフィルムを使用した。

第2節 基本土層

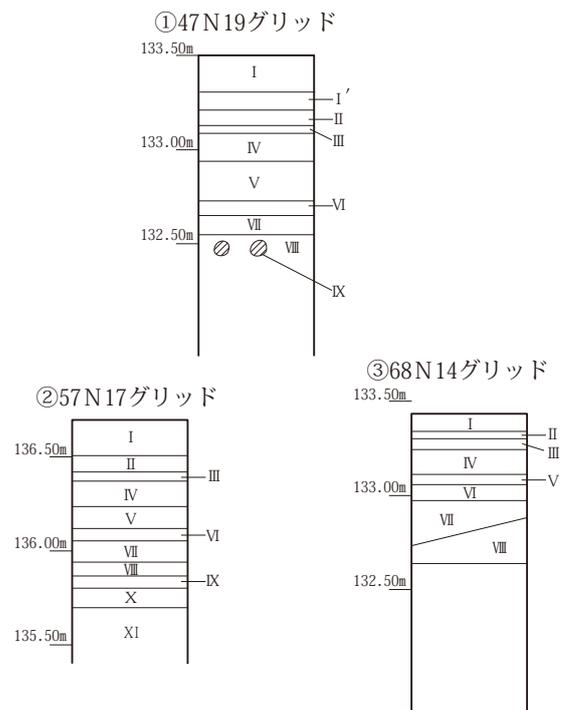
2つの遺跡では、土地改良でIV層まで削平されて耕作土が客土された所と、逆にI層の上に客土された所とが相半ば混在する。これをのぞけば違いはなく、台地上での層序は模式図で示したとおりである（第10図）。

- I層 表土、耕作土、上層に土地改良の客土がのる。
- II層 As-B混入暗褐色土
- III層 As-B
- IV層 As-C混入黒褐色土
- V層 暗褐色土
- VI層 褐色土
- VII層 ローム漸移層
- VIII層 黄褐色ローム ソフトローム
- IX層 黄褐色ローム As-OK混入
- X層 褐色ローム As-BP混入
- XI層 褐色ローム

III層は、As-Bの純堆積層で、古墳の周堀や溝の埋没土の上位だけにみられる。耕作等の攪拌を免れたものである。厚さが最大15cm、所によってはピンク色のアッシュを残す。II層もIII層のように遺存状況が限られていて、本来の堆積は少ないとみられる。IV層には、As-Cのほか、少量ではあるがHr-FP（6世紀中頃、榛名山供給）が混入している。古墳時代に形成され、古代までの地山としてだけでなく、覆土としても多くの遺構でみることができる。VI層、VII層はローム漸移層で、色調が上部の黒色から下位になるにつれて褐色へと変化する。縄文時代の遺物を包含している。ローム層は、漸移層以下、Hr-HP（榛名八崎軽石層）下の褐色ロームまでが堆積しているのを確認している。



第9図 グリッド配置図



第10図 基本土層柱状図

第3節 調査の経過

1 概要

調査は、群馬県教育委員会による2回の試掘調査を経て、平成18年7月、8工区最初の遺跡として開始された。しかし、取得されていた用地も虫食いの状態で、しばらくの間は2遺跡を交互に調査しながら、用地取得の進展を待つという状況が続いた。それも11月には改善されたが、調査の完了に至るまでは、その後に平成19年度、さらに同20年度の半ばまでを要した。

特記されるのは、平成19年度末から20年度当初の道路特定財源問題である。調査を始める以前に、事業実施の予算措置のメドすら立てられないという事態で、解決後は調査期間の短縮が懸案となった。それへの対応策としては、五代砂留遺跡群と調査を平行するなどして事態を凌いだ。また、前橋市指定史跡新田塚古墳とは接していて、試掘調査後も調整が必要とされるなど全体に懸案の多い調査であった。経過の中で使用した区画番号は、第1節1の調査区の項で述べた番号に該当する。調査した遺構の数は、次のとおりである。旧石器時代については、8工区旧石器時代編に掲載する。

上泉唐ノ堀遺跡

竪穴住居	1軒（縄文時代）
土坑	9基
溝	1条
道	1条
遺物箱数	2箱

上泉新田塚遺跡群

竪穴住居	16軒 (縄文時代11軒、古墳時代1軒、奈良・平安時代4軒)
土坑	95基
溝	7条
道	4条
井戸	1基
古墳	2基
遺物箱数	30箱

2 試掘調査

2回の試掘調査が群馬県教育委員会により実施されている。詳細は次のようである。

平成18年4月25・26日 対象面積約600m²、試掘面積約18.25m²。前橋市指定史跡「新田塚古墳」の周堀確認を目的にしたもので、事業予定地内に幅約1mの試掘溝を設定し、重機（0.1立米）を使用して遺構確認面まで掘削した。

調査所見は、5本の試掘溝で周堀を検出し、全周していることが推定できた。覆土には、As-Bが堆積しているのも確認された。

平成18年5月17・18日 対象面積10,000m²、試掘調査面積約344.5m²。調査の方法は、前橋市上泉町地内の事業予定地内に幅約1mの試掘溝を設定し、重機（0.35立米）を使用して遺構確認面まで掘削、遺構検出面の認定、遺構有無の確認、遺物出土の確認を行う。

調査所見は、As-Cが混入する黒褐色土から縄文時代の土坑や剥片石器を検出したことから、本調査が必要と判断された。

3 上泉唐ノ堀遺跡の調査経過

平成18年度の調査経過

7月 18日調査開始。1区画の表土掘削。溝2条、道1条を確認。25日から1号溝の調査。27日国土交通省との調整会議。用地買収の状況と調査工程を確認する。

8月 1日、1区画の旧石器の確認調査を開始。縄文遺構確認のためのトレンチ調査を10日から29日まで継続。21日1号住居の調査開始。25日、1区画空撮。

9月 5日全景。以後、縄文時代の遺構調査を継続。旧石器の確認調査は石器の出土で範囲を拡大。

10月 5日、8・9区画の調査開始。13日から縄文時代の遺構調査。19日、国土交通省との調整会議。用地の買収が進んだのを受けて11月からの調査工程を協議。

11月 1区画の旧石器調査継続。6日、57I3グリッドの暗色帯で局部磨製石斧が出土。21日、1区画での旧石器遺物出土状況空撮。

12月 上泉新田塚遺跡群を調査するため作業は中断。

1月 10日、2・3・4区画の調査開始。2月8日、国土交通省との調整会議。3月8日まで縄文時代の土坑、

第3章 調査の方法と経過

旧石器の調査を行い、調査を終了する。

平成20年度の調査経過

4月から5月11日まで、道路特定財源問題で調査は中断。12日の開始後は、五代砂留遺跡での調査を行いながら、上泉地区2遺跡も平行して調査する。

6月10日、5～7区画の表土掘削。トレンチ調査により土坑3基を検出。11日、すべての調査を終了する。

4 上泉新田塚遺跡群の調査経過

平成18年度の調査経過

8月2日、12区画の調査開始。25日、1号堀空撮。31日までに1号堀、土坑などを調査。1号堀は地元につながる「カラノボリ」ではないかと関心を呼び、31日地元自治会向けの見学会を開催。55名の見学者がある。1号堀については、事業団HP最新発掘情報に掲載。

9月1日から18区画の表土掘削。20日まで土坑、溝、道などを調査。21日から縄文時代の遺構確認と調査。

10月18区画の縄文時代の遺構調査を継続。2日からは18区画の旧石器の確認調査を開始。11月2日に終了。

11月用地の取得が進み、11日からは25～37区画の表土掘削を開始。21日から遺構調査。30日から17区画の調査を開始する。

12月5日、17・18区画、31・32区画の空撮。26日まで住居、土坑、溝など縄文時代から平安時代までの遺構の調査が続く。14日、17区画で旧石器の確認調査を開始。21日、調査区西半分、25区画より西での空撮。

1月10日、調査を開始。16日、14区画の調査を開始。29日、19・20区画の表土掘削を開始。

2月2日から19・20区画の遺構確認、16日から道、溝の調査、縄文時代の遺構の調査。21日、19区画の旧石器の確認調査を開始する。

3月26日まで市道を迂回させて8号住居ほかの遺構を調査、さらに旧石器の確認調査。

平成19年度の調査経過

4月5日、26・29・34・37区画の調査を開始。38区画の表土掘削を開始。16日から10・11区画の表土掘削を開始。19日、38区画の旧石器の確認調査が終了。23日2号墳の調査を開始。27日2号墳の空撮。

平成20年度の調査経過

4月から5月11日まで、道路特定財源問題で調査は中断。12日の開始後は、五代砂留遺跡での調査を行いながら、上泉地区の2遺跡も平行して調査する。

6月9日から13・16区画の立木を伐採。12日から13・22区画の表土掘削を開始。22区画では2号・3号の2条の道を検出。16日からは1号堀の調査。17日からは19・20区画で新田塚古墳の西側周堀を調査。24日新田塚古墳ほかを空撮する。その後、30日まで旧石器の確認調査をして、すべての調査を終了した。なお、23日には前橋市教育委員会と協議の上で、市史跡新田塚古墳の標柱を墳丘寄りの現在地に移動した。

第4節 整理作業の経過

1 平成21年度の経過

平成22年3月、上泉唐ノ堀遺跡の整理作業を開始し、遺構図の整理を土層注記の入力とともにいった。

2 平成22年度の経過

平成22年4月から同23年3月、上泉唐ノ堀遺跡、上泉新田塚遺跡群の遺構図の整理、遺物の分類から接合・復元・実測まで・本文の執筆・写真図版の作成、次年度刊行にむけて編集の作業を行う。

3 平成23年度の経過

平成23年4月から同年6月、刊行にむけて編集作業を行い、入札、刊行。その後に記録類の収納を行い、事業を完了した。

調査した遺構は、全て掲載することを原則とした。ただし例外が土坑で、掲載したのは上泉唐ノ堀遺跡で253基のうち9基、上泉新田塚遺跡群で1048基のうち97基である。未掲載の大多数は、人工と判断するのがむずかしいものである。調査の時点では完掘した状況の写真記録と、全体図への記載がされていて、そのまま保管されている。

第4章 上泉唐ノ堀遺跡の調査

第1節 概要

調査は、1面がローム漸移層で縄文時代まで、2面がその下位のソフトローム層上面で縄文時代を、さらに3面目として、ローム層中で旧石器時代の本調査を行う。大半は、平成18年度に調査されているが、一部が平成20年度となっている。これは用地の取得状況によるもので、遺構によっては分割せざるを得なかった。検出状況に違いがあるのは、このためである。また、耕作による攪乱箇所が予想していた以上に多く、これについては遺構確認後、調査の対象から除外した。検出した遺構は次のとおりである。出土した遺物は3箱である。

旧石器時代 3地点で遺物が出土した。いずれも7工区に近い所で、出土した層位も同じようなAs-BPの上位と下位、暗色帯の3面である。暗色帯からは、局部磨製石斧1点が出土している。主要な石材は、黒曜石が大半を占める中、硬質頁岩、黒色安山岩が少量含まれている。詳細は、上武道路旧石器時代編3（平成23年度刊行予定）を参照。

縄文時代 前期諸磯b式期の竪穴住居1軒、土坑9基
近世 溝1条、道1条

第2節 検出された遺構と遺物

概要 竪穴住居は、単独で調査区の南端にある。7工区とは市道をはさんで西と東、隣接した位置関係である。立地だけでなく、時期の点からみても7工区で検出された集落に近く、西側の縁辺部にあたるのではないだろうか。遺構の数が調査区全体で少ないことも、縁辺部であることを物語っている。

土坑は、ローム漸移層～ソフトロームの上位で253基を検出した。調査では地山との色調の違いを決め手としたが、その中でも掘り込みが深く、形状がしっかりとしている9基を取り上げて報告する。これには、7工区で検出されたものや上泉新田塚遺跡群での調査例を参考とした。なお、251号土坑は、その規模からみて住居の可

能性がある。

分布の状況は、1号住居の周囲には少なく、調査区の中では反対側になる北東寄りに多い。住居からは大きく離れ、近いものでも58号、67号など50～60mの距離である。距離が示すように、集落は一旦途切れて、北東部寄りに別の一群があるのかと思わせる状況である。遺物が出土した土坑は稀で、あっても小破片が埋没時に混入した状態である。時期は、類例との比較、そして覆土の特徴からの推定である。

住居

1号住居（第11図 PL.6・28）

位置 471J11・12グリッド 形状 方台形 規模 長軸 3.86m、短軸3.60m、深さ0.70m 面積 13.89m²

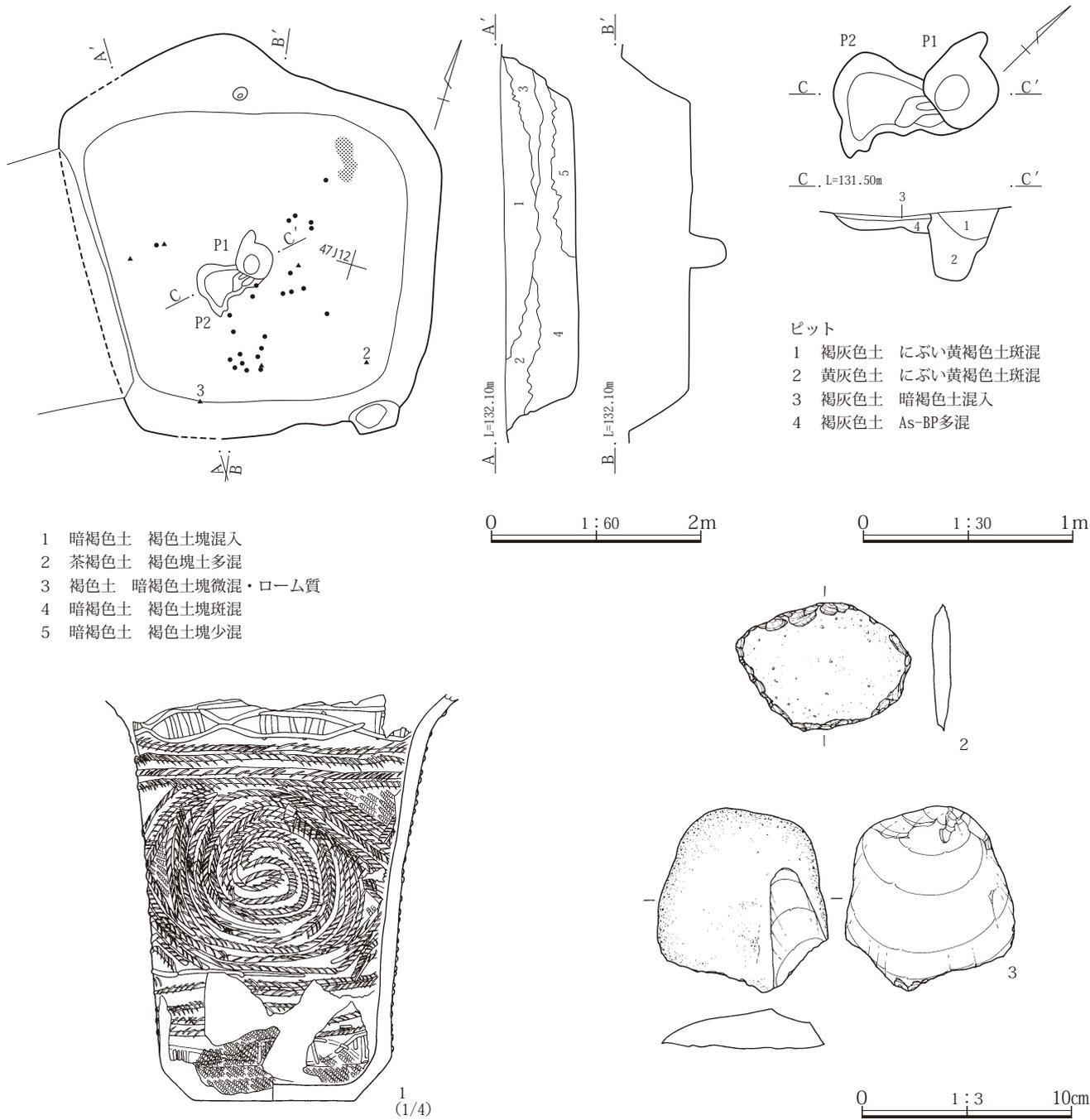
主軸方位 N17°W 炉 確認されていない。

所見 当住居は、調査区の南隅で単独に検出された。遺存状態は良好であったが、西側の壁だけが床面の近くまで攪乱、推定である。床面は、中央部が堅緻で平坦である。柱穴は、住居の中央部で1本検出されている。長軸34cm、短軸32cm、深さ37cmの円形である。住居の規模からみて、この1本だけの可能性が高い。なお、ピットは、壁際やまわり1m前後から同じような大きさのものが6本検出されている。炉は未確認としたが、柱穴の西側に隣接する浅い掘り込みに可能性がある。不整形で、最長50cm、幅40cm、深さ8cmである。

覆土 暗褐色土を明暗の差やロームの混入量で分けた。この時期特有の堅く締まった状態である。

出土遺物 住居中央、床面からは25cm前後浮いて深鉢1個体が出土。4層下部か5層の上面で、埋没時に混入したものであろう。また、北東部では炭化物が出土している。床面よりもわずかに高い。棒状でもあるところから屋根材が炭化したものであろうか。

遺構の時期 覆土中ではあるが、出土した土器の特徴から諸磯b式期と判断した。



第11図 1号住居遺構図・遺物図

第1表 上泉唐ノ堀遺跡 土坑一覧表 (長軸・短軸・深さの単位はcm、カッコは残存値)

No.	位置	時代	形状	長軸・短軸・深さ	備考
58	57-F-4	縄文時代	推定円形	112・(64)・42	
63	57-JK-8	縄文時代	円形	142・140・62	
67	57-J-3	縄文時代	推定円形	100・(61)・26	
133	57-J-9・10	縄文時代	円形	122・118・60	
180	57-P-7	縄文時代	楕円形	182・97・26	
235	57-N-9	縄文時代	円形	148・134・50	
251	57-L-10	縄文時代	推定円形	338・(95)・60	
252	58-S-9	縄文時代	円形	88・76・12	2基 67・57・14
253	57-R-9	縄文時代	円形	90・73・22	

土坑

58号土坑 (第12図 PL.6)

位置 57F4グリッド 形状 推定円形、南半分を検出。
規模 長軸1.12m、短軸0.64m以上、深さ0.42mである。
覆土の特徴 堅緻。出土した遺物はない。遺構の時期
覆土の特徴から縄文時代と判断した。

63号土坑 (第12図 PL.6)

位置 57JK8グリッド、北西2.70mに246号土坑がある。
形状 円形、断面はラッパ状で、中段以下が直径60～
70cmとなっている。規模 長軸1.42m、短軸1.40m、深
さ0.62mである。覆土の特徴 堅緻、黒褐色土、褐灰色
土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。遺構の時期
覆土の特徴から縄文時代と判断した。

67号土坑 (第12図 PL.6)

位置 57J3グリッド、1号道と重複。道よりも古い。形
状 推定円形、南半分を検出。規模 長軸1.00m、短軸
0.61m以上、深さ0.26mである。覆土の特徴 堅緻、黒
褐色土、黒褐色土とロームの斑混土で埋没。出土遺物
粗粒輝石安山岩の割石が土坑の中央部、検出面にある。
遺構の時期 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

133号土坑 (第12図 PL.6)

位置 57J9・10グリッド 形状 円形 規模 長軸1.22
m、短軸1.18m、深さ0.60mである。覆土の特徴 堅緻、
黒褐色土、黒褐色土と暗褐色土、黄褐色土との混土で埋
没。出土した遺物はない。遺構の時期 覆土の特徴から
縄文時代と判断した。

180号土坑 (第12図 PL.6)

位置 57P7グリッド 形状 楕円形、写真では円形のも
のと北側に別のものが重複しているように見える。規模
長軸1.82m、短軸0.97m、深さ0.10～0.26mである。
深い方が円形の部分で、規模としても1m前後ではない
か。覆土の特徴 黒褐色土、にぶい黄褐色土で埋没。出
土した遺物はない。遺構の時期 覆土の特徴から縄文時
代と判断した。

235号土坑 (第12図)

位置 57N9グリッド 形状 円形 規模 長軸1.48m、
短軸1.34m、深さ0.50mである。覆土の特徴 黒褐色土、
にぶい黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。遺構の時
期 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

251号土坑 (第12図 PL.7)

位置 57L10グリッド、北側の半分は未確認である。
形状 円形と推定するが規模からみて住居の可能性もあ
る。規模 長軸3.38m、短軸0.95m以上、深さ0.60mで
ある。覆土の特徴 堅緻、黒褐色土、暗褐色土で埋没。
出土した遺物はない。遺構の時期 覆土の特徴から縄文
時代と判断した。

252号土坑 (第12図 PL.7)

位置 57S9グリッド、2基が連結している。形状 円形
規模 長軸0.88m、短軸0.76m、深さ0.12mである。覆
土の特徴 暗褐色土で埋没。出土した遺物はない。遺構
の時期 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

253号土坑 (第12図 PL.7)

位置 57R9グリッド 形状 円形 規模 長軸0.90m、
短軸0.73m、深さ0.22mである。覆土の特徴 暗褐色土、
黒色土、茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。遺構の
時期 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

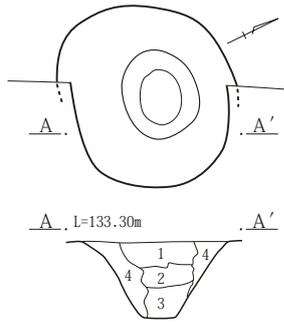
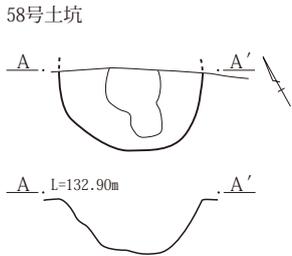
遺構外遺物 (第12・13図 PL.28)

出土した量はポリ袋にして5袋ほどである。住居や土
坑に対応するとみられるが、前期の二ツ木式、諸磯b式、
同c式、中期の加曾利E2、同E4式、後期の加曾利B1式が
出土している。接合したものは稀で、掲載したものを上
限とする大きさである。

石器は、掲載したのが打製石斧の短冊形2、分銅形2、
石鏃1、石核1、磨石1、スタンプ形石器1、使用痕あ
る剥片1で、非掲載には剥片65、破碎礫がある。石材は、
黒色頁岩69、黒色安山岩6、灰色安山岩1、細粒輝石安
山岩2、珪質頁岩2、ホルンフェルス2、黒曜石1、石英
閃緑岩1である。礫は、輝石安山岩が大半で、その中
には被熱で割れたものがみられる。

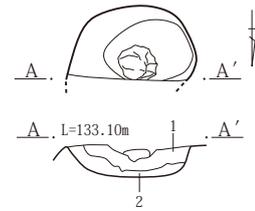
第4章 上泉唐ノ堀遺跡の調査

58号土坑



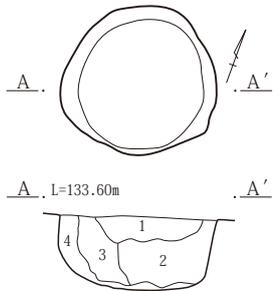
63号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒少混
- 2 褐灰色土 ローム粒多混
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色土と暗褐色土の斑混土



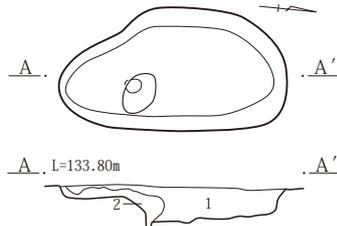
67号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒少混
- 2 黒褐色土とロームの斑混土



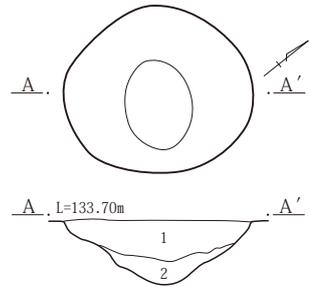
133号土坑

- 1 黒褐色土 暗褐色土混入
- 2 黒褐色土 堅緻
- 3 黒褐色土と暗褐色土の斑混土
- 4 黒褐色土と黄褐色土の混土



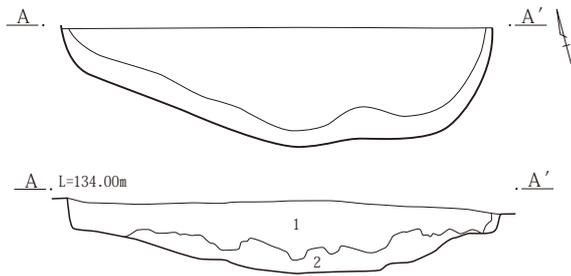
180号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒少混
- 2 にぶい黄褐色土 黒褐色土少混



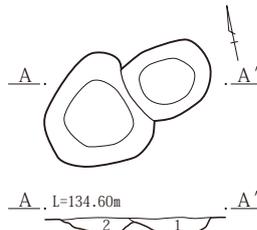
235号土坑

- 1 茶褐色土 褐色土塊混入
- 2 暗黄褐色土 ローム塊混入



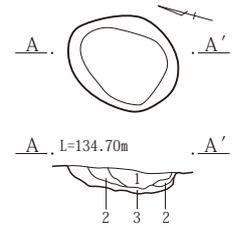
251号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土 黒褐色土斑混



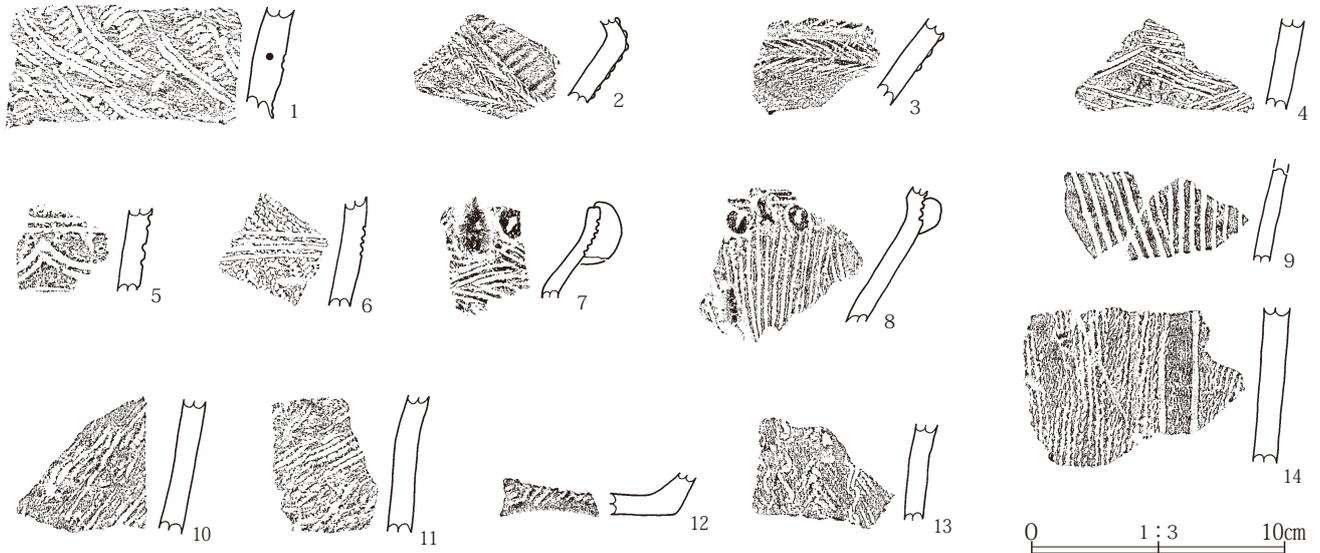
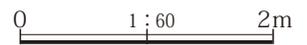
252号土坑

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 褐色土塊

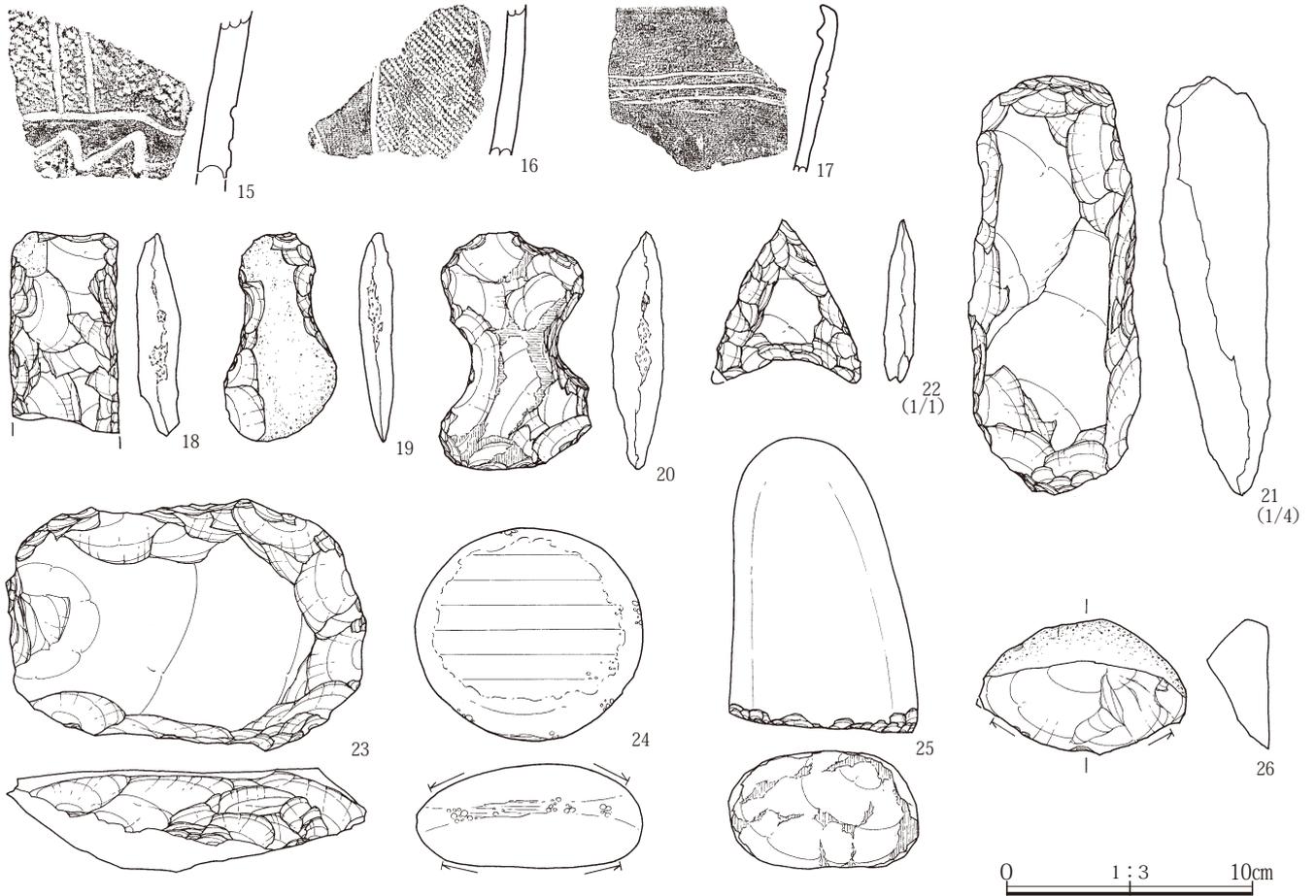


253号土坑

- 1 黒色土 白色粒なし
- 2 暗褐色土 褐色土塊微混
- 3 茶褐色土



第12図 58・63・67・133・180・235・251・252・253号土坑遺構図、遺構外遺物図(1)



第13図 遺構外遺物図(2)

溝

1号溝 (第14図 PL.7)

位置 調査区を北西から南東に直線的に貫いている。両端は、調査区外へと続いているとみられるが、南東側の7工区上泉唐ノ堀遺跡では検出されていない。現在の市道に接続して途切れることも考えられる。

規模 検出長78m、幅1.70～1.85cm、深さは1m前後である。平面図での形状の違いは、遺構検出面が違うことによる。北西端の底面標高は133.48m、南東端が132.21mである。方位 N63～78°W

覆土の特徴 暗褐色土、黒褐色土を色調の微差で細分。自然埋没で、その状態からは3時期の変遷が読み取れる。当初は、箱型をした断面の掘り方である。幅が1m前後、形状は離れた3箇所の断面で変化はなく、安定した状態といえる。次は、深さが半分ほどになる。そのため断面は、箱型から幅1.60mの皿状に変化する。最後は、断面が皿状のままであるが、さらに浅くなる。3期に分けてみたが、箱型から皿状への転換はあったにしても位置は変わ

らずで、多少途切れた時はあったにしても継続して使われていたとみてよいだろう。特に最後にあたる、最も新しい時期は1号道の側溝と考えられる位置関係で、それ以前についても同じことが考えられるのではないか。

出土遺物 非掲載とした土師器の甕、須恵器の甕、陶磁器の碗、油鉢がある。

所見 灌漑目的ではなく、区画を意図したものである。耕地図と照合すると北西端は現在も市道として使われている馬入れの下となり、南東端は市道を超えて畑の筆境と一致する。1号道よりも古い。

道

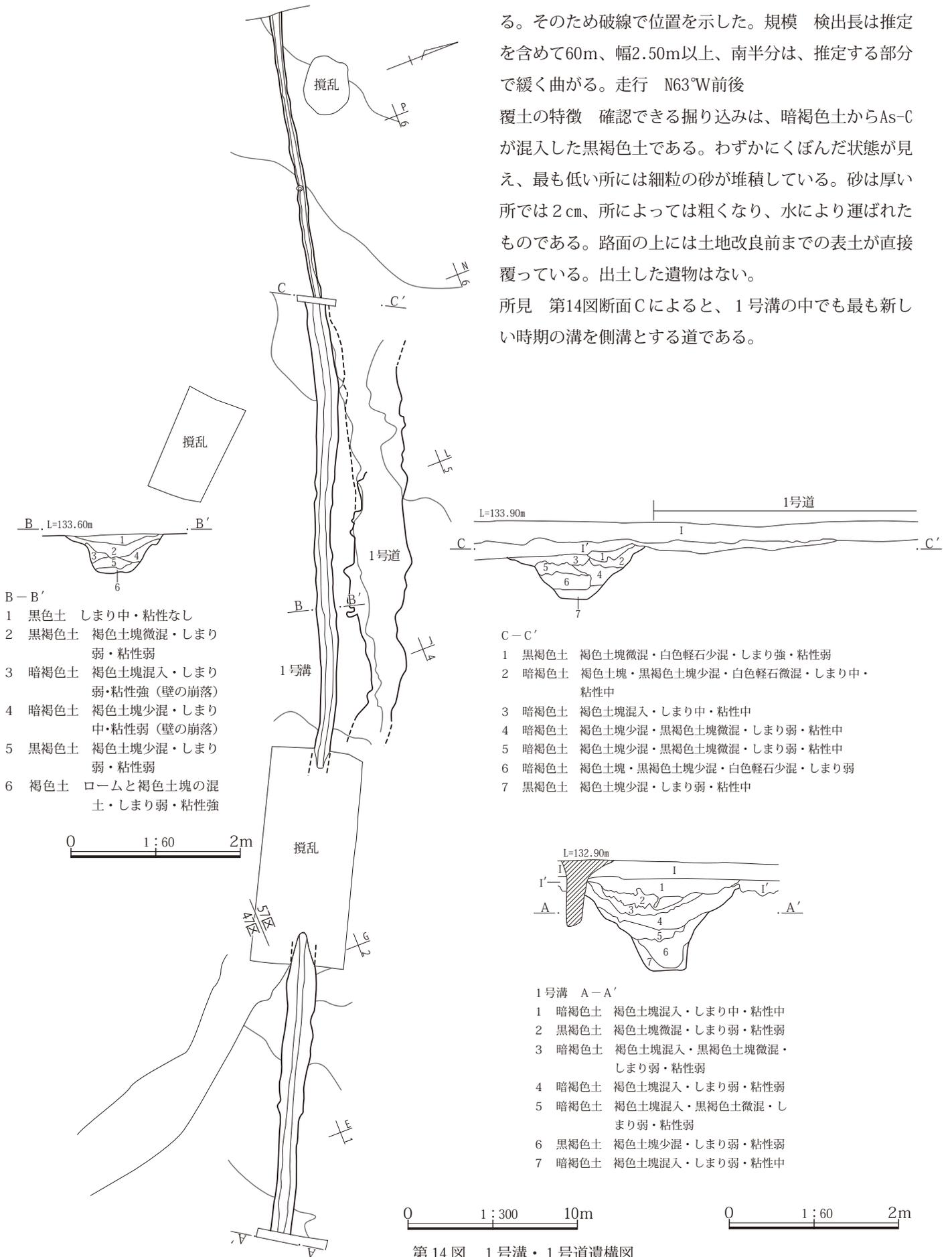
1号道 (第14図 PL.7)

位置 調査区の中央部を縦断している。5712グリッド付近で1号溝に重複している。北側半分には、道らしい硬化した状態がみられる。ただし、これは路面直下の硬化部分とみられ、およその幅を推定した。南になるほど遺存状態は悪くなり、北からの続きとして推定を含んでい

る。そのため破線で位置を示した。規模 検出長は推定を含めて60m、幅2.50m以上、南半分は、推定部分で緩く曲がる。走行 N63°W前後

覆土の特徴 確認できる掘り込みは、暗褐色土からAs-Cが混入した黒褐色土である。わずかにくぼんだ状態が見え、最も低い所には細粒の砂が堆積している。砂は厚い所では2cm、所によっては粗くなり、水により運ばれたものである。路面の上には土地改良前までの表土が直接覆っている。出土した遺物はない。

所見 第14図断面Cによると、1号溝の中でも最も新しい時期の溝を側溝とする道である。



第14図 1号溝・1号道遺構図

第5章 上泉新田塚遺跡群の調査

第1節 概要

調査区は、幅400mの台地を南東から北西の方向に横断していて、西側から300mあまりを占める。市道を境界にして台地の東側が上泉唐ノ堀遺跡である。台地の西を流れる荻窪川とは6～7mの段差である。台地全体も平坦である。周囲にある遺跡と変わるところはないが、立地の点では、やはり川に面していたことが大きかったろう。そのことを反映してか、遺構は川に面した台地の中でも西側が多かった。課題には、隣接する上泉唐ノ堀遺跡、新田塚古墳との関係、調査区全体での土地利用の様子を明らかにし、それが時代によってどう変化していったのかなどをあげて調査に臨んだ。

検出した遺構は、住居16軒、土坑95基、溝6条、堀2条、道4条、井戸1基である。出土した遺物は、収納箱で29箱である。

遺構の分布状況は、先述したように川に面した調査区の西寄り、東西100mあまりの範囲から住居が検出されている。住居は16軒、点在する程度の数ではあったが、縄文時代、古墳時代、平安時代と複数の時代にまたがり、さらに、ここからは旧石器も検出されている。時代が変わろうと居住の場選ばれ、生活をするのには適した環境であったといえよう。しかし、川が流れている低地は、調査の対象からは除外されていて肝心の台地との関係を明らかにすることができなかった。古くは水場や狩猟の場となり、時代が下っては水田に利用されていたはずである。課題を残した。

台地の中央部からは、溝、堀、道が検出されている。居住した形跡には乏しく、西にある集落の東縁辺部といった位置づけが考えられる。立地からは畠を期待したいところではあるが、それを物語る遺構は認められない。わずかに溝の配置から畠の区画を推定するだけである。その溝も問題は年代の特定で、出土した遺物がなく決め手を欠いている。As-Bの降下後というのはまちがいないところで、どこまで年代が下るかである。たとえば、3号溝は、現在の筆境と一致しているが、すぐに新しいと

するには検証が必要である。

逆にどこまでさかのぼれるのか、というのが三夜沢道である。麓から赤城山に通じる道のことで、村々をつなぐ幹線的な存在であったようである。明治時代初期の耕地図に現況を照合すると、道は、耕地整理をしても直線になった程度で、位置が大きくは変えられていない。伝承のとおりならば、三夜沢道は、新田塚古墳に近い所を通過していたものが、現在3本ある市道のひとつに姿を変えたとするのが素直な見方であろう。

調査では台地の中央部で4条の道が検出されている。1条は古代にまでさかのぼり、その後の3条も隣接して次々と作られている。1条をのぞいて覆土にAs-Bが混入していることから、時期は下ったとしても中世までである。台地の中央部にあるのは偶然ではなく、ここでという場所が決められていたからではないだろうか。どれも作り方は似ていて幅が1m前後、一直線に伸びている。堅く締まった路面に、頻繁な往来であることと使用された期間の長さが表れている。伝承とは年代の開きが大きそうであるが、調査成果のひとつである。

溝にもカラノボリ用水の伝承がある。前橋市荻窪町青木博久氏によれば、上流は途中いくつかの沼をつないで大胡町滝窪までさかのぼるといい、下流は前橋市上泉町赤坂の水田に通じていたという。遺跡の北500m付近には、堀の跡だといわれている箇所アカシアの並木が続いていて、いかにも堀は実在したかのようである。

調査では2条の大型の堀が検出されている。1号堀をカラノボリと考えたが、幅5m、深さが3mという規模の大きさを調査区の付近だけで納まるとは思えない。水が流れた跡も歴然としている。台地を超えた範囲に水源と供給先があったとみて間違いのないであろう。

調査区の東側では、堀と溝のほか古墳が検出されている。地元民からは、隣接してなお1基か2基、古墳があったとの話も寄せられている。台地の西側、了覚寺の周囲では、上毛古墳総覧に11基の古墳が掲載されている。これとは別に、台地の東でも新田塚古墳を含む一群の可能性がでてきた。類例が追加されるのを待ちたい。

第2節 縄文時代

概要

住居11軒、土坑97基、集石2基を検出した。遺構は台地の西側に多く、台地の中央部近くまで分布しているが東になるにつれて少なくなる。住居の時期は、前期が10軒、中期が1軒である。前期は、6～8号、10～12号が二ツ木式、14号が関山Ⅰ式、17号が関山Ⅱ式、5号が黒浜式、9号が諸磯b式である。中期は、15号が加曾利E式である。15号は、プランとともに上面で出土した遺物からの推定である。なお、規模の長軸、短軸に「+」記号をつけたのは残存値を意味する。

土坑は、円形が最も多く、楕円形、不整形の順である。断面は、円筒形、袋状、フラスコ状のほかに、浅い皿状のものが半数近くを占めている。住居に付随した貯蔵用の施設とみられるが、土器は前期と中期の両方が出土している。断面形の違いと時期は関係なく、特定することはむずかしい。このほかピットが多数検出されている。土坑、掘立柱建物の柱穴として検討したが、該当するものはなく報告からは割愛した。

住居

5号住居（第15～17図 PL.13・28・29）
 位置 89A5グリッド 形状 不整形（正方形基調）
 規模 長軸3.83m、短軸3.80m 面積 14.55㎡
 主軸方位 N31°S 残存深度 0.26m

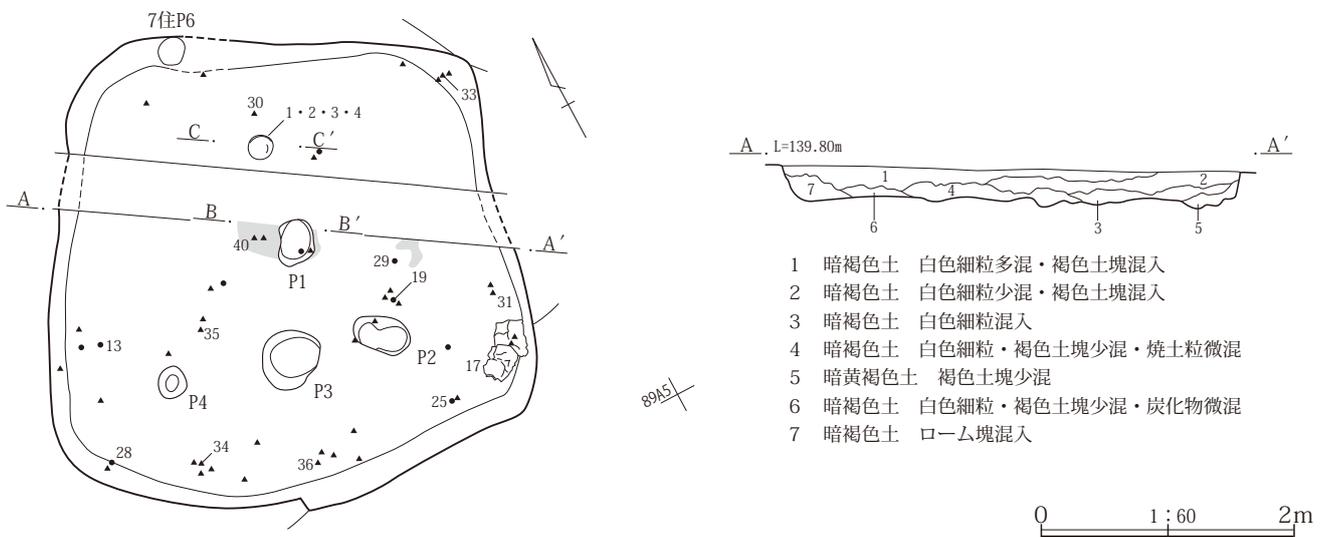
炉規模 長軸0.68m、短軸0.25m+

所見 当住居は、台地の西端で7号住居を切って作られている。7号住居よりは新しい。上面を耕地整理で攪乱されていたが、中段以下は良好な状態である。

中央の北寄りに地床炉があり、さらに壁寄りには埋甕がある。炉は、被熱・酸化した部分と、暗褐色土に焼土粒を含む土坑とで構成されているが、プラン確認のトレンチで截断破壊されて南側の半分しか調査出来なかった。埋甕は、炉の北50cmの所にある。楕円形をした掘り方の中に、床面と縁の高さが揃えられて深鉢の胴部下半部が埋設されている。また、底面には別個体の底部があって、割れ口をふさぐために補強したのか、埋甕を据え直した跡とみられる。

柱穴は、P1～P4の4本を検出している。P1は、炉を切る。P2・P4は、南壁側に平行することから主柱穴とみてもよいが、4本とした場合、北側には対応するものがない。そのため、補助的な柱穴と考えた。主柱穴は、P1の1本、四角錐状を呈する上屋構造が推定される。上泉唐ノ堀遺跡の1号住居も同時期で、主柱穴が1本の構造である。長軸・短軸・深さは、P1が31・30・28cm、P2が48・28・50cm、P3が47・43・24cm、P4が25・22・30cmである。

遺物は、52点を記録した。大半が壁際からの出土で、南東隅床面で17の深鉢が出土している。この深鉢の上からは、住居を廃棄する時に置かれたと推定される石器が2点出土している。掲載した石器は、打製石斧3、削器1、加工痕ある剥片1、凹石3、敲石2、石製品1、石



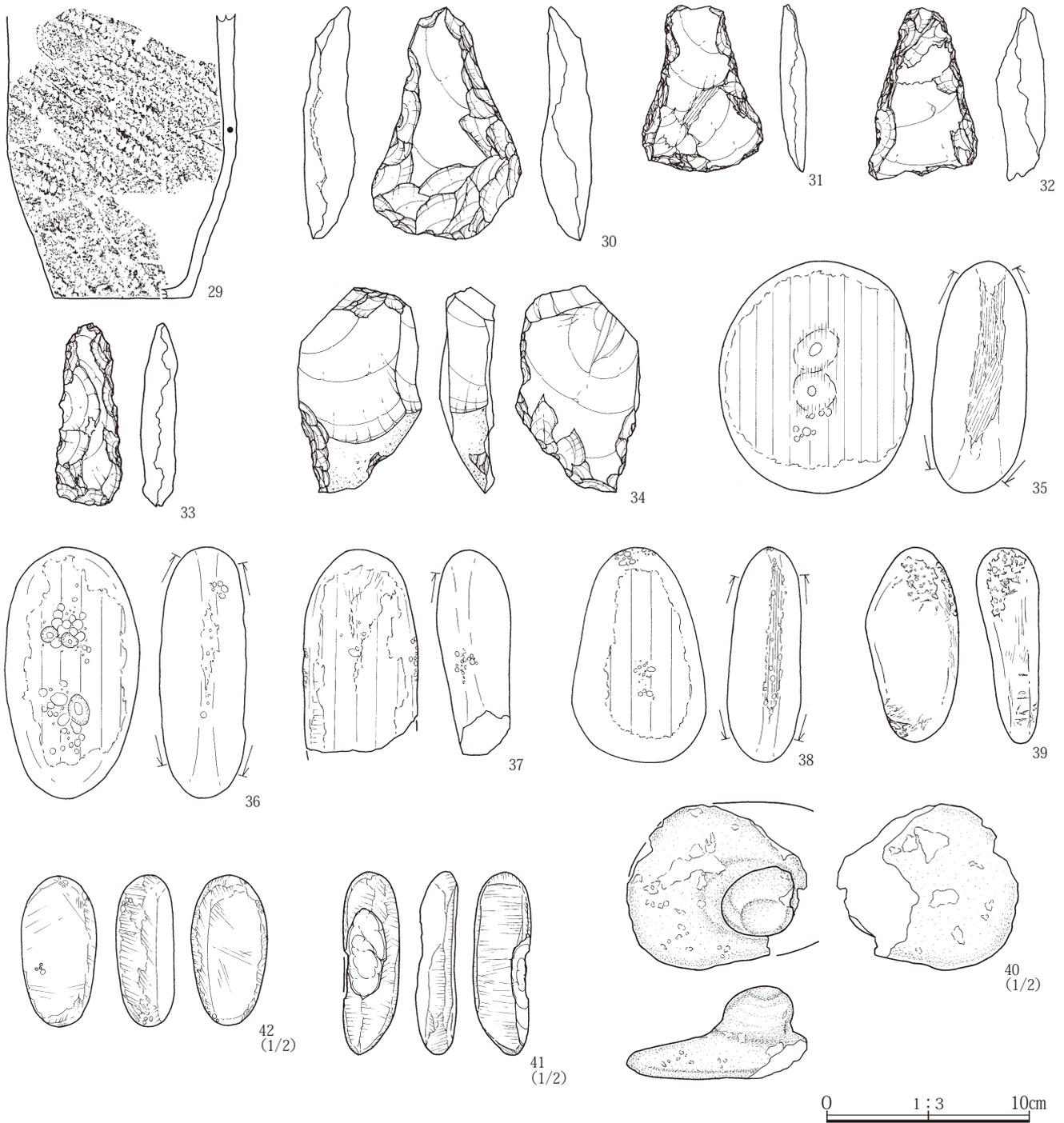
第15図 5号住居遺構図(1)



第16図 5号住居遺構図(2)・遺物図(1)

製研磨具2である。非掲載は、打製石斧3、削器5、加工痕ある剥片7、台石1、剥片42である。

遺構の時期は、埋葬の特徴から黒浜式期である。



第17図 5号住居遺物図(2)

6号住居 (第18・19図 PL.13・14・29・30)
 位置 88RS7・8グリッド 形状 長方形 規模 長軸
 6.10m、短軸4.08m 面積 24.89m² 主軸方位 N35°S
 残存深度 0.38m 炉 中央の北東壁寄り・石組み
 炉規模 長軸0.57m、短軸0.38m
 所見 当住居は、台地の西端に占地し、5号・7号住居

の北東15m程に位置している。

覆土と地山の区別がむづかしく、プランは中央に設けたトレンチで床と壁を確定し、覆土を再確認して調査にあたる。床面は、掘り下げたロームのままで特に硬化している様子はない。また、中央北東の壁寄りで炉を確認したが、柱穴は北東隅から約1mの壁際でのP1の1本だ

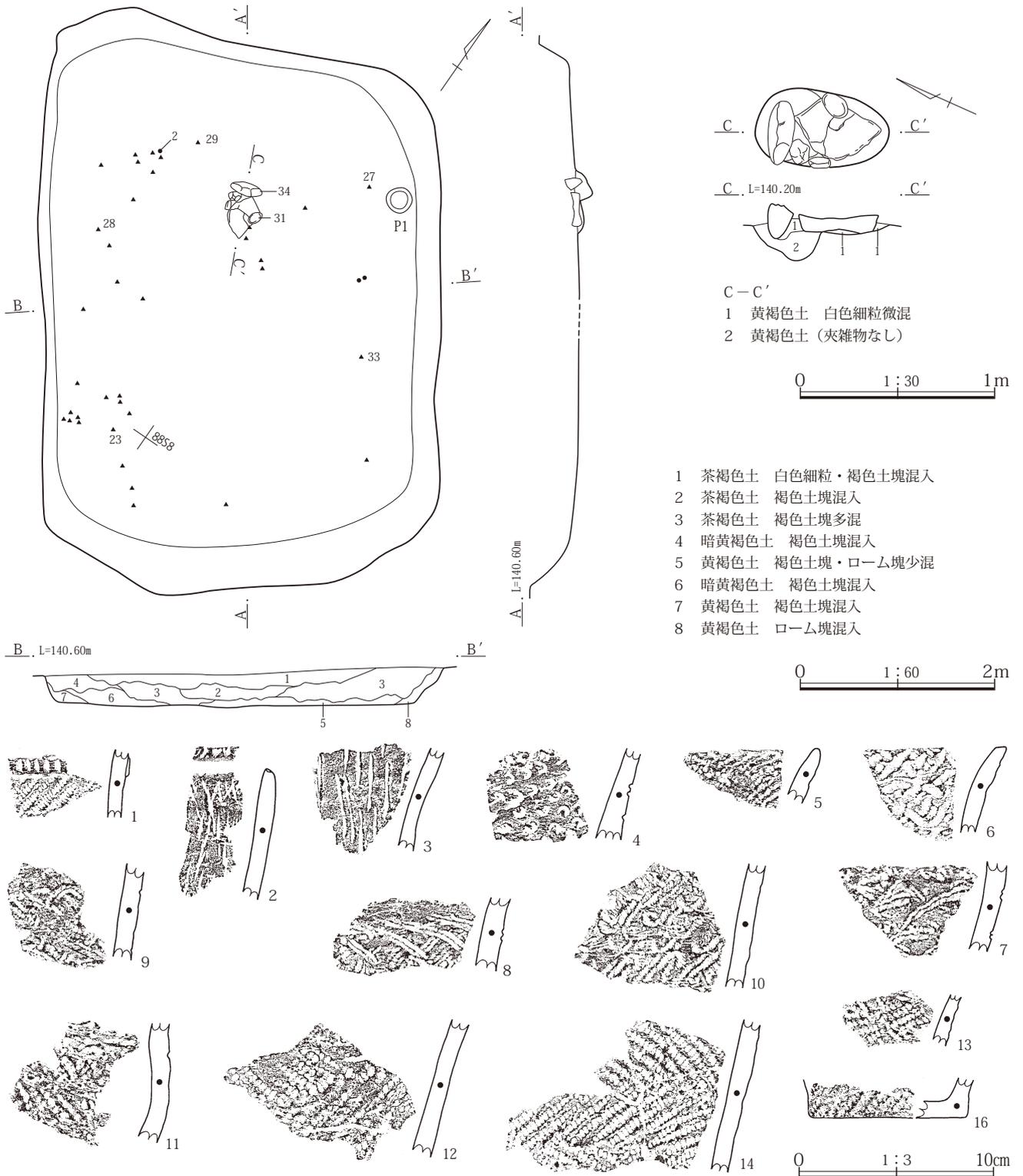
けで、しかも位置が大きく偏っている。直径が24cmの円形、深さは12cmである。

炉は、「コ」の字形の石組み炉で奥側の1石と中に敷いた扁平な石を残している。覆土に焼けた様子はなく、掘り方で検出された2基の土坑も同様である。

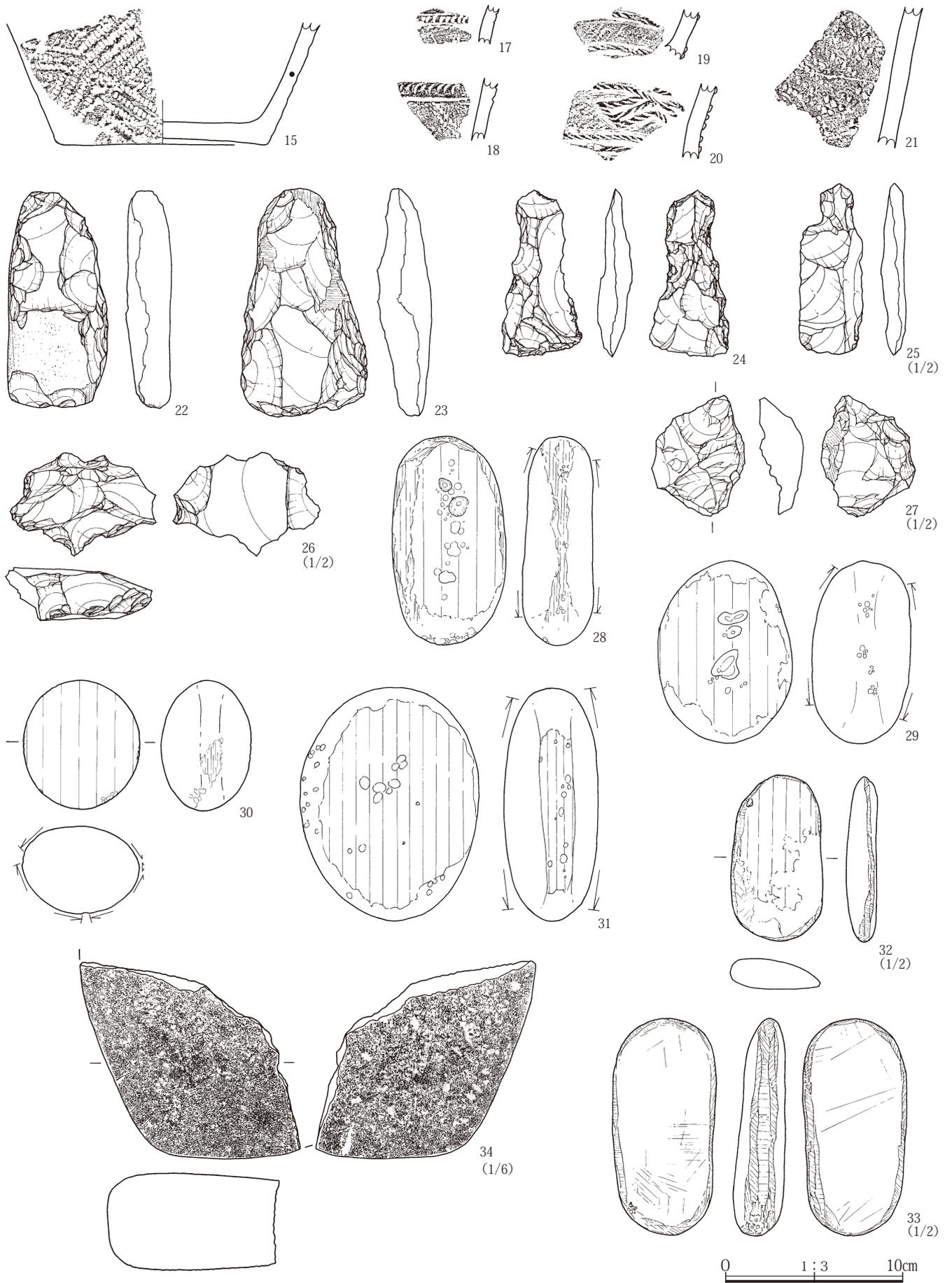
遺物は、壁沿いにある程度で記録したのは44点である。

石器と礫がほとんどで、土器類は少量である。出土層位は床面直上が多い。掲載した石器は、打製石斧3、石匙1、石核2、凹石2、磨石2、台石1、石製研磨具2である。非掲載は、削器2、石核2、加工痕ある剥片7、磨石2、剥片97である。

遺構の時期は、二ツ木式期である。



第18図 6号住居遺構図・遺物図(1)



第19図 6号住居遺物図(2)

7号住居 (第20図 PL.13・30)

位置 89AB5・6グリッド 形状 梯形 規模

長軸5.90m、短軸4.43m・3.00m 面積 21.92m²

主軸方位 N59°S 残存深度 0.25m 炉 不明

所見 当住居は、台地の西端に近い位置に作られ5号住居に切られている。北東隅には117号土坑が重複している。土坑が新しい。平面形状は、羽子板状の梯形を呈し、短辺側の一方にだけ周溝が2条認められる。拡張した跡ではないかとみられたが、床面に段差はない。溝の覆土は、発色の濁ったローム質の土で周囲との区別も難しい。調査時の所見では、段差がなく、覆土にも違いがないことから構築当初からの施設と指摘されており、間仕切りのための施設を推定した。溝は、内外ともに幅が30cm前後、深さが9～30cmと凸凹している。北側ほど深く、特に深い箇所をピット扱いでP2～P5とした。

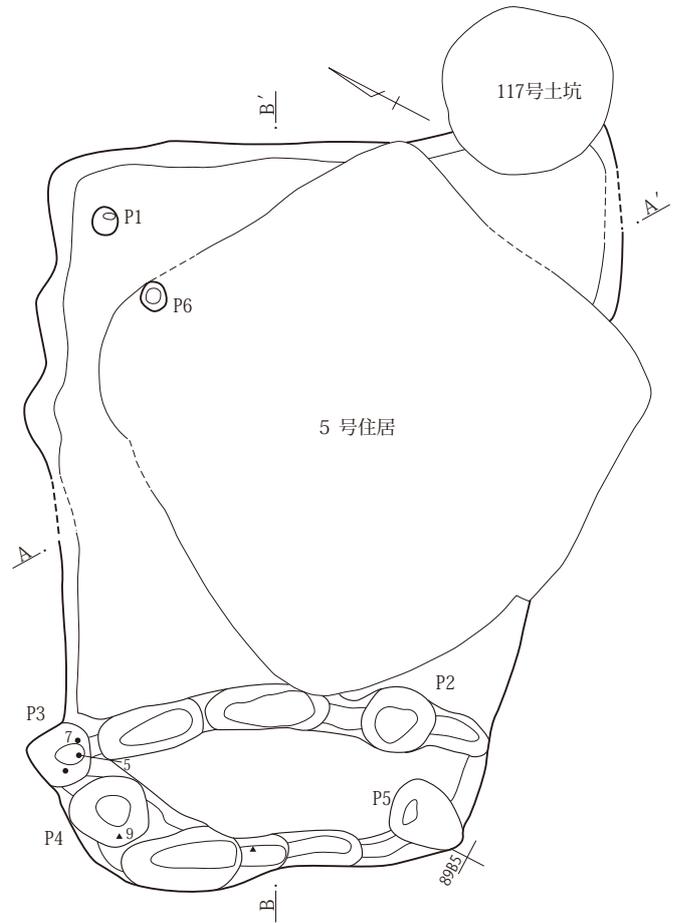
柱穴は、北西隅に寄って1本だけ検出された。長軸・短軸・深さは、30・28・23cmである。

炉は、5号住居の重複で消失したとみられるが、5号住居の埋嚢が当住居の長軸線上にある。位置としては適当ではあるが、調査時の所見にはなく可能性として指摘する。

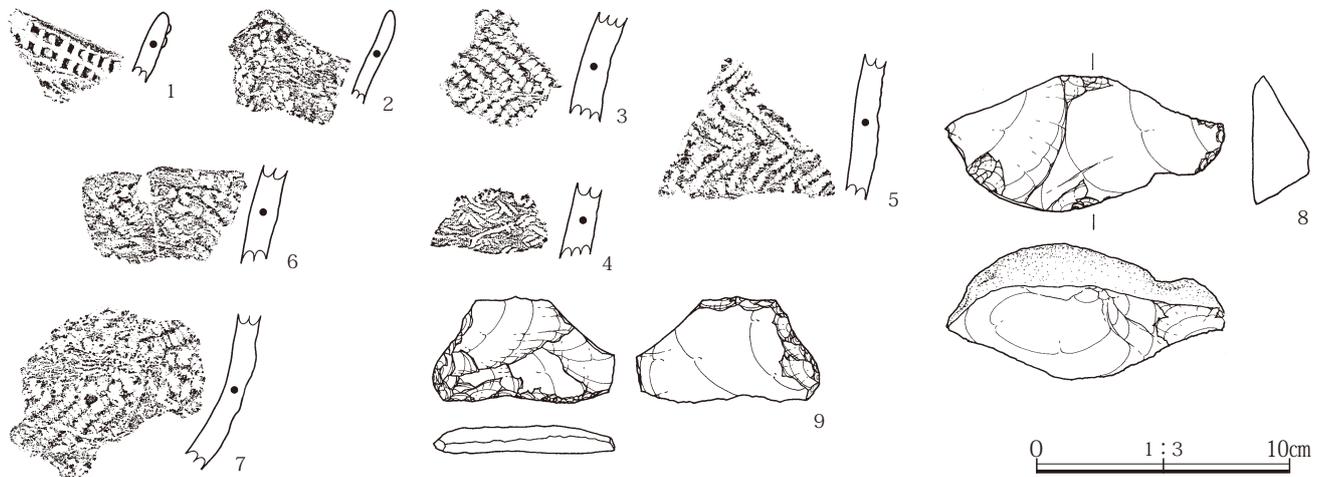
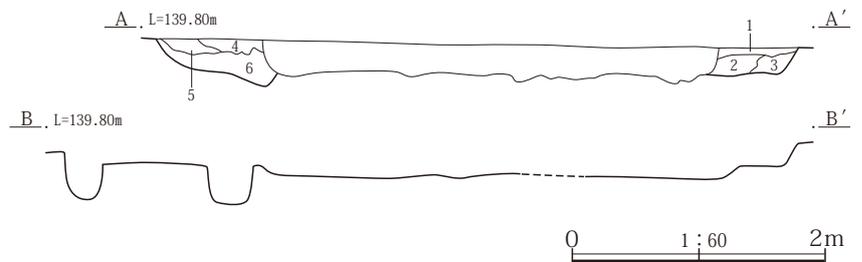
遺物は非常に少なく、土器・石器類が少量出土したに過ぎない。掲載したのは、削器1、加工痕ある剥片1で

ある。非掲載は、剥片2である。

遺構の時期は、床面から出土した土器の時期からみて二ツ木式期である。5号住居の埋嚢とも違いはない。



- 1 暗褐色土 白色細粒・褐色土塊少混
- 2 暗褐色土 褐色土塊少混
- 3 暗黄褐色土 褐色土塊混入
- 4 茶褐色土 白色細粒混入
- 5 暗黄褐色土 褐色土塊微混
- 6 暗黄褐色土 褐色土塊少混



第20図 7号住居遺構図・遺物図

8号住居 (第21～25図 PL.13・14・30・31・32)

位置 88ST2・3グリッド 形状 長方形

規模 長軸6.60m、短軸4.20m 面積 27.72m²

主軸方位 N100°S 残存深度 0.40m

炉 床面中央から西壁寄り・石組み

炉規模 長軸0.82m、短軸0.56m

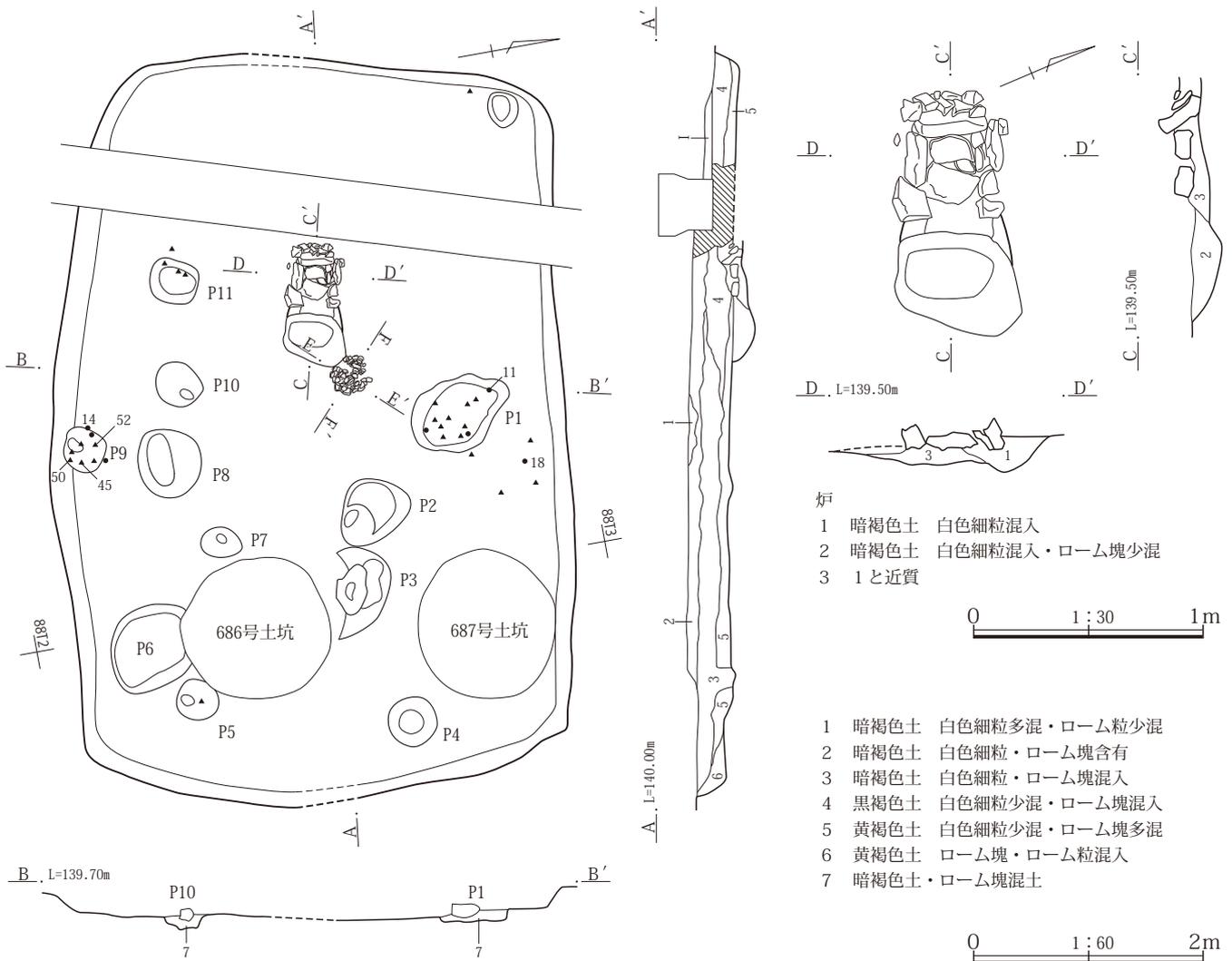
所見 当住居は、台地の西端に占地し、北西壁側15mに5・7号住居、北側25mに6号住居が位置している。また、東壁の寄った所で686号・687号の土坑に切られている。さらに東の壁際で671号、北西隅で681号土坑が重複している。なお、西側半分は、調査対象外の市道であったが側溝の部分を除いて調査した。

中央の西寄りに「コ」の字形の石組み炉を備えている。床面の硬化はほとんど認められない。P1～P11の柱穴と土坑状の掘り込みは、床面の精査で検出した。これらの中で、支柱穴とみられるのがP4・P5、中央部にあるP1

とP10の4本で、この間隔からすると側溝の部分に2本を推定して6本である。長軸・短軸・深さは、P1が90・63・10cm、P4が43・41・21cm、P5が35・33・43cm、P10が41・31・19cmである。P2・P7・P9・P11の4本は、先の4本と同じ掘り込みではあるが、深度・配置の点で不揃いで柱穴としては疑問である。また、P8は、斜めに掘り込まれている。配置の点でも、当住居に伴う施設か疑問である。

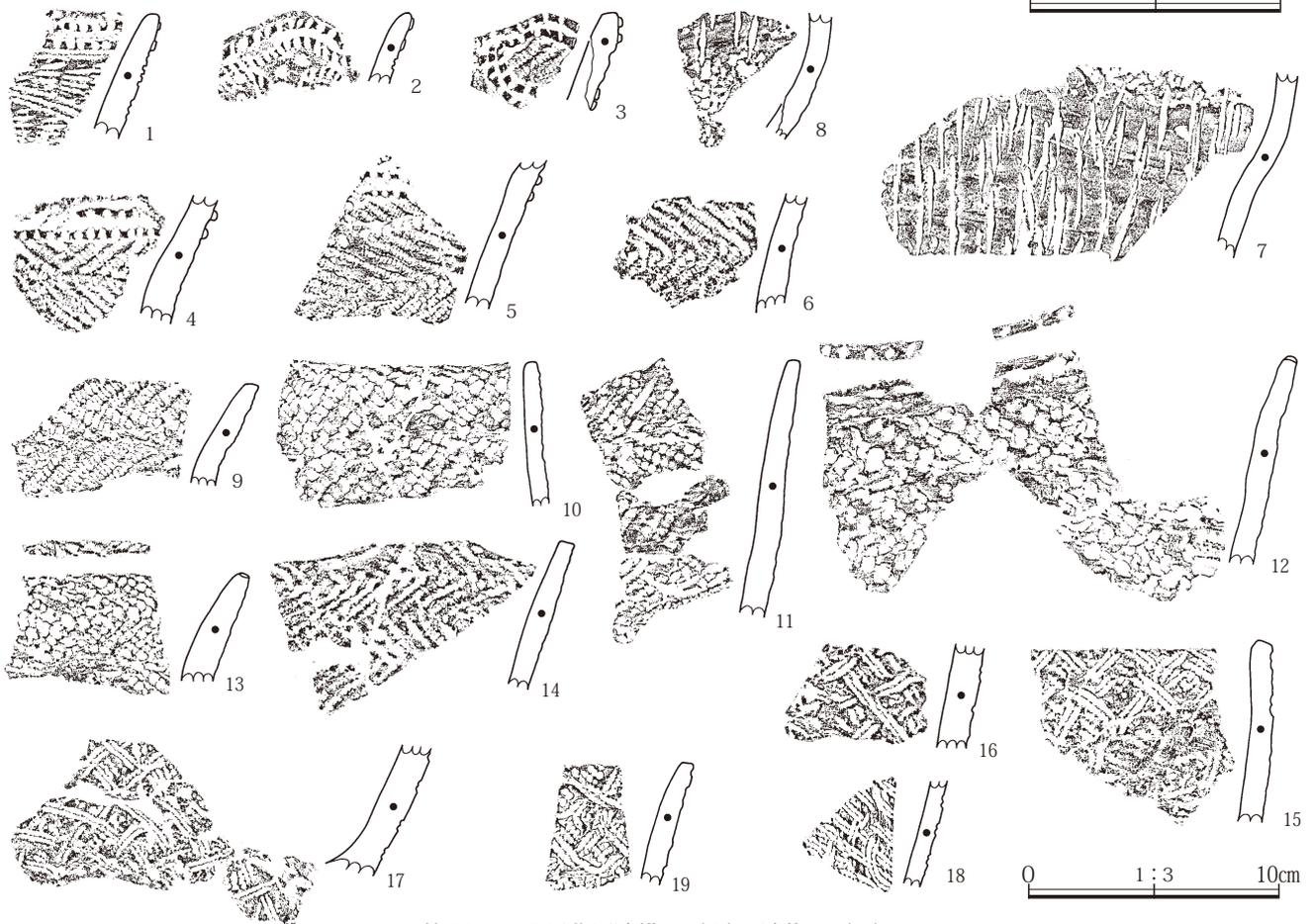
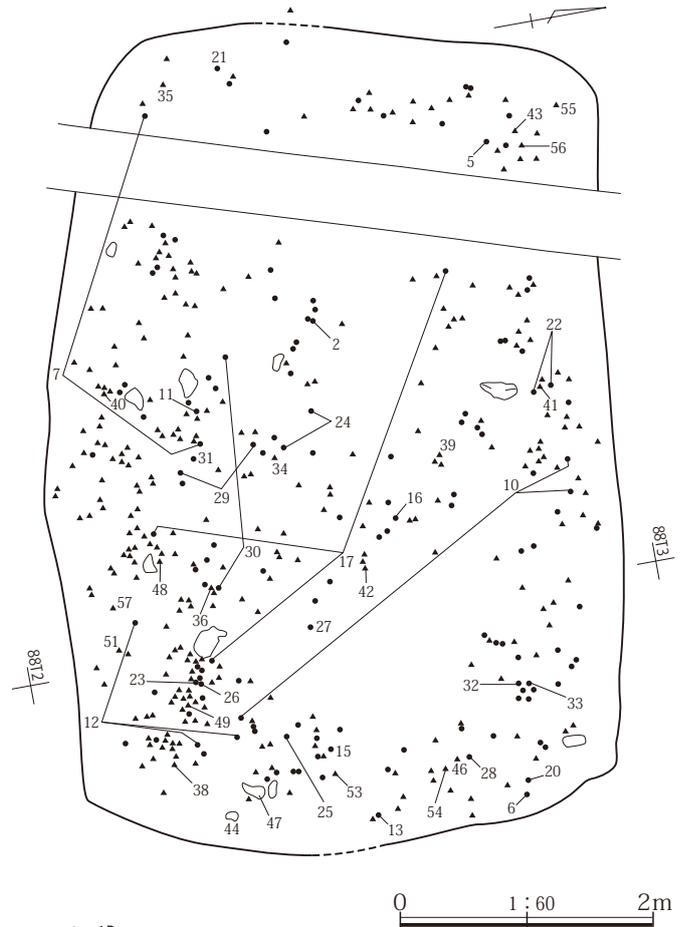
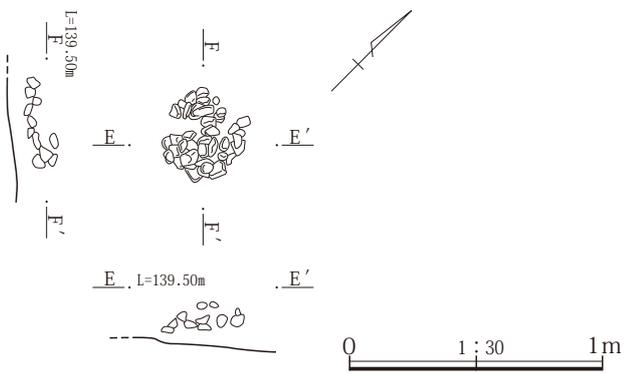
炉は、石を組んだ部分と土坑とからなる。遺存状態は良好で、石の多くは赤く変化している。しかし、炉の内部では、焼土や炭化物等がほとんど認められていない。また、炉の脇にある集石は、直径40cmの範囲に拳大の石が約50個集められている(微細図E・F参照)。床面よりも位置が高く、埋没後に掘り込まれたものと思われる。

遺物は、覆土下半から床面の直上にかけて住居の全体から出土している。記録したのは548点と多いが、半数

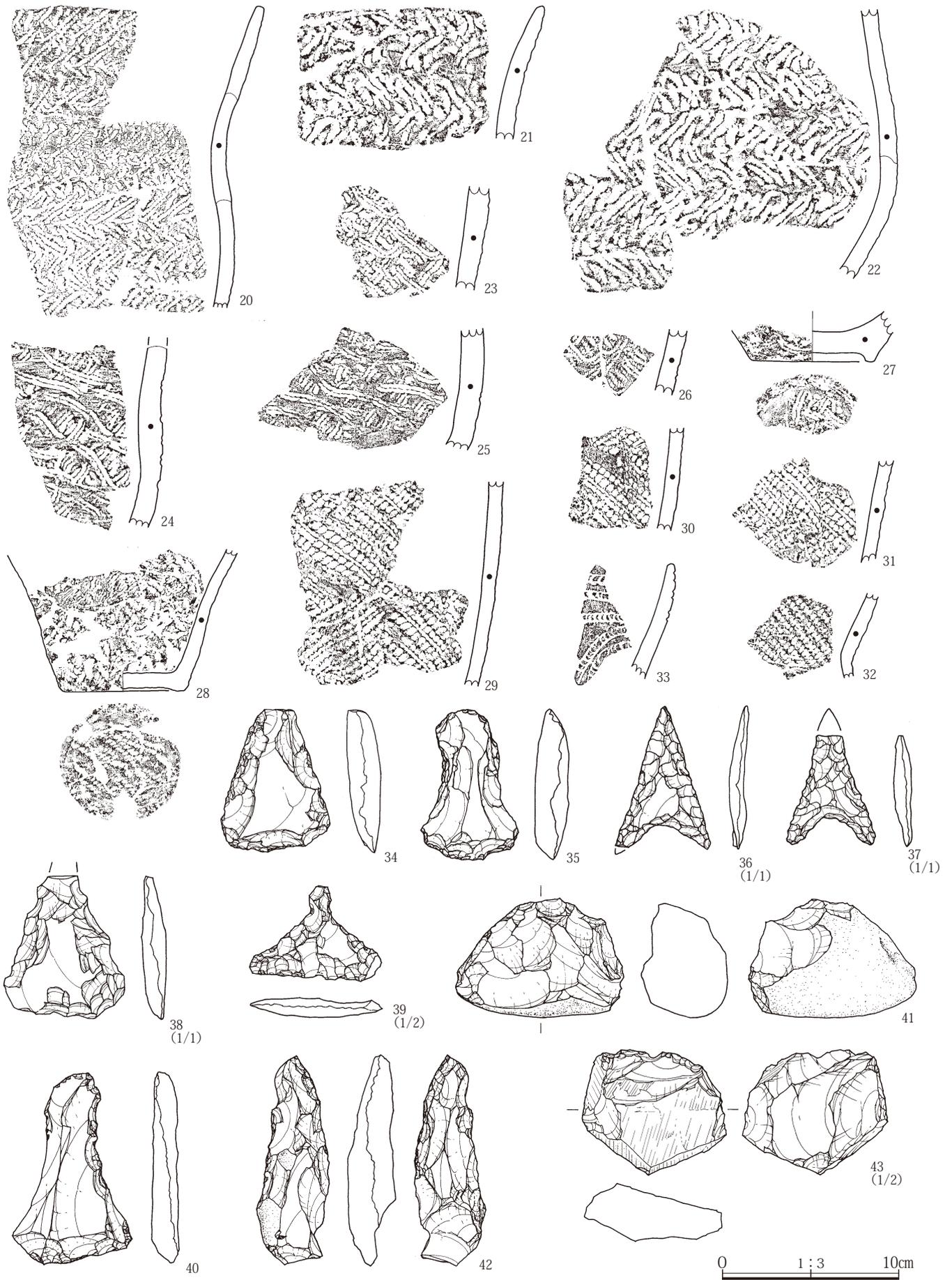


ほどが拳大以下の石で、埋没時に廃棄されたものとみられる。土器の破片数が多いが、器形をうかがえるような良好な個体はない。土器に混じった大ぶりの石は、台石とみられる。表裏に敲打の跡がある。掲載した石器は、打製石斧2、石鏃3、石匙1、削器1、石核2、加工痕ある剥片1、玉1、凹石2、磨石6、敲石1、石皿1、台石1、石製研磨具1、砥石1である。非掲載は、削器3、石核1、加工痕ある剥片4、磨石3、敲石1、剥片245点である。

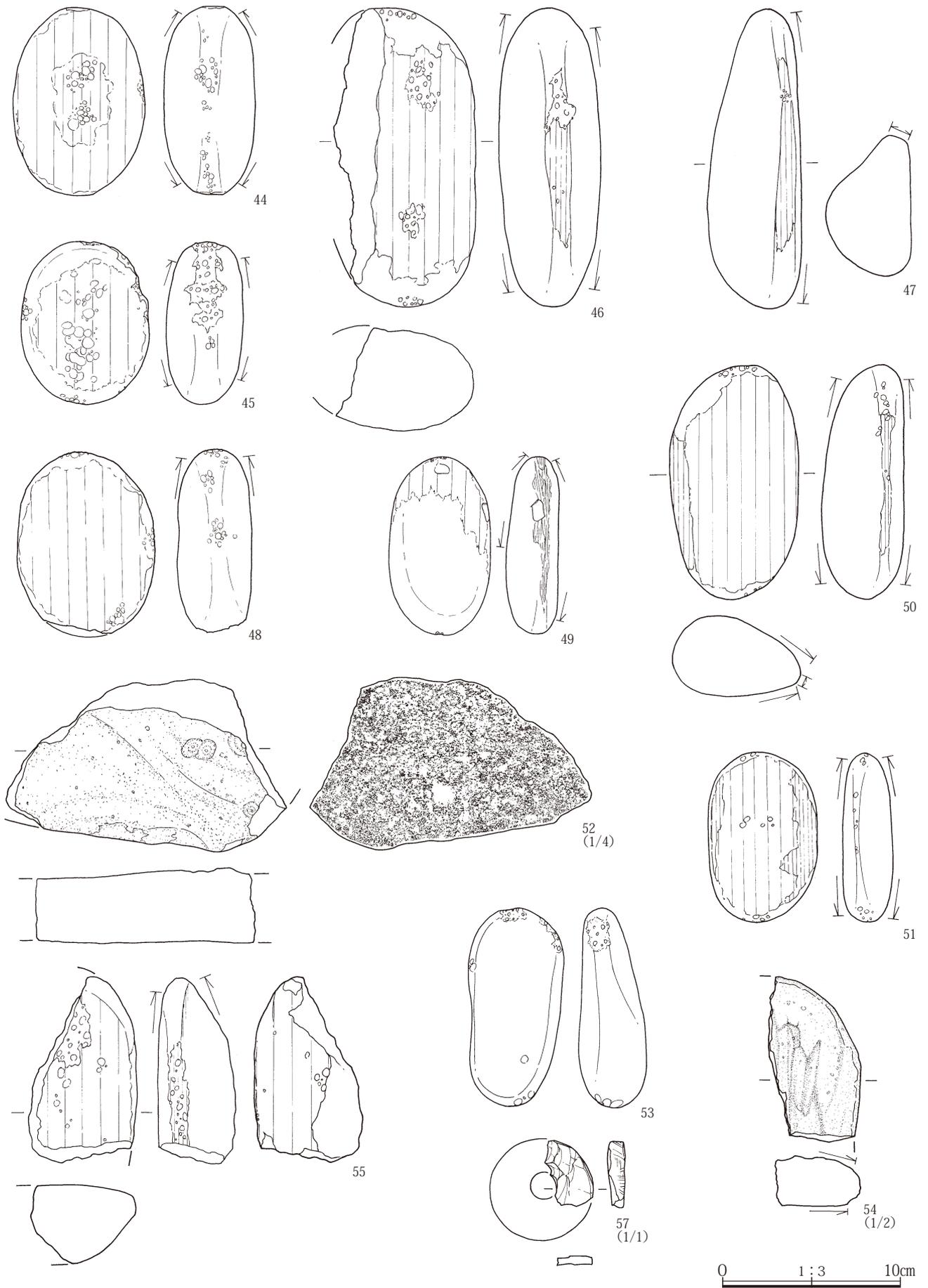
遺構の時期は、二ツ木式期である。



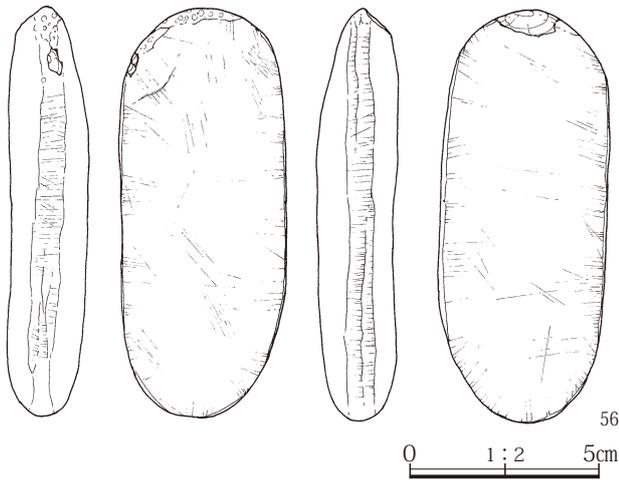
第22図 8号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第23図 8号住居遺物図(2)



第24図 8号住居遺物図(3)



第25図 8号住居遺物図(4)

9号住居(第26・27図 PL.14・15・32)

位置 78T17、79A17グリッド 形状 不整形

規模 長軸4.60m、短軸4.56m 面積 20.98²

主軸方位 N25°E 残存深度 0.28m

炉 埋甕炉・床面中央から北壁寄り

炉規模 長軸0.35m、短軸0.25m

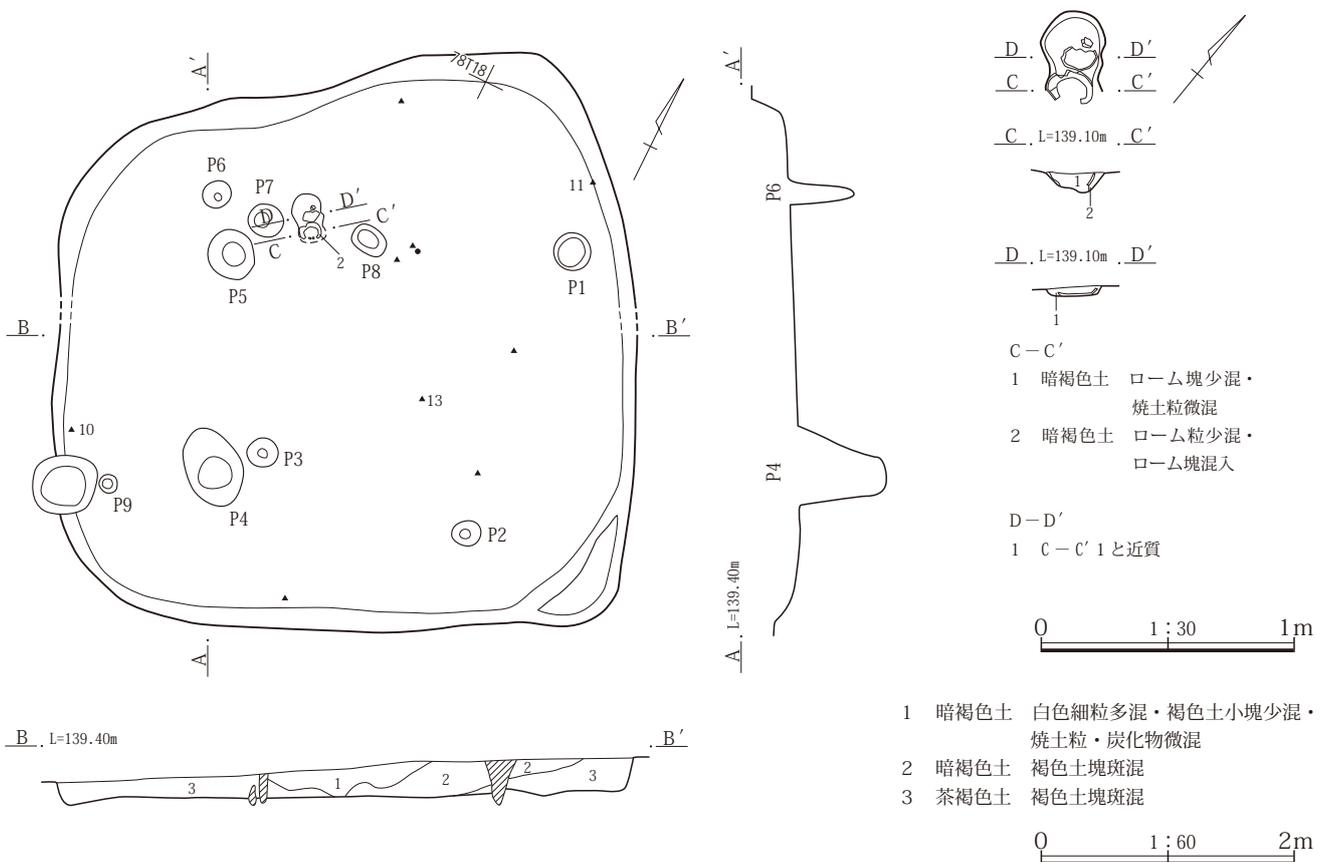
所見 当住居は、台地の西端に占地し南4mの位置に10号住居がある。

隅が丸い不整形で、中央の北壁寄りに炉がある。炉は、南北に新旧2基が重複している。2基ともに、直径20～25cmの掘り方の中に深鉢が埋設されている。北側が古く、底部だけであるのに対して、南側は底部を欠損する下半部のみである。

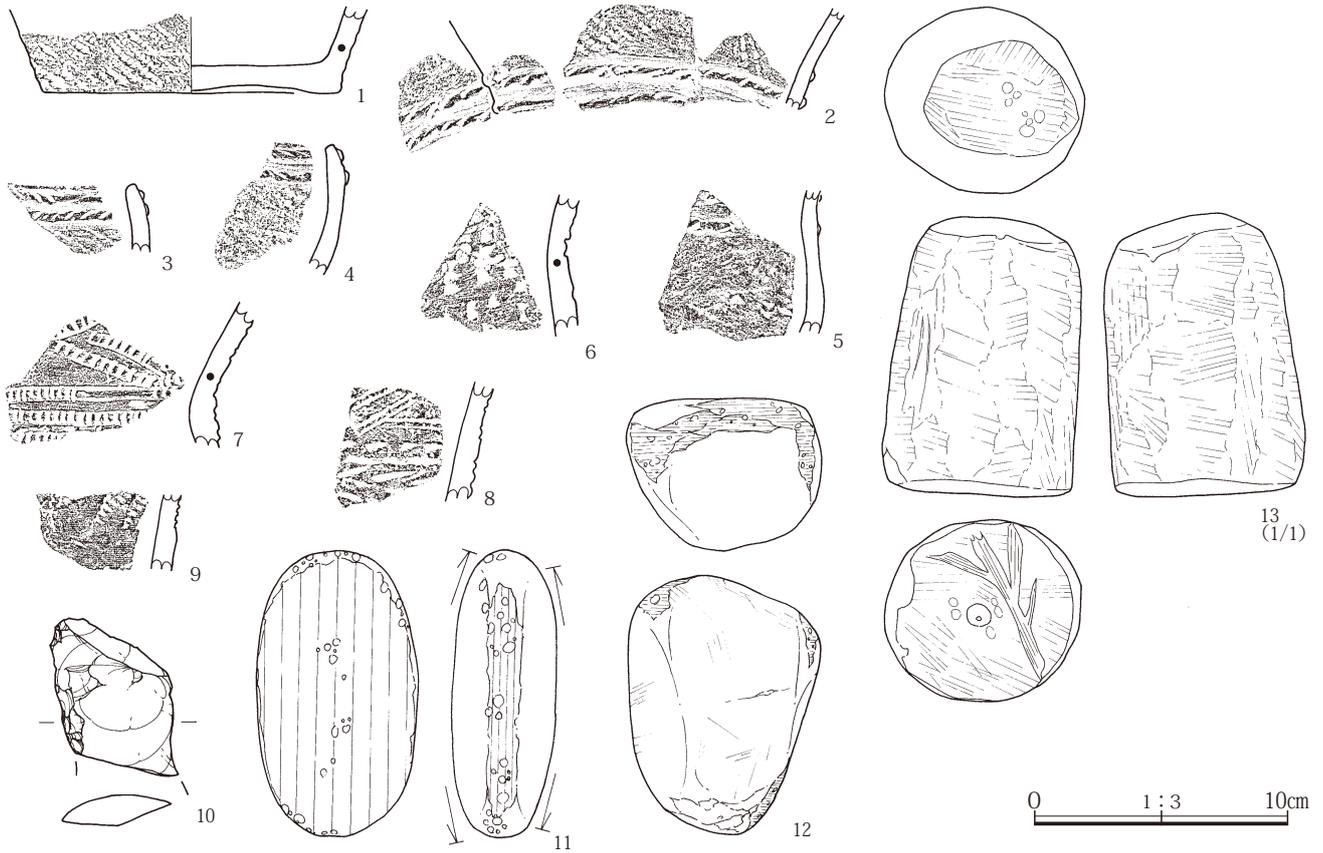
柱穴は、P3～P7の5本と推定される。ただし、これらは西壁側に偏在していて、対となる東壁側は掘り方でも柱穴とみられるものを確認することができなかった。長軸・短軸・深さは、P3が23・22・58cm、P4が64・44・68cm、P5が40・35・63cm、P6が23・21・51cm、P7が29・26・62cmである。P4とP5が対となる主柱穴で、P3、P6、P7は補助の柱穴か建て替えの跡と考えられる。上屋構造は、柱が西側に偏る、片流れ状の状態であったことが推定される。

出土した遺物は、炉体2の深鉢をのぞけば非常に少なく、しかも取り上げた大半が礫である。掲載した石器は、削器1、凹石1、磨石1、滑石製の玉1である。非掲載は、加工痕ある剥片3、剥片12点である。

遺構の時期は、炉体の深鉢からみて諸磯b式期である。



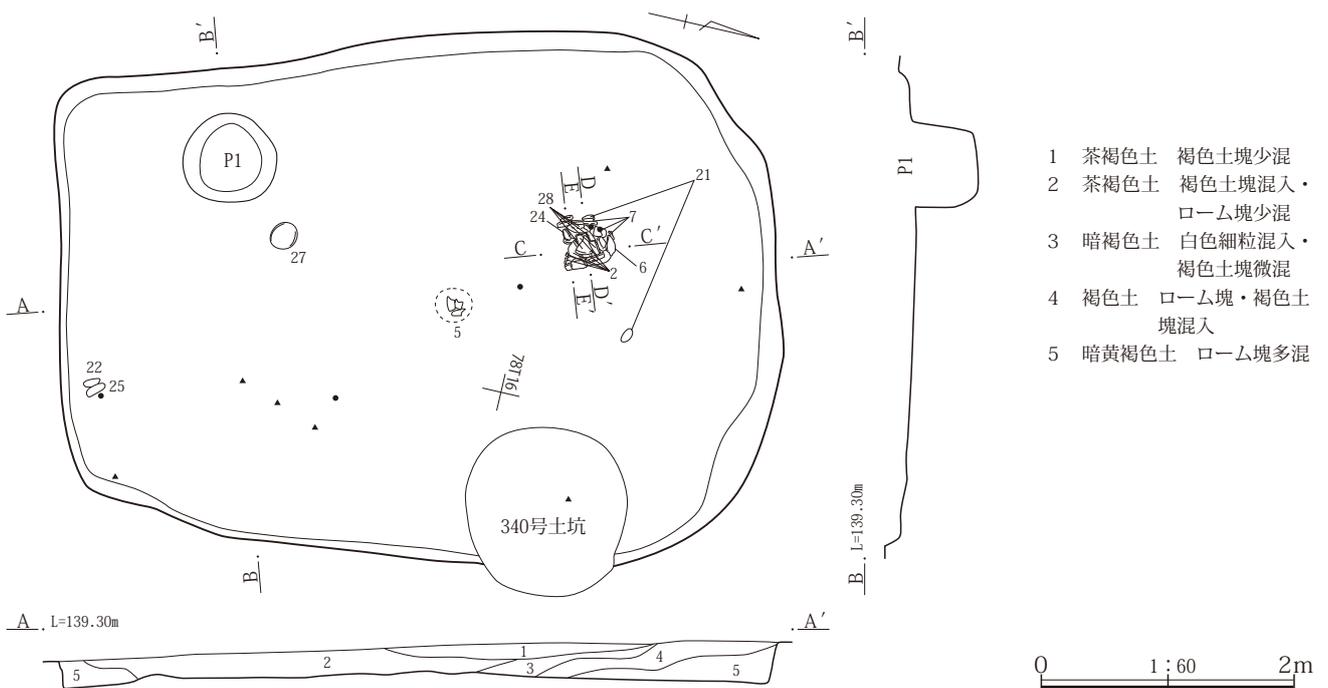
第26図 9号住居遺構図



第27図 9号住居遺物図

10号住居 (第28～30図 PL.15・32・33)
 位置 78ST15・16グリッド 形状 梯形
 規模 長軸5.70m、短軸4.20m 面積 23.94㎡
 主軸方位 N18°W 残存深度 0.28m

炉 北西隅寄り 炉規模 長軸0.74m、短軸0.70m
 所見 当住居は、台地の西端に占地し、北側5mの位置
 には9号住居がある。北東の隅に近い所に340号土坑が
 重複している。住居が古い。



第28図 10号住居遺構図(1)

形状は、南北方向に長い梯形で、北に向かって広くなり両隅が丸みを帯びる。床面は、遺物の出土状態を決め手としたが、深さが一定していない。長軸方向は壁際が低く、逆に短軸方向では壁際の方が高くなっている。

炉は、中央から大きく外れて北壁から内側1mの位置に作られている。南に開く「コ」の字形に石が組まれ、底面には土器の破片が隙間なく敷かれている。石は、板状のものが選ばれ、両側のものは割って高さまでが揃えられている。ほかの住居の例からすると石組みに続いて土坑があったとみられるが、相当する箇所を試掘のトレンチで先行して掘られていて削平したとみられる。

柱穴は、認められなかった。南西隅に近いP1は、長軸・

短軸・深さが72・70・50cmと大型である。検出したのは床面で、周辺の覆土とも差異がない。本跡に伴うと判断したが、34号土坑と同じく本跡よりも新しい時期の土坑の可能性も考えられる。調査では断定できなかった。

出土した遺物は、石を除けば土器が非常に少ない。出土層位は、床面の直上層からである。掲載した石器は、削器1、凹石4、敲石1、石皿1、台石1、多孔石1、石製品1である。非掲載は、加工痕ある剥片1、凹石1、剥片38である。

遺構の時期は、炉出土土器の特徴から二ツ木式期である。



第29図 10号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第30図 10号住居遺物図(2)

11号住居 (第31～36図 PL.15・16・33～36)
 位置 78PQ18・19グリッド 形状 長方形
 規模 長軸5.70m、短軸4.00m 面積 22.80m²
 主軸方位 N48°E 残存深度 0.37m

炉 中央北東壁寄り・埋葬炉
 炉規模 長軸0.35m、短軸0.30m
 所見 当住居は、台地の西端寄りに占地している。北側
 20mに12号住居、南西25mに9号・10号住居が位置して

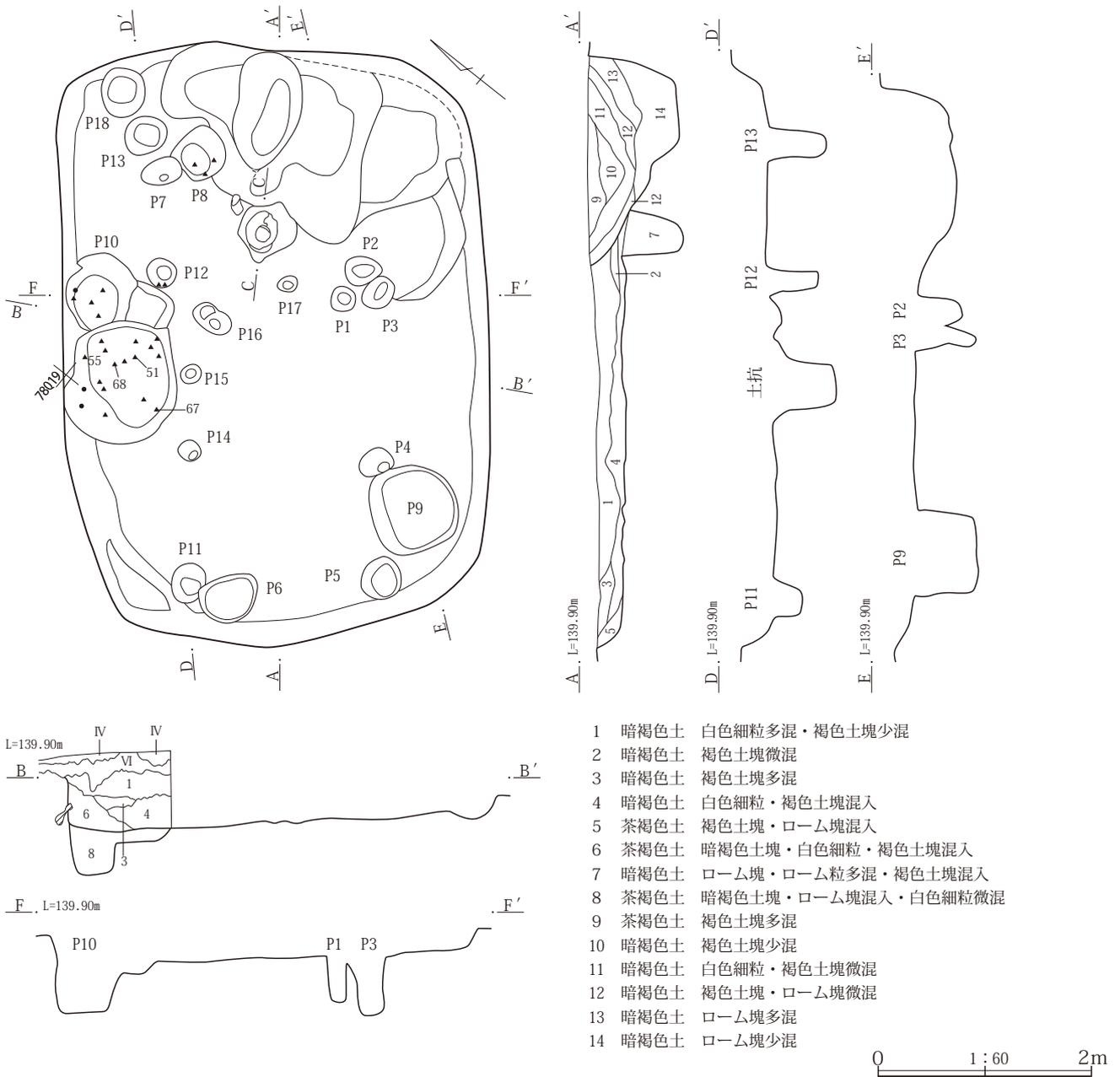
いる。10号・12号住居と並んで、分布域の縁辺を構成する。北東の壁際が長軸1.50m近い土坑に切られ、北西の壁際でも土坑に切られている。2基の土坑は、出土遺物・覆土の状態からみて同時期である。

床面は、壁際をのぞいて全体が硬化している。壁際だけがやわらかいのは周溝の可能性もあり、長軸の両辺がわずかにくぼんでいる。

炉は、第32図1の底部を欠いた深鉢を埋設している。内部に焼土、炭化物はないが、周囲にある住居の例からみて炉と判断した。掘り方は大きく、直径が50cm近い土坑のようである。すぐ側にある石は縁石とみられる。

柱穴と考えられるのは、P1～P8・P11～P18の16本である。これらは、P13、P17、P18を除き、おおむね長軸方向で対称的な位置にある。支柱穴は、西側がP7、P12、P14、P11の4本、東側がP2、P4、P5に1本を加えた合計8本と推定した。P9とP10は、大きさや壁際にあることから除外し、貯蔵穴と推定した。P10は、床面の下で検出されている。建て替えをした跡とみられ、柱穴が複数あることもこれを裏付けている。

出土した遺物は、検出した11軒の中では最も多い。ただし、半分以上は大きさが拳以下、粒を揃えたような円礫で、特に北西側の覆土中位から床面の直上層にかけ流

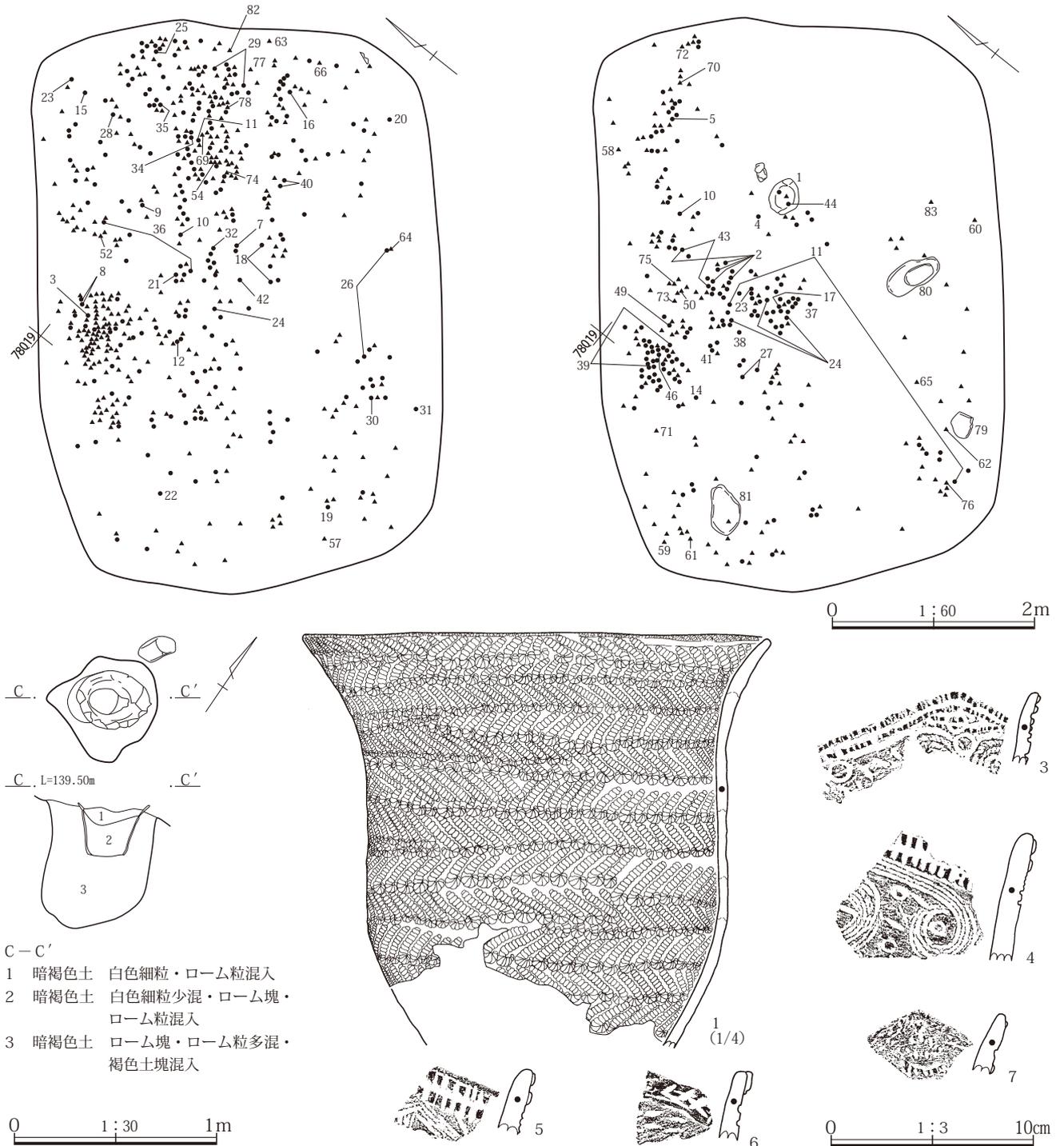


第31図 11号住居遺構図(1)

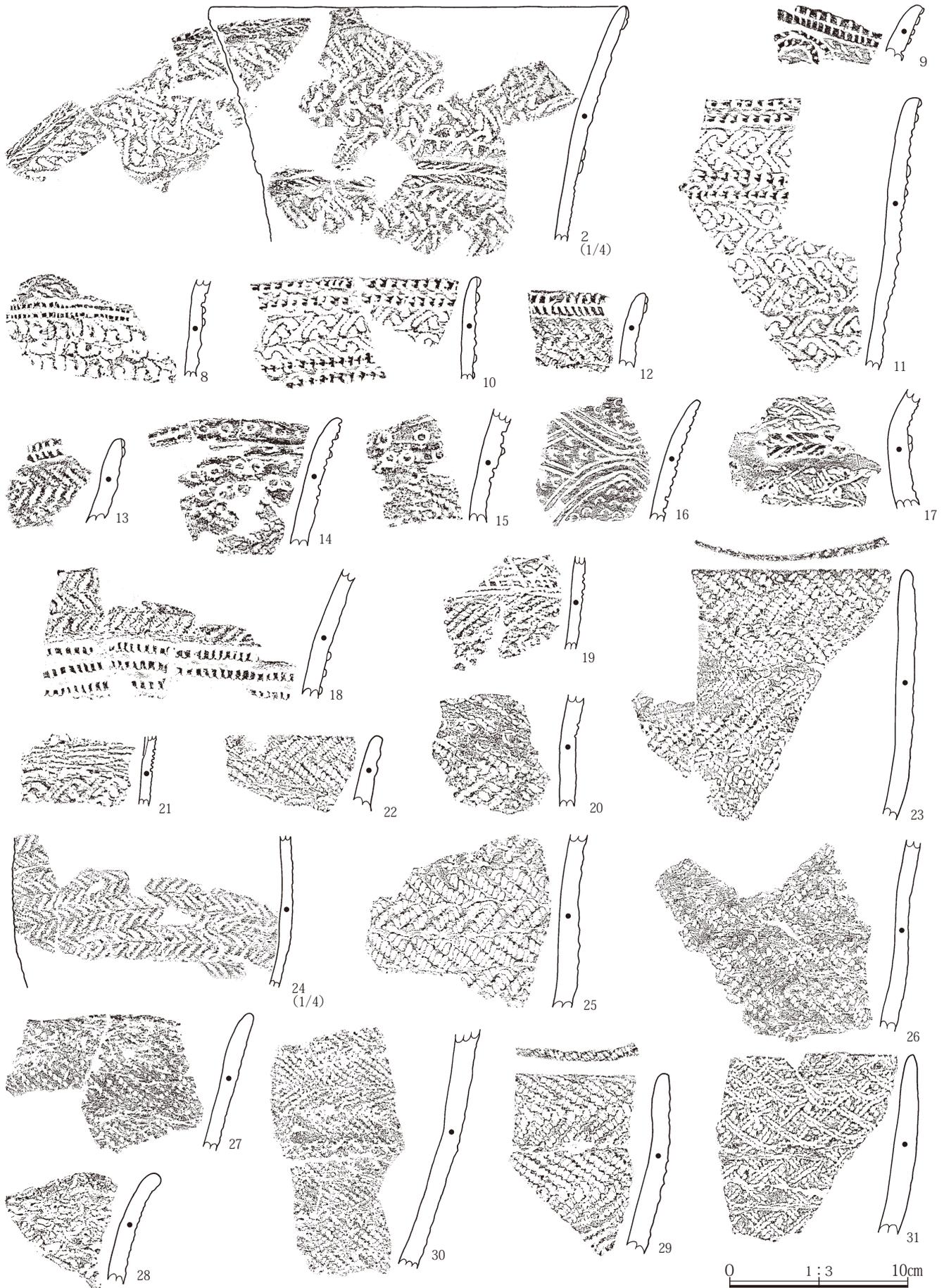
れ込んだような状態である。一部を観察したところ変色、ひび割れが顕著で、集石で使用したものを廃棄したと考えられる。土器は、炉体のほかすべて破片で、少量の大形破片が含まれている。炉の周囲での接合例が多い。床面で出土した3点の大ぶりの石は、作業用の台石である。79が南東隅、80が炉に近い住居の中央部、81が南西の隅からである。どれも扁平で、80は敲打痕がみられ、81は石皿のように擦痕が顕著である。また、西の隅では、床

面の直上層中で同一母岩から剥離された剥片が集中して出土している。掲載した石器は、打製石斧5、石鏃2、石匙3、削器2、石核1、凹石7、磨石5、敲石2、石皿5、台石1、石製研磨具1である。非掲載は、打製石斧3、石鏃1、石匙2、削器1、加工痕ある剥片7、凹石9、磨石6、敲石2、剥片235点である。

遺構の時期は、炉体の土器からみて二ツ木式期である。



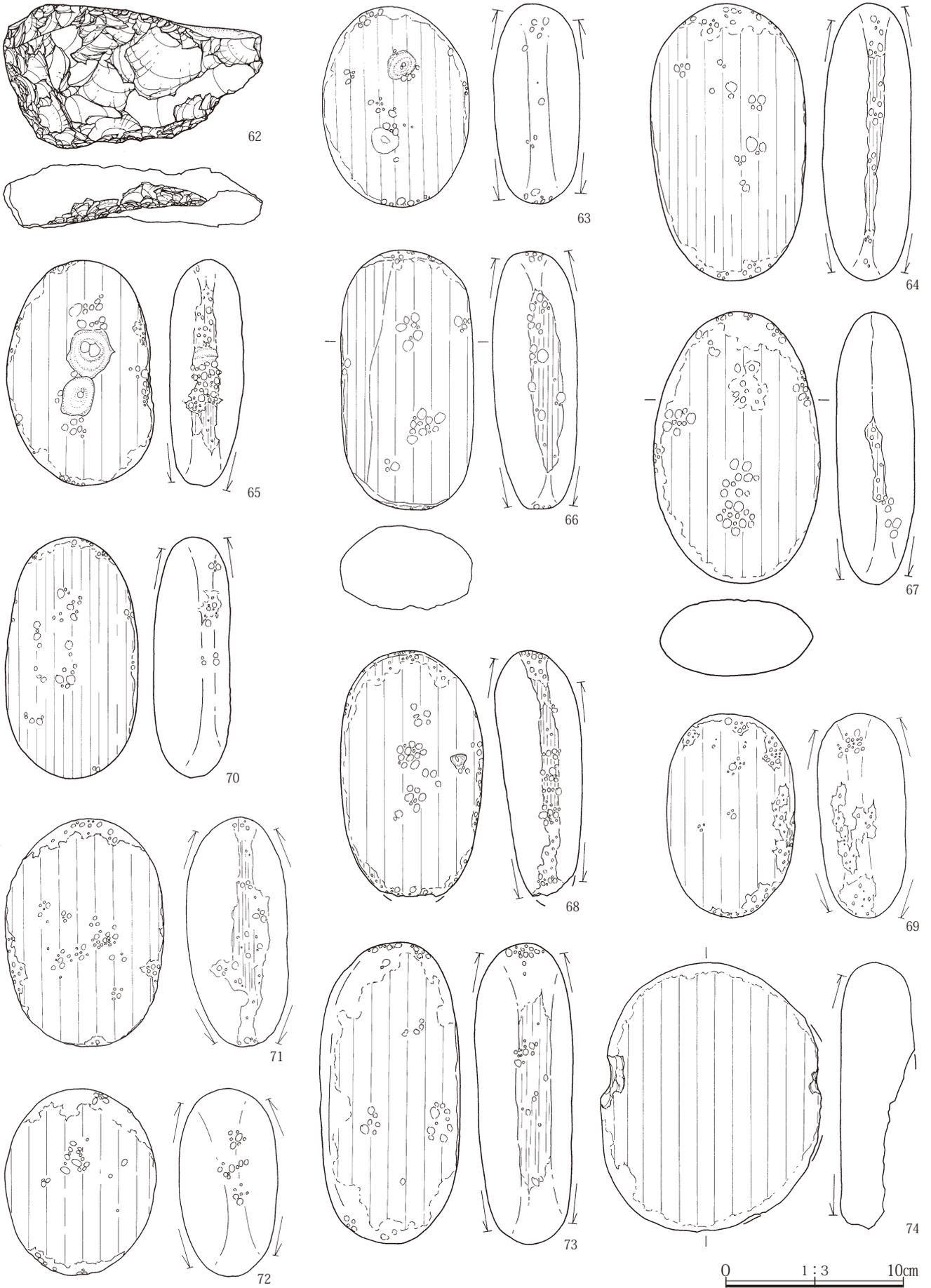
第32図 11号住居遺構図(2)・遺物図(1)



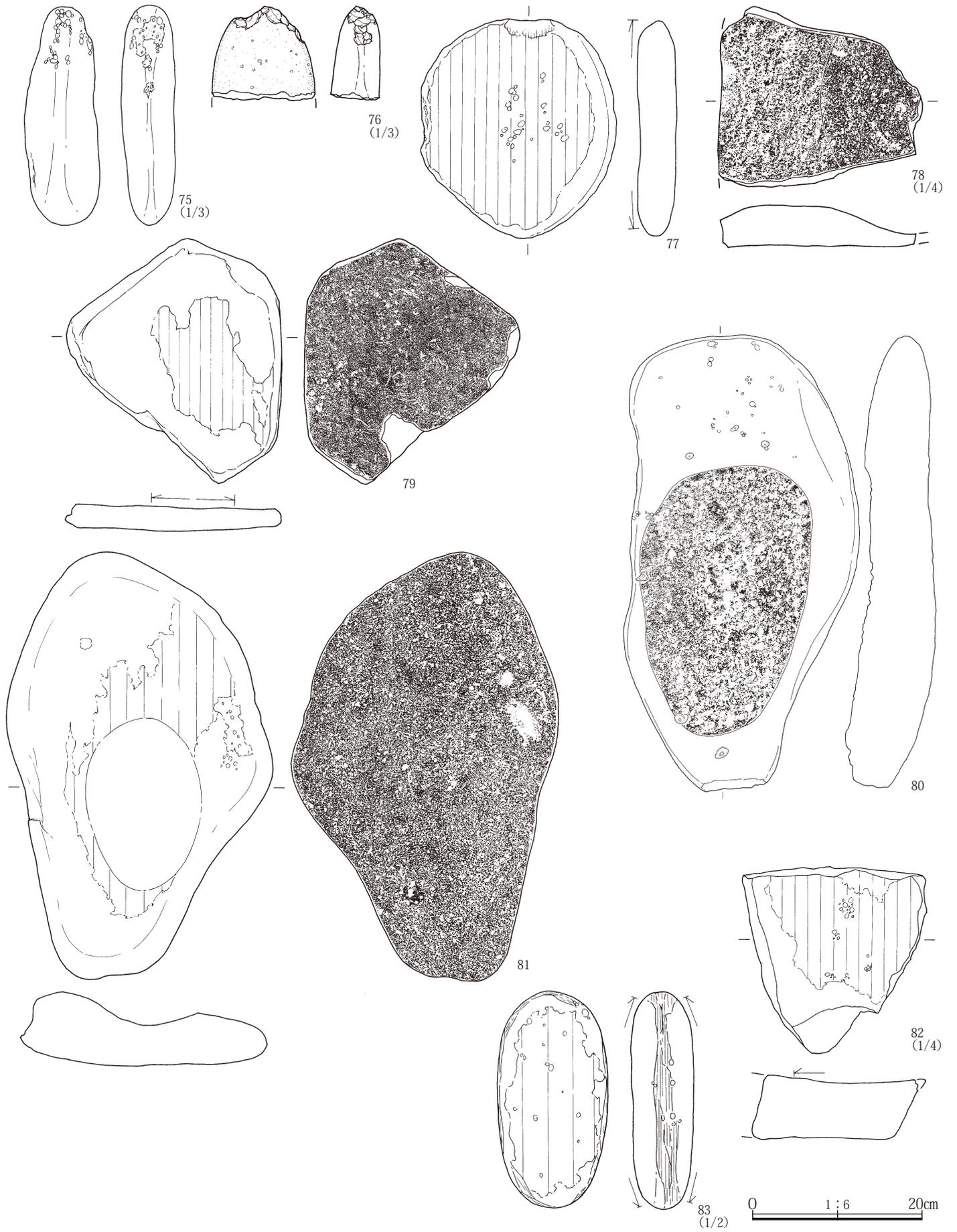
第33图 11号住居遺物図(2)



第34图 11号住居遺物图(3)



第35図 11号住居遺物図(4)



第36図 11号住居遺物図(5)

12号住居 (第37～41図 PL.16・17・36・37)

位置 8802・3グリッド 形状 推定長方形

規模 長軸4.10m+、短軸3.84m 面積 15.74m²+

主軸方位 N29°E 残存深度 0.34m 炉 北東壁寄り

炉規模 長軸1.42m、短軸0.84m

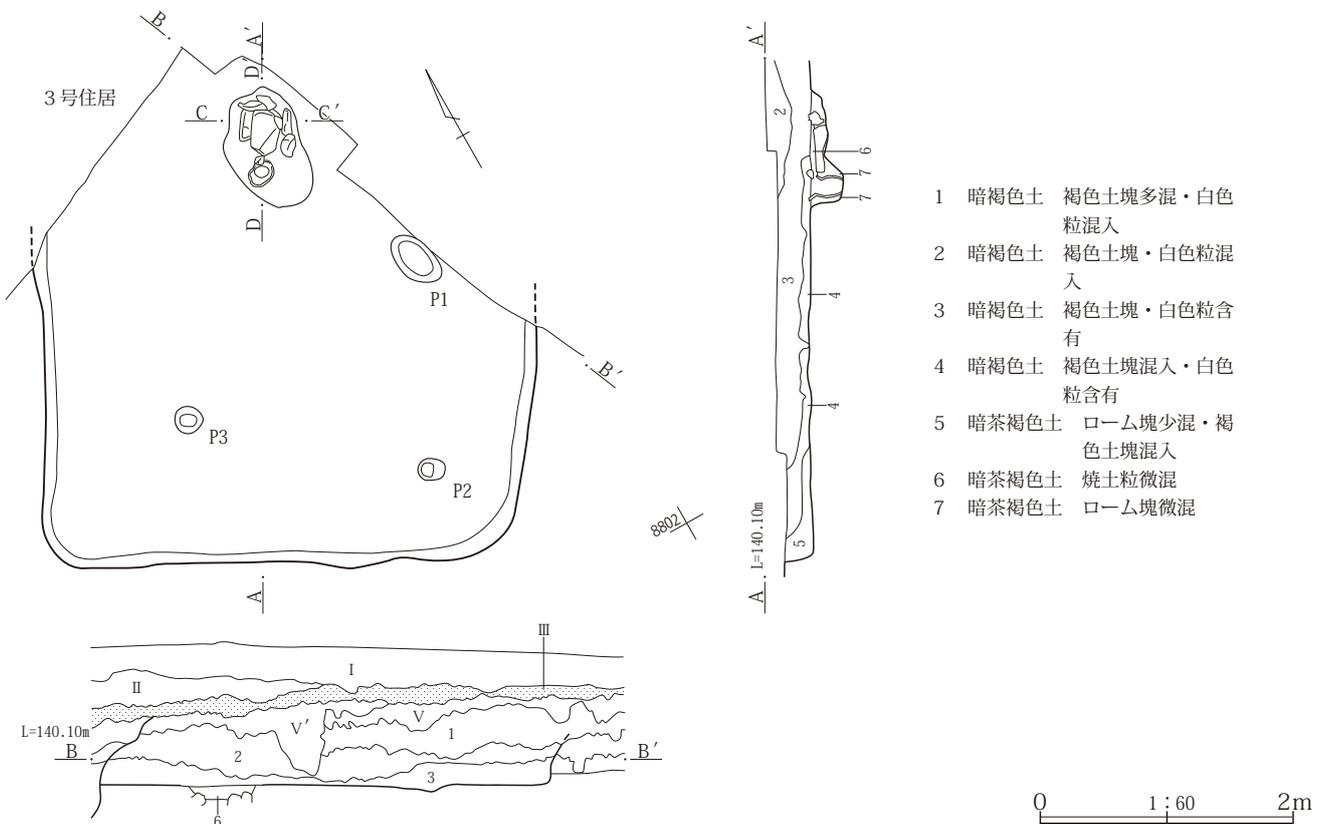
所見 当住居は、台地の西端寄りに占地している。北西側を3号住居に切れ、北東側は調査区外である。検出したのは、全体の3分の2と見られる。南側17mに11号住居、西側16mに8号住居が位置する。

床面は、掘り下げたロームを平坦にしている。一様に硬く、炉のまわりが顕著であった。床面上では3箇所のピットが検出されたが、対応した位置になく、深さが揃っていない。柱穴としては可能性にとどまる。長軸・短軸・深さは、P1が50・27・4cm、P2が20・17・19cm、P3が23・21・10cmである。

炉は、住居の中心を外れて北壁側に寄った位置にあると考えられる。その位置は、南壁との関係で14号住居が参考となる。「コ」の字形に石を組み、開口した南側に第38図1・2・3の埋嚢がある。両者は一体の構造で、組んだ中に敷かれた石の上面と埋嚢の上端が揃えられている。規模は、埋嚢を含む全長が72cm、石組みの内法部

分で長さ40cm、幅28cm、炉の直径が22cmである。掘り方は、長軸96cm、短軸60cmの楕円形で、内部には石組み用と埋嚢のための掘り込みがある。覆土の様子からは、石組みと埋嚢に時差があるようにはみえない。

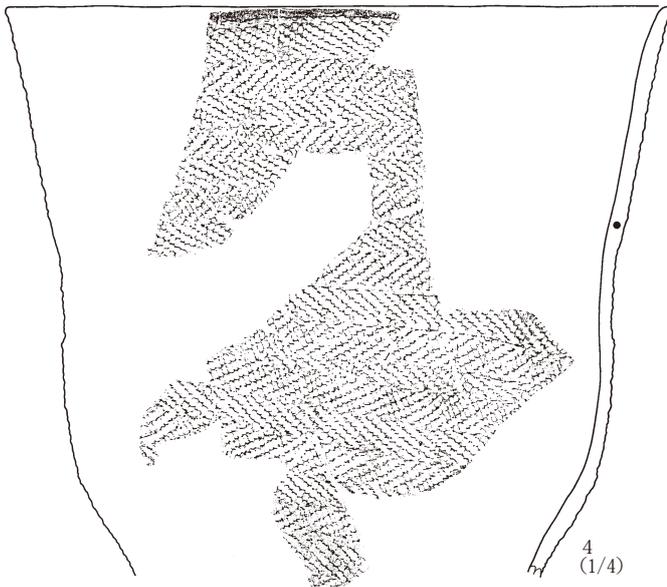
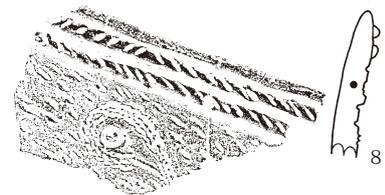
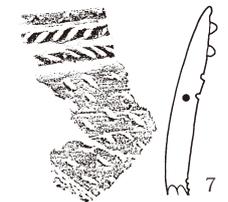
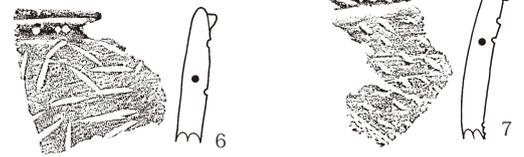
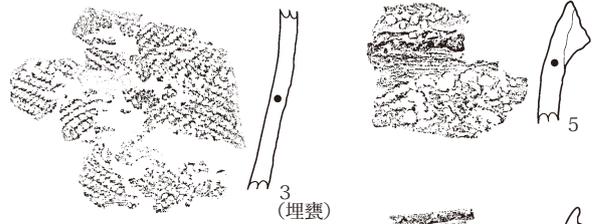
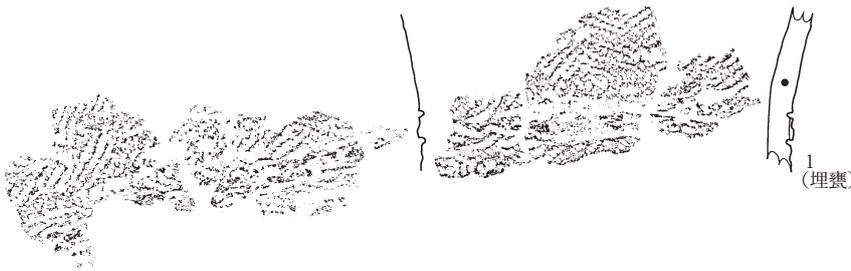
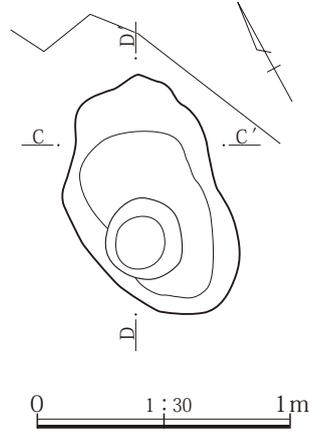
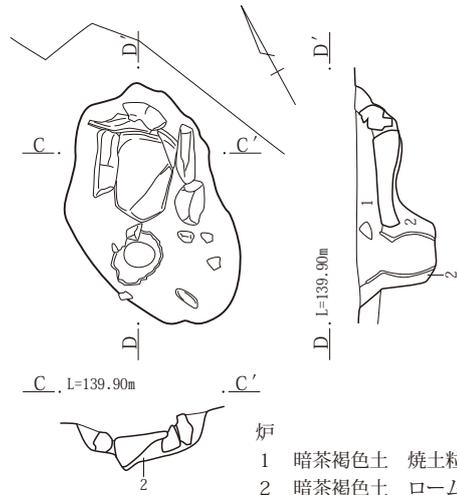
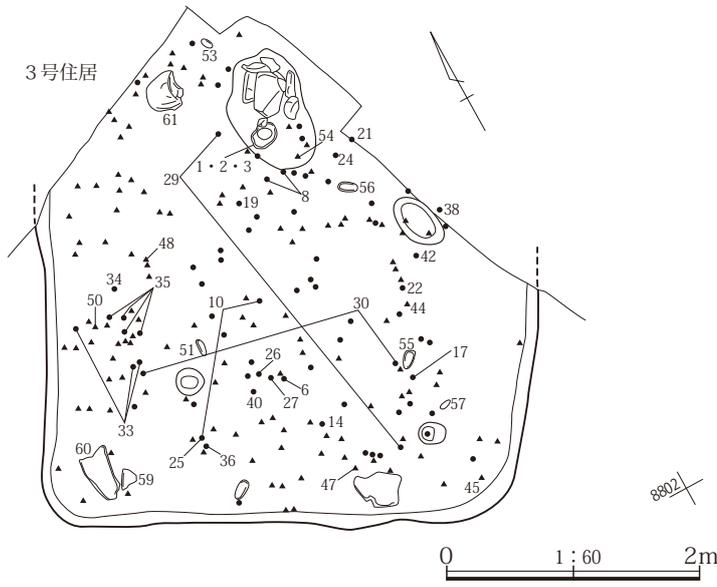
出土した遺物は、床面が55・56・60・61、ほかは直上の3層～4層がほとんどである。60・61は、いずれも原位置で作業用の台石とみられる。61は擦痕と敲打痕、60には顕著な擦痕があり石皿の用途が考えられる。南の壁沿いでは60のほかにも、複数の石が出土している。大きさの点で作業台とみてもよいが、使用した形跡は乏しい。調査時の所見では、一列に並んでいるところから壁の補強や上屋構造に関わるとしているが、床面にあることから壁沿いでの作業用と見た方がよいのではないかと。土器は、破片が全体を占め接合率は低い。遺物としては掲載しないが、床面の直上層からは大量の礫が出土している。拳以下の円礫で、粒が揃っている点に人為的なものを感じさせる。8号・11号住居でも同様な状況がみられ、集石として利用していたものを廃棄したのか、それとも埋没過程での儀礼のひとつであろうか。掲載した石器は、打製石斧3、石鏃1、石匙1、石錐2、石核1、凹石3、磨石2、敲石1、石皿2、台石1、石製研磨具1である。



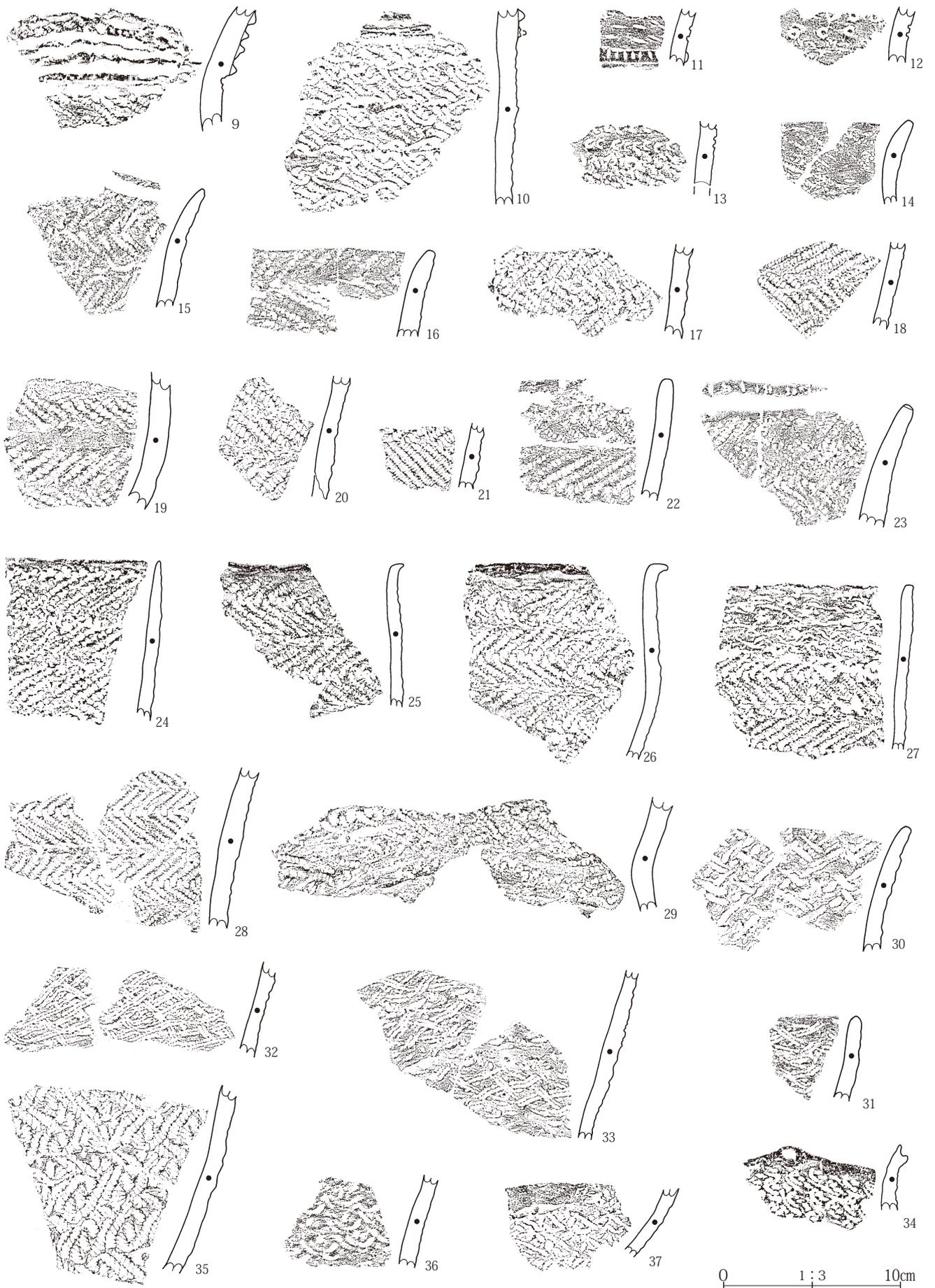
第37図 12号住居遺構図(1)

非掲載は、削器5、石核1、加工痕ある剥片8、磨石3、剥片67である。

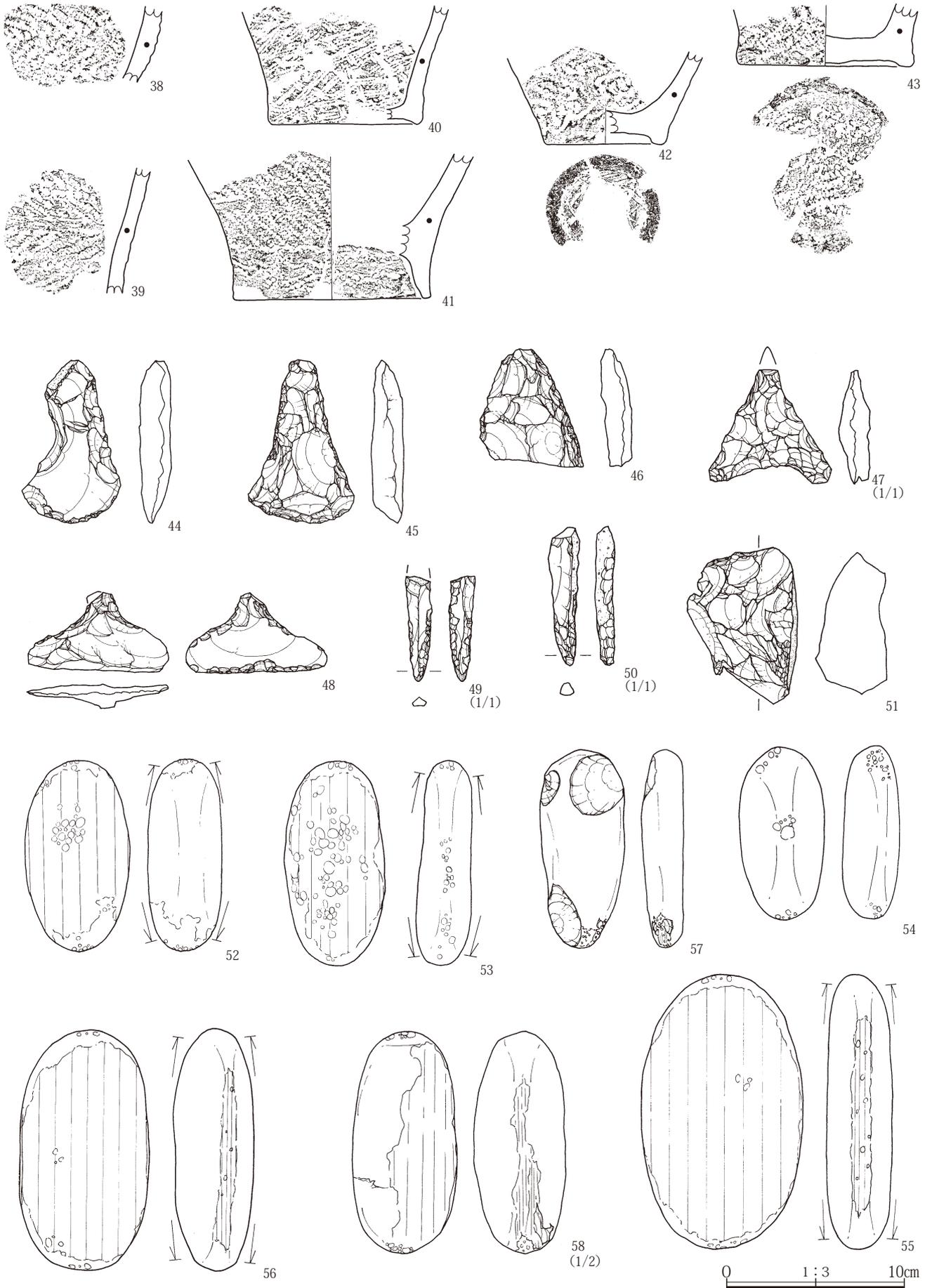
遺構の時期は、埋甕に使われている土器からみて二ツ木式期である。



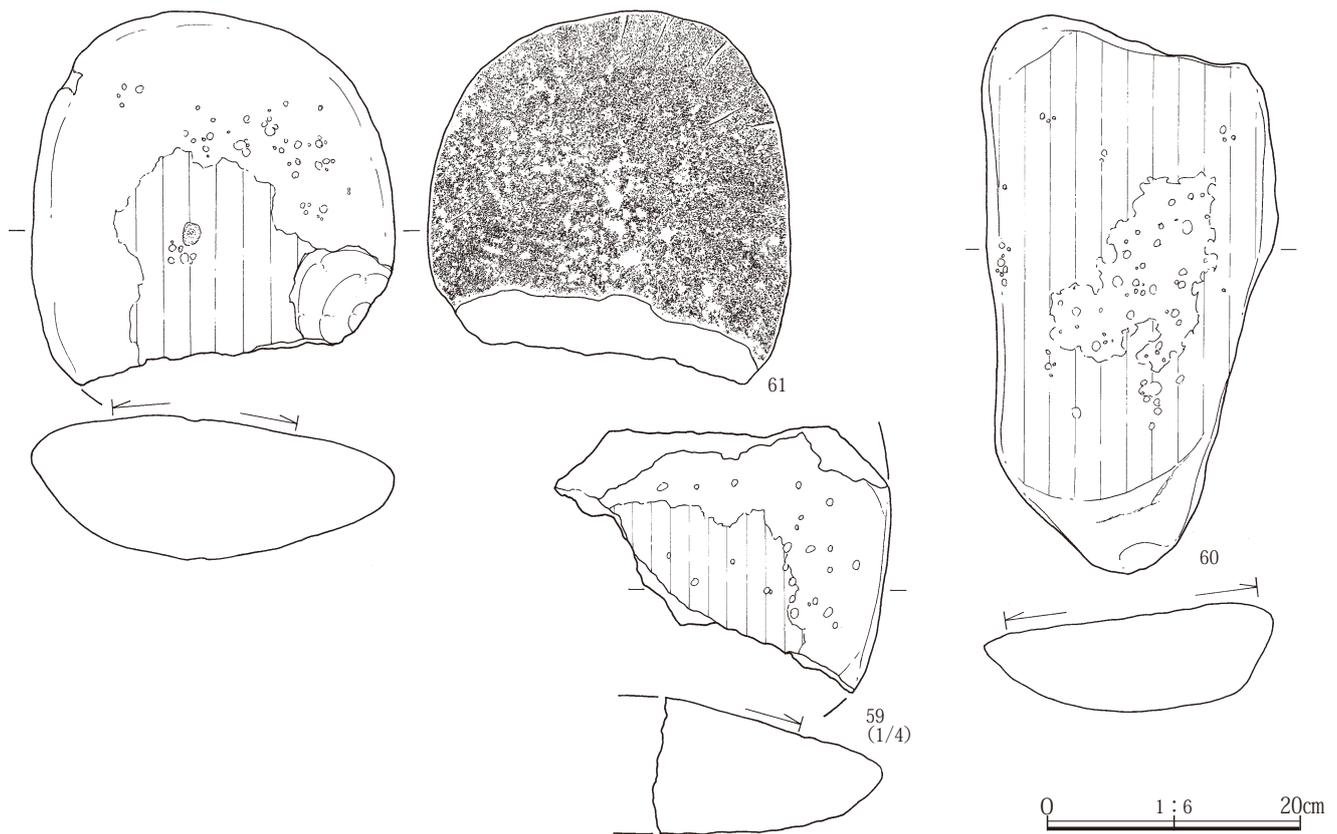
第38図 12号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第39図 12号住居遺物図(2)



第40図 12号住居遺物図(3)



第41図 12号住居遺物図(4)

14号住居 (第42・43図 PL.17・38)

位置 78I8・9グリッド 形状 梯形

規模 長軸5.45m、短軸4.38m 面積 23.87㎡

主軸方位 N4°E(東壁) 残存深度 0.90m

炉 中央よりやや北寄り

炉規模 長軸1.97m、短軸1.10m

所見 当住居は、台地の中央部、調査区の北壁から南西へ4mの位置で検出した。南東隅に2号堀が重複していて、上面は削平されている。台地の西側にある住居からは60mも離れ、近いのは西40mにある17号住居である。床面は、掘り下げたロームを平坦にしている。全体の中では、炉の南西側が硬化している。

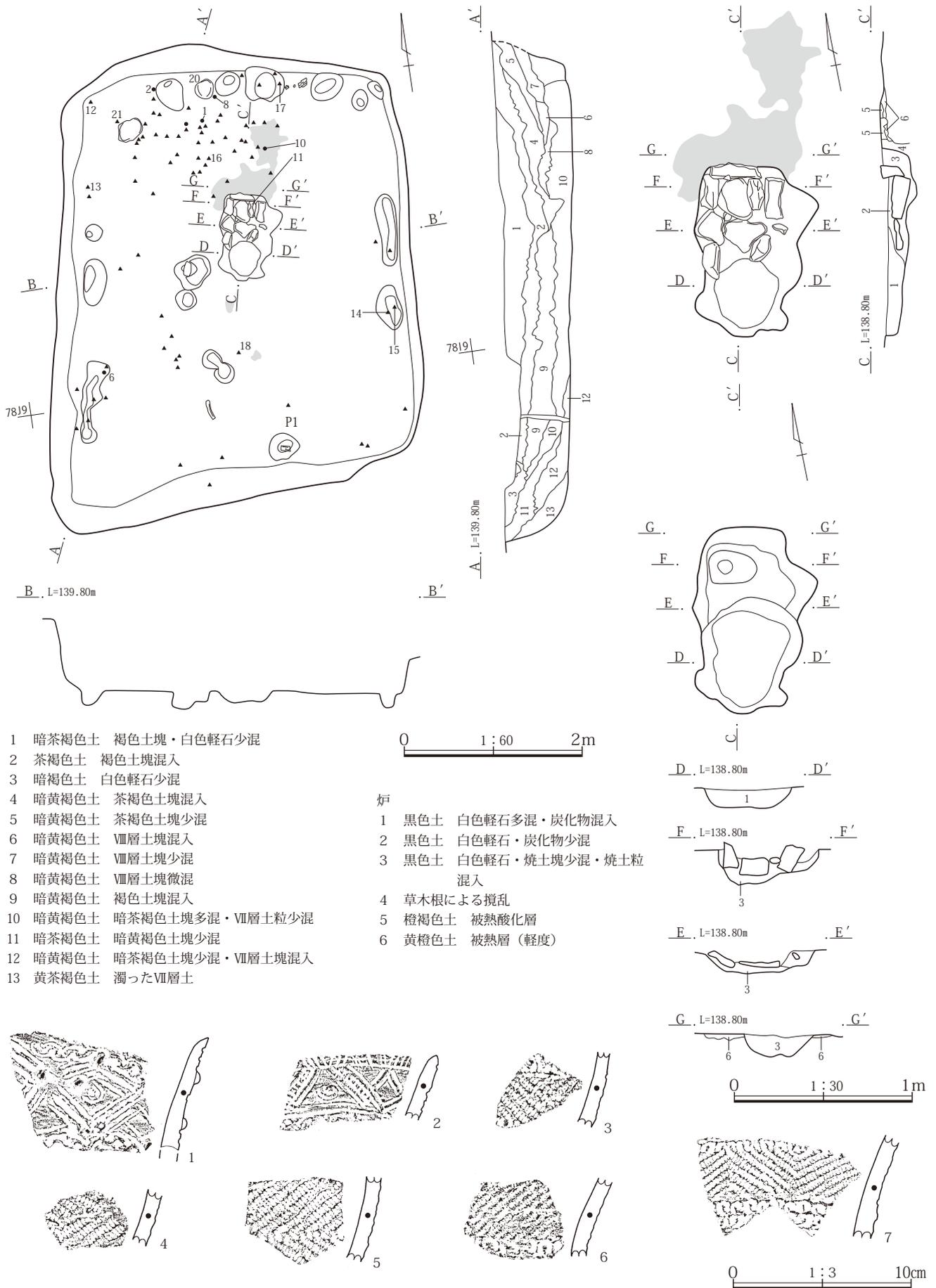
炉は、中央の北寄りにある。「コ」の字形に石を組み、開口した南側に素掘りの土坑がある。石は、組んだ中にも隙間なく敷かれている。大きさは20cm前後、割って四角形になるように形状が整えられている。床面からの深さは5cm、土坑はそれよりも一段深く、10cmである。組んだ石の外側は床までが焼けていて、特に北側では炉と同程度の範囲が硬化している。覆土の様子では、土坑が石を組んだ部分を切っているが、灰掻き穴のように一体

として機能していたとみられる。

柱穴は、壁際の掘り方から12本、中央部から4本が検出されている。壁際は、一列に連なっているのが特徴で、一部は連結して溝になっている。いずれも浅いことから周溝の痕跡のようでもある。支柱穴は、長軸方向の両壁際にある2本に可能性がある。対の位置で、結んだ線上に炉がある。長軸・短軸・深さは、P1が34・23・14cm、P2が42・35・11cmである。

出土遺物は、104点を記録した。このうち97点が拳大以下の礫である。大半は炉の北側で出土し、南西側からが少量である。北西隅から50cm東の床には、長軸30cm、短軸22cmの扁平な石が置かれている。北壁の際でも20cm大の円礫が置かれている。ともに作業用の台石ではないか。北西のものには敲打した跡がみられる。また、中央部にある焼土のほかに、柱穴まわりの壁際で炭が出土した。柱の一部か、上屋の一部であろうか。掲載した石器は、打製石斧2、石匙1、石錐1、削器1、凹石2、磨石2、石皿1、台石1である。非掲載は、削器3、加工痕ある剥片5、台石1、剥片69である。

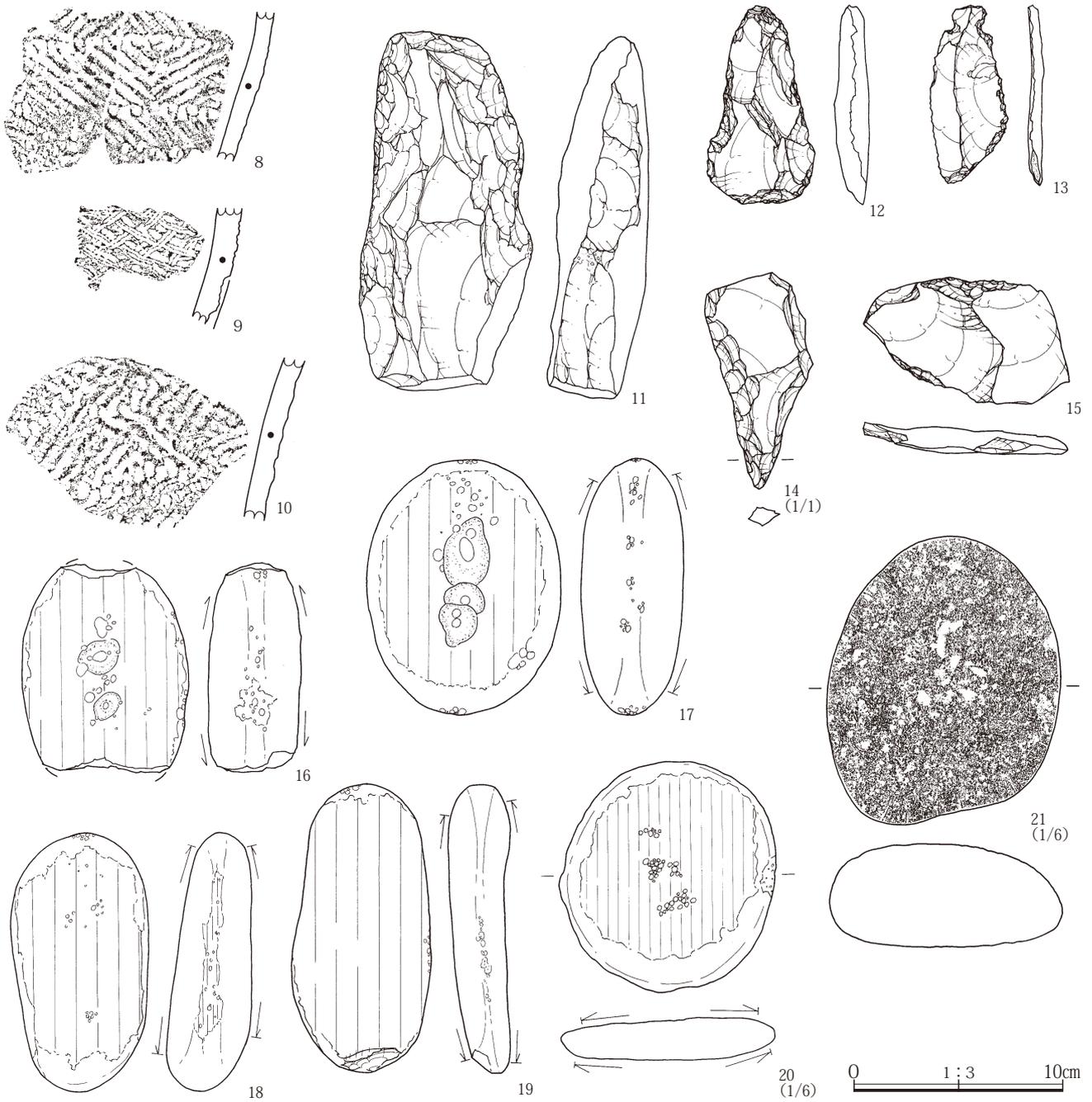
遺構の時期は、関山I式期である。



- 1 暗茶褐色土 褐色土塊・白色軽石少混
- 2 茶褐色土 褐色土塊混入
- 3 暗褐色土 白色軽石少混
- 4 暗黄褐色土 茶褐色土塊混入
- 5 暗黄褐色土 茶褐色土塊少混
- 6 暗黄褐色土 VIII層土塊混入
- 7 暗黄褐色土 VIII層土塊少混
- 8 暗黄褐色土 VIII層土塊微混
- 9 暗黄褐色土 褐色土塊混入
- 10 暗黄褐色土 暗茶褐色土塊多混・VII層土粒少混
- 11 暗茶褐色土 暗黄褐色土塊少混
- 12 暗黄褐色土 暗茶褐色土塊少混・VII層土塊混入
- 13 黄茶褐色土 濁ったVII層土

- 炉
- 1 黒色土 白色軽石多混・炭化物混入
 - 2 黒色土 白色軽石・炭化物少混
 - 3 黒色土 白色軽石・焼土塊少混・焼土粒混入
 - 4 草木根による攪乱
 - 5 橙褐色土 被熱酸化層
 - 6 黄橙色土 被熱層(軽度)

第42図 14号住居遺構図・遺物図(1)



第43図 14号住居遺物図(2)

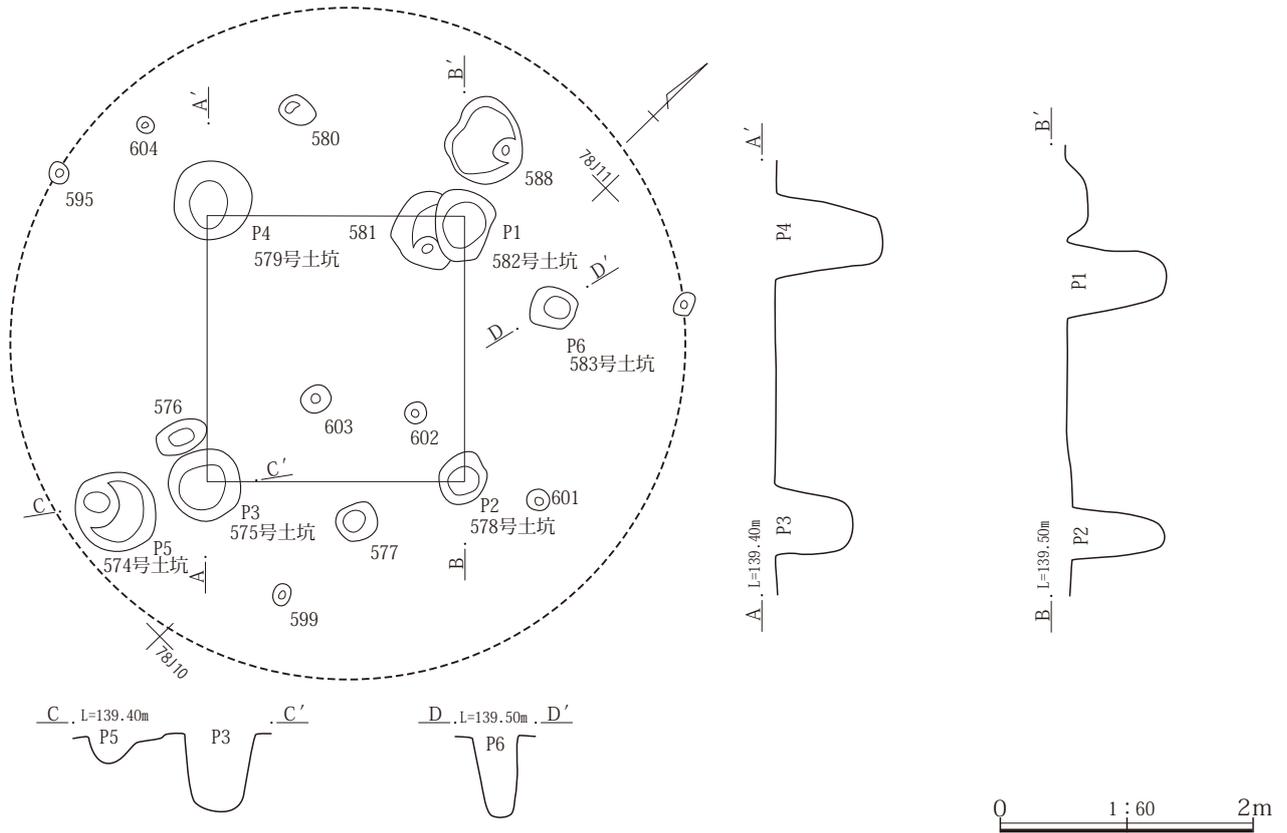
15号住居(第44図 PL.17)

位置 78IJ10・11グリッド 形状 推定円形 規模 推定5.30m 面積・主軸方位・残存深度 計測不可
 所見 当住居は、14号住居から5号溝にかけて中期後半の土器が集中した部分と、その下層で検出された6基のピットからプランを推定した。10m四方の範囲で検出したピットは約50基である。その中から6基を選んだのは、ひとまわり大きいことが基準で、特に深いものを取り上げた。ピットの長軸・短軸・深さは、P1が55・45・

34cm、P2が38・35・31cm、P3が57・55・58cm、P4が64・59・75cm、P5が38・32・47cm、P6が36・31・37cmである。ピットの中から出土した遺物はない。

遺物が集中した面が床面であった可能性がある。ただし炉は、精査しても検出できなかったことからすると、住居ではなく掘立柱建物の可能性も考えられる。

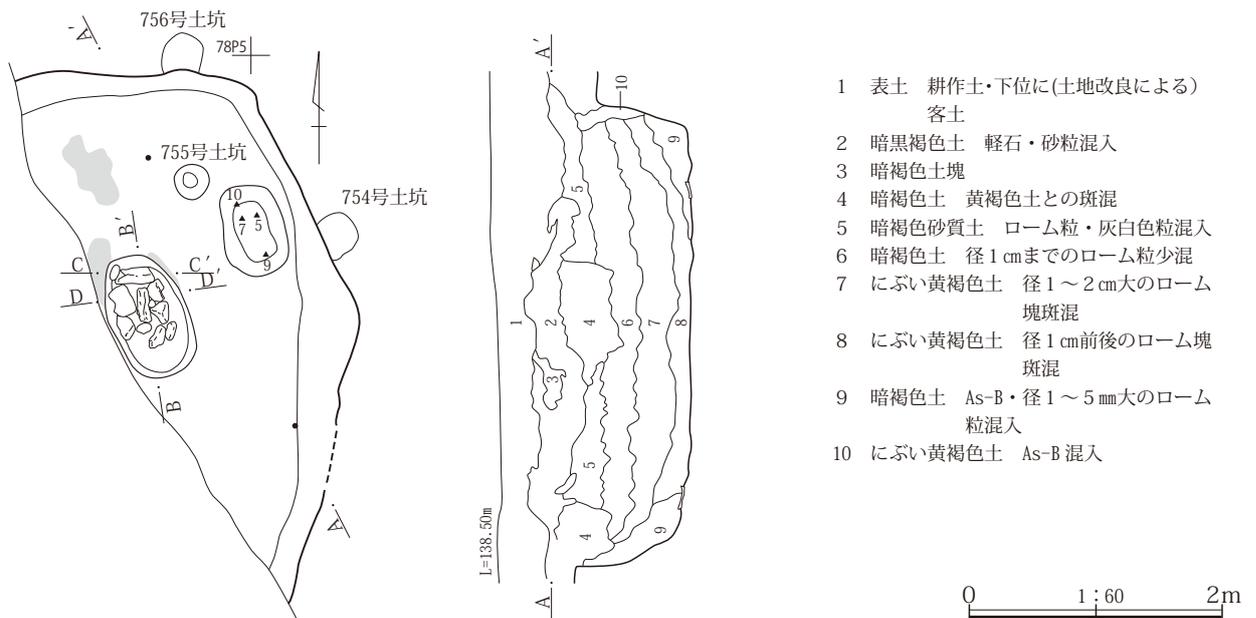
遺構の時期は、中期後半加曾利E式である。プランの上面で出土した土器からの推定で、住居のプランを円形としたのも、この土器の時期が決め手である。



第44図 15号住居遺構図

17号住居 (第45・46図 PL.19・38)
 位置 780P4グリッド 形状 推定長方形、北東隅を
 検出、プランの大半は調査区外の南西方向にある。規模
 南北4.24m以上、幅2.50m以上 面積 10.60㎡以上
 主軸方位 炉の長軸でN5°W 残存深度 1.25m

炉 北東寄り 炉規模 長軸1.03m 短軸0.63m
 所見 当住居は、台地の中央部に占地。台地の西端にあ
 る住居からは約60m、北にある14号住居からでも40m離
 れ、孤立している。1mを超す深度、良好な遺存状態
 であるが調査区の南壁際にかかり、全貌は明らかではない。



第45図 17号住居遺構図(1)

壁際に同時代とみられる754号・756号土坑、住居内には755号土坑が重複しているほか、上面に近世の2号溝が隅をかすめて重複している。プランは、周囲にある石組み炉の住居を参考にして長方形と推定したが、東壁と炉の長軸方向とは斜交、推定にも疑問が残る。参考とした住居は、炉の長軸と壁は直交ないし平行していて、本跡も南東側に広がる可能性もある。

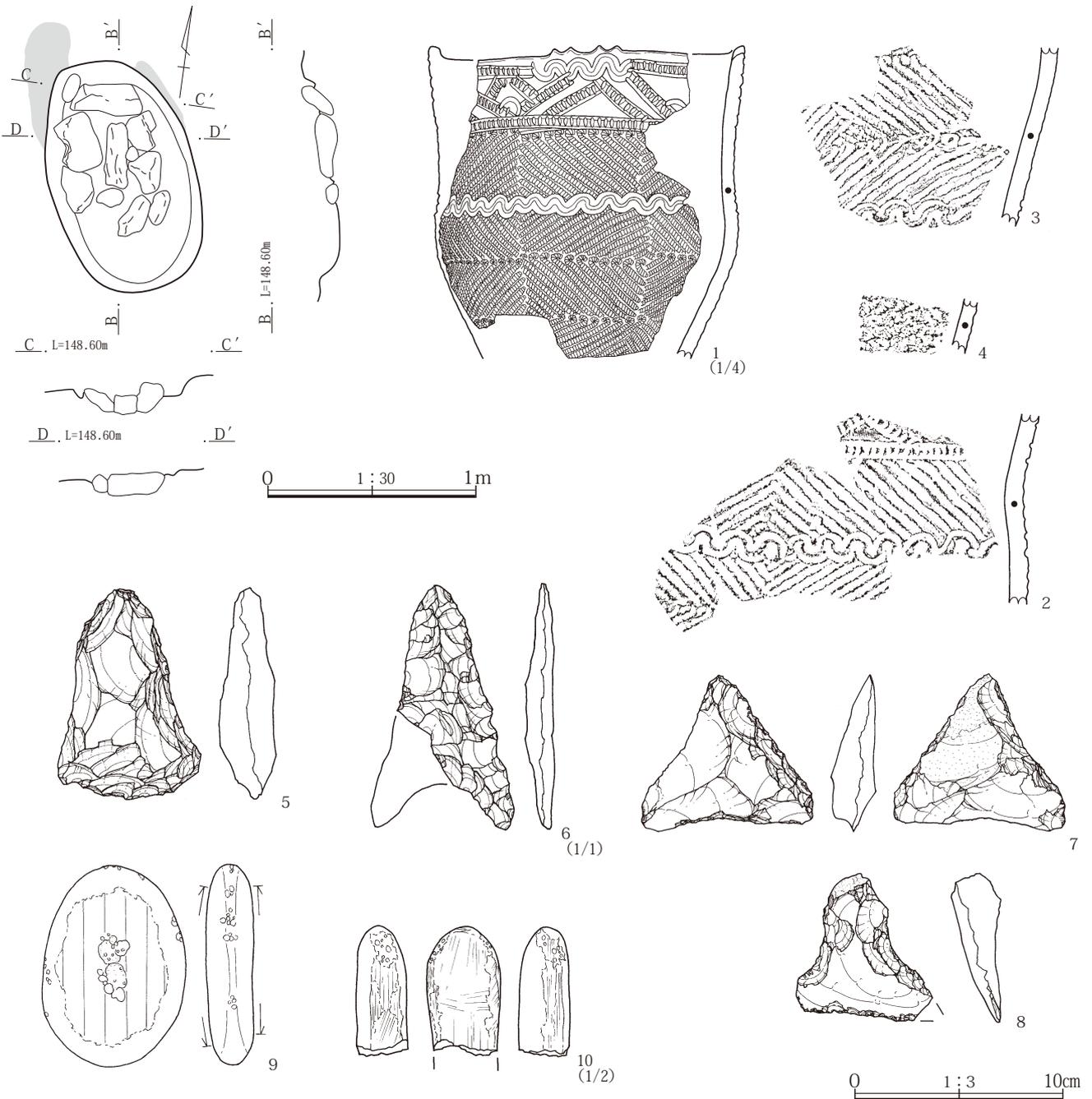
炉は、楕円形の掘り方の中に円礫と棒状の石とを「コ」の字形に組んでいる。石は、14号住居よりも小ぶりである。使用頻度は高いとみられ、炉の周囲は硬化している

上に赤く変色している。

柱穴は、755号土坑に可能性がある。直径が27cmの円形で、深さは16cmである。東の壁際にある土坑は、長軸・短軸・深さが74・50・16cmと大型である。

出土した遺物は、覆土全体を合わせても少なく、記録したのは14点、うち10点が廃棄した礫である。掲載した石器は、打製石斧1、石鏃1、削器2、凹石1、石製研磨具1である。非掲載は、削器2、剥片11である。

遺構の時期は、出土した土器からみて関山Ⅱ式期である。



第46図 17号住居遺構図(2)・遺物図

土坑

概要 検出した1048基の中から、報告するのは97基である。選別の基準は、次の3点である。調査時の所見を第一にして、次いで形状が整っていて掘り込みが深いもの、およそ暗色帯の前後にまで達している。そして、最後が遺物を伴うかである。時期は、いずれも縄文時代と判断したが、遺物の出土がなくても、出土した土坑との形状、覆土の類似を時期の決め手とした。土器は、前期と中期の深鉢がほとんどである。

報告を割愛した土坑は、人工と判断するのがむずかしいものである。共通点は、小さくて、掲載した土坑の周囲はもちろんであるが、住居がない所でも群在する傾向にある。掘立柱建物を検討してみたが、プランとしてまとまるものはなかった。図面、写真の記録類は、欠番としないで調査当時のままである。

分布 大半は、住居がある調査区の西側に集中している。住居の周囲に群在する傾向にあり、多い所で10基を超し、少ない所でも5基前後の数がある。典型が9号、10号住居の周辺で、逆に6号、12号住居のように極端に少ない所もある。群在しても切り合うのは少数である。住居と重複するのは7基、うち2基は一部がかかるだけである。

グリッド別では、58区が2基、68区が6基、78区が55基、79区が6基、88区が24基、89区が2基である。

形状 分類基準は、円形が長軸と短軸の差が50cm以内、楕円形が長軸と短軸の差が50cm超である。推定を含めて、内訳は次のとおりである。

円形が65基 (34・56・61・63・64・65・73・74・99・100・109・110・117・118・156・180・181・183・187・191・201・213・214・219・222・243・255・256・259・290・302・304・313・317・322・323・324・327・335・337・338・340・344・345・375・519・540・542・550・557・625・626・649・660・668・669・670・671・673・678・682・685・686・687・688号)

楕円形が22基 (157・190・228・230・239・273・301・312・316・325・326・328・334・341・343・354・368・374・543・560・561・584号)

方形が3基 (172・178・538号)、不整形が7基 (1a・227・235・329・330・336・683号) である。楕円形で

も長短の差が1mを超すようなものはない。

陥し穴は、楕円形の273号、343号、368号の3基である。

断面の形状 分類基準は、箱形が上面径と底径の差が少なく、中段にふくらみがないもの。袋状は、上面径よりも底径が大きいもの。フラスコ状は、底径が極端に大きく、底面が平坦である。

箱形が17基 (63・64・65・99・117・172・180・181・183・187・255・256・334・338・340・685・687号)、袋状が5基 (156・179・191・302・686号)、フラスコ状が2基 (214・243号) である。上記の3つ以外は、緩く窪んでいるものを皿状とした。なお、形状はしっかりしているが、深さが20cm以下のものは特定を避けた。

規模 長軸の1m以下が29基、1m以上が76基である。深さは、底面が暗色帯にまで達している深いものと、その半分以下、ソフトロームかその前後でとどまっている浅いものとに分けられる。断面形状との関係でみると、箱形や袋状、フラスコ状が深く、それ以外が浅い上に底面に凹凸が目立つ。

覆土 共通点は、堅く締まっていることである。壁、床との区別は、第一が色調の違いで、これに炭化物や遺物があるかを判断基準にして作業した。しかし、区別しにくいというのが実態である。

遺物の出土状態 土器が出土したのは42基である。しかし、器形をうかがえるものは少なく、破片の状態である。覆土の中位かそれ以上の出土で、埋没中に投棄されたと見てよいだろう。

一方、石器が出土したのは36基である。器種は、最多が加工痕ある剥片16点、次いで打製石斧が8点、石鏃が5点である。非掲載の剥片等を含めても、製品の占める率は高いように見える。256号土坑の4点の打製石斧は、保管されていたことを示すのであろうか。また、688号が石器を意図的に置いたような状態である。

用途 断面が箱形、袋状、フラスコ状のものは、住居の周囲に多く貯蔵用施設という見方ができる。

1a号土坑(第47図 PL.19)

位置 58B20グリッド、1号堀から西へ7m、南西には34号土坑がある。形状 長方形の一辺に舌状の張り出しが付く。規模 長軸1.20m、短軸1.02m、深さ0.24m。張り出しは、間口50cm、奥行き37cmである。覆土の特徴 被熱している。6層に焼土が多く、4層には焼土のブロック、3層には灰が混入している。出土遺物 黒色頁岩の剥片1点 所見 覆土に焼土、灰が混じる点に特異さがある。張り出しを取り除くと陥し穴のように見え、覆土の様子からは倒木痕の可能性もある。

34号土坑(第47図 PL.19)

位置 58D18グリッド、1号堀から西へ12m、33号・35号土坑と隣接。形状 円形 規模 長軸1.15m、短軸1.10m、深さ0.26mである。断面は皿状。覆土の特徴 暗褐色土、にぶい黄褐色土で埋没。上位で拳大から人頭大の石9点が出土。所見 集石の可能性はある。

56号土坑(第47図)

位置 88T3グリッド 形状 推定円形 規模 長軸1.80m、短軸0.54m以上、深さ0.30mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

61号土坑(第47・53図 PL.19・38)

位置 88T4・5グリッド 形状 円形 規模 長軸1.30m以上、短軸1.36m、深さ0.40mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 ニツ木式深鉢破片、チャート剥片1点 所見 5号・7号住居と8号住居との間にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

63号土坑(第47・53図 PL.20・39)

位置 88T5グリッド、上面の北西側に浅い掘り込みがある。形状 円形 規模 長軸1.50m、短軸1.32m、深さ0.80m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土、黄褐色土で埋没。出土遺物 ニツ木式、諸磯b式深鉢破片、黒色頁岩剥片2点 所見 5号・7号住居と8号住居との間にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

64号土坑(第47・53図 PL.39)

位置 88T6グリッド 形状 円形 規模 長軸1.40m、短軸1.18m、深さ0.40m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没、焼土粒が混入。出土遺物 諸磯b式土器の深鉢破片、加工痕ある剥片1点、黒色頁岩、黒色安山岩、珪質頁岩の剥片3点 所見 5号・7号住居と8号住居との間にある土坑群の一つである。本来は長短の差が少ない円形で、南東側を掘りすぎている。時期は、出土した土器の特徴から前期と判断した。

65号土坑(第47・53図 PL.19・39)

位置 88T6グリッド 形状 円形 規模 長軸0.94m、短軸0.84m、深さ0.32mである。断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉と諸磯b式深鉢破片、黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

73号土坑(第47図)

位置 88S6グリッド 形状 円形 規模 長軸0.76m、短軸0.70m、深さ0.21mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 黒色頁岩剥片2点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

74号土坑(第47・53図 PL.19・39)

位置 88T7グリッド、6号住居の南西7mにある。形状 円形 規模 長軸0.91m、短軸0.72m、深さ0.37mである。覆土の特徴 暗褐色土で埋没。出土遺物 諸磯a、同b式深鉢破片、黒色頁岩剥片5点 所見 時期は、出土した土器の特徴から前期と判断した。

99号土坑(第47・53図 PL.39)

位置 89B8グリッド、683号・684号土坑の南1.60mにある。形状 円形 規模 長軸1.58m、短軸1.32m、深さ0.36m、断面は円筒形。覆土の特徴 茶褐色土、暗褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉と黒浜式深鉢破片、加工痕ある剥片3点、ほかに黒色頁岩、砂岩の剥片2点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から黒浜式と判断した。

100号土坑（第47図）

位置 89B7グリッド、5号・7号住居の北西12mにある。
形状 円形 規模 長軸0.96m、短軸0.85m、深さ0.23mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

109号土坑（第47・53図 PL.19・39）

位置 89CD4グリッド、110号土坑と40cmの距離にある。
形状 円形 規模 長軸2.00m、短軸1.78m、深さ0.29mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 石鏃1点 所見 時期は、遺物と覆土の特徴から前期と判断した。

110号土坑（第47図 PL.19）

位置 89CD4グリッド、109号土坑と40cmの距離にある。
形状 円形 規模 長軸1.82m、短軸1.44m、深さ0.33mである。覆土の特徴 茶褐色土、暗褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

117号土坑（第48・54図 PL.20・39）

位置 88T5グリッド、7号住居に重複、住居よりも新しい。形状 円形 規模 長軸1.33m、短軸1.31m、深さ0.60m、断面は円筒形。覆土の特徴 茶褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉と黒浜式、諸磯b式の深鉢破片、石鏃1点、加工痕ある剥片2点、ほかに黒色頁岩剥片4点 所見 5号・7号住居と8号住居との間にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

118号土坑（第48・54図 PL.20・39）

位置 88T5グリッド 形状 円形 規模 長軸1.25m、短軸1.06m、深さ0.60mである。覆土の特徴 黄褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉深鉢破片、黒色頁岩剥片1点 所見 5号・7号住居と8号住居との間にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

156号土坑（第48・54図 PL.20・39）

位置 78N8グリッド 形状 円形 規模 長軸1.45m、短軸1.42m、深さ0.52mである。断面は袋状。覆土の特徴 暗褐色土に褐色土が斑状に混入、壁際にローム塊がある。出土遺物 覆土の中位から関山I式深鉢破片、石匙1点、削器3点、磨石1点、ほかに黒色頁岩剥片6点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から関山I式と判断した。

157号土坑（第48図）

位置 78Q12グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.71m、短軸1.07m、深さ0.26mである。覆土の特徴 暗褐色土に茶褐色土が混入。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

172号土坑（第48・54図 PL.20・39）

位置 78S14・15グリッド 形状 方形 規模 長軸1.18m、短軸1.18m、深さ0.70mである。1～3層が皿状土坑、4層が円筒形土坑である。覆土の特徴 1～3層が暗褐色土、茶褐色土、4層がロームを含む茶褐色土である。出土遺物 覆土の中位と下位から加曾利E4式深鉢破片、打製石斧2点、石鏃1点、加工痕ある剥片1点が出土。所見 10号住居の周辺にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から加曾利E4式と判断した。

178号土坑（第48図）

位置 78T16、79A15・16グリッド、北東1.20mに181号土坑がある。形状 方形 規模 長軸1.01m、短軸1.00m、深さ0.24mである。覆土の特徴 暗黄褐色土には褐色土が斑状に混入。出土した遺物はない。所見 9号と10号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

179号土坑（第48・54図 PL.39）

位置 79A16グリッド、西側が調査区外、180号土坑とは60cmの距離にある。形状 推定円形 規模は長軸1.58m以上、短軸1.35m、深さ0.76mである。断面は袋状である。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土、黄褐色土で埋没。

出土遺物 覆土の中位～下位で黒浜式、諸磯b式、前期後葉の深鉢破片、削器1点、加工痕ある剥片1点、ほかにチャート、細粒輝石安山岩2点 所見 9号と10号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

180号土坑 (第48・54図 PL.20・39)

位置 79A16グリッド、179号土坑とは60cmの距離にある。形状 円形 規模 長軸1.30m、短軸1.25m、深さ0.29m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土に茶褐色土が混入。出土遺物 諸磯b式深鉢破片、黒色頁岩剥片6、黒色安山岩剥片5点 所見 9号と10号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、覆土の特徴から諸磯b式と判断した。

181号土坑 (第48・54図 PL.20・39・40)

位置 78T16グリッド 形状 円形 規模 長軸1.03m、短軸1.00m、深さ0.45mである。断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土にローム、褐色土が混入。出土遺物 ミニチュアを含む前期後葉深鉢破片、4は滑石製耳飾、5は石製品 所見 9号と10号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期後葉と判断した。

183号土坑 (第48・54図 PL.20・39)

位置 78ST16グリッド、同規模のものが2基、10号住居の北東隅に重複し、近くには181号、340号土坑がある。形状 円形 規模 長軸1.61m、短軸1.60m、深さ0.93mである。2基は同規模、底面の段差は40cm、断面はともに円筒形。覆土の特徴 茶褐色土、暗褐色土が互層に堆積。ロームの混入が多い。出土遺物 前期前葉、加曾利E3式深鉢破片、加工痕ある剥片1点 所見 時期は、出土した土器の特徴から中期と判断した。重複する中では、深い方が新しい。

187号土坑 (第48図 PL.20)

位置 78S15グリッド 形状 円形 規模 長軸1.34m、短軸1.26m、深さ0.56mである。断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没、ロームの混入が多い。出土遺物 黒色頁岩剥片2点 所見 10号住居の

周辺にある土坑群の一つである。時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

190号土坑 (第48・54図 PL.40)

位置 78ST17グリッド 形状 楕円形、底面が凸凹していて2基が重複か。規模 長軸1.64m、短軸1.26m、深さ0.39mである。断面は皿状。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。ロームの混入が多い。出土遺物 前期前葉深鉢破片 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

191号土坑 (第48・54図 PL.21・40)

位置 78T18グリッド 形状 円形 規模 長軸1.33m、短軸1.32m、深さ0.73mである。断面はわずかに袋状。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉と黒浜式の深鉢破片 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

201号土坑 (第49・55図 PL.40)

位置 88S1グリッド 形状 円形 規模 長軸0.81m、短軸0.80m、深さ0.51mである。覆土の特徴 黒褐色土に褐色土が斑状に混入。出土遺物 諸磯b式深鉢破片、加工痕ある剥片1点 所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から諸磯b式と判断した。

213号土坑 (第49図)

位置 78P10グリッド 形状 円形 規模 長軸0.92m、短軸0.75m、深さ0.22mである。覆土の特徴 暗褐色土、褐色土が斑状に混入。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

214号土坑 (第49・55図 PL.21・40)

位置 78Q10・11グリッド 形状 円形 規模 長軸1.24m、短軸1.21m、深さ0.65mである。断面はフラスコ状。覆土の特徴 茶褐色土、暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土遺物 関山I式と黒浜式深鉢破片、石鏃1点、ほかに黒色頁岩剥片6点、黒曜石1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から関山I式と判断した。

219号土坑（第49・55図 PL.40）

位置 78S20グリッド、222号土坑と1mの距離にある。
形状 円形 規模 長軸0.72m、短軸0.60m、深さ0.35mである。出土遺物 黒浜式深鉢破片 所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から黒浜式と判断した。

222号土坑（第49・55図 PL.40）

位置 78S20 グリッド、219号土坑から1mの距離にある。形状 円形 規模 長軸0.75m、短軸0.65m、深さ0.33mである。出土遺物 覆土の下位で黒浜式深鉢破片が出土。所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から黒浜式と判断した。

227号土坑（第49図）

位置 88S1グリッド 形状 不整形 規模 長軸0.92m、短軸0.89m、深さ0.30mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土に褐色土が混入。出土遺物 覆土の下位で加工痕ある剥片1点、ほかに珪質頁岩剥片1点 所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、遺物と覆土の特徴から前期と判断した。

230号土坑（第49図）

位置 88S1グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.50m、短軸0.97m、深さ0.25mである。覆土の特徴 暗褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、覆土の特徴から前期と判断した。

235号土坑（第49図）

位置 88R1グリッド 形状 不整形 規模 長軸1.31m、短軸1.13m、深さ0.24mである。覆土の特徴 暗褐色土に褐色土、ロームが混入。出土した遺物はない。所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

239号土坑（第49図）

位置 78QR20グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.19m、短軸0.79m、深さ0.20mである。覆土の特徴 暗褐

色土に暗黄褐色土が混入。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

243号土坑（第49・55図 PL.21・40）

位置 88Q1グリッド、300号土坑に隣接。形状 円形 規模 長軸1.39m、短軸1.11m、深さ0.84mである。断面はフラスコ状。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。ロームが多く混入。出土遺物 覆土中位の1層、2層の境界から関山I式、前期前葉、黒浜式深鉢破片、加工痕ある剥片2点、ほかに剥片が珪質頁岩1点、チャート2点、黒色頁岩14点 所見 8号住居の南東にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

255号土坑（第49・55図 PL.40）

位置 78P19グリッド、256号土坑とは50cmの距離である。形状 円形 規模 長軸1.13m、短軸1.11m、深さ0.49m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗黄褐色土、黄褐色土で埋没。ロームの混入が多い。出土遺物 加曾利E3式深鉢破片、打製石斧1点 所見 11号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から加曾利E3式と判断した。

256号土坑（第49・55図 PL.21・40）

位置 78OP19グリッド、255号土坑とは50cmの距離である。形状 円形 規模 長軸1.18m、短軸1.04m、深さ0.69m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土遺物 加曾利E3・E4式深鉢破片、短冊形打製石斧2点、黒色頁岩剥片4点、細粒輝石安山岩剥片1点 所見 11号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から中期と判断した。

259号土坑（第49・55・56図 PL.40）

位置 78O20グリッド、11号住居の北東8mにある。形状 円形 規模 長軸0.94m、短軸0.93m、深さ0.15mである。覆土の特徴 暗褐色土で埋没。出土遺物 覆土の中位から加曾利E3・E4式深鉢破片、黒色頁岩剥片2点、細粒輝石安山岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から中期と判断した。

273号土坑 (第49図)

位置 78P17グリッド、272号・313号土坑と重複。本坑が古い。形状 楕円形 規模 長軸2.20m、短軸0.75m、深さ0.29mである。覆土の特徴 黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 形状からして陥し穴の可能性がある。時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

313号土坑 (第49図)

位置 780P17グリッド 形状 円形、底面に段差があり2基の重複か。規模 長軸1.21m、短軸0.98m以上、深さ0.13mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

290号土坑 (第49・56図 PL.40)

位置 78LM15 グリッド 形状 円形 規模 長軸1.32m、短軸1.27m、深さ0.43mである。覆土の特徴 暗褐色土で埋没。出土遺物 加曾利E3・E4式深鉢破片、黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から加曾利E4式と判断した。

300号土坑 (第49図 PL.21)

位置 88Q1グリッド 形状 円形 規模 長軸1.05m、短軸0.90m、深さ0.23mである。覆土の特徴 暗黄褐色土で埋没。出土遺物 黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

301号土坑 (第49図)

位置 78Q17グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.09m、短軸0.79m、深さ0.44mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

302号土坑 (第50・56図 PL.21・40)

位置 88R3・4グリッド 形状 円形 規模 長軸0.80m、短軸0.77m、深さ0.56m、断面は袋状。出土遺物 黒浜式深鉢破片、磨石1点、黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、出土した遺物と調査中の覆土の特徴から黒浜式と判断した。

304号土坑 (第50図)

位置 88Q3グリッド 形状 円形 規模 長軸0.84m、短軸0.78m、深さ0.20mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

312号土坑 (第50・56図 PL.41)

位置 780P16・17グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.18m、短軸0.88m、深さ0.18mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 加曾利E3式深鉢破片、黒色安山岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から加曾利E3式と判断した。

316号土坑 (第50図)

位置 78M13グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.05m、短軸0.84m、深さ0.29mである。覆土の特徴 黄褐色土で埋没。ロームの混入が多い。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

317号土坑 (第50図)

位置 78L13グリッド 形状 円形 規模 長軸1.00m、短軸0.90m、深さ0.23mである。覆土の特徴 茶褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

322号土坑 (第50図)

位置 78N14グリッド 形状 円形 規模 長軸1.00m、短軸0.86m、深さ0.36mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

323号土坑 (第50図)

位置 78014グリッド 形状 円形 規模 長軸0.88m、短軸0.73m、深さ0.26mである。覆土の特徴 茶褐色土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 覆土の特徴から縄文時代と判断した。

324号土坑 (第50・56図 PL.41)

位置 78012・13グリッド 形状 円形 規模 長軸2.00m、短軸1.90m、深さ0.42mである。覆土の特徴 茶褐

色土、暗黄褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉の深鉢破片 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から関山I式と判断した。

325号土坑 (第50図 PL.21)

位置 78012グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.08m、短軸0.85m、深さ0.22mである。覆土の特徴 黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

326号土坑 (第50図)

位置 78P11グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.10m、短軸0.78m、深さ0.40mである。覆土の特徴 黄褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

327号土坑 (第50図)

位置 78011グリッド 形状 円形 規模 長軸1.08m、短軸0.95m、深さ0.26mである。覆土の特徴 黄褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

328号土坑 (第50図)

位置 78010・11グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.23m、短軸0.83m、深さ0.24mである。覆土の特徴 茶褐色土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

329号土坑 (第50・56図 PL.41)

位置 78010グリッド 形状 不整形 規模 長軸0.85m以上、短軸0.88m、深さ0.30mである。覆土の特徴 茶褐色土、黄褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉の深鉢破片、黒色頁岩剥片2点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

330号土坑 (第50図)

位置 78PQ15・16グリッド 形状 不整形 底面の近くだけが残り、凸凹が目立つ。規模 長軸1.95m、短軸1.60m、深さ0.24mである。覆土の特徴 茶褐色土、暗褐色

土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

334号土坑 (第50図 PL.21)

位置 78N9グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.36m、短軸0.86m、深さ0.48m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。褐色土が斑状に混入。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

335号土坑 (第51図)

位置 78PQ9グリッド 形状 円形 規模 長軸1.82m、短軸1.74m、深さ0.14mである。覆土の特徴 暗茶褐色土で埋没。褐色土が斑状に混入。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

336号土坑 (第50・56図 PL.41)

位置 780P18・19グリッド 形状 不整形、円形のもものが2基重複している可能性がある。規模 長軸1.03m、短軸0.93m、深さ0.52mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 覆土の上位で加曾利E3式深鉢破片、短冊形打製石斧1点、黒色頁岩剥片2点 所見 11号住居の周囲にある土坑群の一つである。時期は、出土した土器と覆土の特徴から加曾利E3式と判断した。

337号土坑 (第50・56図 PL.41)

位置 78R18・19グリッド 形状 円形 規模 長軸0.98m、短軸0.73m、深さ0.31mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 黒浜式深鉢破片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から黒浜式と判断した。

338号土坑 (第50・56図 PL.21・41)

位置 78QR18グリッド、4号住居の南西隅に重複。形状 円形 規模 長軸1.13m、短軸0.98m、深さ0.67m、断面は円筒形。覆土の特徴 黄褐色土で埋没。出土遺物 覆土上位で前期二ツ木式、中期加曾利E3式深鉢破片、黒色頁岩剥片10点、砂岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と特徴から中期と判断した。

340号土坑 (第51・57図 PL.22・41)

位置 78S15・16グリッド、10号住居の北東隅近くに重複、住居よりも新しい。形状 円形 規模 長軸1.32m、短軸1.27m、深さ0.30m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。褐色土が斑状に混入。出土遺物 覆土から諸磯b式深鉢破片、短冊形打製石斧1点
所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から諸磯b式と判断した。

341号土坑 (第51図)

位置 78I5グリッド 形状 推定楕円形 規模 長軸1.74m以上、短軸1.15m、深さ0.73mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土、茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

343号土坑 (第51図 PL.22)

位置 78K4グリッド 形状 楕円形 N20°E 規模 長軸3.05m、短軸1.10m、深さ0.96mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土、茶褐色土などで埋没。出土遺物 3層上位で前期の深鉢破片が出土。所見 陥し穴である。時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

344号土坑 (第51図)

位置 78J3グリッド 形状 円形 規模 長軸0.88m、短軸0.88m、深さ0.15mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

345号土坑 (第51図)

位置 78J3グリッド、346号土坑と重複。形状 円形 規模 長軸0.98m、短軸0.81m、深さ0.26mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

354号土坑 (第51図)

位置 78LM2グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.56m、短軸1.24m、深さ0.23mである。覆土の特徴 暗褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見

時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

368号土坑 (第51図)

位置 78Q15・16グリッド 形状 楕円形 N60°E 規模 長軸3.17m、短軸1.05m、深さ0.32mである。覆土の特徴 暗褐色土、茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 形状から陥し穴と考えられる。時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

374号土坑 (第51・57図 PL.41)

位置 78R17グリッド 形状 楕円形 規模 長軸1.17m、短軸0.80m、深さ0.13mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉の深鉢破片 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

375号土坑 (第51図)

位置 78R17グリッド 形状 円形 規模 長軸0.94m、短軸0.87m、深さ0.14mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から前期前葉と判断した。

519号土坑 (第51図)

位置 68A5・6グリッド 形状 円形 規模 長軸1.07m、短軸0.96m、深さ0.33mである。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

538号土坑 (第51・57図 PL.41)

位置 78K7グリッド、540号土坑と重複。形状 方形 規模 長軸0.95m以上、短軸1.18m、深さ0.18mである。覆土の特徴 暗黄褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 加曾利E4式深鉢破片、黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器の特徴から加曾利E4式と判断した。

540号土坑 (第51図)

位置 78K7・8グリッド、538号土坑と重複。形状 円形 規模 長軸1.52m、短軸1.49m、深さ0.23mである。覆土の特徴 暗黄褐色土、茶褐色土で埋没。出土遺物 珪質頁岩剥片1点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

542号土坑（第52・57図 PL.41）

位置 78L8グリッド、543号土坑と重複。形状 円形
規模 長軸1.45m、短軸1.40m、深さ0.25mである。覆土の特徴 黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土で埋没。出土遺物 関山I式と加曾利E4式深鉢破片 所見 時期は、出土した土器の特徴から中期と判断した。

543号土坑（第52・57図 PL.41）

位置 78L8グリッド、542号土坑と重複。形状 楕円形
規模 長軸1.16m、短軸0.78m、深さ0.26mである。覆土の特徴 黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土で埋没。出土遺物 関山I式深鉢破片、黒色頁岩剥片1点 所見 出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

550号土坑（第51図）

位置 78K8グリッド 形状 円形 規模 長軸0.67m、短軸0.66m、深さ0.20mである。覆土の特徴 茶褐色土、暗黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

557号土坑（第51・57図 PL.41）

位置 78JK7グリッド 形状 円形 規模 長軸1.30m、短軸1.21m、深さ0.20mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 加曾利E3式深鉢破片 所見 時期は、出土した土器の特徴から中期と判断した。

560号土坑（第52・57図 PL.41）

位置 78L8グリッド、561号土坑と重複。形状 楕円形
規模 長軸1.13m、短軸0.91m、深さ0.20mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 関山I式深鉢破片 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

561号土坑（第52・57図 PL.41）

位置 78L8グリッド、560号土坑と重複。形状 楕円形
規模 長軸0.65m、短軸0.45m、深さ0.14mである。覆土の特徴 茶褐色土で埋没。出土遺物 磨石の破片か1点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

625号土坑（第52図）

位置 68H12グリッド 形状 円形 規模 長軸1.22m、短軸1.20m、深さ0.30mである。覆土の特徴 ロームを含む暗褐色土で埋没。出土遺物 黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

626号土坑（第52図）

位置 68H12グリッド 形状 円形 規模 長軸1.34m、短軸1.20m、深さ0.40mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

649号土坑（第52図）

位置 68H16グリッド 形状 円形 規模 長軸1.82m、短軸1.61m、深さ0.31mである。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

660号土坑（第52・57図 PL.41）

位置 68L18グリッド 形状 円形 規模 長軸0.77m、短軸0.75m、深さ0.11mである。出土遺物 凹石1点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

668号土坑（第52図）

位置 68K16グリッド 形状 円形 規模 長軸1.15m、短軸1.12m、深さ0.26mである。出土遺物 黒色頁岩剥片2点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

669号土坑（第52図）

位置 79B17グリッド 形状 円形 規模 長軸1.53m、短軸1.40m、深さ0.13mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

670号土坑（第52・57図 PL.22・41）

位置 79A18グリッド 形状 円形 規模 長軸1.66m、短軸1.60m、深さ0.24mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土遺物 前期前葉の深鉢破片

所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

671号土坑 (第52図)

位置 88T2グリッド、8号住居の南壁中央部に重複、住居よりも新しい。形状 円形 規模 長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.69mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

673号土坑 (第52図)

位置 88T3グリッド 形状 円形 規模 長軸1.22m、短軸1.08m、深さ0.23mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土遺物 黒色頁岩剥片2点 所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

678号土坑 (第52・57図 PL.41)

位置 88R6グリッド 形状 円形 規模 長軸1.20m、短軸1.12m、深さ0.31mである。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。出土遺物 黒浜式、諸磯式深鉢破片、黒色頁岩剥片2点、珪質頁岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

682号土坑 (第52・57図 PL.22・41)

位置 79A18グリッド 形状 円形 規模 長軸1.38m、短軸1.14m、深さ0.52m、断面は円筒形。覆土の特徴 黒褐色土、暗褐色土で埋没。出土遺物 1層の中位から黒浜式深鉢破片、ホルンフェルス剥片1点 所見 出土した土器と覆土の特徴から黒浜式と判断した。

683号土坑 (第52図 PL.22)

位置 89B9グリッド、684号土坑と重複、本坑が新しい。形状 不整形 規模 長軸1.57m、短軸1.47m、深さ0.56mである。覆土の特徴 黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土で埋没。上層の黄褐色土は重複する別の遺構の覆土か。出土した遺物はない。所見 時期は、覆土の特徴から縄文時代と判断した。

684号土坑 (第52・57図 PL.22・41)

位置 89B9グリッド、683号土坑と重複、本坑が古い。

形状 楕円形 規模 長軸1.95m、短軸1.63m、深さ0.30mである。覆土の特徴 暗褐色土が底面を覆い、覆土の大半は黒褐色土である。出土遺物 ニツ木式深鉢破片 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

685号土坑 (第53・57・58図 PL.22・41)

位置 79A16 グリッド 形状 円形 規模 長軸1.72m、短軸1.46m、深さ0.68m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土、黄褐色土で埋没。ローム塊が多く、炭化物も混入。出土遺物 4層下位で諸磯b式、浮島式深鉢破片、凹石1点、黒色頁岩剥片2点、黒色安山岩剥片2点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期と判断した。

686号土坑 (第53・58図 PL.42)

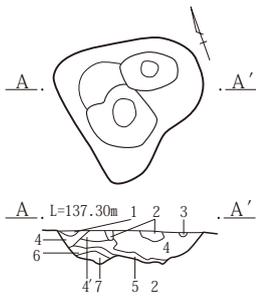
位置 88ST2グリッド、8号住居内に重複、住居よりも新しい。形状 円形 規模 長軸1.32m、短軸1.23m、深さ0.76m、断面は袋状。覆土の特徴 暗褐色土と黄褐色土の斑混土で埋没。出土遺物 ニツ木式、黒浜式深鉢破片、短冊形打製石斧2点、石鏃1点、石錐か1点、珪質頁岩剥片2点、黒色頁岩剥片1点 所見 時期は、出土した土器と覆土の特徴から前期前葉と判断した。

687号土坑 (第53・58図 PL.42)

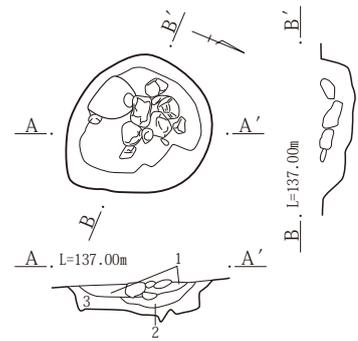
位置 88ST2グリッド、8号住居内に重複、住居よりも新しい。形状 円形 規模 長軸1.30m、短軸1.16m、深さ0.96m、断面は円筒形。覆土の特徴 暗褐色土と黄褐色土の斑混土で埋没。出土遺物 覆土から剥片が黒色頁岩7点、珪質頁岩3点、黒色安山岩1点、チャート1点 所見 時期は、覆土の特徴から前期と判断した。

688号土坑 (第53・58・59図 PL.14・42)

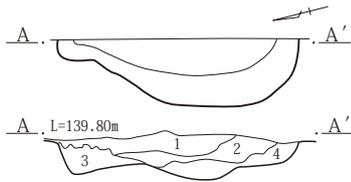
位置 88T2、89A2グリッド、8号住居に隣接、壁際から20cmの所にある。形状 推定円形、南側がトレンチで削平され推定。規模 長軸0.20m、短軸0.20m、深さ0.14mである。覆土の特徴 暗褐色土で埋没。出土遺物 環状石製品、石核、磨石各1点、黒色頁岩剥片2点 所見 時期は、出土した遺物から前期と判断した。小規模でピットとした方がよい。遺物は配置したものとみられる。



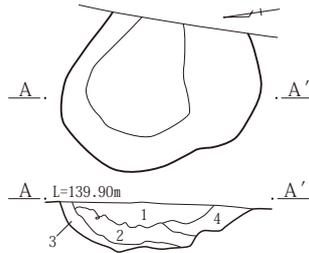
- 1 a号土坑
 1 褐色土 赤褐色土塊(径2~3cm)混入・粘性中
 2 暗褐色土 黒褐色土塊(径2~3cm)混入・粘性中
 3 暗褐色土 4の中に灰のような物混入・粘性中
 4 灰黄褐色土 1に囲まれ被熱したような灰黄褐色土塊(径2~3cm)多混・粘性中
 4' 灰黄褐色土 4より灰黄褐色土塊(径2~3cm)が集中・粘性中
 5 灰黄褐色土 6の赤褐色土塊(径2~3cm)多混・粘性弱
 6 赤褐色土 被熱により全体が赤化・密・粘性なし
 7 褐色土 被熱部を掘りすぎ(地山)



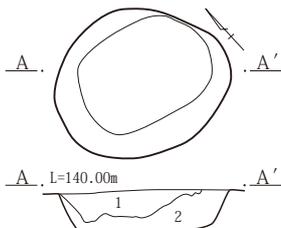
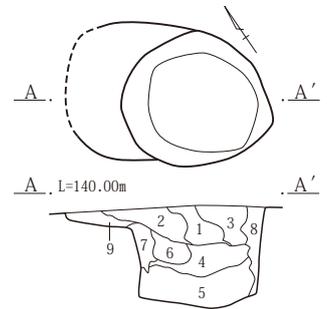
- 34号土坑
 1 暗褐色土 しまり弱・粘性弱
 2 暗褐色土 褐色土塊(径3~4cm)多混・しまり弱・粘性中
 3 にぶい黄褐色土 褐色土塊(径3~4cm)多混・粘性中



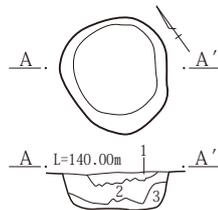
- 56号土坑
 1 茶褐色土 褐色土塊斑混
 2 暗褐色土 褐色土塊少混
 3 暗褐色土 ローム塊混入
 4 暗黄褐色土 ローム塊多混



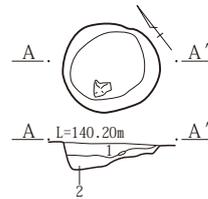
- 61号土坑
 1 暗褐色土 褐色土塊少混
 2 暗褐色土 褐色土塊混入
 3 暗褐色土 ローム塊混入
 4 茶褐色土 褐色土塊多混



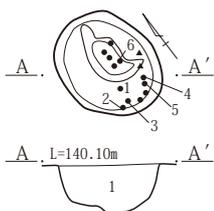
- 64号土坑
 1 暗褐色土 褐色土塊・焼土塊・焼土粒・炭化物混入
 2 茶褐色土 褐色土塊・暗褐色土塊混入



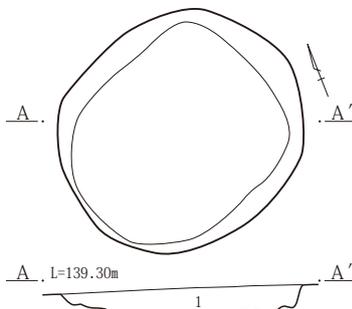
- 65号土坑
 1 暗褐色土 褐色土塊混入
 2 暗褐色土 褐色土塊混入・ローム粒少混
 3 茶褐色土 ローム塊混入



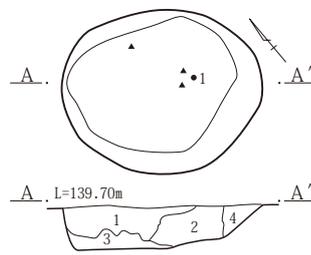
- 73号土坑
 1 暗褐色土 褐色土塊多混・ローム粒少混
 2 茶褐色土 ローム塊少混



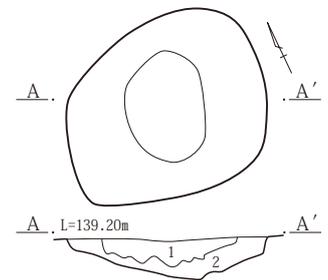
- 74号土坑
 1 暗褐色土 ローム塊混入



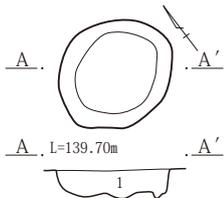
- 109号土坑
 1 暗褐色土 褐色土塊多混・ローム粒少混



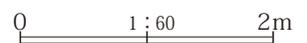
- 99号土坑
 1 暗褐色土 褐色土塊混入・焼土粒微混
 2 暗褐色土 褐色土塊多混
 3 茶褐色土 褐色土塊・ローム粒混入
 4 茶褐色土 褐色土塊混入



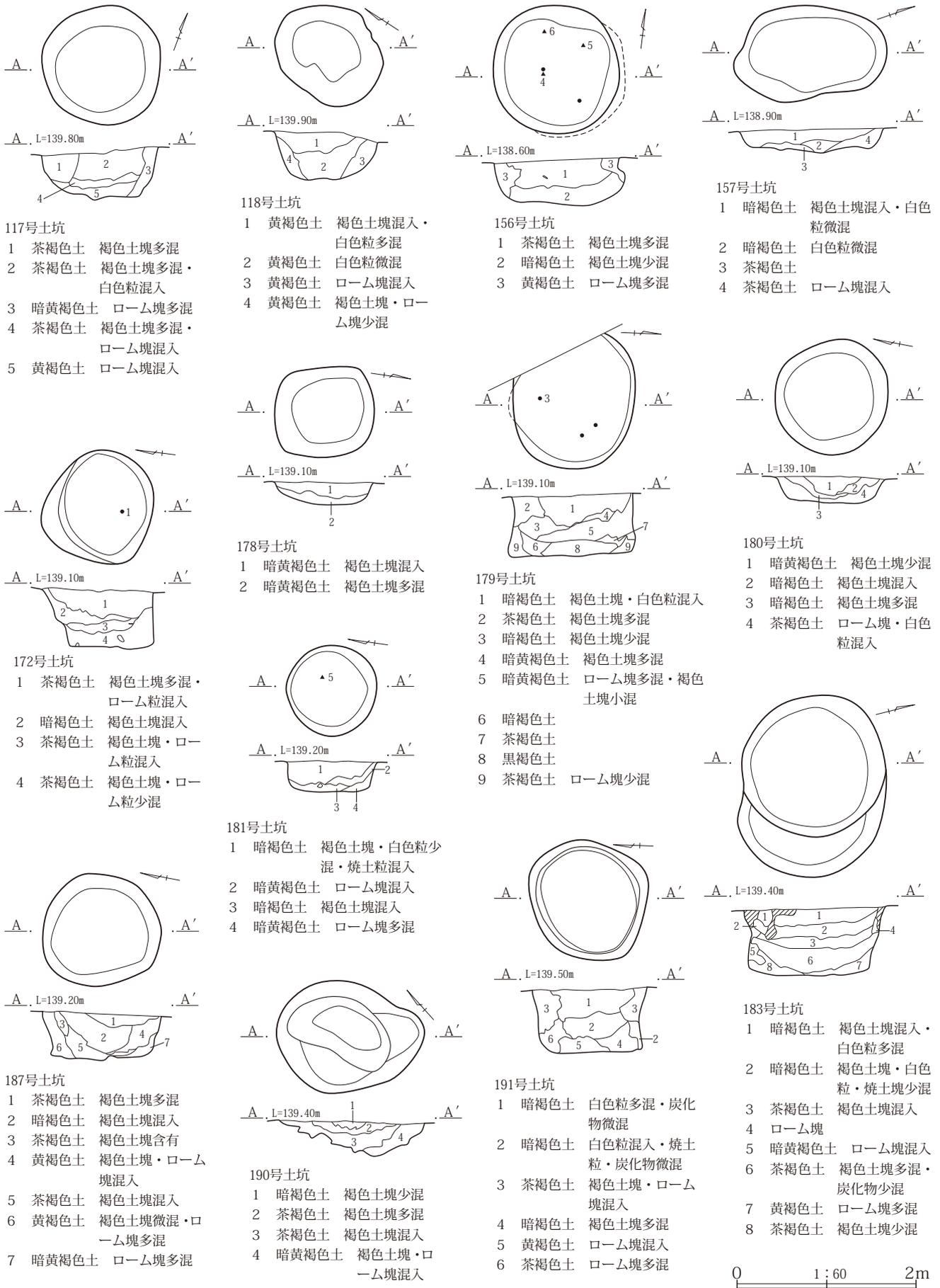
- 110号土坑
 1 暗褐色土 炭化物多混
 2 茶褐色土 ローム塊・炭化物混入



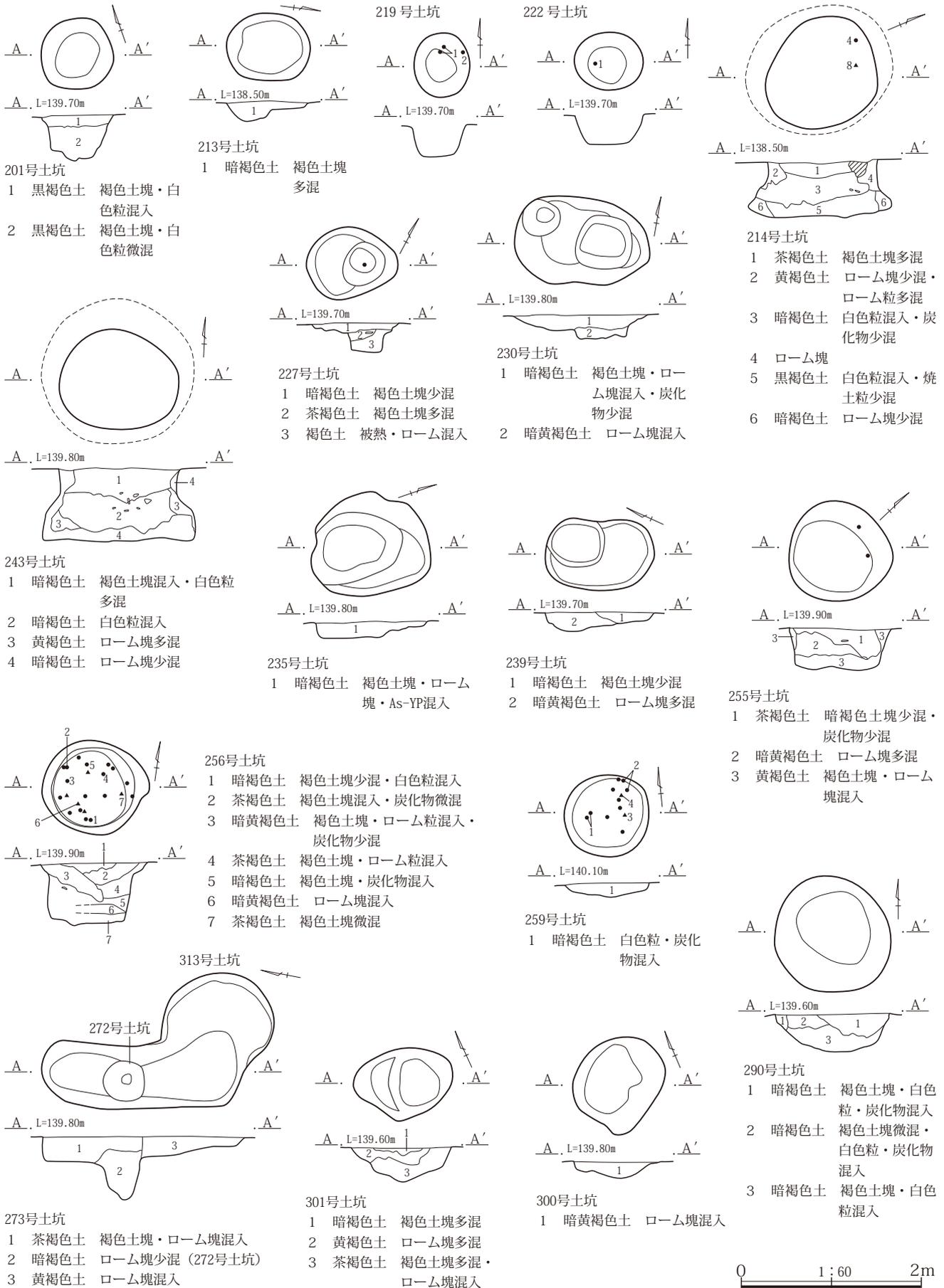
- 100号土坑
 1 茶褐色土 褐色土塊斑混



第47図 1a・34・56・61・63・64・65・73・74・99・100・109・110号土坑遺構図



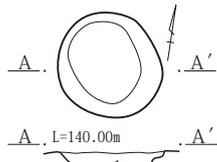
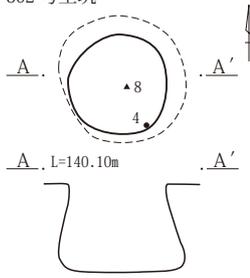
第48図 117・118・156・157・172・178～181・183・187・190・191号土坑遺構図



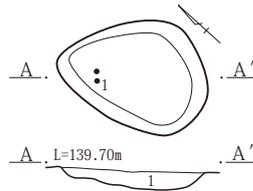
第 49 図 201・213・214・219・222・227・230・235・239・243・255・256・259・273・313・290・300・301 号土坑遺構図

第5章 上泉新田塚遺跡群の調査

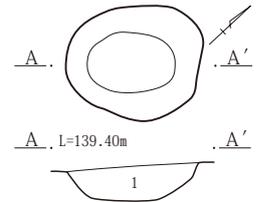
302号土坑



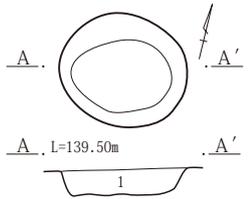
304号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊多混・白色粒混入



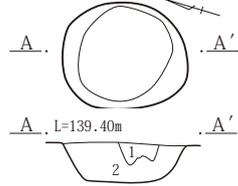
312号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊・ローム塊・白色粒混入・炭化物微混



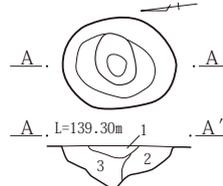
316号土坑
1 黄褐色土 ローム塊多混



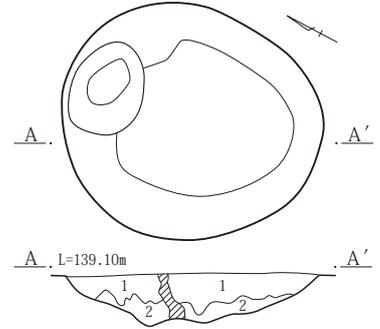
317号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊・ローム塊多混
2 暗黄褐色土 ローム塊多混



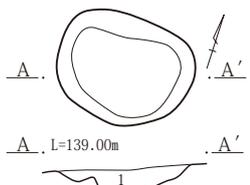
322号土坑
1 暗褐色土 白色粒少混
2 茶褐色土 褐色土塊・ローム塊多混・白色粒少混



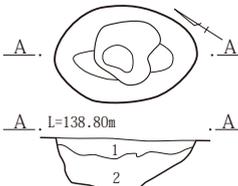
323号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊少混
2 黄褐色土 ローム塊多混
3 黄褐色土 褐色土塊・ローム塊混入



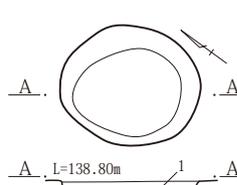
324号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊多混・ローム塊混入
2 暗黄褐色土 ローム塊多混



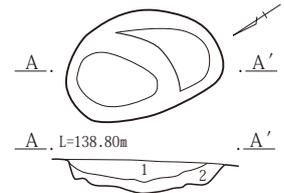
325号土坑
1 黄褐色土 褐色土塊・ローム多混



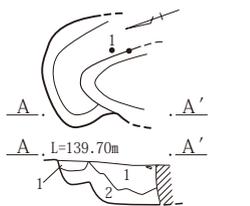
326号土坑
1 黄褐色土 褐色土塊・ローム塊混入・白色粒少混
2 暗黄褐色土 ローム塊多混



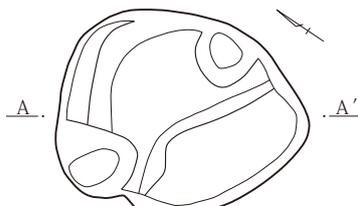
327号土坑
1 黄褐色土 白色粒微混
2 暗黄褐色土 ローム塊多混



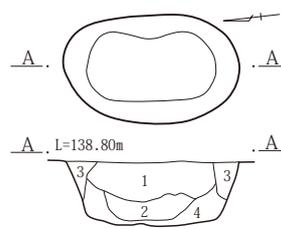
328号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊多混
2 黄褐色土 褐色土塊・ローム塊混入



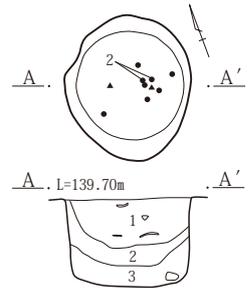
329号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊多混・暗褐色土塊混入
2 黄褐色土 褐色土塊多混・ローム塊・白色粒少



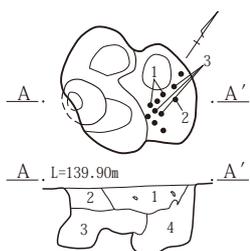
330号土坑
1 暗褐色土 褐色土粒・ローム塊・ローム粒混入
2 茶褐色土 褐色土細粒多混



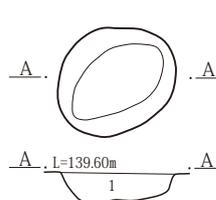
334号土坑
1 暗褐色土 褐色土塊・白色粒混入
2 暗褐色土 褐色土塊少混
3 黄褐色土 褐色土塊・ローム塊斑混
4 暗褐色土 褐色土塊斑状多混



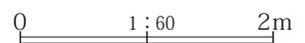
338号土坑
1 黄褐色土 ローム塊微混・白色粒多混
2 黄褐色土 ローム塊少混
3 黄褐色土 暗褐色土塊混入



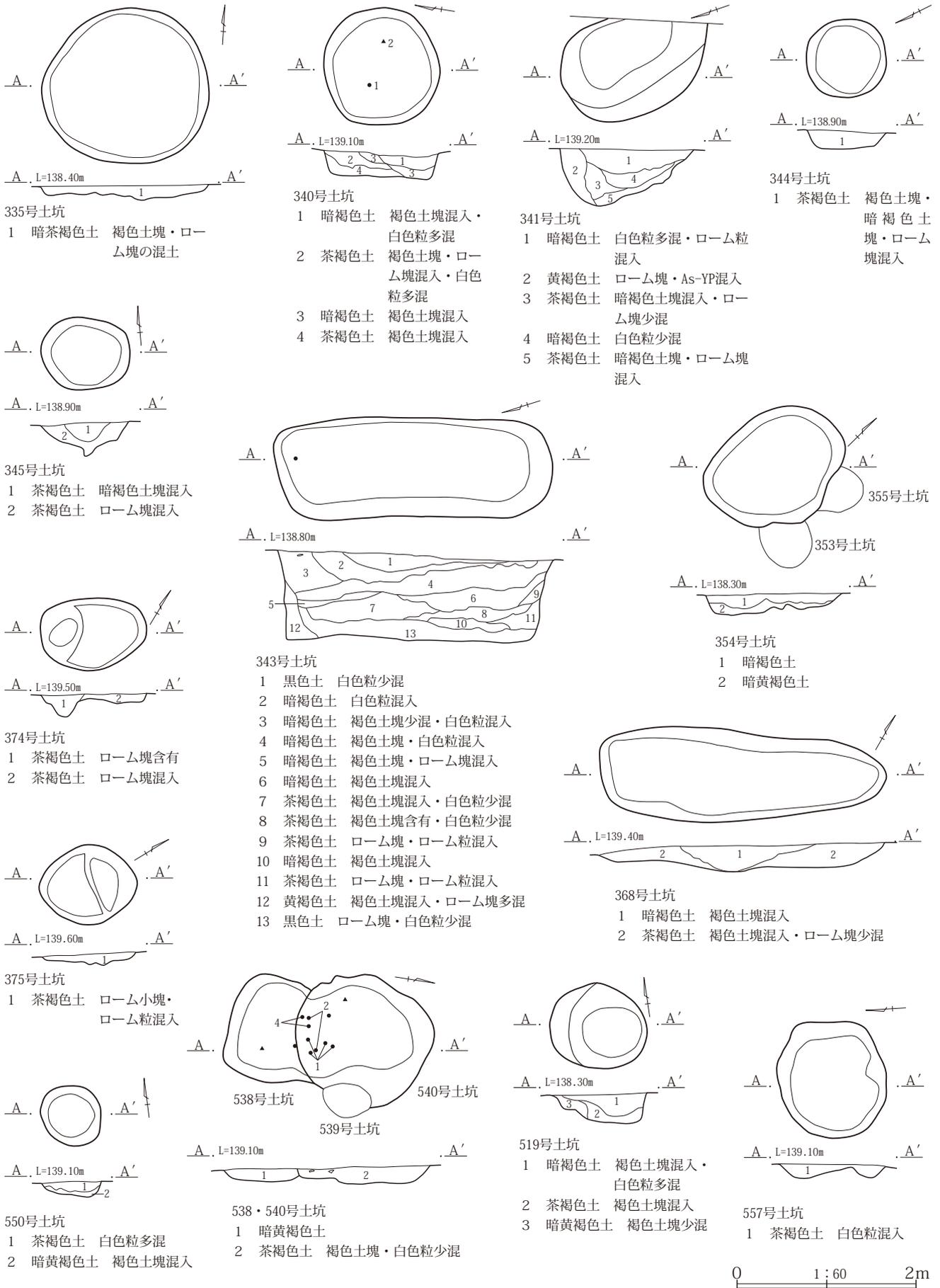
336号土坑
1 暗褐色土 白色粒・炭化物混入
2 茶褐色土 白色粒少混
3 茶褐色土 褐色土塊混入
4 黄褐色土 褐色土塊・ローム小塊多混



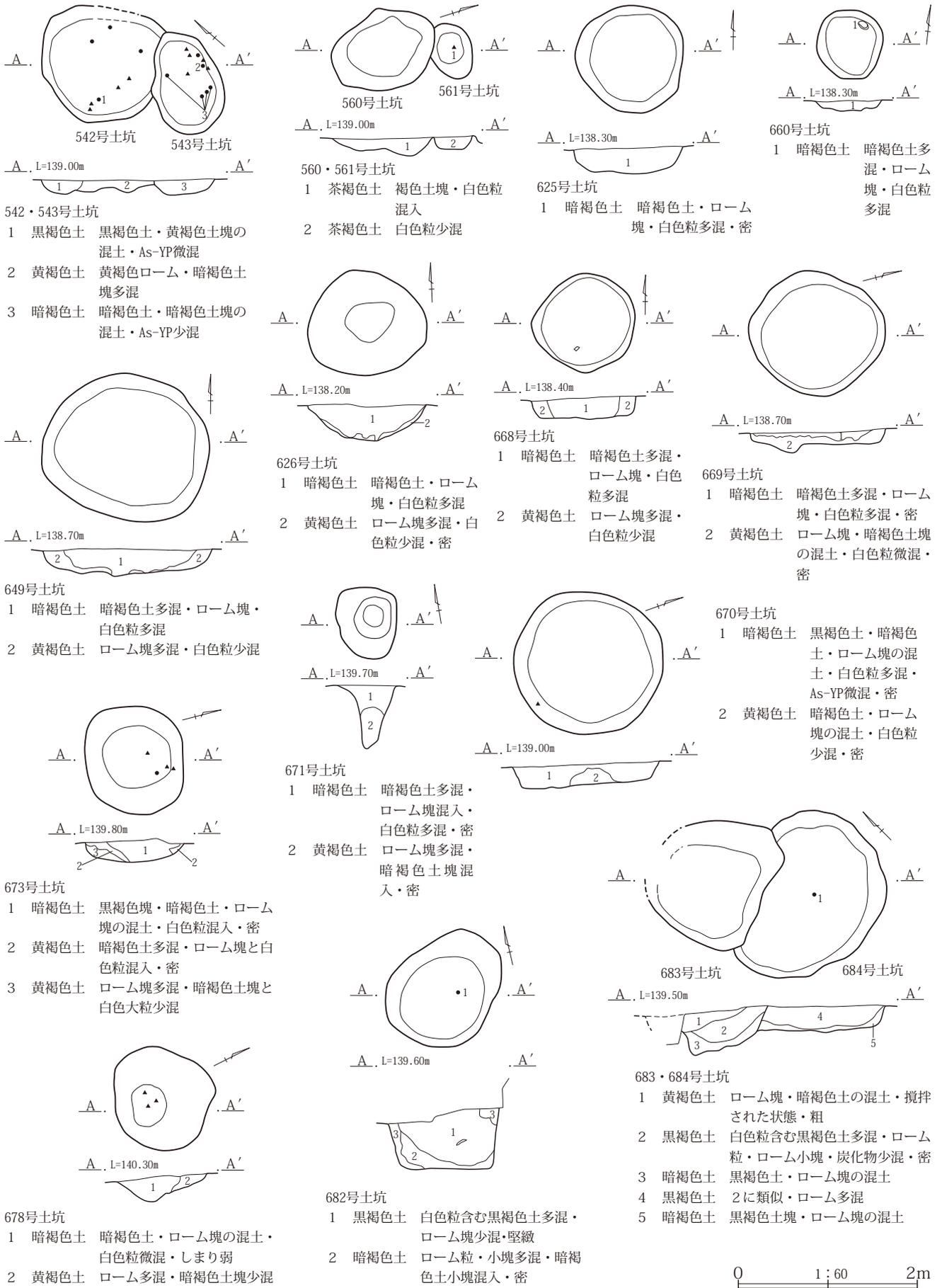
337号土坑
1 茶褐色土 褐色土塊混入



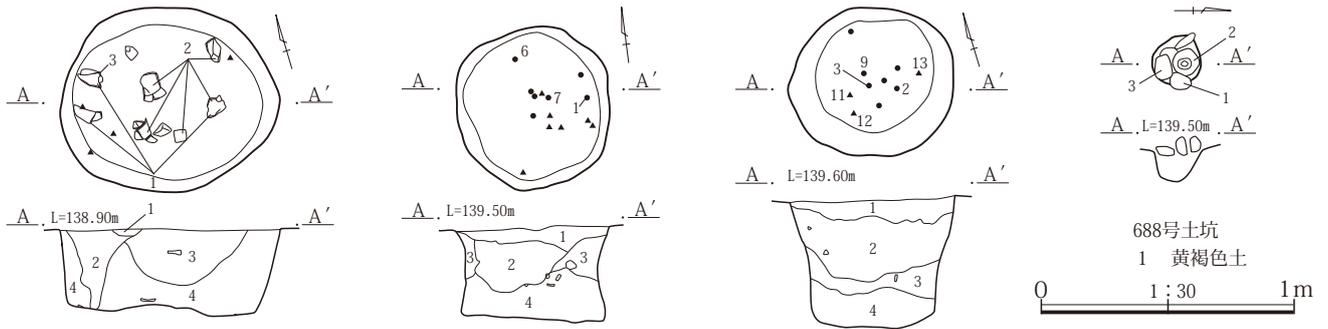
第50図 302・304・312・316・317・322～330・334・336・337・338号土坑遺構図



第51図 335・340・341・343・344・345・354・368・374・375・519・538・540・550・557号土坑遺構図



第52図 542・543・560・561・625・626・649・660・668～671・673・678・682・683・684号土坑遺構図



685号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒・炭化物多混・し
まり弱
- 2 暗褐色土 ローム塊・暗褐色土の混
土・白色粒多混・密
- 3 暗褐色土 ローム塊・暗褐色土の混
土・白色軽石・炭化物多混
- 4 黄褐色土 ローム多混・暗褐色土塊混
入・白色軽石小混

686号土坑

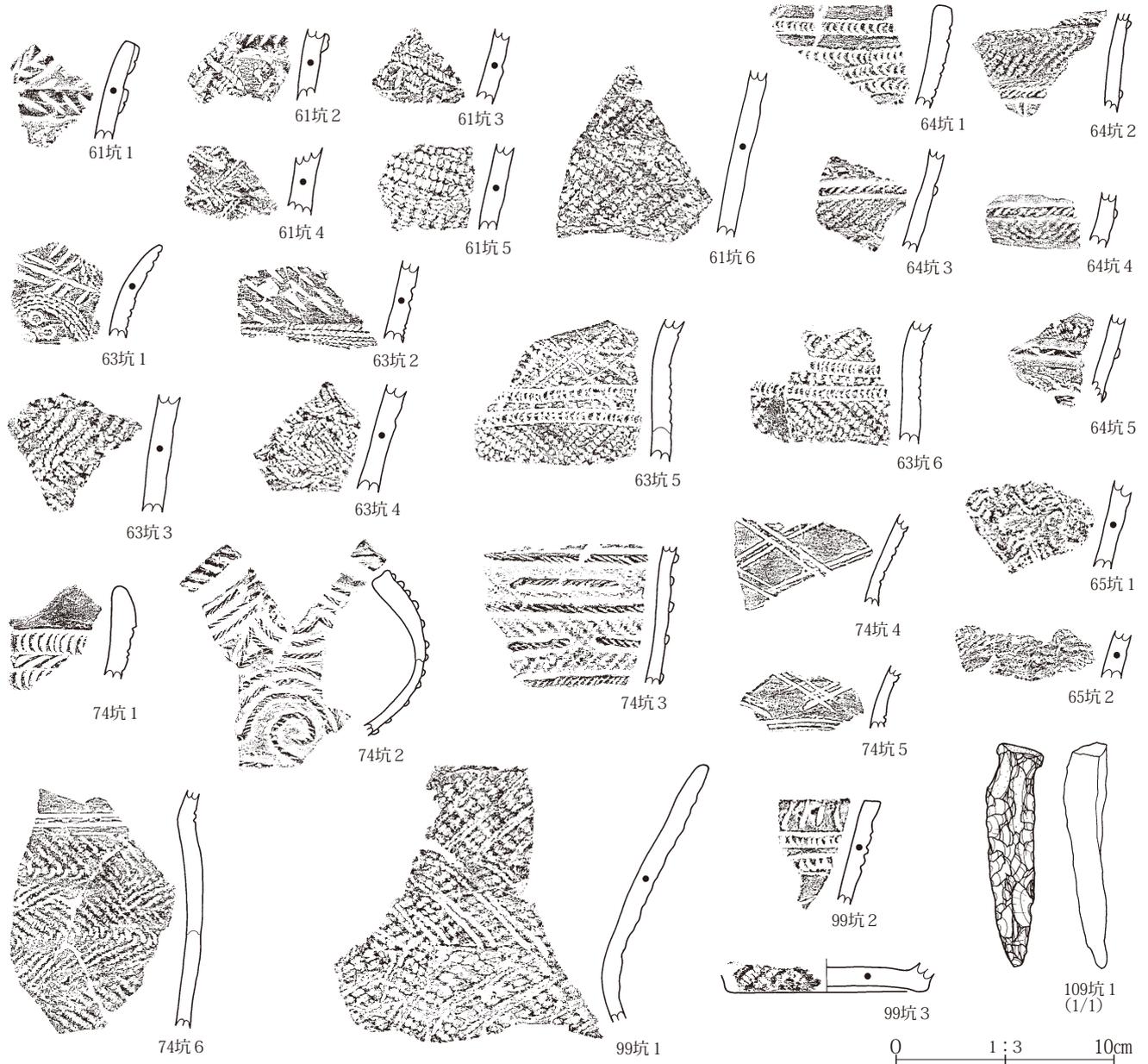
- 1 黒褐色土 ローム小塊少混・
堅緻
- 2 暗褐色土 ローム塊の混土・
堅緻
- 3 暗褐色土 ローム塊多混の混
土
- 4 暗褐色土 ローム塊多混・堅
緻

687号土坑

- 1 黒褐色土 ローム塊少
混・堅緻
- 2 暗褐色土 ローム塊の
混土
- 3 にぶい黄褐色土
- 4 暗褐色土 ローム塊多
混・堅緻

688号土坑

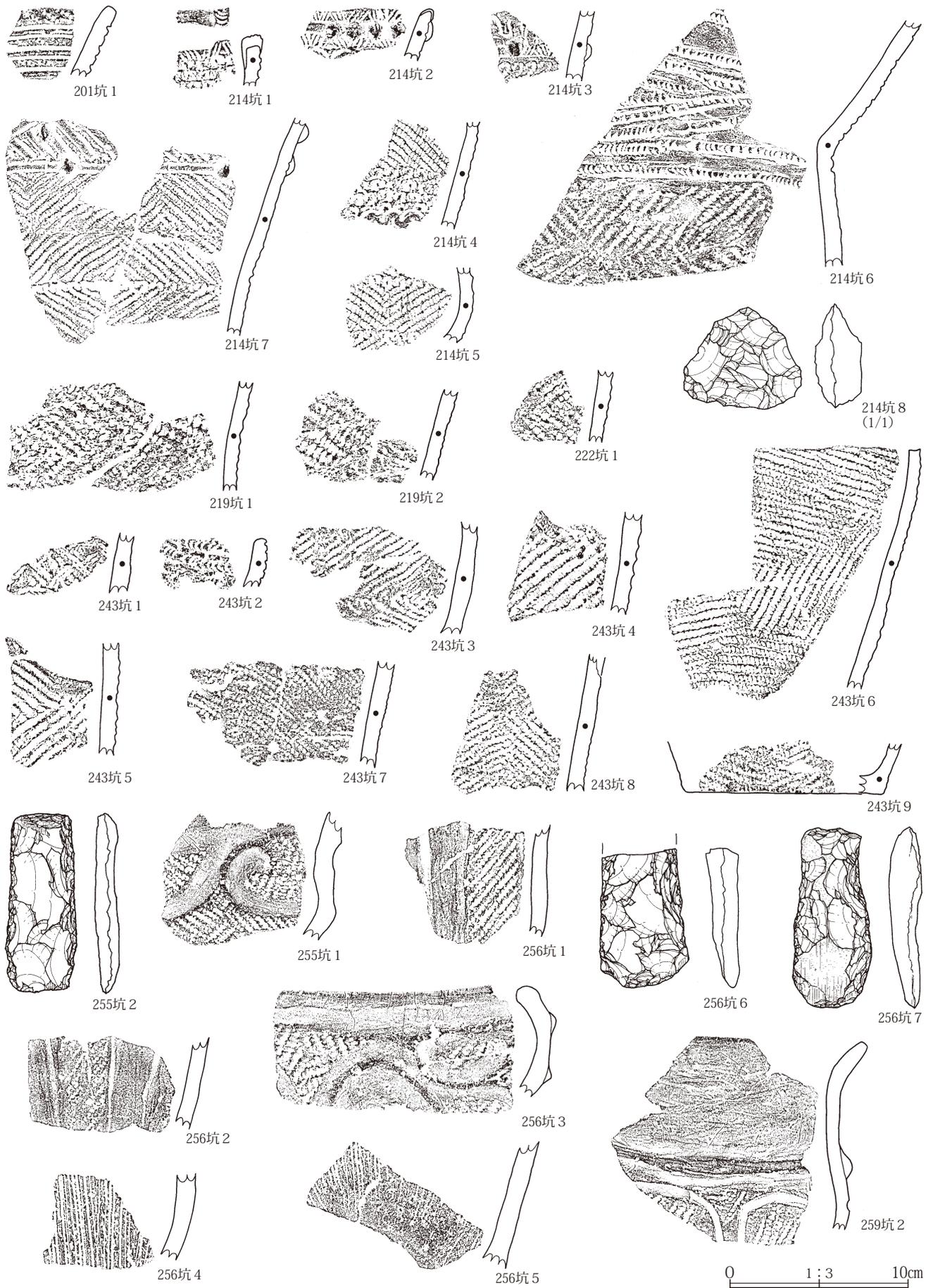
- 1 黄褐色土



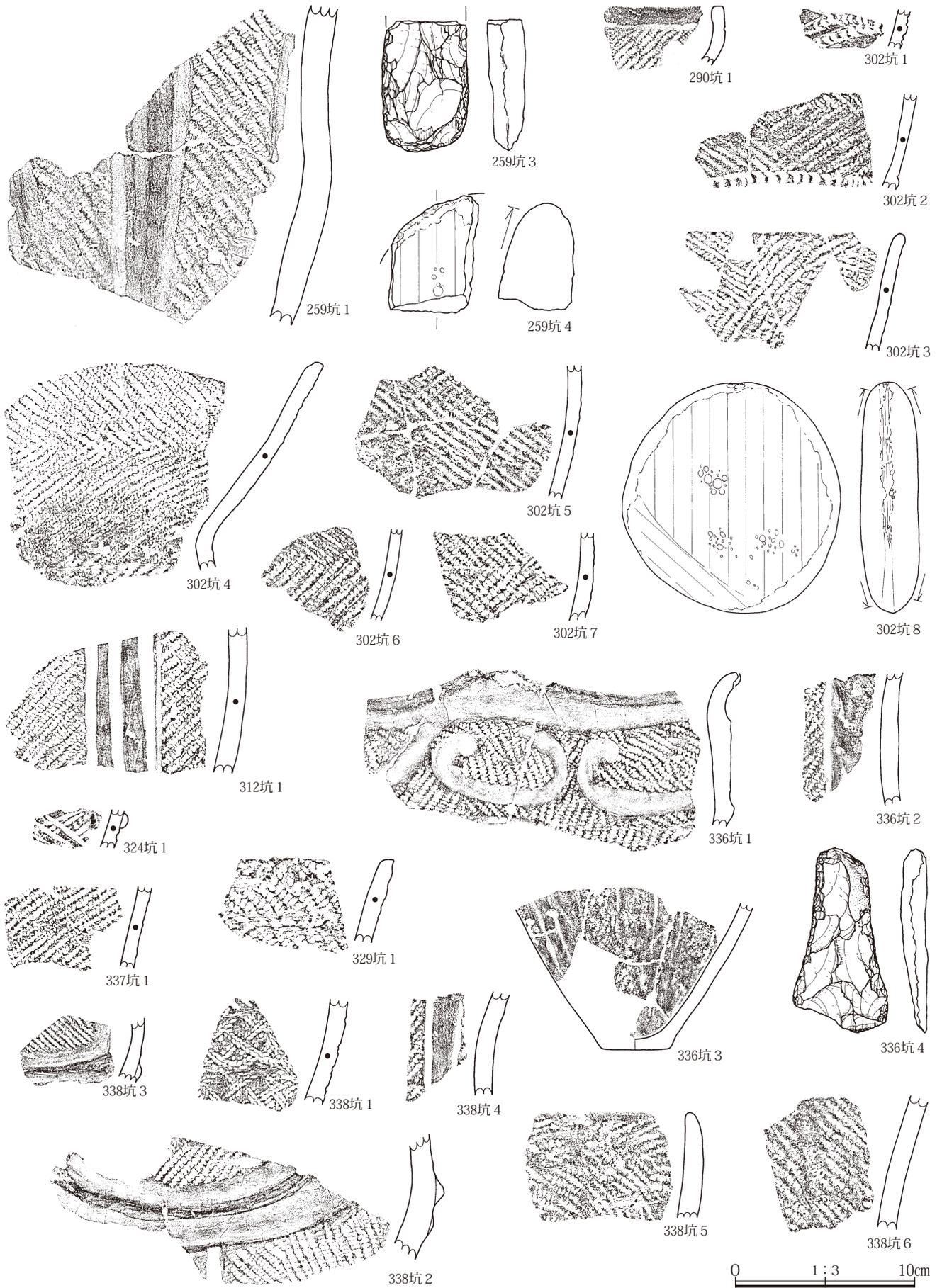
第53図 685～688号土坑遺構図、61・63・64・65・74・99・109号土坑遺物図



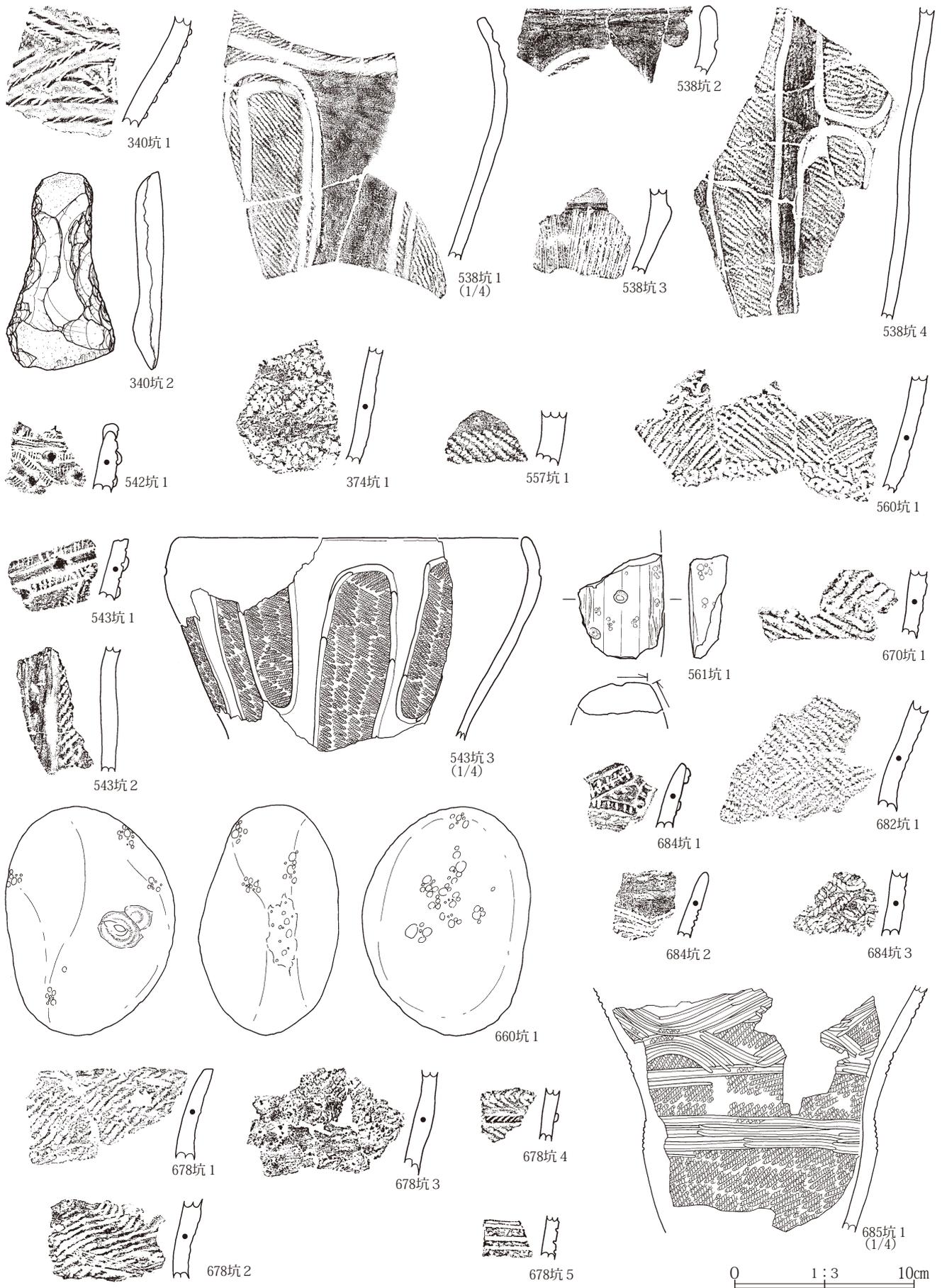
第54図 117・118・156・172・179・180・181・183・190・191号土坑遺物図



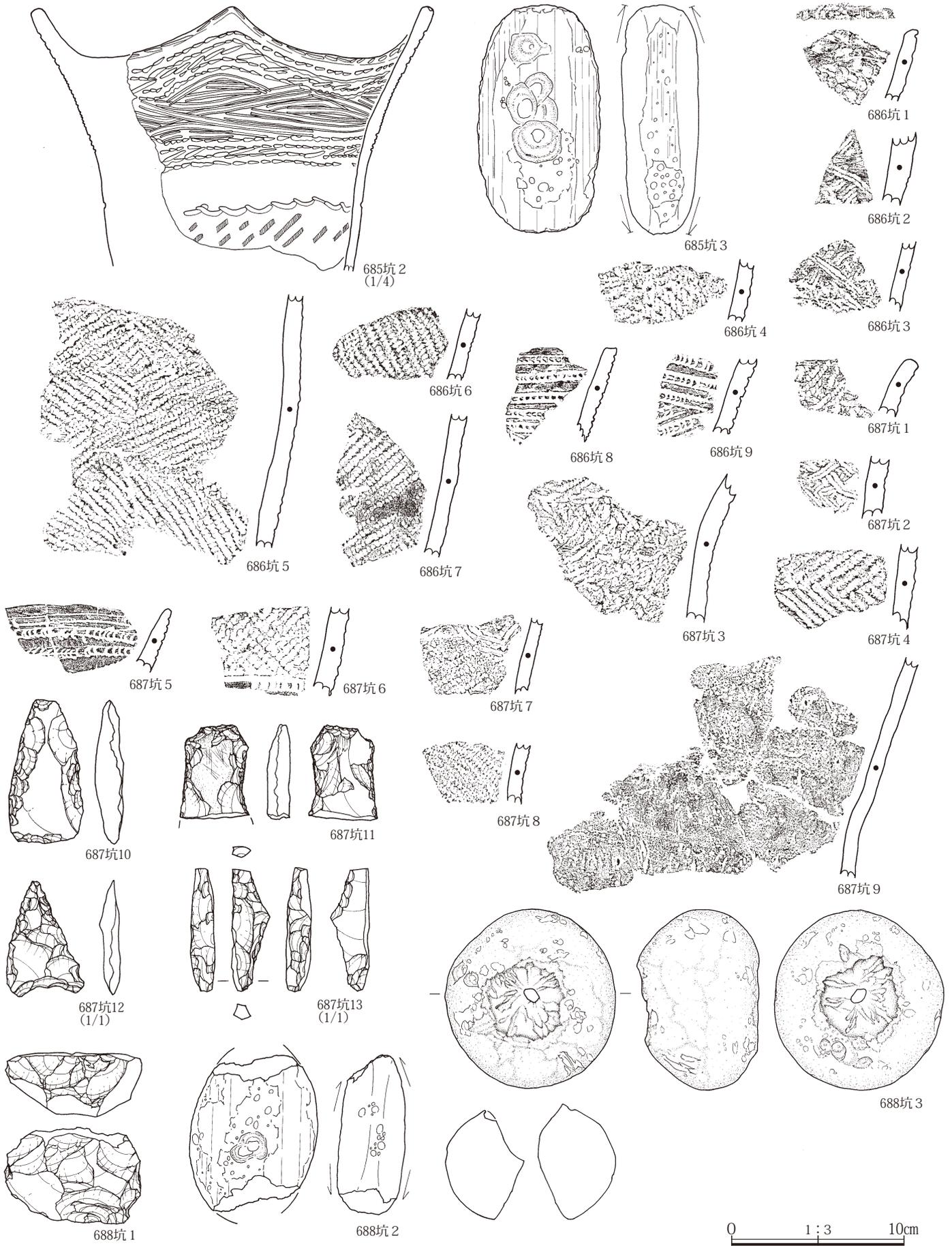
第 55 图 201・214・219・222・243・255・256・259 号土坑遺物图



第56図 259・290・302・312・324・329・336・337・338号土坑遺物図



第57图 340・374・538・542・543・557・560・561・660・670・678・682・684・685号土坑遺物图



第58图 685・686・687・688号土坑遺物図

所見 土坑および出土遺物の帰属時期については、伴出土器がなく確定できないが、8号住居（前期二ツ木式期）検出過程で確認されたこと、これに土坑覆土が類似すること、土坑が前期土器片類の分布域に重なり、中期土器片の分布とは離れていること、8号住居は黒浜式期土坑と重複関係にあることから、前期二ツ木式期から黒浜式期に帰属するものと判断した。土坑出土石器3点は配置されたように出土しているが、配置意図については不明である。有孔石製品(第58図688坑3)については概要を観察表に記したが、ここではその穿孔法について説明、その帰属時期と機能的役割について述べていきたい。

この石製品の孔が回転穿孔でないことは、孔の平面形が略方形であることから明らかである。数ミリの太い線条痕が縦位に並び内面が多面構成されることから、棒状礫で両側から敲打・穿孔させ、ノミ状の工具で最終的に整形したものと考えている。ノミ状の工具は棒状礫の先端を一撃して得た平縁をなすものか、それに似た先端を有する大型剥片が使われたものと見られる。縦位線条痕はミリ単位で細かく生じた部分と、数ミリ単位で広く深く生じた部分があり、状況により工具のエッジを微妙に変えていたことが分かる。整形前の作業として礫面敲打があるはずであるが、軟質であるため短時間で凹み部が形成されたのではないかと考えている。裏面側・孔周辺は、部分的に剥片類で平坦に整形され、背面側の孔周辺は摩耗しているようで、背面側礫面も面取り整形されており、完成状態に思える。穿孔部「孔」の最少径は1cmに満たず、不整形である。

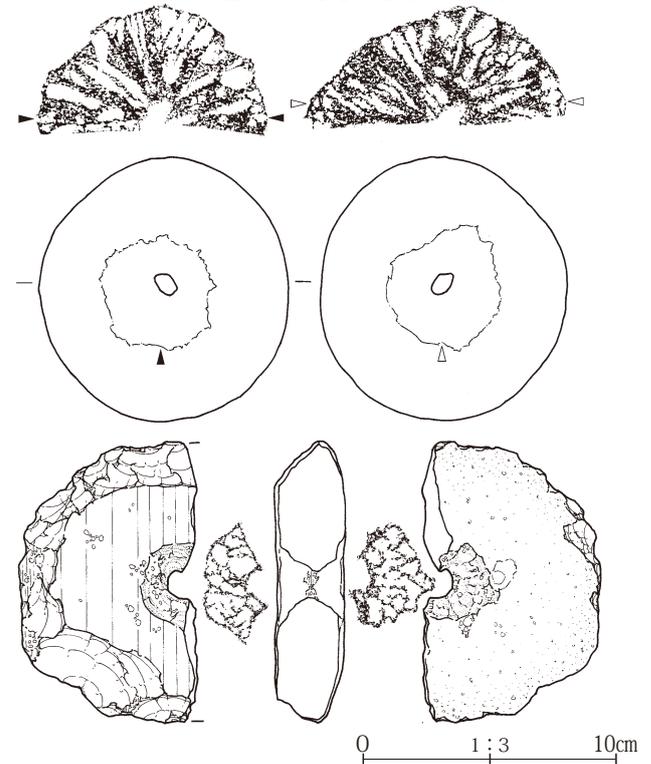
このような整形を可能としたのは、軟質石材（多孔質の粗粒輝石安山岩）であるためである。粗粒輝石安山岩は、赤城山麓を流れる利根川や渡良瀬川などに豊富で、磨石類・石皿・敲石その他の礫石器の素材となるものであるが、軟質なものは意外に少なく、意図的・選択的に採取されたということになる。上述した特殊な整形は多孔質の軟質石材を用いることで実現したものであり、通常は敲打して両側穿孔、その内面を最終的に回転整形したのであろう。

この種の石器については類例が少なく、特殊な存在である。群馬県内では、前橋市萱野Ⅱ遺跡（群埋文第407集2007）と吉井町東吹上遺跡（群馬県立博物館研究紀要第8集1973）に類例があり、第59図に萱野Ⅱ遺跡例（再実測）を示した。石材は、磨石・敲石類と同じ粗粒輝石安山岩製で、重量感がある。萱野例は前期黒浜式期（新）の住居の出土であり、河床礫から厚さ3cm弱の大型石片を得て、その剥離面を平坦に研磨、周辺を礫面側から粗く打ち欠き、円盤状に形状を整えたものである。破損品であり、長軸13cm・短軸11cmがその復元長である。孔は両側穿孔によるが、敲打によることが明らかである。孔の最少径は不整形（長軸1.3cm・短軸0.9cm）で、

新田塚例（688坑3）に似る。周辺加工により、石器の概形が作出されているが、加工部の稜は磨滅しているように見える。東吹上例は長軸9.6cm・短軸7.8cm・厚さ3.1cmの扁平礫を用い、最小径1.8cmを測る孔を穿つ。孔の断面は直線的だが、左辺側に両側穿孔の痕跡が残る。表採品で時期不詳だが、縄文前期・中期、弥生前期の土器片が包含層から出土している。

新田塚の石製品は状況的に縄文前期とされたもので、東吹上例も表採例であり、いずれもその帰属時期は断定できないが、萱野Ⅱの石製品は前期黒浜式期（新）の住居から出土しており、孔が敲打による両側穿孔である点で新田塚の石製品に似る。また、新田塚遺跡では、前期前葉の住居から石製品(第30図29)が出土、破損品だが東吹上例の帰属時期を暗示するかのようである。

この種の石製品は類例が少ない。集落毎にあるようなものというより、特殊な存在である。河床礫に「孔を穿つ」という行為から、機能的には棒状具を挿入して使用したものであることとなるであろうが、新田塚や萱野Ⅱの石製品が完成状態にあるとすれば、両者とも孔が細く不定形であり、強度的に棒状具を挿し込む使用法の想定は難しい。環状石錘とされるものは、漁労具としての使用が海浜部で想定されているが、これも量的に見て内陸部では考え難い。生産具以外の別用途を検討すべきかもしれない。環石を含む環状石斧は、当初弥生期の石器とされ、その後それが縄文期に起源することが指摘されたものであるが、周縁加工する萱野Ⅱ例もレンズ状の断面を作出しようとするものではなく、上記3遺跡の石製品は環石の一つとして理解すべきものと考えている。



第59図 688号土坑3 有孔石製品遺物図

集石

概要 調査区の中央、縄文時代の土坑が集中する一角で、隣接して2基を検出した。石はともに30点余りが点在する程度で、土坑の中に集めたという状態ではない。土坑とは重複するか、接近した位置関係にある。

1号集石 (第60図)

位置 78L8グリッド、縄文時代の土坑が集中する一角で、2号集石とは2mの距離にある。

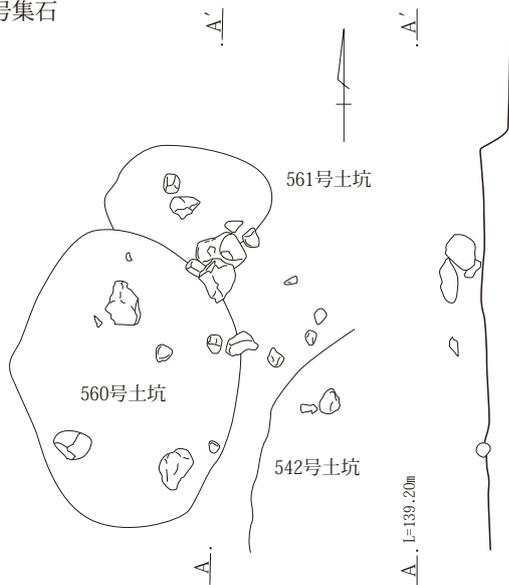
規模 長軸1.25m、短軸1.10mの範囲に、おもに粗粒輝石安山岩の破碎礫が標高138.95～139.05mと10cmのレベル差に分布している。点在する程度で、掘り込みがあったかどうかは不明である。石の大きさは最大が20cmで、以下15cm前後のものが半数、ほかは拳大程度である。大ぶりの石が目立ち、北寄りでは3個が重なる。遺物 関山1式深鉢破片、粗粒輝石安山岩剥片の剥片が1点出土、

いずれも非掲載である。重複 542号・560号・561号土坑の上面にある。備考 時期は、重複する遺構との関係からみて前期である。

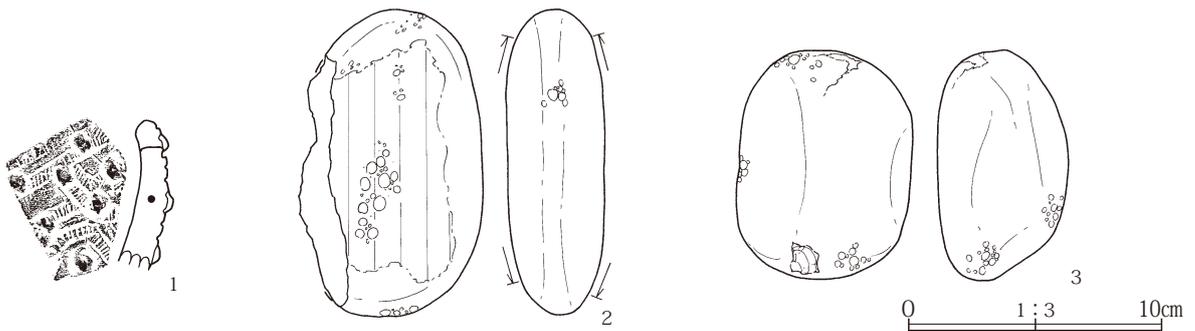
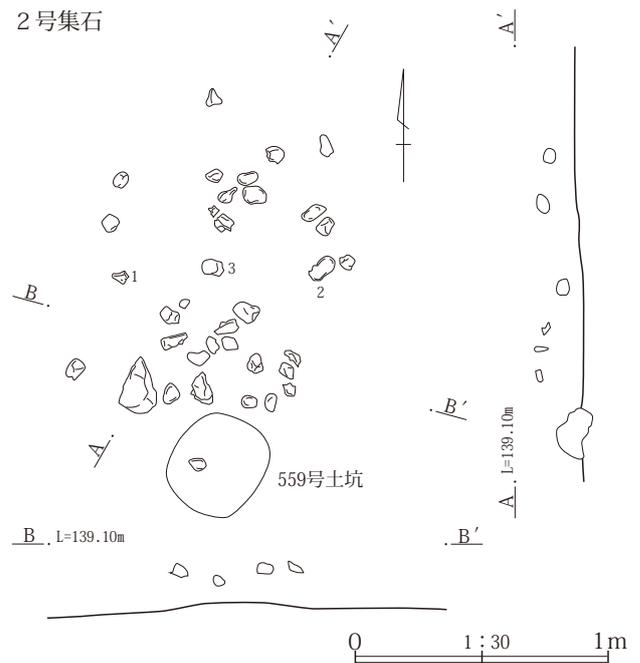
2号集石 (第60図 PL.42)

位置 78L7グリッド、縄文時代の土坑が集中する一角で、1号集石とは2mの距離にある。規模 長軸1.50m、短軸1.10mの範囲に、おもに粗粒輝石安山岩の円礫が標高138.80～139.00mに分布している。点在する程度で、掘り込みがあったかどうかは不明である。石は、20cm大の1点を除けば、ほかは10cm以下で粒の大きさが揃っている。遺物 集石の中に凹石と磨石の破損品各1点がある。転用されたものと思われる。ほかに非掲載の黒浜式深鉢破片がある。重複 南端に559号土坑がある。検出状況としては、集石の方が新しい。備考 時期は、出土した遺物や重複する遺構との関係からみて前期である。

1号集石



2号集石



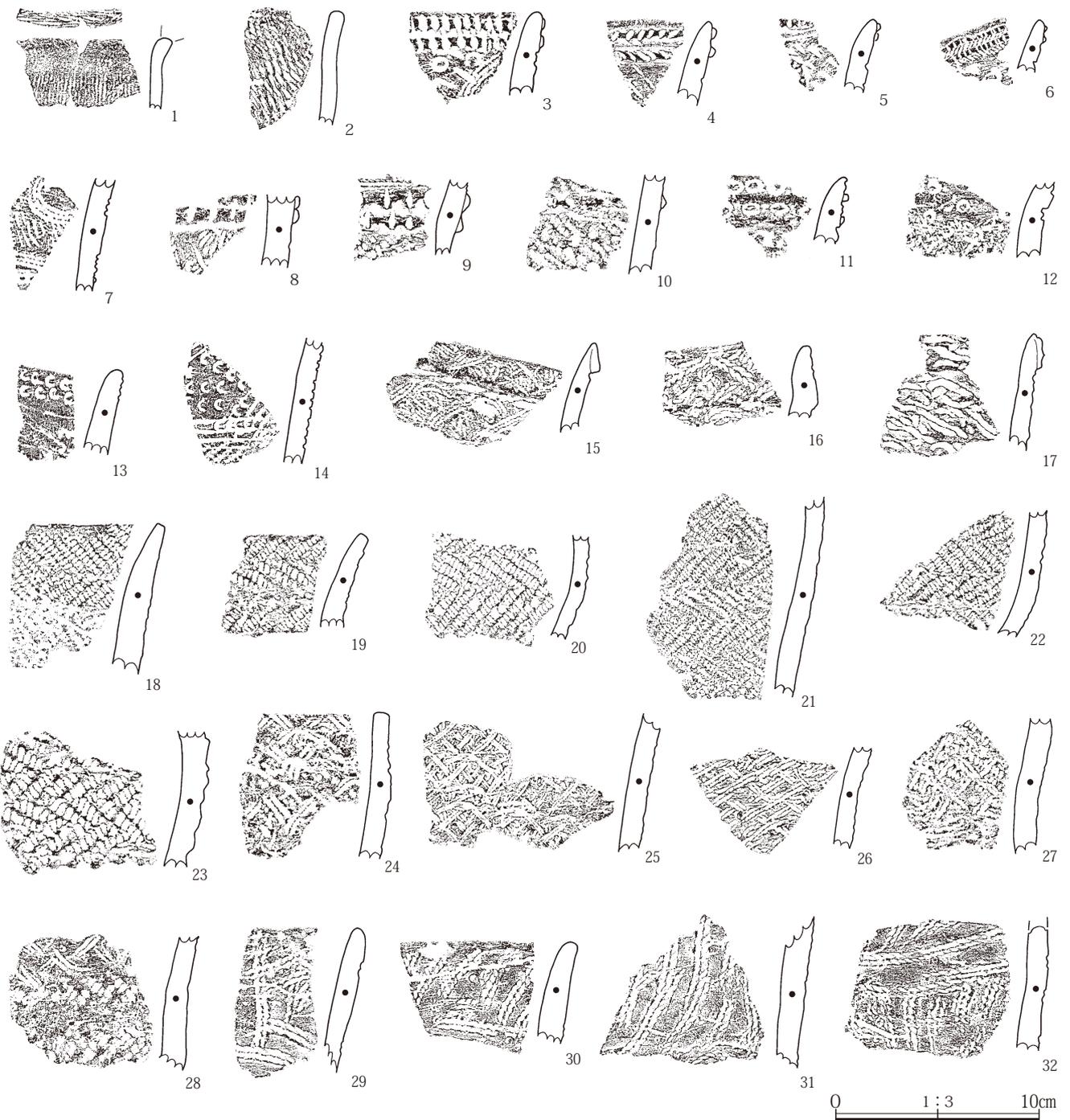
第60図 1・2号集石遺構図、2号集石遺物図

遺構外遺物 (第61～70図 PL.42～48)

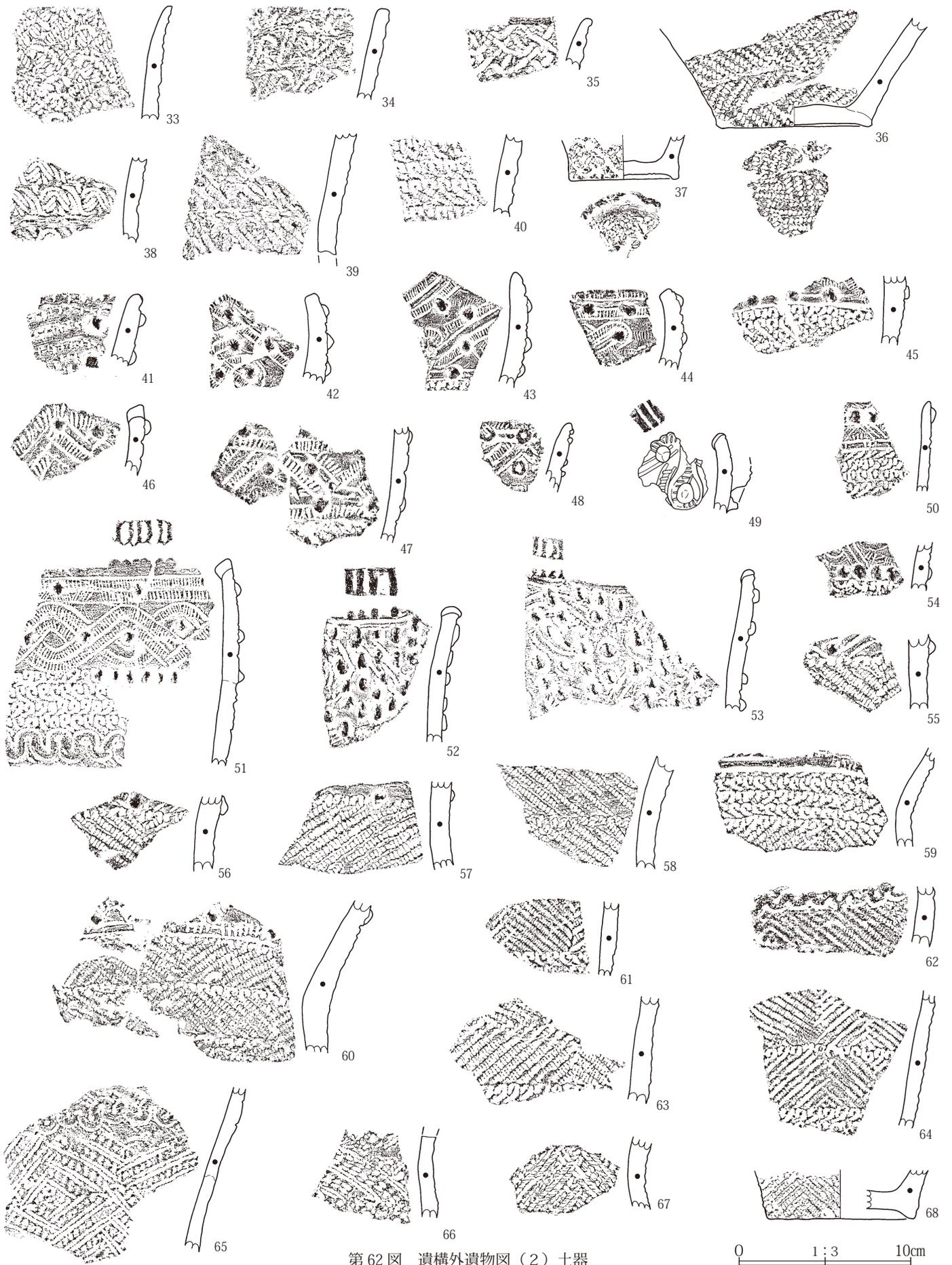
遺物は、縄文土器が12箱、石器が15箱である。その半数は住居など遺構から出土、残りがグリッドや時代の異なる遺構の覆土中への混入である。土器は、草創期の井草、夏島式もあるが、ほとんどが検出した遺構と同じ前期前葉、前期後葉、中期後葉の時期のものである。分布傾向は、前期が台地の西寄りに多く、中期が台地の中央寄りである。石器は、掲載以外では剥片類、磨石・凹石が多い。石材は、黒色頁岩が圧倒的に多く、次いで黒色

安山岩、珪質頁岩、少量のものにチャート、ホルンフェルス、黒曜石がある。

中世は、常滑焼の甕の小片がある。遺構がないことを反映して遺物の数は少ない。近世は、17世紀代以降の碗、皿などが少量出土。検出した溝に対応する時期のものであるが、直接の関係を知ることはむずかしい。細片で割れ口も古い。集落に隣接はしているが、背後にあたる耕作地という位置関係を示すものであろう。



第61図 遺構外遺物図(1) 土器



第62図 遺構外遺物図(2) 土器



第63図 遺構外遺物図(3) 土器



第64図 遺構外遺物図(4) 土器



第65図 遺構外遺物図(5) 土器



第66図 遺構外遺物図(6)土器



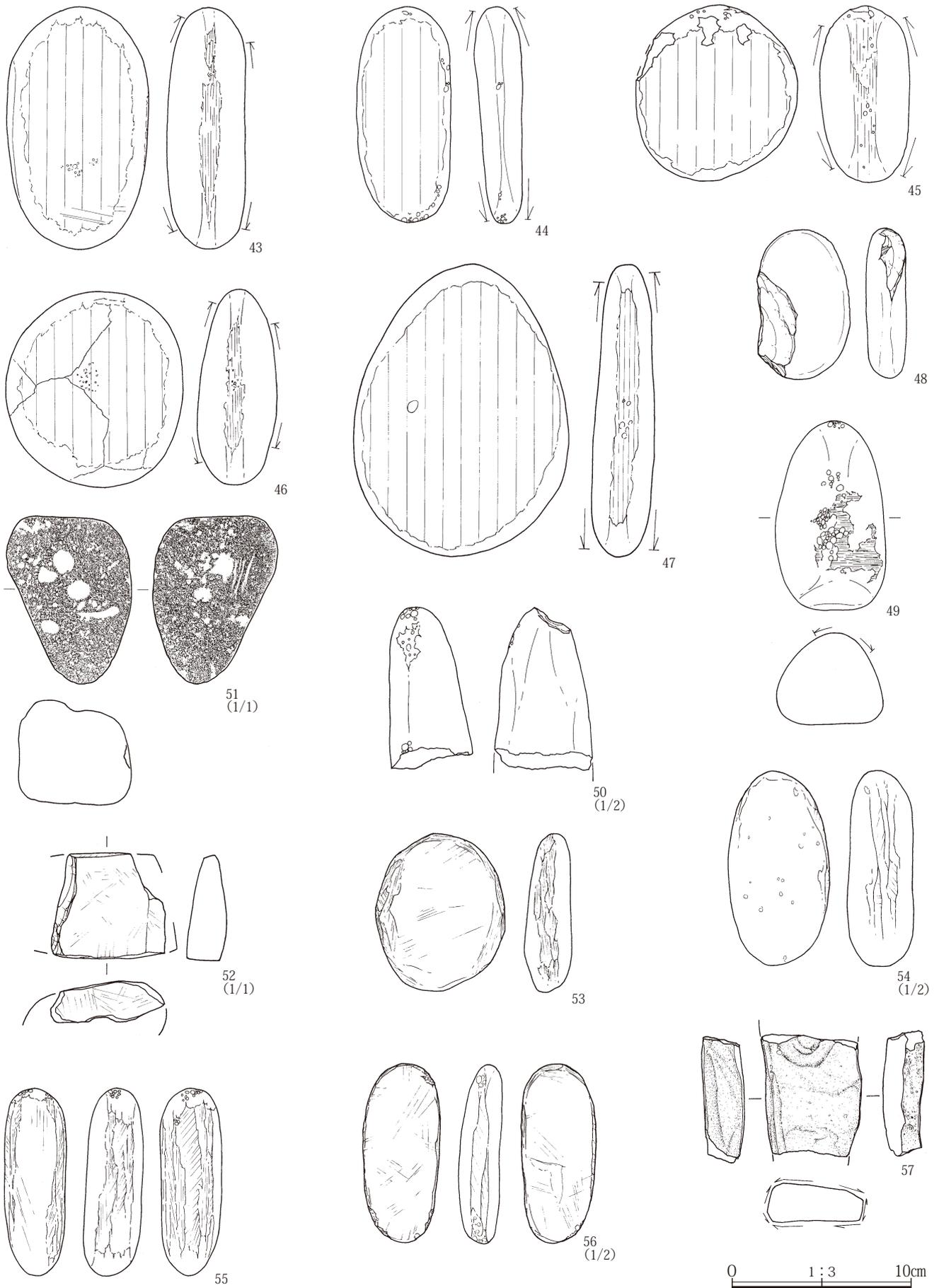
第67図 遺構外遺物図(7)土器



第68図 遺構外遺物図(8) 石器



第69図 遺構外遺物図(9)石器



第70図 遺構外遺物図(10) 石器

第3節 古墳時代

概要

住居1軒、古墳2基を検出した。住居が台地の西側縁辺部であって、古墳は東に100mほど離れた台地の中央部にある。両者は、距離を置いているものの居住域と墓域とで対応する位置関係にあるとみられ、時期も7世紀代の中で接近している。

1号墳は、『上毛古墳綜覧（以下綜覧）』（1933）桂萱村51号墳新田塚古墳、前橋市指定史跡である。調査したのは指定範囲外、墳丘とは市道をはさんだ西側と前庭寄りとみられる墳丘の南西部である。周堀が検出されている。南西部では、周堀と墳丘との間で地山を掘削した跡も検出されている。周堀は深さが1m前後なのに対して、掘削坑は2mを超す。この深さになったのは八崎軽石層が目的だからで、軽石層に次々と横穴を開け、残ったロームの天井を崩して前後左右に移動して、この形状になったとみられる。赤城山麓では、ロームを目的に前庭だけを深く掘り下げていることが知られているが、ここで検出した範囲は長さ18mという広い範囲に及んでいる。これまで知られていたものと違い、前庭からは西に離れ、規模も大きい。採掘したのが八崎軽石層というのも興味深い。また軽石層に開けられた穴からは土師器の坏が出土している。調査担当からは、掘削に伴う儀礼の跡という見方が提起されている。

2号墳は、推定25mの円墳で、石が集積されていたことから周知はされていたが『綜覧』からは漏れている。わずかに高まりを残す程度で、石室の根石列が検出されている。これにより新田塚古墳が単独ではないことが明らかとなり、なお1基か2基隣接していたようである。

古墳は、『綜覧』によると台地西側の低地沿いに集中していて、42基が登載されている。住居は、この古墳に比例した数が隣接地にあって、その一角を明らかにしたものとみられる。

住居

3号住居（第71～73図 PL.11・12・49）

当住居は、縁辺に近い台地の西側に占地している。西5mには平安時代の16号住居があり、南東側は縄文時代の12号住居に重複している。東側は調査区の壁にかかる

ため完掘することができず、北西部にある空白は用水路の敷設で破壊された箇所である。

調査は、用地取得の関係で土層断面Aラインを境にして2回に分けて行っている。最初にラインの南側を、2回目がその北側である。掲載した写真は、2回目のものである。また、掘り方調査では建て替えが判明している。北壁をそのままにして、柱穴をずらせて南側と西側へそれぞれ1m前後の幅で拡張している。カマドがあると想定される東壁は、そのままとみられる。報告では改築前、改築後に分けて記述したが、写真記録類は3号としたままで変更していない。判断できる資料はないが、改築の前後での時差は少ないとみられる。むしろ、改築は、添え柱とした柱穴の組み合わせがあること、掘り方の周溝が西壁で途切れているのを見ると、さらに1時期追加され3時期あるようにもみえる。

改築前 位置 880P2・3グリッド 形状 推定矩形ないし正方形 構築基準辺 不詳 規模 長軸4.2m、短軸 推定3.9m 面積 16.38㎡ 主軸方位 N64°E
残存深度 0.80m カマド 推定東壁

規模は、改築後よりも東側・南側がそれぞれ1m前後小さい。改築後との区別は掘り方での一段深い段差であるが、南壁は、その段差がなく推定である。そのままとした北壁も周溝の幅の分だけ外側にずれが認められる。新たに壁を補強した跡ではないか。主柱穴は、推定4本（P6・P8・P10+）とその添え柱（P7・P9）である。長軸・短軸・深さは、P6が42・38・46cm、P8が30・22・34cm、P10が45・38・42cmである。P11は貯蔵穴で、完掘されていないが85・65・28cmの円形である。P7とP9は、先述のように添え柱ではなく、さらに一時期古い主柱穴の可能性もある。P12は直立しているが出入口用のピットとみられ、規模は26・22・10cmである。柱間は、P6とP8が190cm、P8とP10が185cmである。出土遺物は、改築前として特定できるものはない。

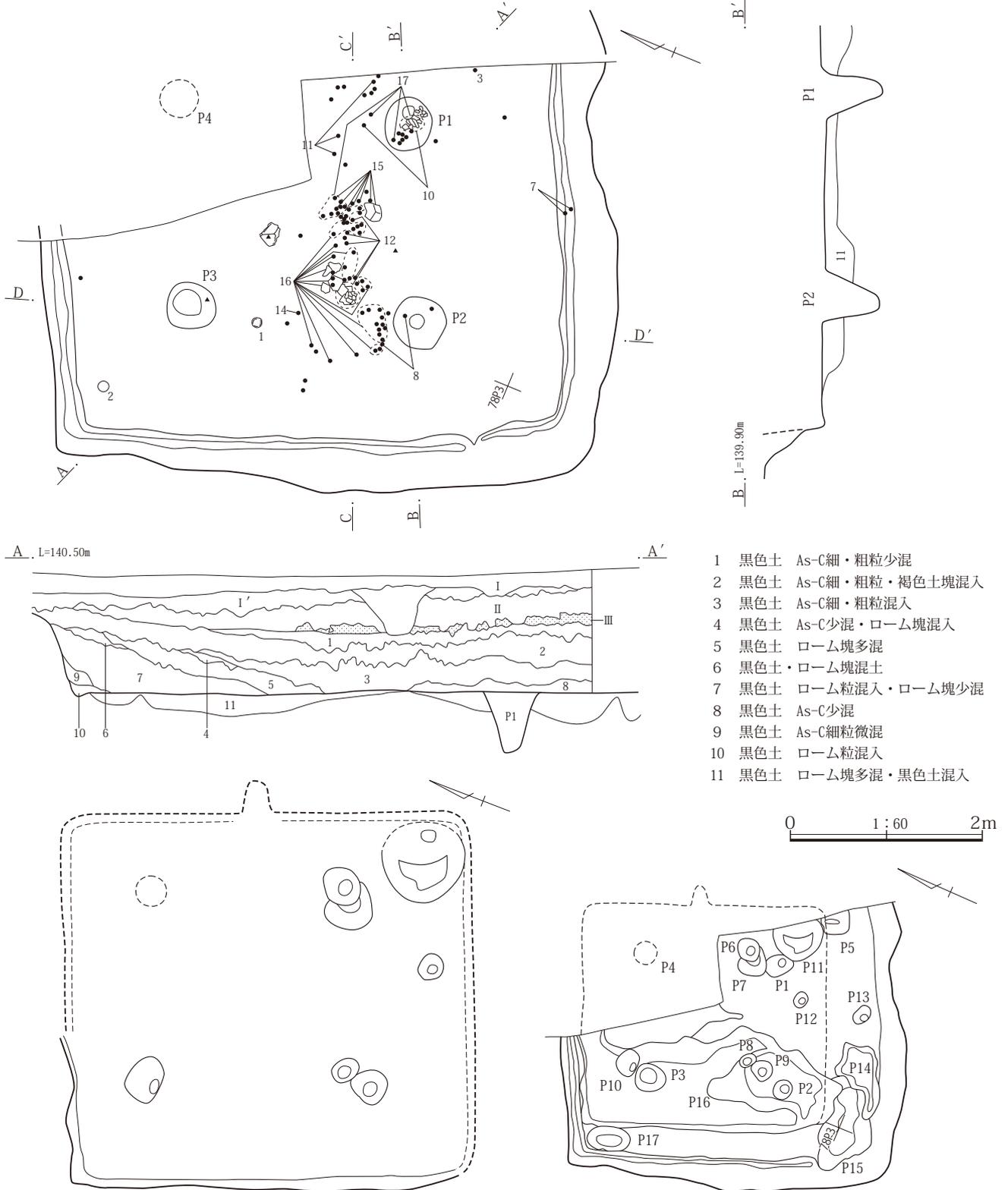
改築後 位置 880P2・3グリッド 形状 推定矩形ないし正方形 構築基準辺 北壁 規模 長軸5.10m+短軸5.98m 面積 30.50㎡+ 主軸方位 N64°E
残存深度 0.80m カマド 推定東壁

所見 覆土の上にはAs-Bが厚さ10cmで堆積している。遺存状態は良好である。覆土の11層は貼床で、西壁沿いを除いて全面にみられる。掘り方では段差を境にして

違いがあるものの、改築前との区別はむずかしい。床も、壁同様共有している可能性がある。支柱穴は、推定を含む4本である。長軸・短軸・深さは、P1が47・42・43cm、P2が48・43・53cm、P3が50・48・39cmである。破線のP4が推定である。柱間は、P1とP2が215cm、P2とP3

が225cmである。改築前にくらべて南西に40cm前後広がっている。

壁は、土層断面から推定できる高さが90cm前後である。西側から北側が垂直気味に立ち上がるのに対して、南側は床上20cmのあたりから60程度の角度で外傾している。



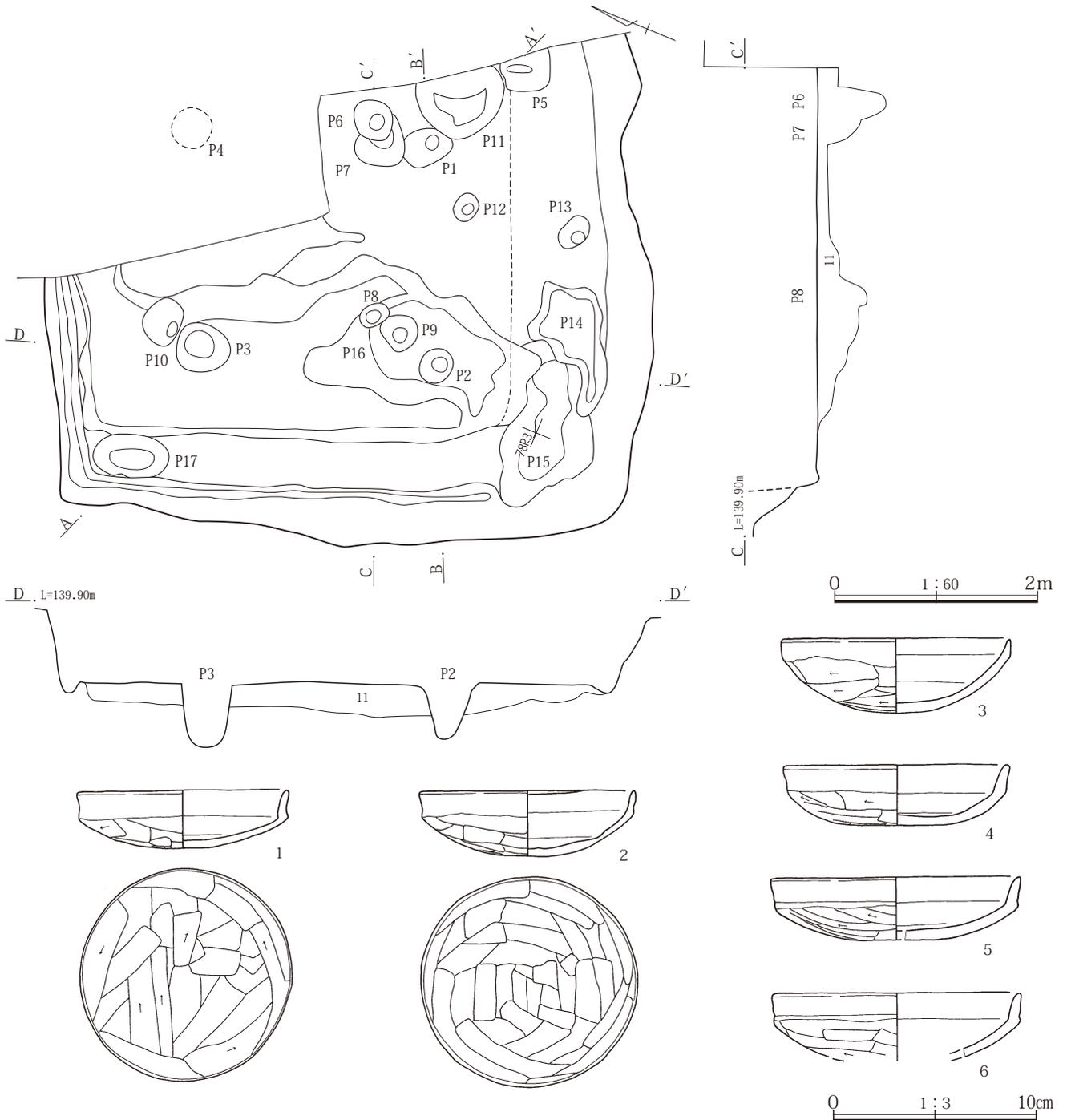
第71図 3号住居遺構図(1)

この角度の違いは、垂直気味が構築時の状況を残しているのに対して、南側は廃屋となった後、崩落したためと考えられる。掘り方で検出されたP13、P14は、対の位置にあり、出入口に関係した施設の痕跡と考えられる。P14ははっきりとしないが、P13は長軸36、短軸24、深さ25cmである。周溝は、全周しているようで一様にしっかりと掘り方である。幅が15cm前後、深さが3～7cmである。

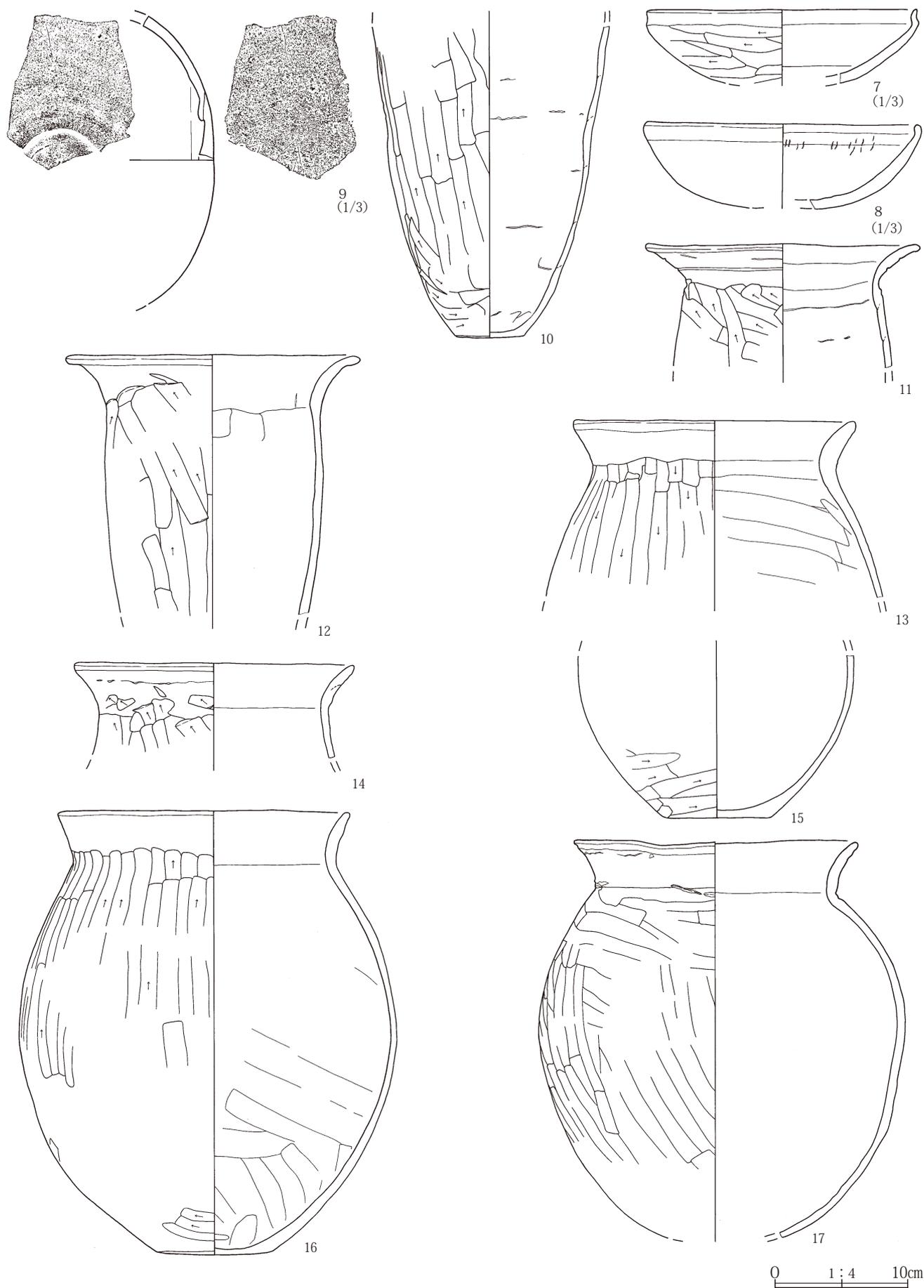
遺物は、支柱穴を結んだ内側の床直～直上で甕が多く、

被熱した状態からカマドでの使用が考えられる。壁際に環第72図2、第73図7の環が出土する。壁の上に想定される棚に置かれたものらしく、2は床面から70cmも高い検出面付近で出土している。1～8が土師器環、9が須恵器平瓶、10～17が土師器甕である。改築後のものである。非掲載は、土師器環38片、甕303片である。

住居の時期は、出土した土器の特徴から7世紀前半～7世紀中頃とみられる。



第72図 3号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第73図 3号住居遺物図(2)

古墳

概要 1号墳は、『上毛古墳綜覧（以下綜覧）』桂萱村51号墳新田塚古墳で、前橋市上泉町2694-2番地に所在する前橋市指定史跡である。調査をしたのは指定された範囲外で、これまで知られていなかった周堀が市道をはさんだ西側とそれに続く南西にあたる箇所で見出され、さらに墳丘に隣接して地山採掘坑が見出された。

2号墳は、推定規模25mの円墳で、昭和10年調査の『綜覧』漏れである。墳丘はほとんどが削平されていて、わずかに墳丘盛土を残す程度である。見出したのは、主体部の根石部分、西側の周堀である。

新田塚古墳については、群馬県教育委員会「群馬県の史跡 古墳編」（平成7年）から引用すると、次のようになる。

「かつて小坂子町南部からこの地にかけては古墳の多く所在する地域であった。昭和10年調査の「上毛古墳綜覧」によると桂萱地区には79基の古墳の所在が確認されている。上泉町は内42基を数え、これらのほとんどが円墳である。

この新田塚もこの円墳のひとつである。名前の由来には諸説があるが、前橋風土記には「在大胡辺疑蔵戦士之屍墓乎郷人乎日新田塚」とあり、中世の新田氏との関連を記している。地元も新田氏によるものかと伝えている。

平成3年度に新田塚古墳について測量を実施したが、測量結果によると墳丘の径は45m、高さ5.0m、周堀は北東部に確認され、幅10m、現状での深さ1.0mである。周堀まで含んだ復元径は65mとなる。

未発掘であるため主体部は不明であるが、7世紀に構築された横穴式の石室が想定される。埴輪等の散布は見られない。

新田塚古墳はこの地の古墳群の中でも比較的大型であり、ほかの古墳の多くが失われた中で残された貴重な古墳である。（井野誠一）」

1号墳（第74～76図 PL.26・27・49）

周堀 見出したのは、市道の西が68DE18～20グリッド、長さ20mに及ぶ。ただし、外側の半分程度だけで、残る墳丘側は未確認である。また北側の延長上では、破線で示したように外側にふくらむとみられる。市道の東は、67ST12・13、68AB13・14グリッドにある。前庭部までは

続いていない。市道と墳丘との間は、一段低くなっているが、見出部分はこれに含まれるものの外側の縁辺部である。幅広く残る墳丘との間にあるのが地山採掘坑で、67T13、68AB13～16グリッドにある。

形状 底面は平坦で、両側が緩く外傾している。幅は、完掘できた南西部で5mである。深さは、市道の東が断面図によると1.20m、西が見出面から60cm前後である。覆土 周堀の外側から流れ込んだ、As-Cが混入する黒褐色土で自然埋没している。As-Bの厚さは、最大10cmである。

遺物 周堀から掲載遺物の土師器環1、非掲載の土師器環3片、須恵器環1片、甕1片、軟質陶器瓦1片が出土。地山採掘坑 八崎軽石層が目的で、周堀と墳丘の間にある。見出したのは外側半分とみられ半月状をしている。長さは18m、最も深い所では2.25mを測る。

覆土 上下で様相が異なる。1～18層までは黒褐色土が主体となり、19層以下31層まではロームが主体で周堀の覆土に比べてそれぞれが薄く、ブロック状態である。このブロックとなる傾向は、深くなるほど顕著で、掘削が済んだごとに不要なロームを崩して足元にならしたからではないか。上面には、As-Bが堆積している。

遺物 第76図断面Bの位置で外側の壁の中段、軽石層に間口45cm、奥行き20cmの横穴があって、中からは土師器環1点（第74図）が出土した。口縁部を上にして、置いたとみられる。祭祀行為に伴う遺物ではないか。

所見 遺構の時期は、地山採掘坑から出土した土師器環の特徴から7世紀中頃とみられる。

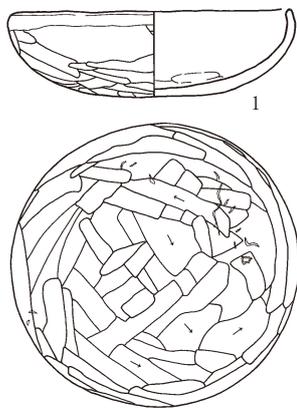
2号墳（第77～81図 PL.27・49・50）

位置 57L～R15～20、67Q1・2グリッド 主体部が前橋市上泉町2469-1番地、ほか2466-1、2468-1、2470、2471、2505-1番地である。南東へ緩く傾斜、新田塚古墳の中心からは南東に70m離れている。

調査前の状況 ほとんど削平されていて、主体部だけがわずかに高まりを感じさせる程度。石があることは知られていて、これをさけて畑として利用。

墳丘の規模 推定25mの円墳、石室の西壁から西側の周堀まで約12.5mを根拠に算出。南側は上泉唐ノ堀遺跡にかかるはずであるが、すでに削平している。

墳丘盛土 破線で示した、石室まわりに10～20cmの厚



さで残る。As-Cが混入する黒褐色土とロームの斑状の混土で、石室から外側への順序で置かれている。整地面は、断面Hによると標高135.70m～136.50mである。

主体部 自然石乱石積、南開口両袖型横穴式石室、開口方位はN4°Eである。粗粒輝石安山岩を使用、稀に長さ60cmを越すものもあるが、ほとんどは長さ40～50cmと小ぶりである。玄室と羨道での大きさの区別や、特に加工した跡はない。奥壁は、4～5石を並列している。

石室全長 推定で最長で7.68m、最短は7.10m

玄室長 3.70m、玄室幅 奥壁で1.52m、西壁はわずかに弧を描く。東壁の中央部では、内側へ10cmのずれがある。間仕切りの可能性もあり、奥壁から2mの位置であ

第74図 1号墳遺構図(1)・遺物図

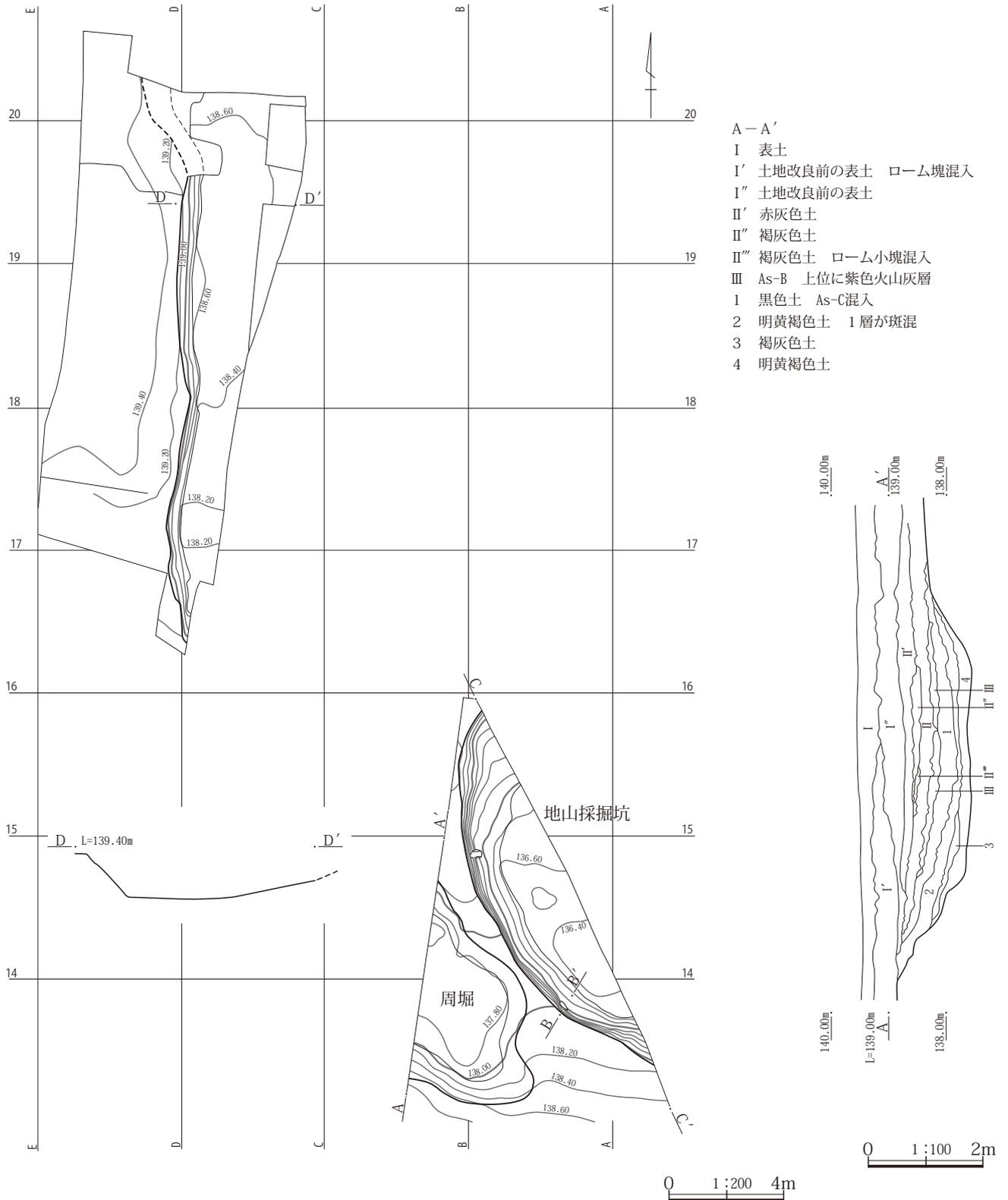
る。床の構造は、玉砂利の上に手の平大の石を敷いた様子にみえたが、ほとんどが攪乱されている。

羨道長 推定での最長が3.98m、最短で3.40m、石室の掘り方の位置は3.60mである。羨道幅 石が残されている中央部で70cm、左右は平行している。

床面 玄室と羨道に段差はない。羨道と前庭部との境は、人頭大の石1個分の厚さで段がつく。

玄門 左右の石は抜かれていて、栗石からの推定である。構造も不明である。

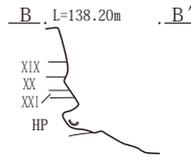
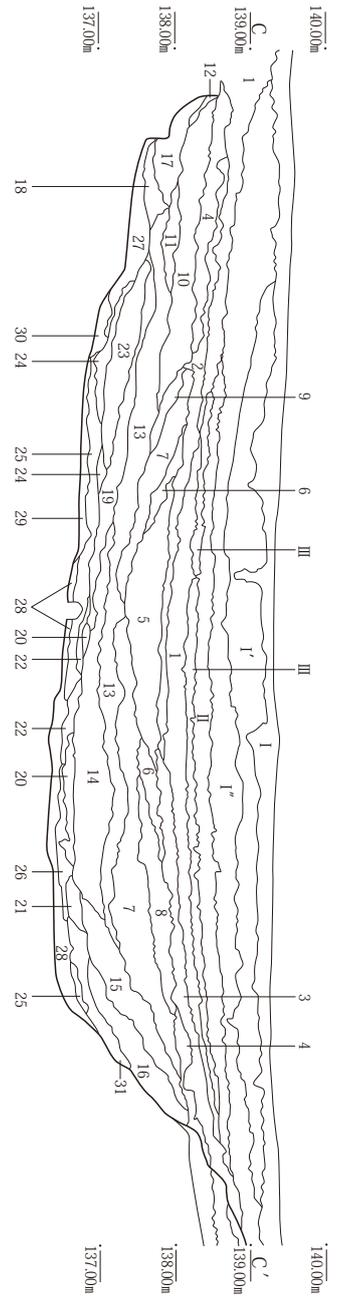
羨門 横に長い石が1石だけ残されている。小口積か。



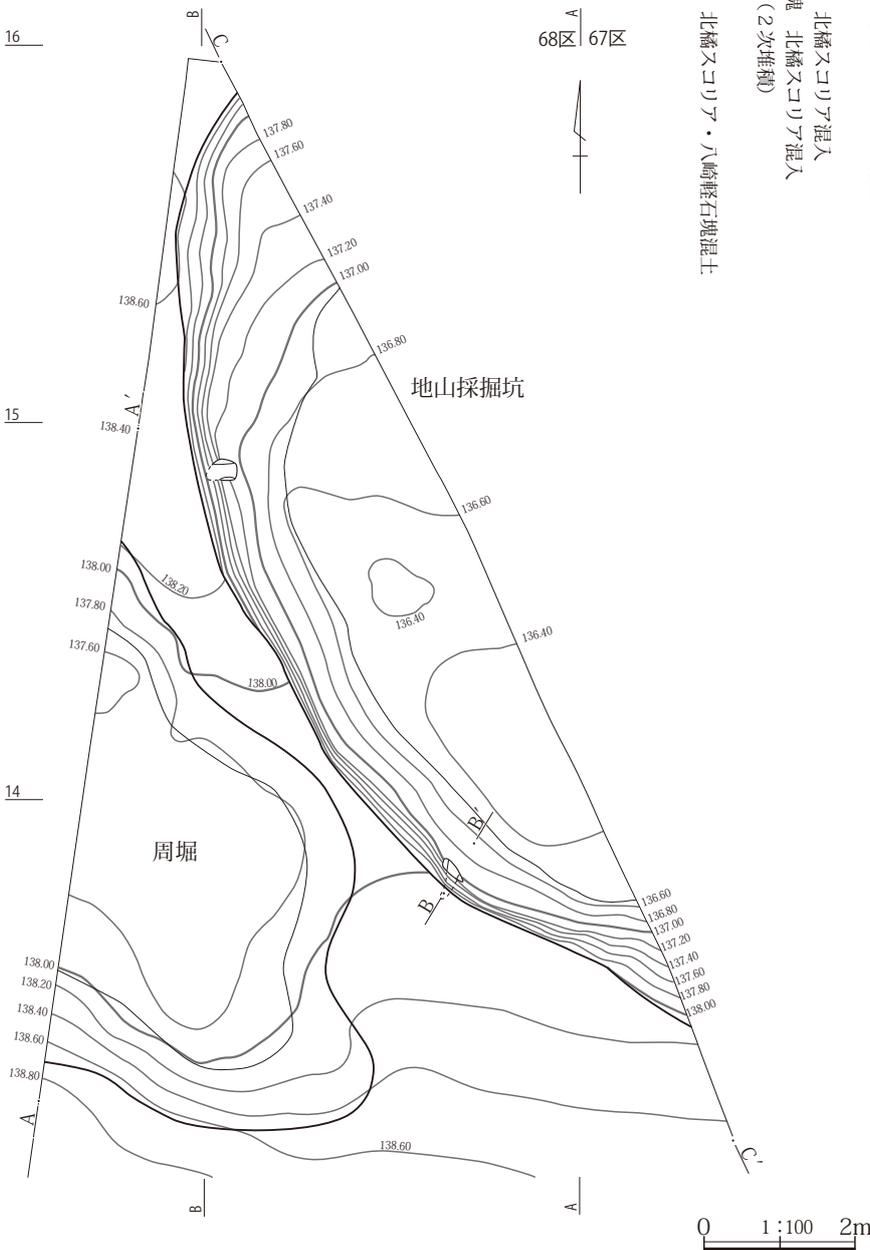
第75図 1号墳遺構図(2)

- 11 黒色土 As-C混入
- 12 黒色土 As-C・ローム粒混入
- 13 黒色土 As-C・褐色土塊・ローム塊混入
- 14 黒色土 As-C少混・褐色土塊微混
- 15 黒色土 As-C微混・ローム大塊・暗褐色土大塊混入
- 16 黒色土 As-C微混・ローム塊少混
- 17 黒色土 As-C少混・褐色土塊微混
- 18 褐色土・黄褐色土 ソフトローム・As-YP混入
- 19 茶褐色土 ソフトローム・As-YP塊混
- 20 ソフトローム塊
- 21 褐色土・茶褐色土・ソフトローム混入
- 22 暗褐色土
- 23 暗褐色土・黒褐色土・ローム塊混入

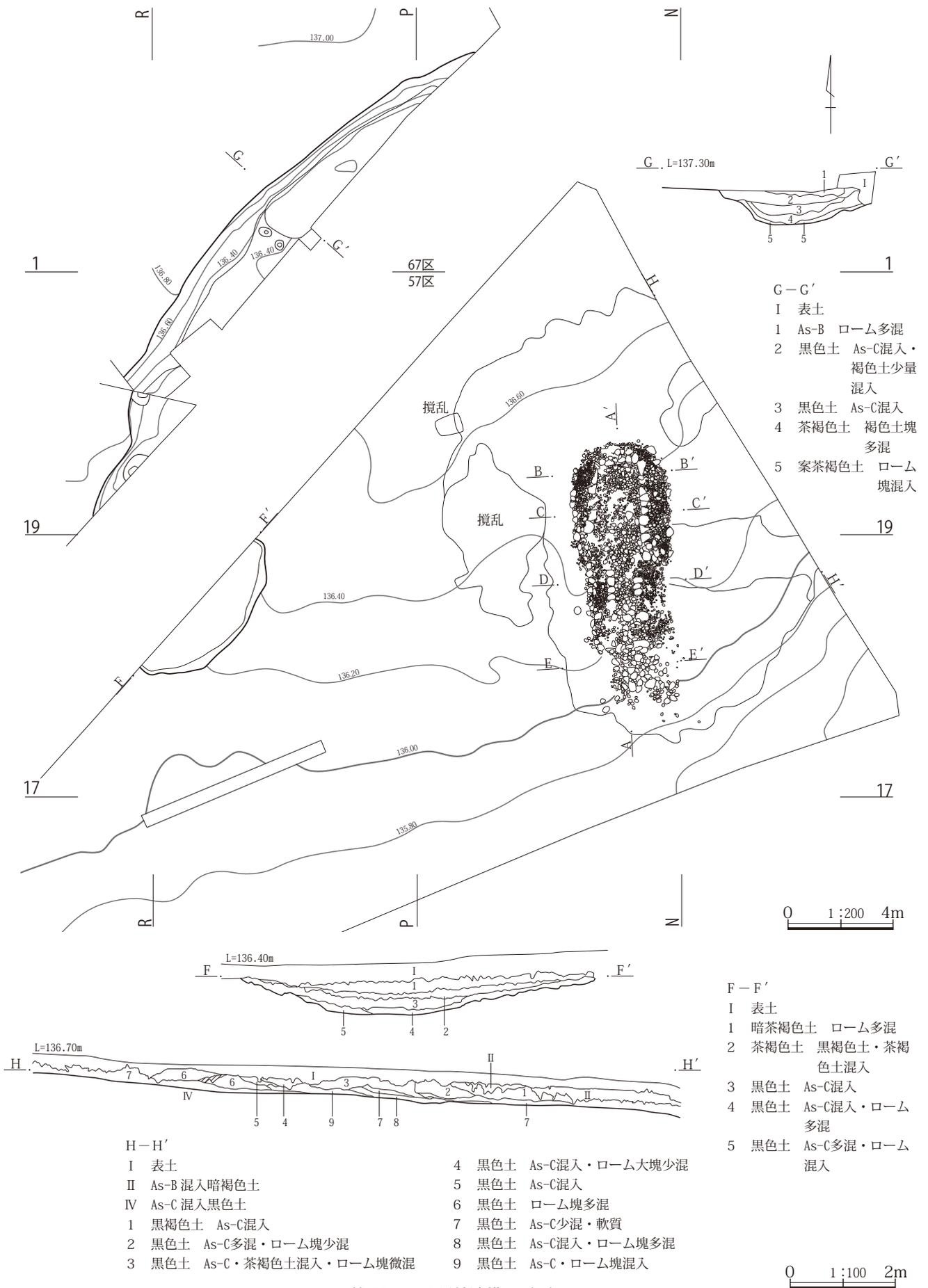
- C-C'
- I 表土
- I' 土地改良前の表土
- I'' 土地改良前の表土
- II 暗褐色土 As-B混入
- III As-B
- 1 黒色土 As-B混入
- 2 黒褐色土 As-C微混・ローム塊少混
- 3 茶褐色土 褐色土塊多混・ローム塊混入
- 4 ローム
- 5 黒色土 As-C少混・ローム塊微混
- 6 黒色土 As-C・ローム塊少混
- 7 黒色土 As-C・褐色土塊混入・ローム塊微混
- 8 黒色土 As-C少混・褐色土塊混入
- 9 黒色土 As-C少混・褐色土塊混入・ローム塊微混
- 10 黒色土 As-C・ローム塊少混・褐色土塊混入
- 11 黒色土 As-C混入
- 12 黒色土 As-C・ローム粒混入
- 13 黒色土 As-C・褐色土塊・ローム塊混入
- 14 黒色土 As-C少混・褐色土塊微混
- 15 黒色土 As-C微混・ローム大塊・暗褐色土大塊混入
- 16 黒色土 As-C微混・ローム塊少混
- 17 黒色土 As-C少混・褐色土塊微混
- 18 褐色土・黄褐色土 ソフトローム・As-YP混入
- 19 茶褐色土 ソフトローム・As-YP塊混
- 20 ソフトローム塊
- 21 褐色土・茶褐色土・ソフトローム混入
- 22 暗褐色土
- 23 暗褐色土・黒褐色土・ローム塊混入
- 24 暗茶褐色土 29微混
- 25 暗茶褐色土 北橋ヌコリア・29混入
- 26 ローム塊
- 27 暗茶褐色土 北橋ヌコリア混入
- 28 暗茶褐色土塊 北橋ヌコリア混入
- 29 八崎軽石塊 (2次堆積)
- 30 八崎軽石塊
- 31 暗茶褐色土 北橋ヌコリア・八崎軽石塊混入



0 1:50 1m



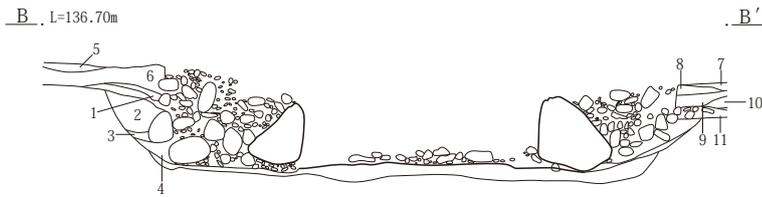
第76図 1号墳遺構図(3)



第77図 2号墳遺構図(1)



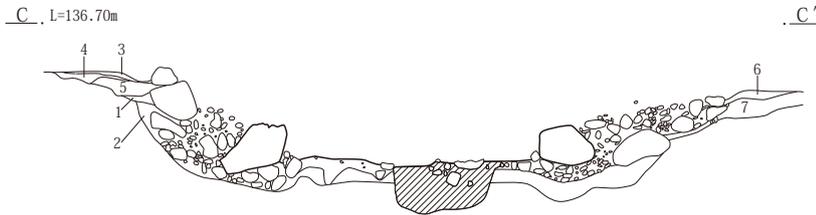
第78図 2号墳遺構図(2)



A-A'

裏込

- 1 黒色土 As-C混入・軟質
- 2 黒褐色土 As-C微混・軟質

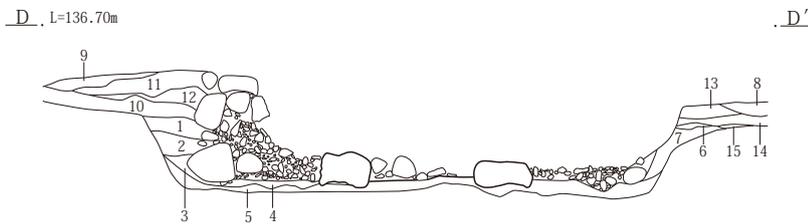


C-C'

裏込

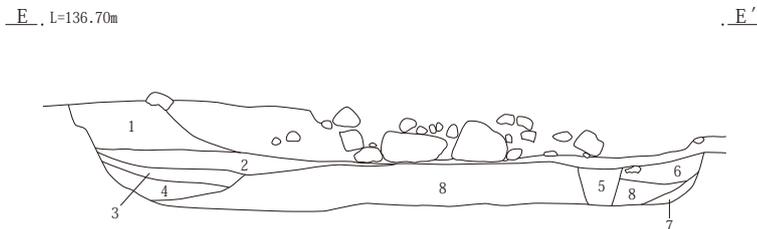
- 1 黒色土 As-C・ローム小塊混入
 - 2 黒色土 As-C・茶褐色土塊混入
- 盛土

- 3 黒色土 As-C粗粒多混
- 4 ローム
- 5 黒色土 As-C粒多混
- 6 黒色土 As-C・ローム小塊少混
- 7 暗褐色土 ローム塊・As-C少混



E-E'

- 1 黒色土 As-C混入・地山に類似
- 2 黒色土 As-C・茶褐色土混入・上面礫
- 3 黒色土 As-C・ローム粒混入
- 4 黒色土 As-C混入・軟質
- 5 黒褐色土 As-C微混・ローム塊少混
- 6 黒褐色土 As-C・ローム塊少混
- 7 黒褐色土 As-C微混
- 8 ローム



B-B'

裏込

- 1 黒色土 As-C混入
- 2 黒色土 As-C・茶褐色土小塊混入
- 3 黒褐色土 茶褐色土・ソフトロームの混土
- 4 暗褐色土

盛土

- 5 黒色土 As-C多混・ローム塊少混
- 6 黒色土 As-C多混・粗粒褐色土混入
- 7 黒色土 As-C混入
- 8 褐色土 ローム塊混入
- 9 黒色土 As-C微混
- 10 黒色土 As-C・褐色土・ローム混入
- 11 茶褐色土

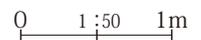
D-D'

裏込

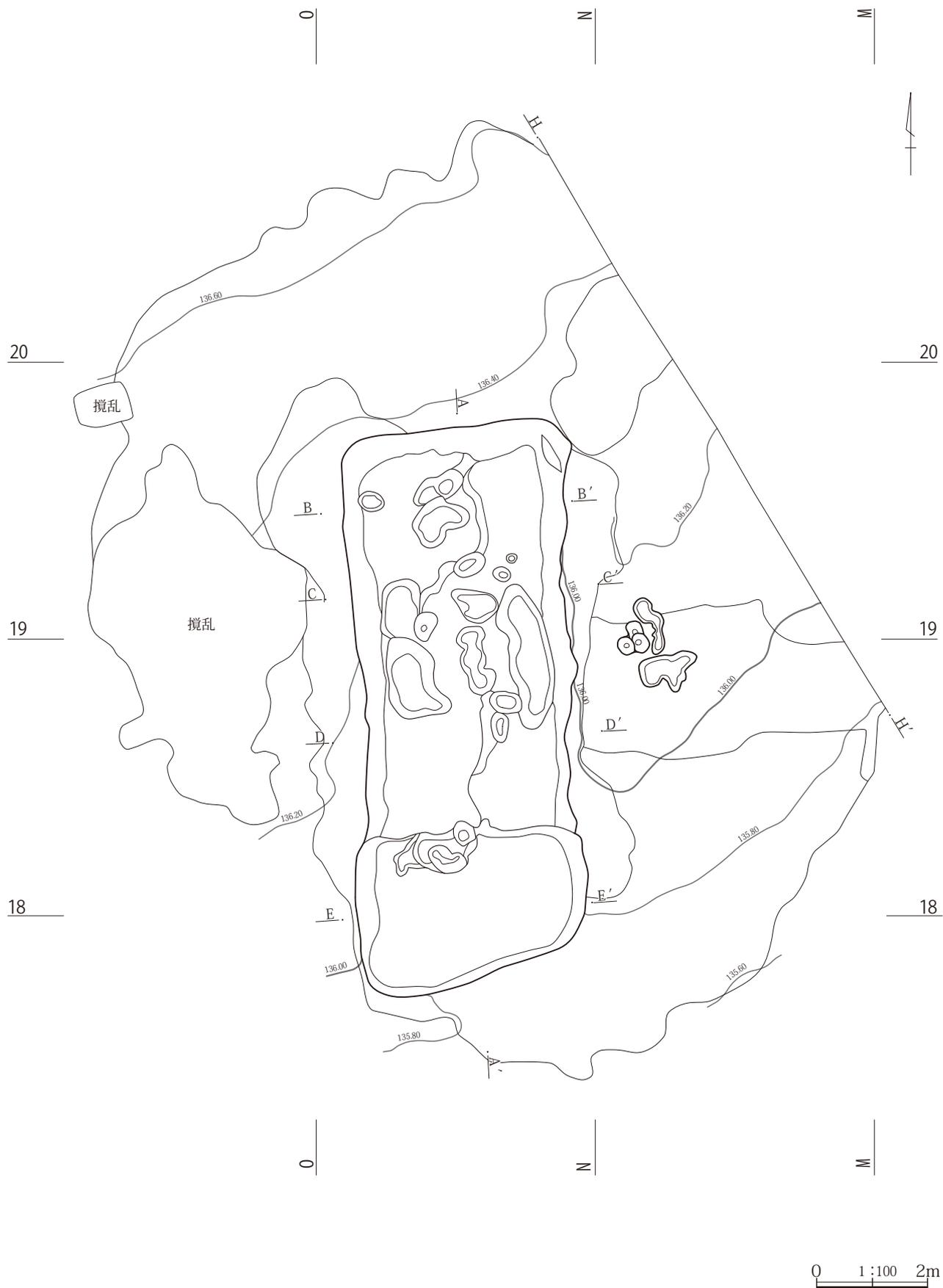
- 1 黒色土 As-C・茶褐色土塊混入
- 2 黒色土 As-C少混・茶褐色土塊混入
- 3 黒色土 暗褐色土多混
- 4 黒色土 As-C微混・茶褐色土混入
- 5 黒色土 茶褐色土小塊少混
- 6 黒色土 As-C混入
- 7 黒色土 As-C・ローム塊混入

盛土

- 8 黒色土 As-C・ローム塊混入
- 9 黒色土 As-C・茶褐色土小塊少混
- 10 黒色土 As-C少混・茶褐色土塊混入
- 11 黒色土 As-C・茶褐色土塊混入
- 12 黒色土 As-C・ソフトローム塊混入
- 13 黒褐色土 ローム塊混入
- 14 黒色土 As-C少混・ローム塊多混
- 15 黒色土 As-C微混



第79図 2号墳遺構図(3)



第80図 2号墳遺構図(4) 主体部掘り方

閉塞石 敷き並べたような集石状、東側だけに「ハ」の字形に開く様子がみえる。

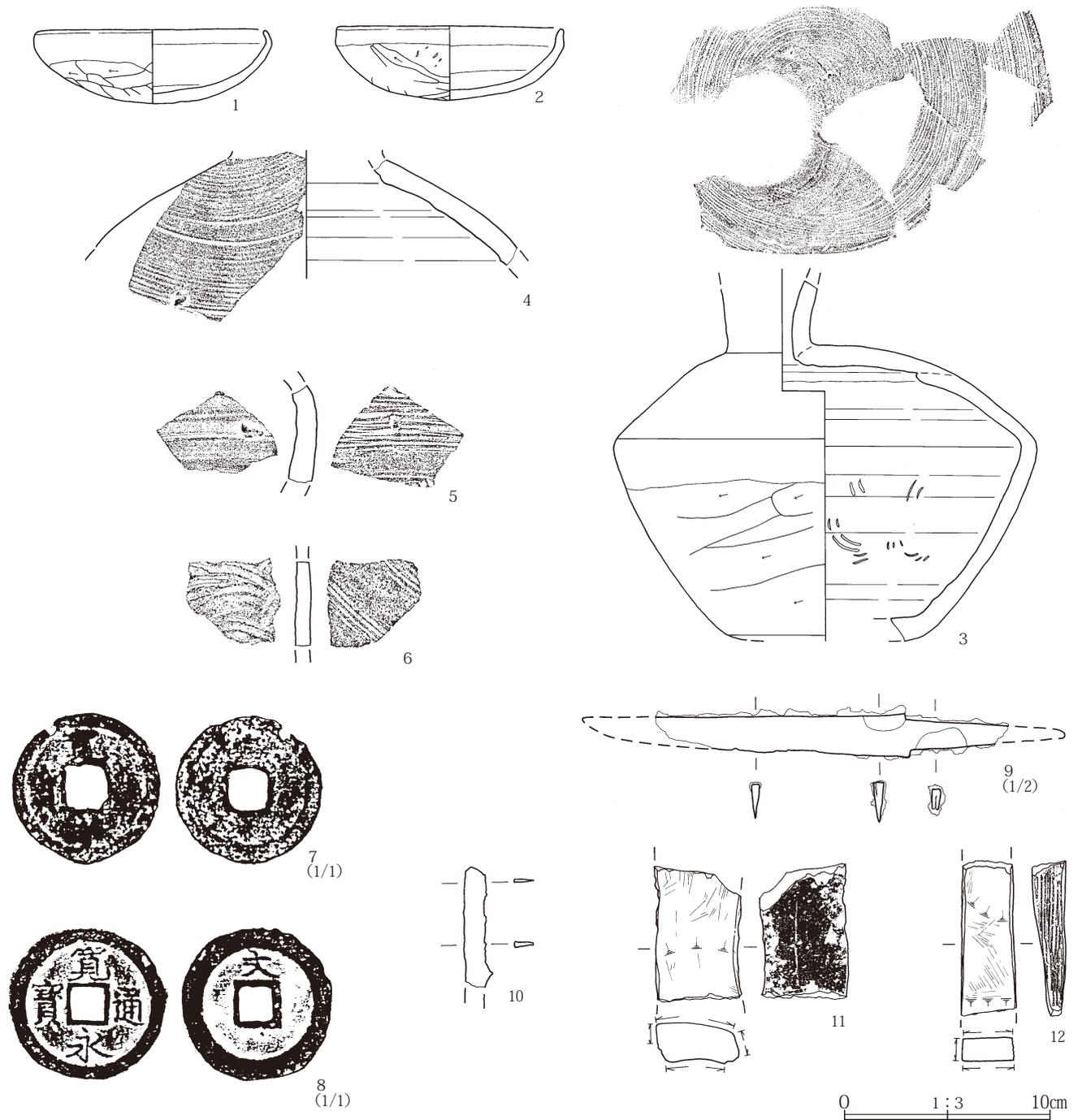
裏込め 西側よりも東側が厚い。卵大から拳大前後までの石に砂を混ぜ、詰め込んでいる。被覆は、東西とも壁よりもひとまわり小さな石が使われている。

周堀 上幅2.50m前後、深さ70cmである。立ち上がりは、断面Dでは外側が40度前後なのに対して、墳丘側は20度前後と緩い。検出したのは、西側と南西にかけてであるが、標高136mの線をみると窪んでいて、さらに前庭部

に続いていたことが推定できる。

出土遺物 前庭部の東側、閉塞石から1mほど離れて1、3が破片となって出土、玄室からは刀子1点が出土している。掲載遺物は1・2が土師器杯、3が須恵器平瓶、4・5が須恵器瓶破片、6が須恵器甕破片、7・8が寛永通宝、9が刀子、10が釘、11・12が砥石、非掲載に土師器杯8片、甕2片、須恵器甕1片、陶器碗1片が出土。

所見 上毛古墳総覧漏れである。古墳の時期は、石室や土師器の杯、平瓶の特徴から7世紀中頃～後半である。



第81図 2号墳遺物図

第4節 奈良・平安時代

概要

住居4軒、道1条を検出した。

住居は、台地の西側縁辺部に寄って10～20m前後の距離で点在している。道や溝と重複することもなく、8世紀初頭、9世紀前半～9世紀中頃である。

道と溝は、覆土の上面にAs-Bが堆積していることからこの時代のものとしたが、年代の上限は不明である。ともに住居からは大きく離れ、集落の東縁辺を区画するような位置で、台地の中央部を縦断している。

住居

1号住居（第82～84図 PL.10・50）

位置 78QR11・12グリッド 形状 正方形

構築基準辺 南・西壁 規模 長軸4.66m、短軸4.56m

面積 21.25㎡ 主軸方位 N132°S 残存深度 0.53m

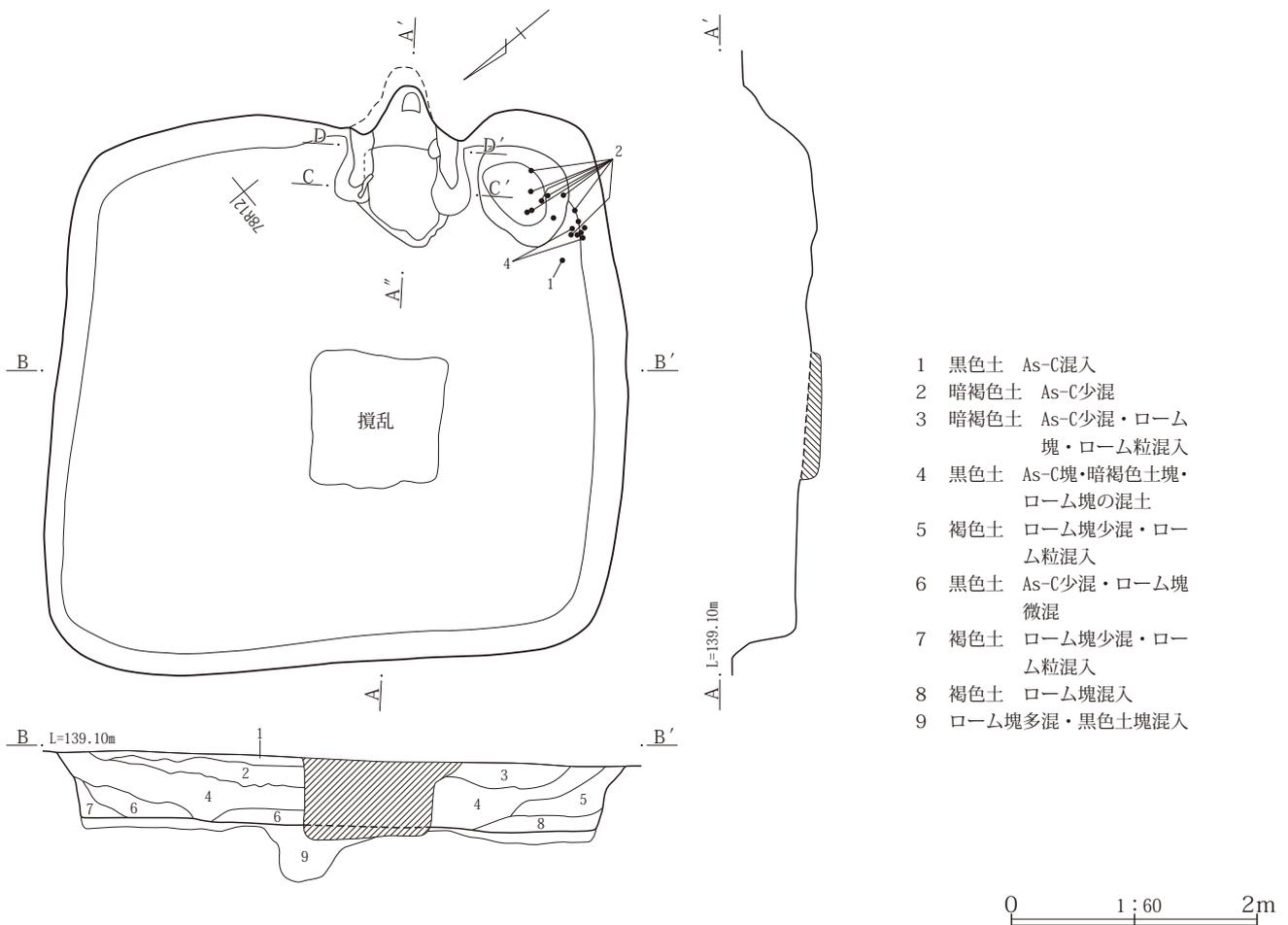
カマド 南東隅から1.4m カマド規模 長軸 1.32m、

短軸1.10m、燃焼部幅0.60m

所見 当住居は、均整のとれた正方形を呈する。床面で計測すると、おおむね一辺は12尺に相当する。床面は、平坦で全体が硬化している。ローム層まで掘り込んで直接床にしているところが多いため、掘り方はカマド脇から南の壁沿いが顕著である。土坑状のP4が西隅に、同じく中央部にP6がはっきりとしていて、北東の壁沿いにも浅い掘り込みがある。覆土には塊状のロームが多く混じる。周溝、柱穴は、検出されていない。貯蔵穴は、カマドと南壁との間、住居の南東隅1m四方を占める。長軸・短軸・深さは、95・71・23cmである。

カマドは、東壁の中央から南に寄る位置で、屋内に燃焼部がある。全長約1m、焚口の幅は、約40cmである。煙道は、50度の角度で屋外へ掘り込まれ、長さが約50cmである。燃焼部は、一辺が60cm「コ」の字の形をした造りになっている。天井は崩落、支脚もない。

袖口から壁との間は、左右ともに手の平大の粗粒輝石安山岩を芯材にして作られている。石は6点もあり、二

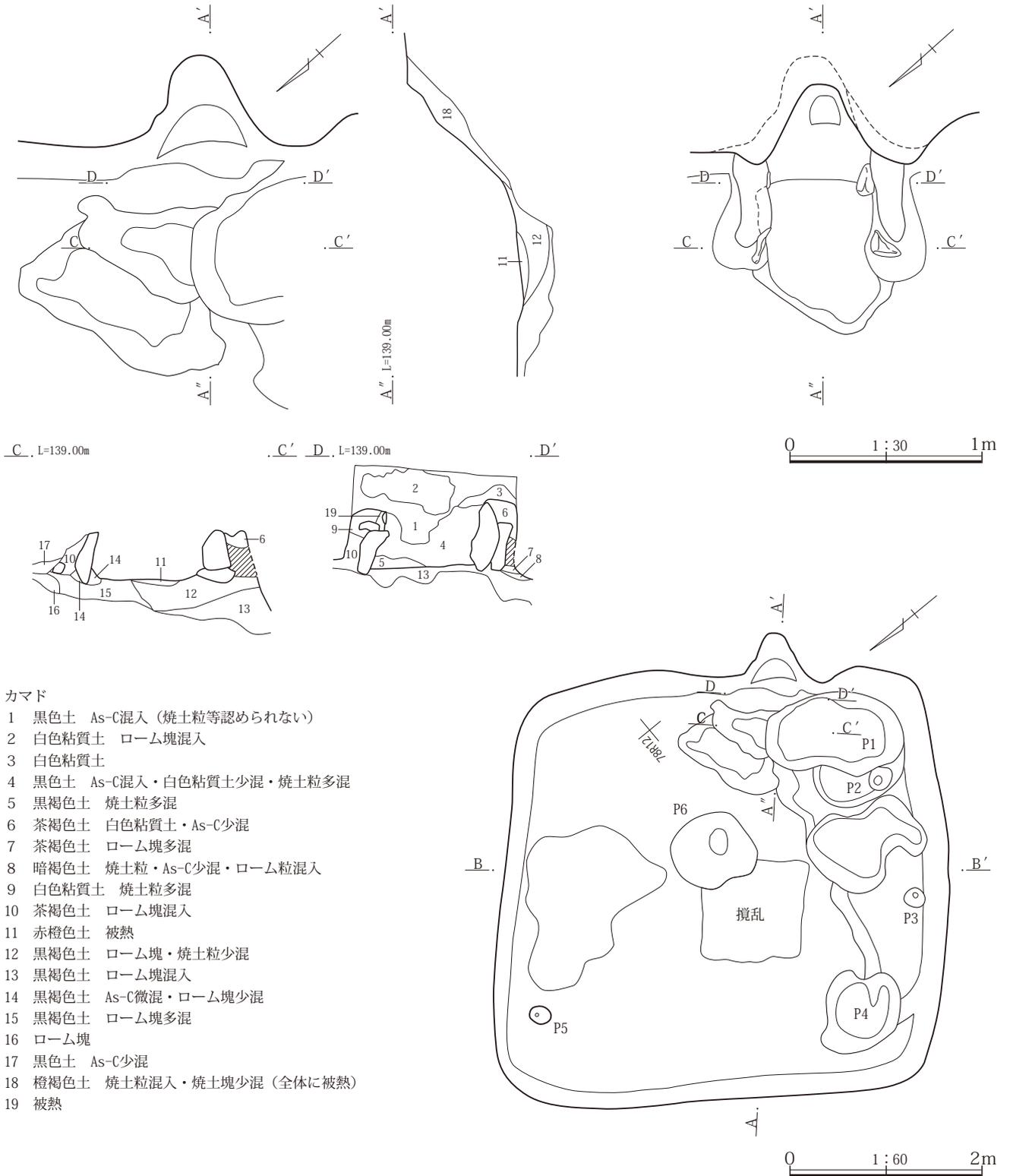


第82図 1号住居遺構図(1)

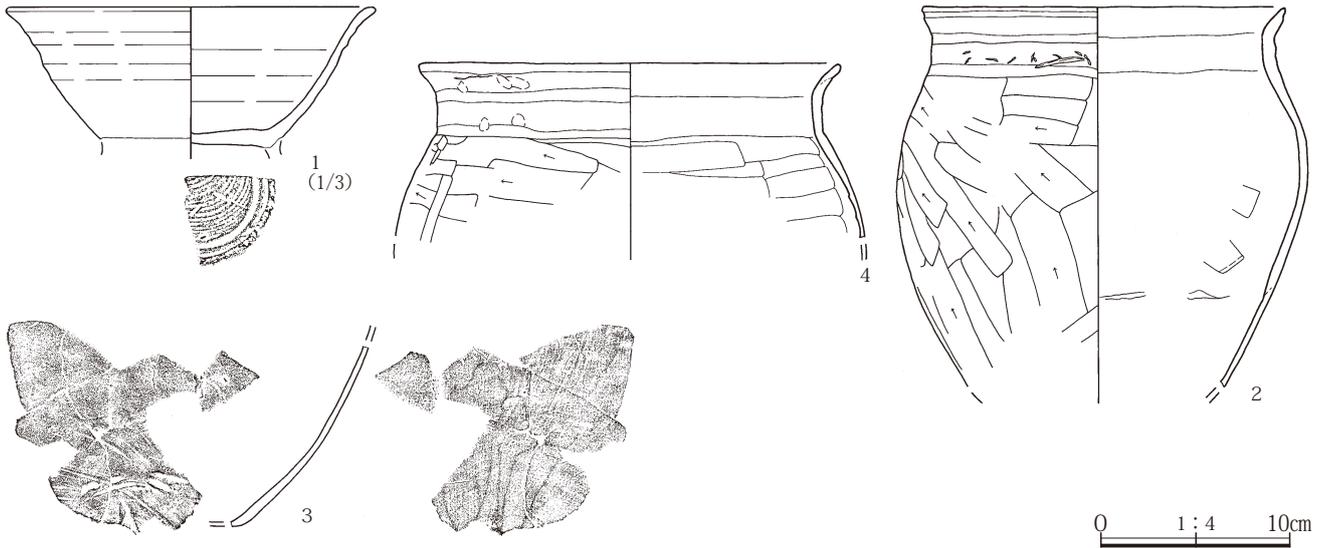
重に立てた箇所や根太のように横に置くなどの工夫がされている。それを被覆するのは、下半部が褐色土、上半部が白色粘質土を主材としている。白色粘質土は、そのまま天井部にも使われている。改築が12層・15層を底面の構築土にして、2回は行われている。

遺物は、P1貯蔵穴の覆土上面で1の須恵器環、2・3・4の土師器甕が出土している。未掲載には、土師器甕と須恵器環の細片が約30片ある。

住居の時期は、出土した甕の特徴から9世紀中頃とみられる。



第83図 1号住居遺構図(2)



第84図 1号住居遺物図

2号住居 (第85図 PL.11)

位置 78ST14・15グリッド 形状 長方形

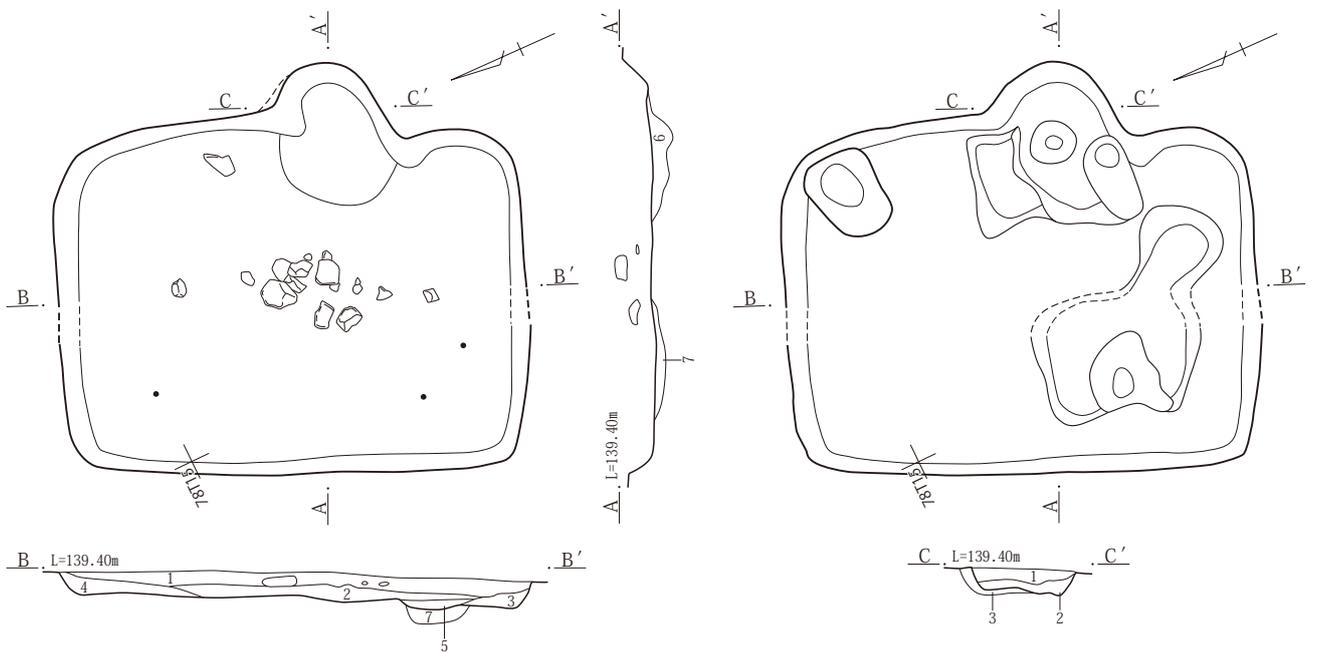
構築基準辺 西壁 規模 長軸3.70m、短軸2.86m

面積 10.58㎡ 主軸方位 N116°S

残存深度 0.23m カマド 南東壁 カマド規模 長軸

1.35m、短軸1.10m、燃烧部幅0.50m

所見 当住居は、均整のとれた横長の方形を呈する。床面は、ローム層まで掘り下げて暗褐色土などで貼床をしている。特に硬化した状態はみられない。柱穴、貯蔵穴は、掘り方でも認められない。周溝は、平面図には記録



- 1 黒色土 As-C混入
- 2 黒色土 As-C微混
- 3 茶褐色土 As-C微混・ローム塊混入
- 4 茶褐色土 As-C微混・ローム塊斑混
- 5 黒色土 ローム塊混入
- 6 暗褐色土 ローム塊少混
- 7 黒色土・ローム塊の混土

- カマド
- 1 黒色土 As-C微混入
 - 2 黒色土 焼土粒少混
 - 3 暗褐色土 ローム塊少混

第85図 2号住居遺構図

されていないが、断面図Bでは北の壁際で窪む様子が観察できる。なんらかの造作があったとみられる。

カマドは、南東壁の中心から南に寄って作られている。壁際に袖口があり、壁を矩形に掘り込んで燃烧部を作る構造である。すでに崩落をしていて、掘り方で右の袖穴、支脚を据えた穴が検出されている。全長約1m、支脚が中央にあることから1穴式とみられる。

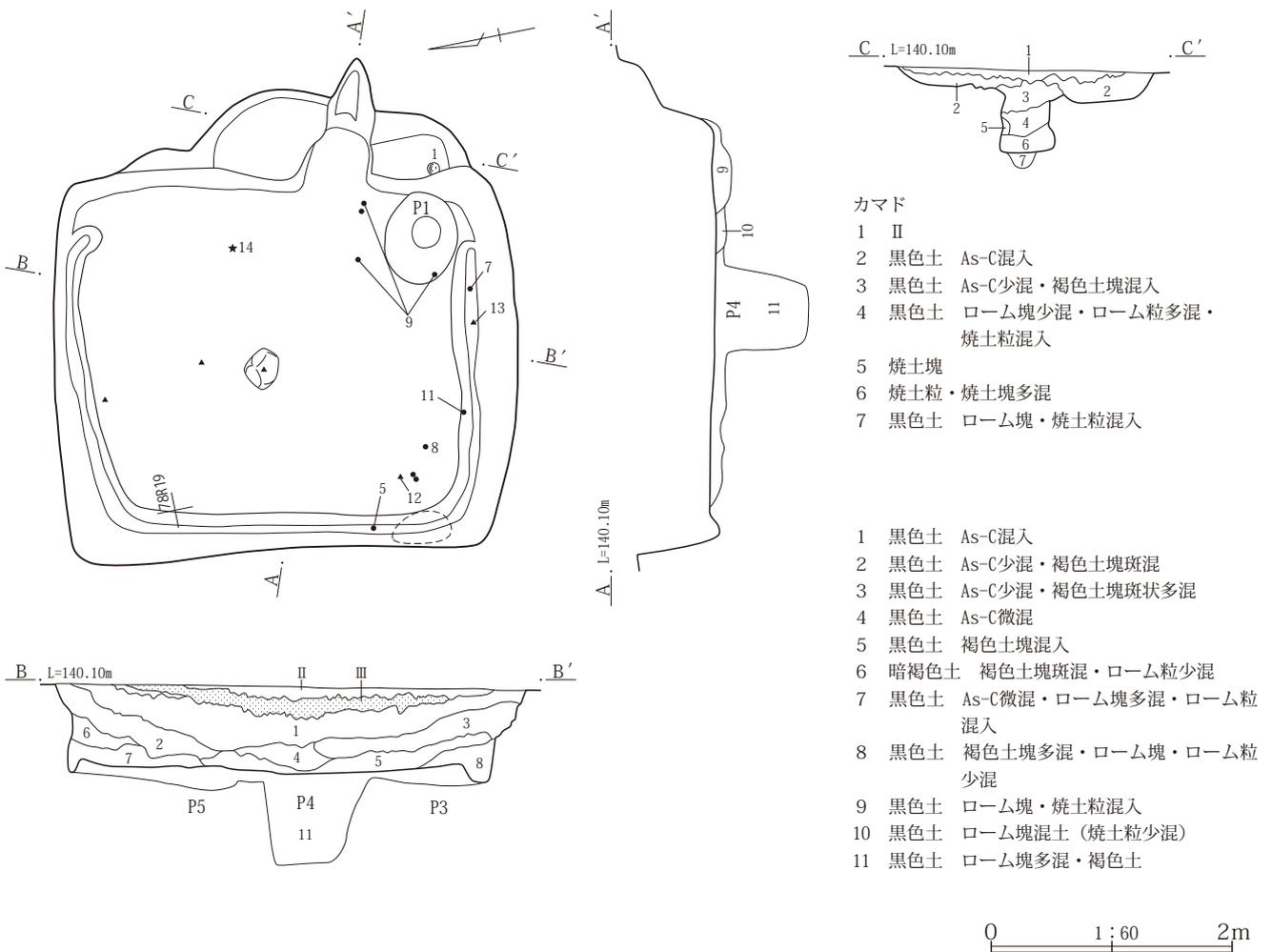
住居の掘り方は、中央の南寄りと北東隅でローム層に達する程度の浅い掘り込みが認められている。南寄りのものは、入口に関係した施設の跡ではないか。

遺物は、掲載したものが無い。数が非常に少なく、覆土からの須恵器杯の破片2点だけである。住居の中央からは、覆土の中位で大小約10点の礫が集中しているが、住居外から廃棄されたものとみられる。

住居の時期は、数は少ないながらも出土した土器の特徴からみて9世紀代である。

4号住居 (第86～88図 PL.12・50・51)

位置 78QR18・19グリッド 形状 方形 構築基準辺
西壁 カマドの両側は、棚のようで検出面より15cm低く、壁からさらに55～70cm張り出している。規模 張出部分を除いた長軸3.80m、短軸3.20m 面積 12.16㎡
主軸方位 N101°S 残存深度 0.78m カマド 東壁
カマド規模 長軸1.10m、短軸0.60m 燃烧部幅0.60m、煙道部長0.46m
覆土 上層にAs-Bの純層が堆積している。厚さは最大12cmである。床面 ローム層まで掘り込んで暗褐色土などで貼床をしている。平坦で堅い。掘り方は、北東と南西側がやや深く掘り込まれ、北西から中央部は浅くて皿状である。その中でP2とP4は、形状が整っている上に深さがあり、P2が60cm、P4が72cmでどちらも塊状のロームを主体した土で埋没している。出土した遺物はなく、用途は不明である。周溝 カマドのある東辺を除く3辺に



第86図 4号住居遺構図(1)

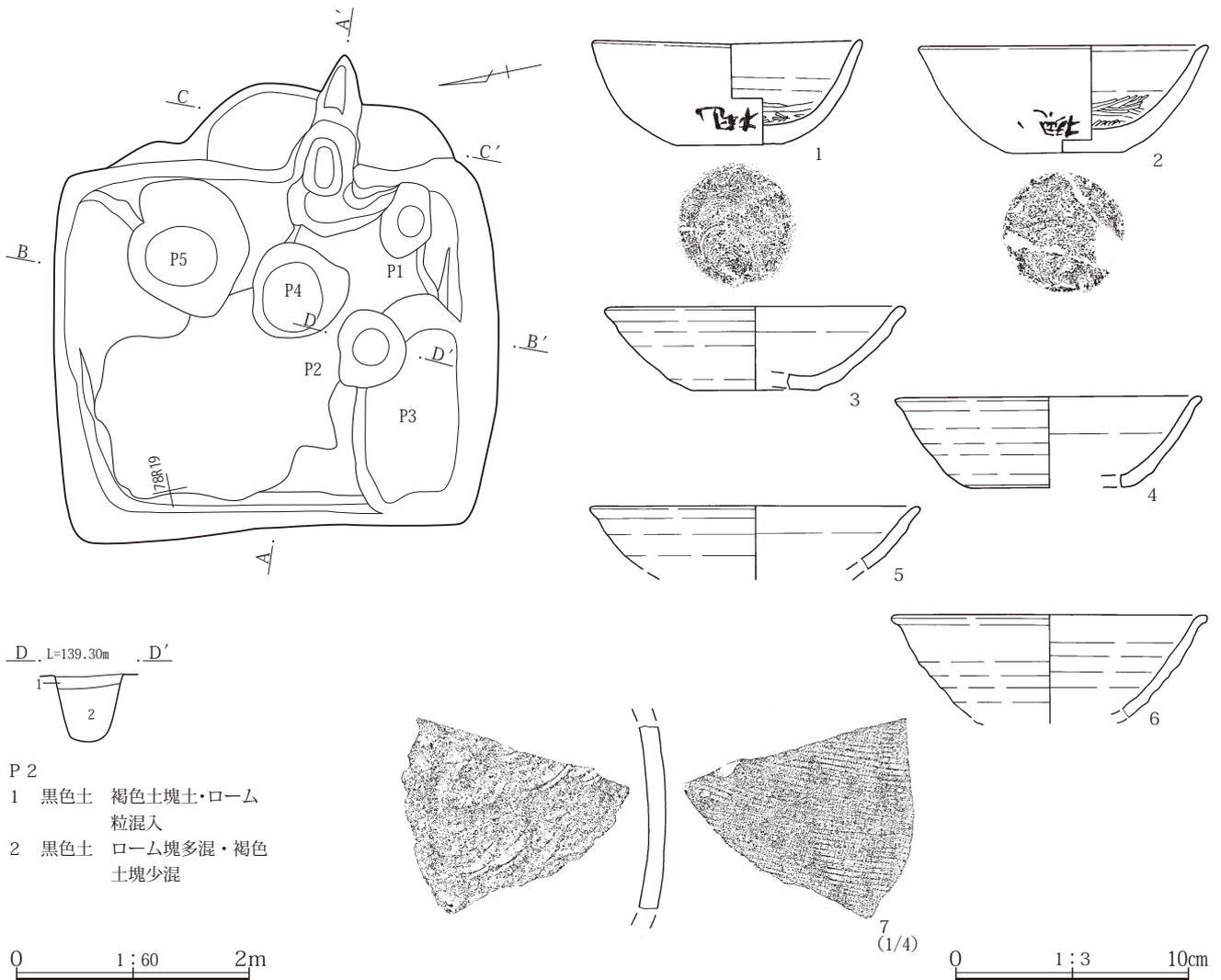
めぐる。幅が15cm前後、深さは3～14cmである。東辺は、掘り方でも溝が検出されず壁際に小さなピットを思わせる凹凸が点々としている状態である。これと関係するの、北側の周溝は東端が壁の手前30cmで内側に曲がっている。南側でも貯蔵穴の手前で途切れている。住居を拡張したためか、柵があるために壁際の構造を変えているとみられる。P1が貯蔵穴で、カマドの右脇の一角を占めている。長軸75cm、短軸57cm、深さ51cmの楕円形である。

カマドは、東壁の南寄りに作られている。直接、壁に袖口を作り、壁よりも外側に全体が突き出た構造である。間口の幅の広さからみて2穴式とみられるが、天井は崩落し、支脚も残されていない。カマドの左右には、壁の外側に柵とみられる掘り込みがある。床との段差は40cm、間口は左右とも80cm、奥行きが左70cm、右55cmである。特に右側は、その位置からみて貯蔵穴と一体にし

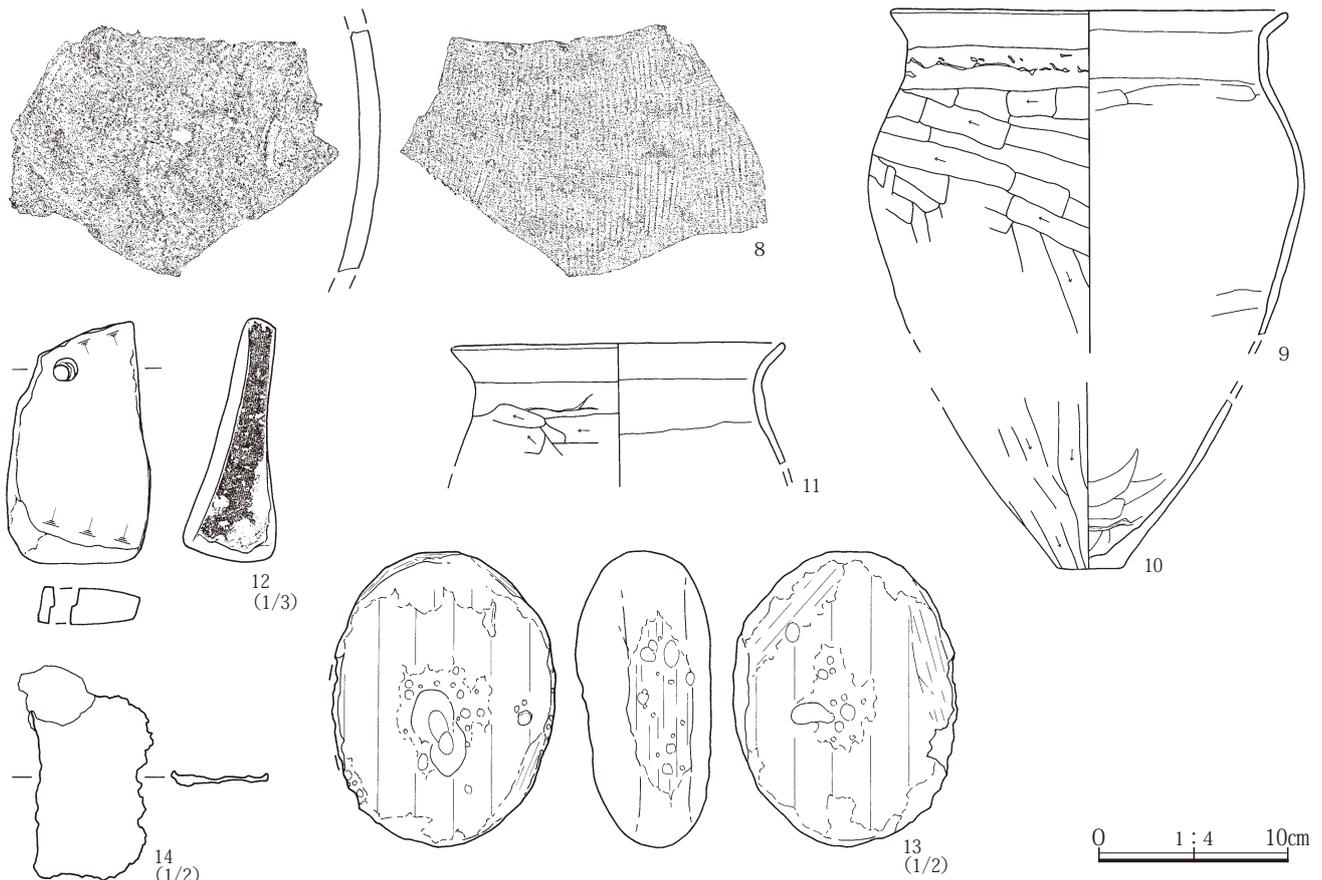
た利用が考えられるが、ここからは外面に「楓」と墨書した須恵器内黒環1点が出土している。いかにも柵に置かれていたものが、落ちたような状態である。

遺物は、貯蔵穴周辺の床直と南壁沿いにある。9の土師器甕が接合し、カマドから抜き取られたような状態に見える。「楓」の墨書は、もう1点あるが出土位置を特定できない。ほかに3～6が須恵器環、7・8が須恵器甕破片、10、11が土師器甕、12が砥石、13が軽石を利用した石製品、14が鉄製品である。これらに非掲載を含めても、出土した遺物量は少ない。非掲載は、土師器環1片、甕23片、高坏2片、須恵器環11片である。南東隅部では、床面よりも上10cm前後で炭化物の多いことが記録されている。柵に関係した痕跡であろうか。

住居の時期は、出土した土器の特徴から9世紀中頃である。



第87図 4号住居遺構図(2)・遺物図(1)



第88図 4号住居遺物図(2)

16号住居 (第89・90図 PL.18・51)

位置 88PQ4・5グリッド 形状 長方形 規模 長軸
4.70m、短軸 3.85m 面積 18.095m²

主軸方位 N78°E (南壁) 残存深度 0.65～0.68m

カマド 東壁 カマド規模 長軸1.25m、焚口幅0.40m

燃焼部長0.50m 煙道部長0.75m

所見 当住居は、台地の西端で検出された。3号住居の
北西5mの位置にある。

床面は平坦で堅い。ローム層まで掘り下げ、ローム塊
を多く含んだ褐色土による貼床である。掘り方で土坑の
ように見えるのが、掘削作業、1回あたりの単位ではな
いか。浅くて、土の量が目的ではないらしい。壁に沿っ
ての動きが推定でき、南西の隅には刃幅が20cm前後の鋤
と思われる跡が残されている。

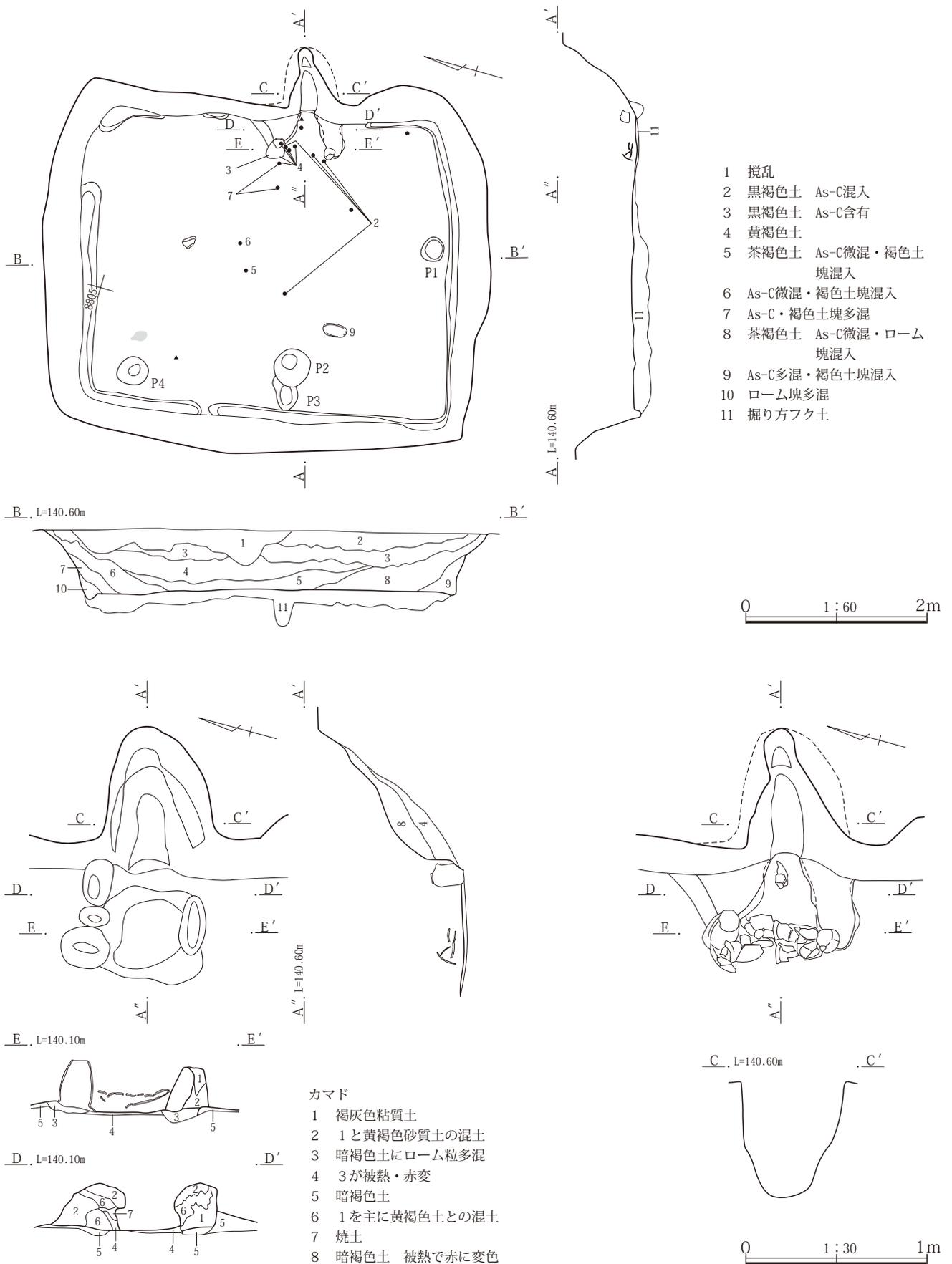
柱穴は、P1～P4の4本が床面で検出されている。4
本ともに壁際であって浅い。配置からは、掘り方で検
出されたP6、P10の2本に可能性がある。長軸・短軸・
深さは、P6が55・50・6cm、P10が43・35・9cmである。
ただし、これに対応するものが北側にはない。

カマドは、東壁の中央南寄りに作られている。燃焼部
は、壁に「コ」の字の形に作り付け、焚口を甕と石で鳥
居状に組んでいる。左袖口では伏せた甕を、右袖口では
石を芯にして粘土が厚く貼られている。粘土は、壁との
間に充てんされ、さらに天井部まで作られていたものと
みられる。支脚は、燃焼部の中央、奥壁に寄って加工さ
れた石が据えられている。床との段差は10cm、その位置
からみて1穴式ではないか。煙道は、約60度と急な角度
で壁の中段から掘り込まれている。

周溝は、北東の隅で一部が途切れるほかは、幅10～
15cmのものが全体にめぐっている。

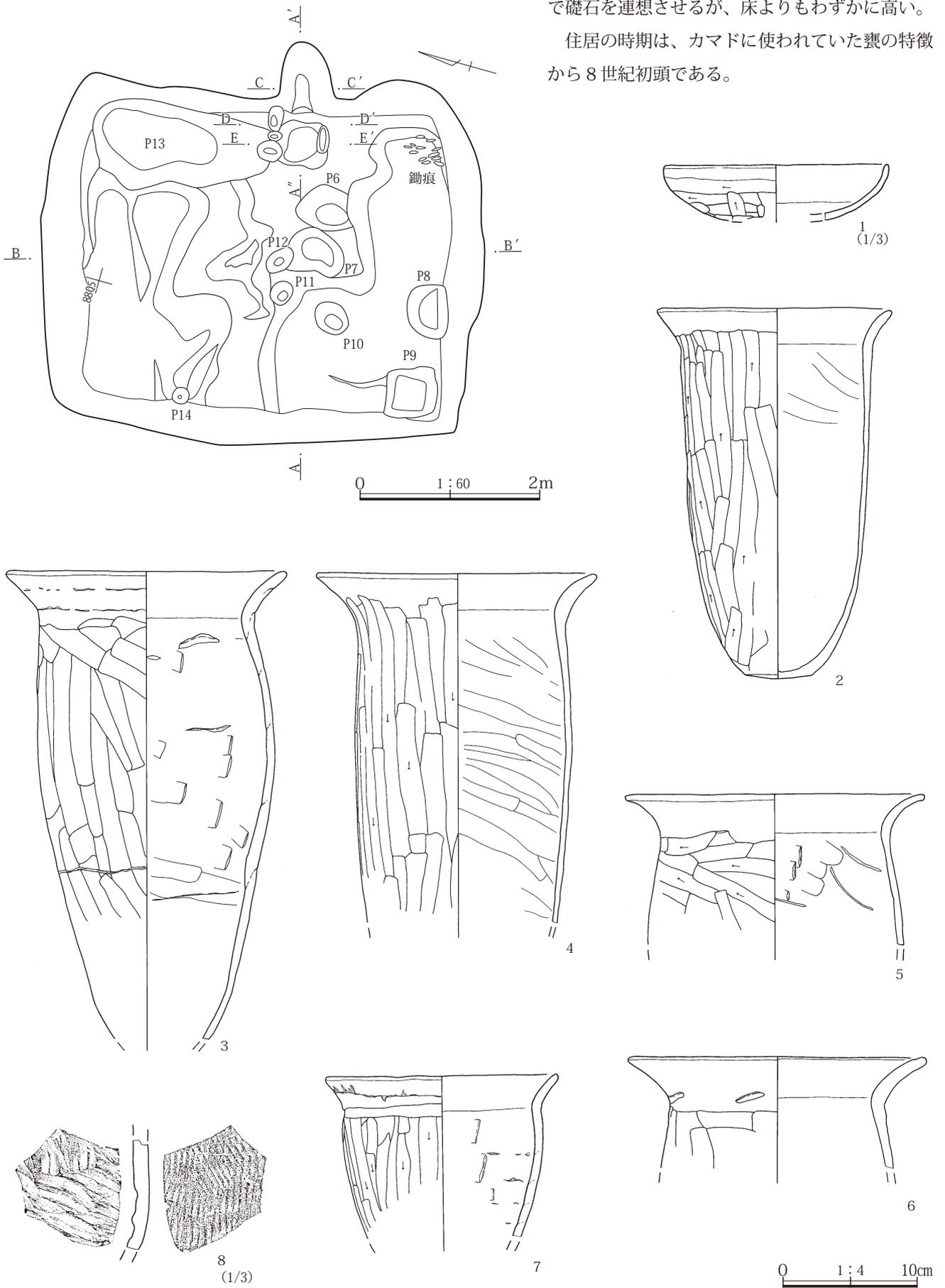
貯蔵穴は、床面では検出できず、位置と大きさから南
西隅の掘り方で検出されたP9を相当させた。55cm四方の
方形、深さは30cmである。

出土した遺物は、カマドの焚口に使われていたものを
除くと、西の壁寄りにわずかに点在している程度である。
1が土師器坏、2～7が土師器甕、8が須恵器甕である。
非掲載は、土師器の坏26片、甕159片、須恵器甕1片で
ある。P10の上面では、扁平な石が出土している。水平



第89図 16号住居遺構図(1)

で礎石を連想させるが、床よりもわずかに高い。
住居の時期は、カマドに使われていた甕の特徴
から8世紀初頭である。



第90図 16号住居遺構図(2)・遺物図

道

概要 4条が調査区の中央部を横断している。方向は、現道に平行している。覆土は、As-Bの有無で3つのケースがある。

- ①As-B純層が堆積 2号道
- ②As-Bが混入 3号道、4号道
- ③As-Bがはっきりとしない 1号道

1号道 (第91・92図 PL.24・25)

位置 調査区の東寄りで、68DE5～20、78D1グリッドにある。市道の西側を併走し、南端はその市道と交錯している。新田塚古墳をさけて緩く曲がるようである。

規模 検出長86m、幅は220～280cm、断面Bでは、最大の上幅が2.45m、その中で中心を西から東へ60～70cmずらして数時期の変遷がある。覆土は、厚さが数センチの互層状態で強く締まっている。断面Cでは、最大幅2.60～2.70m、両端が溝状に窪んでいる。溝は浅くて轍のように見えるが幅広で、それぞれが単独の道ではないか。地山まで硬化していて、断面B同様、長期にわたる使用を示すものである。北端では、全体の幅は変わらないものの両端の溝がよりはっきりとしている。

覆土からみた変遷 路面は地山のローム漸移層まで掘り込み、それを直接路面としている。土質や硬化の度合いからみて1～3層期、5層期、4層期、6層期に分けられる。1～3層期には表土に近い土が混入している。4層期、5層期は路面だけでなく、全体が強く締まっているのが特徴である。走行 N2°E

出土遺物 非掲載とした須恵器の甕の小破片がある。

所見 1号道～4号道の中では、覆土にAs-Bを含まないことから最も新しいと考えられる。年代の下限は現代に近いが、上限については轍の数、複数の硬化面の様子から近世頃までさかのぼり三夜沢道の候補の一つではないだろうか。

2号道 (第91・92図 PL.25)

位置 調査区の東寄りで、68H～L5～20、78F～H1～6グリッドにある。1号道と3号道の間を南北に併走している。ただし、走行する方位は平行していない。

規模 検出長106m、幅は1.20～3.00m、溝状の掘り方で、断面が逆ハの字形に開いている。

覆土からみた変遷 上層にAs-Bの純層が水平に堆積している。路面までは25～30cmである。断面Cでは、埋没しても掘り返したような状態が、断面Dでは底面に複数枚の薄い硬化層のあるのが観察されている。一方が普請の跡で、もう一方は土砂が流れ込んでも、そのままにして使い続けたのと往来が頻繁であったことを伝えているのであろう。走行 N20°E 出土した遺物はない。

所見 直線の溝状の点に特徴がある。硬化面は薄い、普請を重ねて使用したとみられる。

3号道 (第91・92図 PL.25)

位置 調査区の中央東寄りで、68JK15～20、78H～J1～6グリッドにある。2号道の西約20mを南北に併走している。

規模 検出長55m、幅は2.20～3.00m、2号道と掘り方が類似している。北は調査年度が違うために未調査となってしまうが、2号堀の東縁にかかるとみられる。相当する箇所では、2号堀の上端が東側の3号道方向に大きくふくらんでいる。

覆土の特徴 灰褐色砂質土の硬化層が上下3層、中心の位置を左右に変えて堆積している。硬化層が左右に位置をずらせながら複数確認されている。4層、5層には、As-Bが混入している。

走行 N14°E 出土した遺物はない。

所見 As-Bの混入状態からすると2号道よりも新しいと判断した。断面Aにある1・2・3層が4号道とすると、4号道よりは古い。As-Bを決め手とすると、2号堀が平坦になったところを通過している可能性があつて堀よりは新しいと判断する。

4号道 (第91・92図 PL.25)

位置 68KL18グリッドで削平を免れた一部を検出。3号道の西約4mに位置する。北は攪乱を受けて消失している。南は、調査区の壁で硬化面が確認されている。3号道と重複するとみられる。

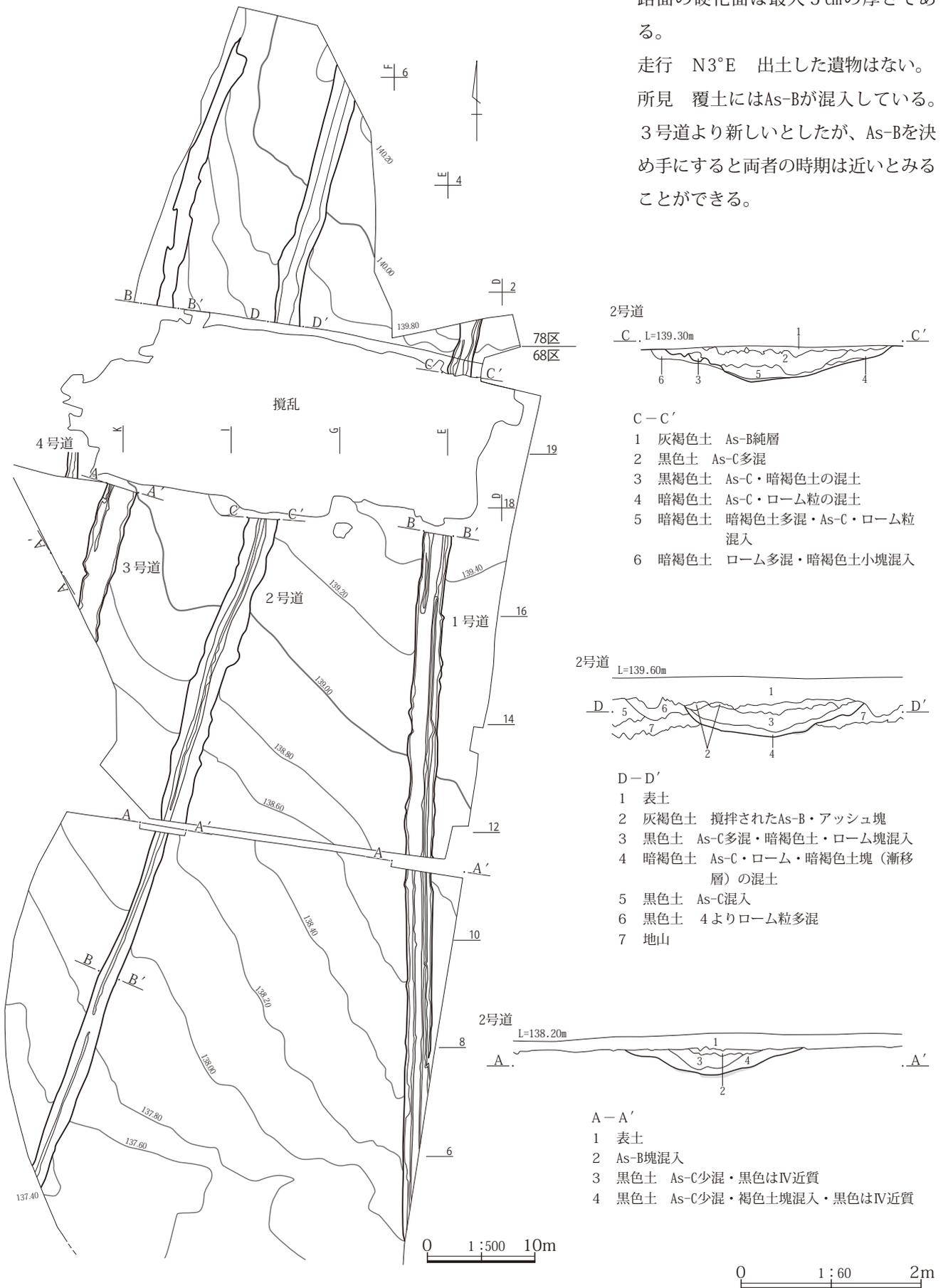
規模 検出長24m、幅0.90～1.10m、深さ14cmである。

路面の硬化面は最大5cmの厚さである。

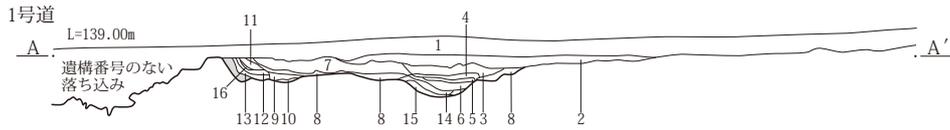
走行 N3°E 出土した遺物はない。

所見 覆土にはAs-Bが混入している。

3号道より新しいとしたが、As-Bを決め手にすると両者の時期は近いとみることができる。



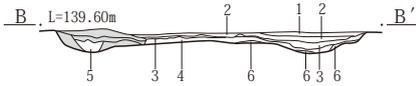
第5章 上泉新田塚遺跡群の調査



A-A'

- 1 表土
- 2 ローム塊混入
- 3 濁黒褐色土 硬化旧表土・黒色IV層塊混入
- 4 濁黒褐色土 硬化旧表土・砂質(細粒)
- 5 濁黒褐色土 硬化旧表土・砂多混(細粒)
- 6 濁黒褐色土 硬化旧表土・砂質(細粒)・2に均質
- 7 濁黒褐色土 硬化旧表土・砂質・ローム粗粒の流山混入
- 8 濁黒褐色土 硬化旧表土・3と同質
- 9 濁黒褐色土 As-C無い・砂質(細粒)
- 10 濁黒褐色土 As-C無い・砂質(粗粒)
- 11 濁黒褐色土 As-C無い・砂質(細粒)
- 12 濁黒褐色土 As-C無い・砂質(細粒)
- 13 濁黒褐色土 As-C無い・砂質(細粒)・褐色土粗粒混入
- 14 6に近似
- 15 濁黒褐色土 砂質(細粒)
- 16 炭化物と焼骨

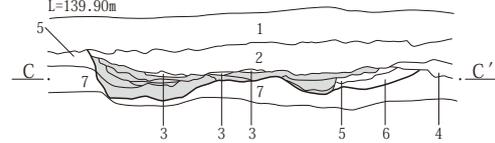
1号道



B-B'

- 1 黒褐色土 As-C多混・表土粒多混
- 2 黒褐色土 As-C多混・表土粒少混・硬化
- 3 灰褐色土 表土多混・As-C・ローム粒微混
- 4 暗褐色土 暗褐色土多混・As-C・ローム粒少混・密
- 5 暗褐色土 暗褐色土・ローム粒の混土・密
- 6 黄褐色土 ローム多混・漸移層粒混入・密

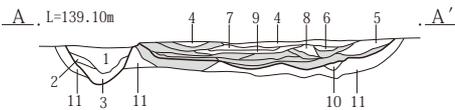
1号道



C-C'

- 1 表土
- 2 表土 表土とAs-C塊の混土・粗
- 3 灰色土 砂質土・粗
- 4 暗褐色土 6・7の混土・粗
- 5 黒褐色土 As-C混入(一部堅緻)
- 6 暗褐色土 7とAs-C塊の混土
- 7 地山

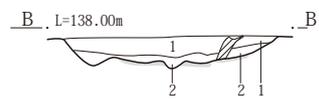
3号道



A-A'

- 1 黒褐色土 As-C・As-B・表土の混土・粗
- 2 黒褐色土 As-C多混・表土粒混入
- 4 灰褐色土 As-B多混
- 3 黒褐色土 As-C・表土・ロームの混土・粗
- 5 灰褐色土 現代の表土・3に類似・As-B多混
- 6 暗褐色土 表土多混・粗
- 7 灰褐色土 As-C・表土の混土・粗
- 8 灰褐色土 表土多混・密
- 9 灰褐色土 表土多混・粗
- 10 黒褐色土 As-C多混
- 11 地山

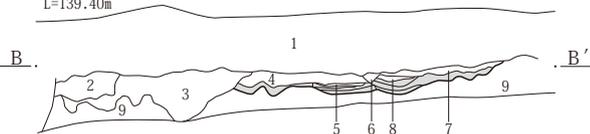
2号道



B-B'

- 1 暗褐色土 As-C黒色土・ローム・ローム漸移層の混土
- 2 黒色土 As-C黒色土多混・暗褐色土・ローム塊混入

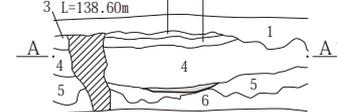
3号道



B-B'

- 1 表土
- 2 灰褐色土 現代の表土・ロームの混土・粗
- 3 灰褐色土 現代の表土・粗
- 4 灰褐色土 現代の表土・2より堅緻
- 5 黒褐色土 As-C・灰褐色土混入・黒褐色土多混
- 6 灰褐色土 現代の表土・粗
- 7 灰褐色土 現代の表土・3に類似・ローム塊混入・粗
- 8 灰褐色土 現代の表土・3に類似・As-B多混
- 9 地山

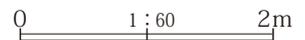
4号道



A-A'

- 1 表土
- 2 灰褐色土 As-B・暗褐色土の混土
- 3 As-B純層
- 4 黒褐色土 As-C多混・ローム塊少混・しまり弱
- 5 暗褐色土 硬化層と類似・全体に明るい
- 6 地山

■は硬化面



第92図 1・2・3・4号道遺構図(2)

第5節 中世・近世

概要

調査区付近には、「カラノボリ」用水や赤城山麓に向かう「三夜沢道」の伝承がある。調査区の北100mには「次郎坊溜」、さらに大正用水を超えた北へは用水堀の位置に相当するらしくアカシアの並木が残されている。

調査では、溝6条、堀2条、道3条が検出されている。道の中で最も古いものは、2号のようにAs-Bが降下する前にまでさかのぼる。平安時代の集落と関連して機能したものであろう。しかしAs-Bが降下した時点では、すでに平坦になっていて、わずかに痕跡を残す程度である。このように一旦は途切れたのであろうが、その後も類似した遺構が隣接しているのは偶然であろうか。2条の堀は、幹線水路として申し分のない規模で水の流れた跡も歴然としている。上流にある次郎坊溜との関連や、伝承のとおり旧大胡町滝窪から続いていたのかなど、新たに課題を提供したことにもなる。

溝

概要 6条が調査区の東西に分布している。調査区を分けている市道の東に1号溝があるほかは、5条が西にある。3条は隣接している上に平行し、場所が特定されていたかのようなのである。それは基準であったのか、残り2条は延長上で接続するかT字形に交差している。任意に掘られたものではなく、畑の区画をあらわすとみるのが妥当である。1号溝だけが東に離れているが、これも単独ではなく、併走している1号堀との関係が有力である。

6条は、いずれも幅が1m前後と小規模である。しかし、2号溝は、台地上を鍵の手にめぐり全長が100mを超している。明治年間の耕地図と照合した結果では、3号溝、4号溝が筆境に近く、2号溝と5号溝は該当するものがない。遺物が出土したのは稀で、時期を特定するにはAs-Bの有無を判断基準とした。さかのぼったとしても中世か、近世以降と判断した。

1号溝 (第93図 PL.22)

位置 調査区の東、57S・T19・20、58A～D15～19グリッドにあり、1号堀の西1～2mを併走している。北半分

は、検出面が深く削平した。南から延長すると西縁に沿うか、重複している可能性が高い。

規模 検出長28m、上幅50～72cm、南北両端のレベル差は12cm、南への下り勾配である。U字形の断面で、深さは21～28cmである。北端の標高は136.63m、南端が135.75m、南北両端のレベル差は12cmである。

方位 N28°E 出土遺物 非掲載とした土師器の坏、甕、須恵器の坏がある。埋没時の混入である。

所見 1号堀とは併走することで関係が表れているが、時期は堀が機能した全期間に対応するのではなく、埋没の進んだ後半の一時期ではないか。

堀

概要 2条が調査区を横断して検出されている。1号堀が台地の東寄り、2号堀が台地の中央部にある。幹線水路らしい大規模なものであるが、方位にずれがあり断面も違いがある。水の流れた形跡は、1号堀では壁をえぐるように強く、2号堀は利用期間が短いのか普段は道としても利用されていたのではないかと推測される。年代は、2号堀が覆土の上面にAs-Bが堆積していることから上限は古代にまでさかのぼる。数時期の変遷もある。幹線水路の役割も考えられる。1号堀は、テフラ分析の結果、As-B以後の可能性が高い。

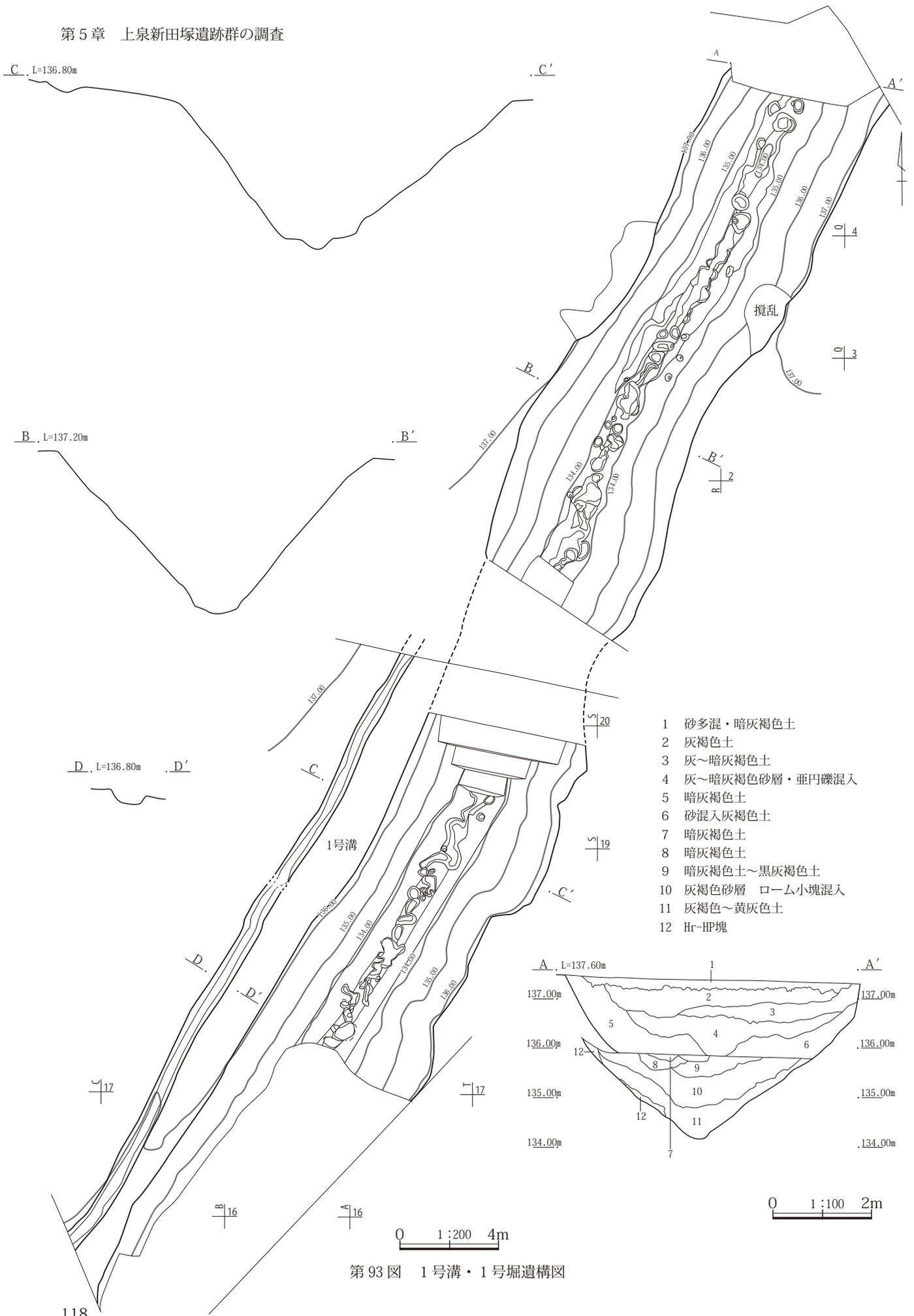
1号堀 (第93図 PL.23)

位置 調査区の東寄りで、57R～T16～20、58A～C15～18、67P～S1～5グリッドにある。用地の取得が2度に分かれたため、南北に2分割して調査する。

規模 検出長63m、幅5.50～7.00m、深さ3.00～3.30m、北端の標高は134.13m、南端が133.42mである。底面には、不整形の土坑が連続していて水が流れた跡とみられる。断面の形状は、逆ハの字形である。特に東側の中段以下で凹凸が激しい。方位 N24°E

出土遺物 非掲載とした須恵器の甕、土師器の甕、陶磁器の皿、碗、急須、器種不明の軟質陶器がある。

所見 地元に伝承されている「カラノボリ」、「トウノボリ」に該当するものか。



第93図 1号溝・1号堀遺構図

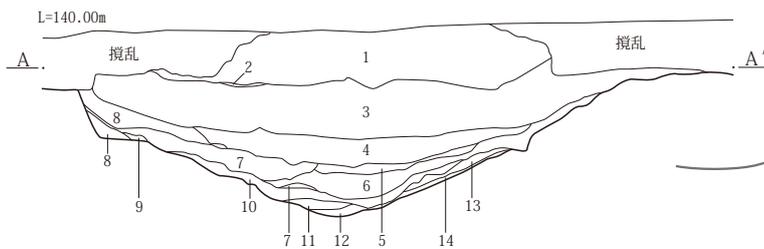
2号堀 (第94図 PL.23・24)

位置 調査区の中央部を横断、78H～O 3～9グリッドにある。北東端で北へ曲がる。東縁で北上してくる3号道と重複するとみられるが、確認はしていない。

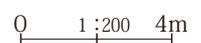
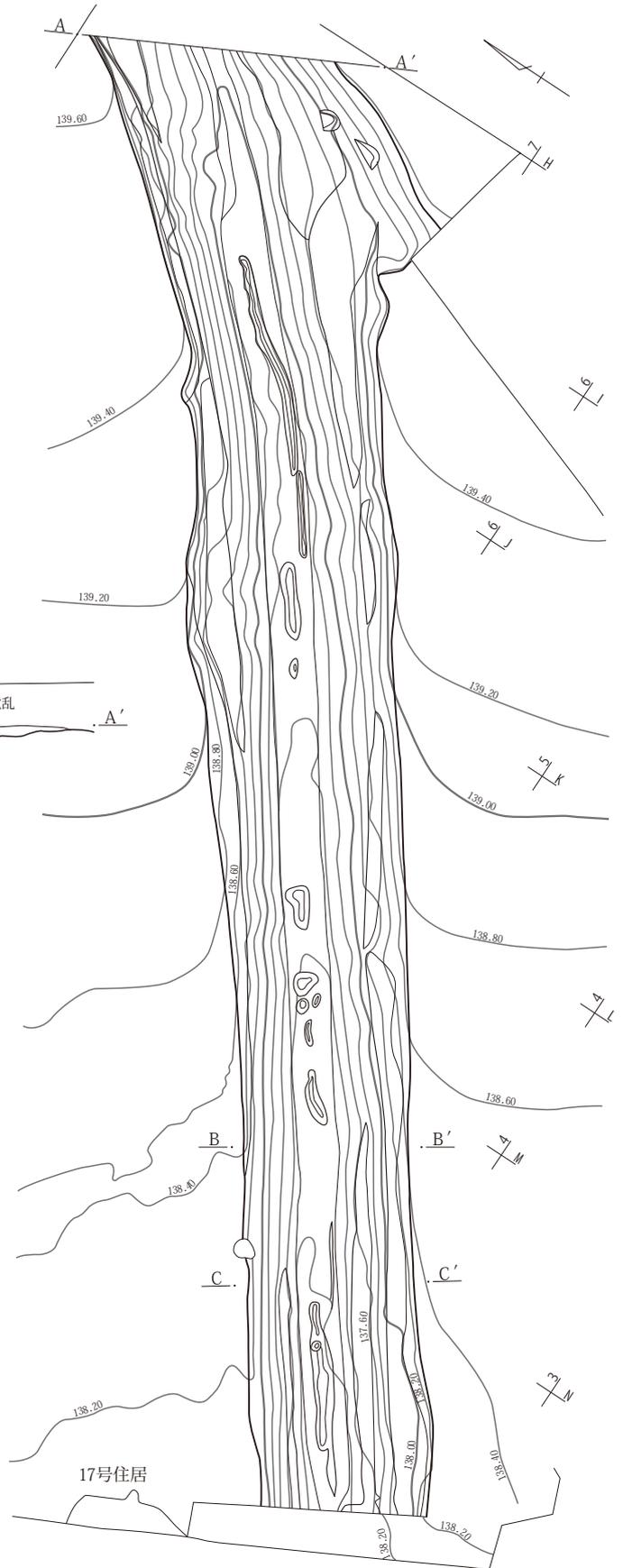
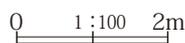
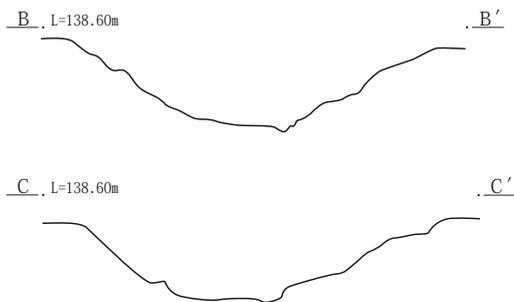
規模 検出長44m、幅5.10～5.50m、深さ1.40～1.60mである。東端の標高は138.03m、南端が137.08mである。断面は、逆ハの字に開く方台形、底面が85～100cmの幅で硬化している。方位 N53°E 出土遺物 非掲載とした陶磁器の鍋、急須、火鉢、瓦がある。

所見 北壁での埋没状況からは、中心の位置をずらしながら徐々に浅くなっていく過程が観察できる。変遷は、およそ4時期か5時期である。斜面の中段にあるゆがみは、新たに掘り込まれたか、流路の一時期である。

時期は、3号道との関係から見てAs-B降下以前である。



- 1 表土
- 2 土地改良前の表土
- 3 濁黒褐色土 粗～細粒・As-C多混
- 4 濁黒褐色土 細粒気味・As-C多混
- 5 濁黒褐色土 粗粒混入
- 6 濁黒褐色土 ローム塊斑混
- 7 濁黒褐色土 ローム塊混入
- 8 濁黒褐色土 粗粒少混
- 9 濁黒褐色土 砂質
- 10 濁灰黒褐色土 砂質
- 11 濁灰黒褐色土 濁黒褐色土の混土・砂質
- 12 濁黒褐色土 砂質・硬質
- 13 風化ローム 濁黒褐色土の混土
- 14 風化ローム



第94図 2号堀遺構図

3号溝 (第95図)

位置 調査区の中央部の78N～Q7・8グリッドを北西-南東方向に横断。西は調査区外に続き、東端が2号溝とT字形に接続している。5号溝とは掘り方の類似から、2号溝の東で北に折れ曲がり接続する可能性がある。推定部分は、検出面が深く削平してしまったものとみられる。また西端は、南に曲がっている。

規模 検出長20m、上幅55～80cm、深さ11～23cm、東端の標高が138.81m、西端が138.65m、西への下り勾配である。方位 N80°W 出土した遺物はない。

所見 2号溝より古いが、時期は特定できない。

4号溝 (第95・96図 PL.23)

位置 調査区の中央部の78J～L10～13グリッドにある。

5号・6号溝とは併走している。直線的な掘り方は5号溝と類似。南端は、2号溝とT字形に接続。その手前には土坑状の掘り込みがある。長軸が110cm、短軸が80cm、深さは66cm、溝よりも27～32cm深い。溜井の可能性も考えられたが、確定することはできなかった。

規模 検出長19m、上幅30～80m、深さ9～28cmである。北端の標高が139.84m、南端が139.28m、南への下り勾配である。方位 N19°E 出土した遺物はない。

所見 時期は、特定することができない。

5号溝 (第95図)

位置 調査区の中央部、78I～L8～11グリッドにある。

4号・6号溝の東を併走、緩く蛇行をしている。底面には、南北で46cmの段差がある。

規模 検出長20m、上幅は、北が40～72cm、南が25～52cmである。深さ7～19cmである。北端の標高は139.54m、南端が139.17m、南への下り勾配である。

方位 N36°E 出土した遺物はない。

所見 時期は、特定することができない。

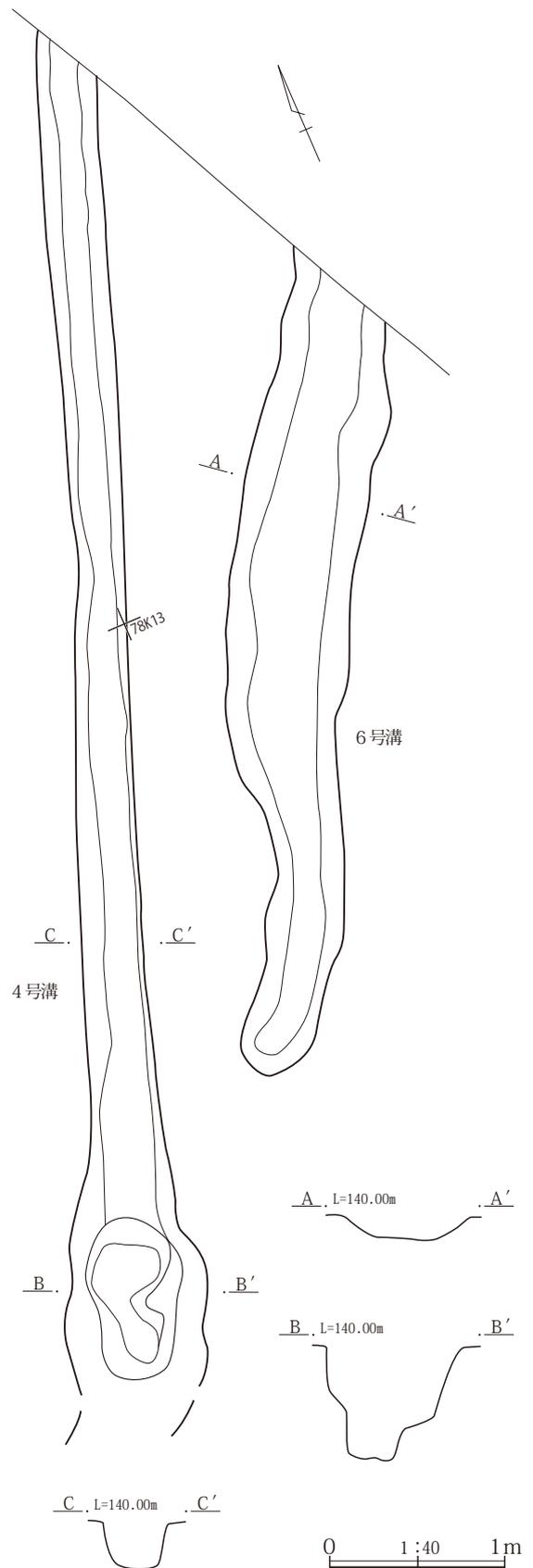
6号溝 (第95・96図 PL.23)

位置 調査区の中央部、78JK12・13グリッドにある。4号溝と5号溝の間で併走。浅く蛇行気味である。

規模 検出長4.5m、上幅40～70m、深さ6～13cmである。北端の標高は139.86m、南端が139.87mである。

方位 N29°E 出土した遺物はない。

所見 時期は、特定することができない。



第96図 4・6号溝遺構図

井戸

台地中央部に近い、古代の住居が集まる一角で1基が検出されている。低地からは東に70m離れている。309号土坑として調査したものを、検討した結果、井戸に変更した。1号井戸として報告するが、写真等の記録類は調査していた時の309号土坑のままである。

1号井戸 (第97図 PL.22)

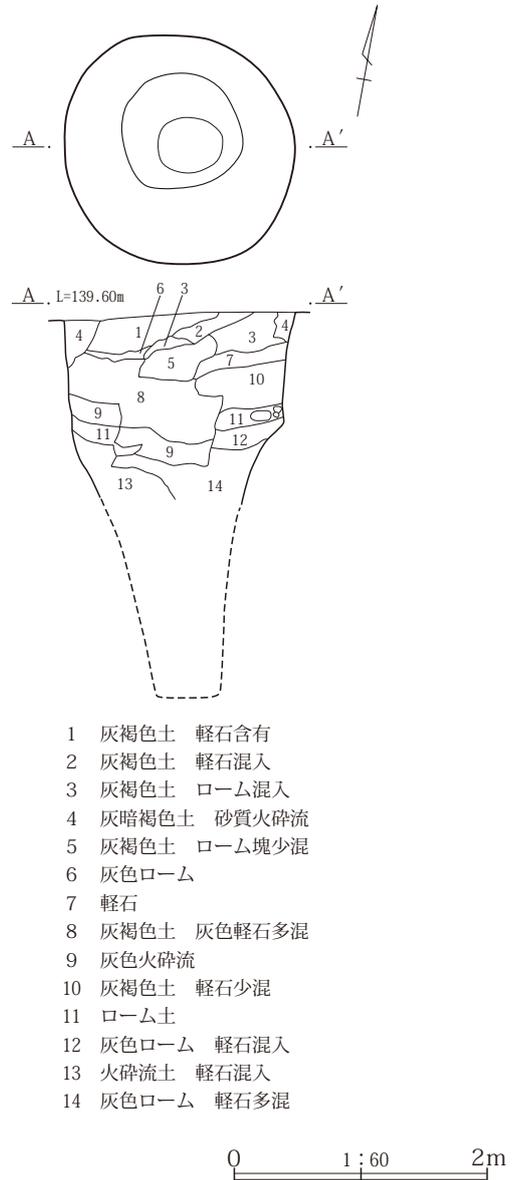
位置 78Q16グリッド、台地の中央部にある。1号・2号・4号住居が最も近く、距離は10m前後である。確認面の標高は、139.50mである。

平面 長軸1.90m、短軸1.80mの平面円形、深さは3.08mである。断面は漏斗状で、検出面から約1m下がったあたりから細くなり、中段以下は直径が90cmとなる。底面は平坦で、湧水の痕跡に乏しい。

覆土の様子 安全上、記録をしたのは検出面から深さ1.6mまで、これ以下は記録をしないで掘り上げている。1から6層は、覆土が陥没した後の流入土とみられる。7層から12層は、それぞれの厚さが20～30cm前後、水平に堆積している。互層にも見えるところから、井戸枠の裏に詰めたとみられる。中央部の8層と9層は、上下に食い違いがあり陥没したように見える。井筒が腐食して陥没した痕跡ではないか。

重複関係 単独である。最も近い所にあるのが1号・2号・4号住居で、10m前後離れている。

所見 出土した遺物はない。時期は、覆土の特徴、隣接する住居との位置関係から平安時代と考えられる。



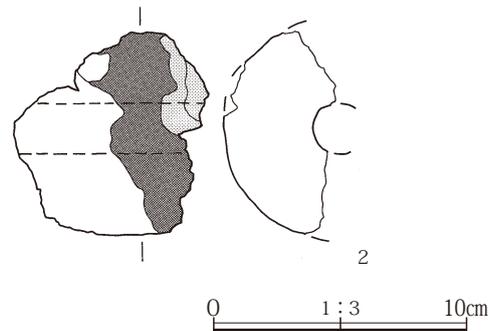
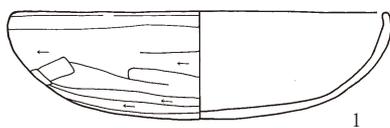
第97図 1号井戸遺構図

遺構外遺物 (第98図 PL.51)

坏は用地区画34で出土。16号住居の可能性はある。

羽口先端部片

器厚3.3cmとやや厚手。胎土には粒径の大きい白色軽石とスサを含む。先端部は黒色化しているが下半がほとんど欠損している為詳細は不明。10世紀以降の羽口か。



第98図 遺構外遺物図

第 6 章 自然科学分析

上泉新田塚遺跡群 2 号墳出土刀子の 金属考古学的調査

分析に至る経過

上泉新田塚遺跡群 2 号墳からは刀子 1 点が出土した。隣接し、並行して調査した五代砂留遺跡群では、9 世紀後半に位置づけられる鍛冶遺構と同時期の住居跡が発見され、鉄製品も出土した。分析は、鍛冶遺構出土の鉄製品及び鉄滓と、住居跡出土の鉄製品との関係を知ることが目的に岩手県立博物館に委託した。

当該分析供試料は、五代砂留遺跡群とは時代を異にしているが、同じ地域にあり製品素材としての関わりを確認するために、分析を実施した。

分析に当たり、当該供試料遺物として選定後、実測図を作成し観察を行った。観察された要件は以下のとおりである。

1 外観：全体の錆は、微細粒状が全体を覆い、棟寄りにやや膨れた錆粒が目立っている。錆色は、地で暗赤褐色、浮遊錆は橙～黄橙色を呈し、鉄味としては、良とも悪ともなく、並みであった。

2 状態：切先側及び茎先側を欠損しているが（調査以前の欠損）、総じて元の姿は留めている。鍛造も滓を喰う部分は殆ど無く、仕上がりは粗悪品とは異なる上等に類したかもしれない。

3 造り：平棟平造の刀身に両関を具備する造りである。

4 焼き：切先側及び茎側を欠損するため、詳細には及ばなかった。しかし、欠損する切先より先での焼き入れであったか、関の周辺か茎まで及ぶほどの焼き入れであったかのいずれかであり、前者の焼き入れとした場合には、刃部側に生ずるであろう萎縮が認められないことから、ほぼ、後者の焼き入れが行われたことが類推された。

5 研ぎ：小型製品であったため、研減りであるとは観察することが出来なかった。

分析の依頼内容

分析の内容は以下の 5 点を条件とした。

1：分析機材の明示。2：分析条件。3：分析供試料の取り扱い条件。4：製品素材の科学的特徴。5：上記 5 点以外で得られた所見。とした。

上泉新田塚遺跡群 2 号墳出土刀子の 金属考古学的調査結果

1 はじめに

群馬県前橋市上泉町に所在する上泉新田塚遺跡群は、国道 17 号（上武道路）改築工事に伴い、平成 18 年～同 20 年の 3 ヶ年間に渡り緊急発掘された遺跡である。発掘調査の結果、縄文時代の住居 11 棟、土坑 95 基、鎌倉時代に比定可能な溝状遺構、古墳時代の住居 1 棟、奈良・平安時代の住居 4 棟、古墳 2 基が確認された。

2 号墳は直径 20m の円墳で、前橋市指定史跡新田塚古墳の真南約 50m の所に位置する。横穴式石室と周堀の一部が検出され、出土土器から 7 世紀中葉～後半に造営された古墳、と推定されている。石室内から 1 点の刀子等が見出された。

群馬県下から出土した古墳時代の鉄器に関する金属考古学的調査としては、群馬県太田市（旧新田郡新田町）新田遺跡出土蕨手刀および群馬県伊勢崎市（旧佐波郡赤堀村）下触牛伏 1 号墳主体部出土蕨手刀が知られているが（赤沼 2009）、調査例が少なく、金属考古学的研究結果を基に、古墳時代における鉄器普及の状況を検討する状況には至っていない。

上泉新田塚遺跡群 2 号墳出土刀子の金属考古学的調査結果は、群馬県下の古墳時代における鉄器の製作と普及状況を知るうえでの基礎情報になるものと期待される。以下に、調査結果を報告する。

2 調査資料

調査資料は第99図a₁に示す新田塚2号墳出土刀子である。資料表面には土砂が固着し、鍍が析出しているもののほぼ完形で、残存状況は良好である。

3 調査試料の抽出

調査試料は、第99図a₁に示す矢印の箇所から、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使って抽出された。抽出した約0.2gの試料を2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に用いた。

4 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面をナイタール（硝酸2.5ml、エチルアルコール97.5mlの混合液）で腐食した後、金属顕微鏡で観察した。次に、1μmのダイヤモンドペーストを使って腐食面を再研磨し、カーボン蒸着後、メタル中に見出された代表的な非金属介在物を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA：日本電子株式会社・JXA8230）で分析した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、鍍をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾かし、メノー乳鉢で粉碎した後、テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、リン（P）、チタン（Ti）、ケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）、ヒ素（As）、およびいおう（S）の14元素を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法：パーキンエルマー株式会社 Optima4300）で分析した。

5 調査結果

（1）抽出した試料の調査結果

抽出した試料のマクロエッチング組織（第99図b₁）が示すように、刀身断面中央部から棟部にメタルが残って

はいるが、他は鍍化が進んでいて、いたるところに空隙や亀裂が観察される。

マクロエッチング組織領域(Reg.1)および領域(Reg.2)内部のマクロエッチング組織は、その全域が針状で微細組織、マルテンサイトによって構成されている（第99図c₁・₂）（佐藤編 1968）（東北大学金属材料研究所編 1953）。製作時の過程で焼き入れといった熱処理が施された可能性が高いことを示している。この試料から炭素量を推定するためには、焼き戻しを行い標準組織にする必要があるが、解析組織の喪失を考慮し、今回は見合わせた。鍍化した領域からは、鍍化前の地金組織を推定できる領域を見出すことができなかった。

メタルには鉄チタン酸化物とガラス化した領域からなる非金属介在物が観察された。第2表のEPMAによる定量分析結果によると、図1d₁およびd₂化合物①および②は共に、チタノマグネタイトに近い組成の化合物が析出している²⁾。黒色を呈するガラス化した領域は、CaO-K₂O-SiO₂-Al₂O₃-MgO-MnO-FeO-TiO₂-P₂O₅系である。

（2）抽出した試料の化学組成

抽出した試料のT.Feは82.24mass%で、メタルと鍍が混在した試料が分析されたことを示している。（第3表）5-(1)の組織観察結果とよく整合する。抽出した試料からは0.026mass%のNi、0.071mass%のCo、0.018mass%のCuが検出されている。他の微量元素に特徴的な値はみられない。

既述のとおり、メタルと鍍が混在したからなる試料が分析に供されている。このような場合、埋蔵環境下からの富化が懸念されるが（佐々木 村田 1984）、これまでの調査結果に基づけば、鉄器を包み込んだ土壤に0.005mass%以上のCu、Ni、およびCoが含有された例は未確認である（赤沼 2004；2009）。土壤中に100ppm以上ものCu、Ni、およびCo三成分が含有される可能性はきわめて乏しいことを考え合わせると、第3表に示すCu、Ni、およびCo三成分のほとんどは、鍍化前の地金に含有されていた可能性が高い。

6 考察

抽出した試料の組織解析結果は、新田塚2号墳出土刀

子が鋼製鉄器であり、素材となった鋼製造の過程で酸化チタンを含むスラグと鉄とが接触した状態が存在していたことを示している。非金属介在物中に見出された鉄チタン酸化物の起源としては、地金の製造時に使用された原料鉱石、炉壁材または鋼製造に使用された道具類からの混入、造滓材、利用不能となった鋼製鉄器を再利用する際の混入などが考えられ、その特定は難しい。この点については、新田塚 2 号墳出土刀子とほぼ同時代に用いられた生産設備、および生産方法などの調査結果をふまえ、慎重に判断する必要がある。

古代における鋼製造には複数の方法が用いられていた可能性が高い(赤沼・福田1997)(赤沼・佐々木・伊藤2000)²⁾。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは間違いない。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、最終的に得られる鋼の組成にはばらつきが生じる。錆化が進んだ資料の場合には、埋蔵環境からの富化の影響についても検討する必要がある。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ摘出した試料の組成分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。製造法の如何に係わらず、地金を精度高く分類する方法の確立が必要である。

銅 (Cu)、ニッケル (Ni)、およびコバルト (Co) の三成分は鉄よりも錆びにくい金属であるため、鉄中に取り込まれた後は、そのほとんどが鉄中にとどまると推定される。5 (2) で述べたとおり、調査資料に含有される Cu・Ni・Co 三成分が埋蔵環境下から富化された可能性は乏しい。従って、合金添加が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に関わらず、製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

表 2 の分析結果から (mass% Co) / (mass% Ni) (本稿では Co* と記載) と (mass% Cu) / (mass% Ni) (本稿では Cu* と記載)、(mass% Ni) / (mass% Co) (本稿では Ni** と記載) と (mass% Cu) / (mass% Co) (本稿では Cu** と記載) をそれぞれ求めると、表 2 右欄のとおりとなる。その値をプロットしたものが図 2 である。なお、図には参考として、茨城県稲敷市東大沼 7 号墳石棺内出土刀剣類 (6 世紀後半～7 世紀代) (Rf1-6)、茨城県稲敷市福田 6 号

墳主体部出土刀剣類 (古墳時代後期) (Rf7・8)、茨城県稲敷市水神峰古墳主体部箱式石棺内出土 (6 世紀後半～7 世紀代) (Rf9)、茨城県土浦市高崎山西支群第 2 主体部出土 (6 世紀前半) (Rf10・11)、茨城県つくば市中台遺跡 21 号墳析出土 (6 世紀後半～7 世紀前半) (Rf12・13)、群馬県太田市 (旧新田郡新田町) 新田遺跡出土蕨手刀 (7 世紀代) (Rf14)、群馬県伊勢崎市 (旧佐波郡赤堀町) 下触牛伏 1 号墳主体部出土蕨手刀 (7 世紀中葉～7 世紀後半) (Rf15) の 15 資料 (赤沼 2009) についてもプロットした。また、図では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった鋼製鉄器を黒丸 (●)、鉄チタン酸化物が見出された鋼製鉄器を星 (☆)、非金属介在物が見出されなかった鋼製鉄器を白三角 (△) で示した。

図から明らかなように、新田塚 2 号墳出土刀子に近似した三成分比をとる鉄器として、6 世紀後半～7 世紀前半に比定される茨城県つくば市中台遺跡 21 号墳石室から出土した刀剣 (Rf12) を挙げるができるが、その数はきわめて少ない。群馬県から出土した 2 振りの蕨手刀と新田塚 2 号墳出土刀子とは三成分比が大きく異なる。加えて、図 2 に示す調査資料以外の鉄器 15 資料に、鉄チタン酸化物が混在した非金属介在物は見出されていない。この分析結果をふまえると、第 100 図に掲載した資料の中で、新田塚 2 号墳出土刀子の製作に使用された地金とほぼ同じ組成の地金を用いて製作された、とみることのできる資料を列挙することは困難である。

第 100 図の結果は、以下の 3 点を考慮に入れ、7 世紀代の群馬県下における鉄器普及を考える必要があることを示している。

- ① 7 世紀代、群馬県下には異なった地域で製作された製品鉄器がもたらされていた
- ② 7 世紀代、群馬県下には異なった地域で製造された原料鉄が運び込まれ、目的とする器形の鉄器に加工された
- ③ 時代の推移とともに、製品鉄器または原料鉄の製造地域が変わった

上記①～③を考慮に入れて、7 世紀代に比定される遺跡から出土した鉄関連資料の調査を進めることにより、当該時期の群馬県下における鉄器普及の実態がより一層明確になるものと思われる。

注

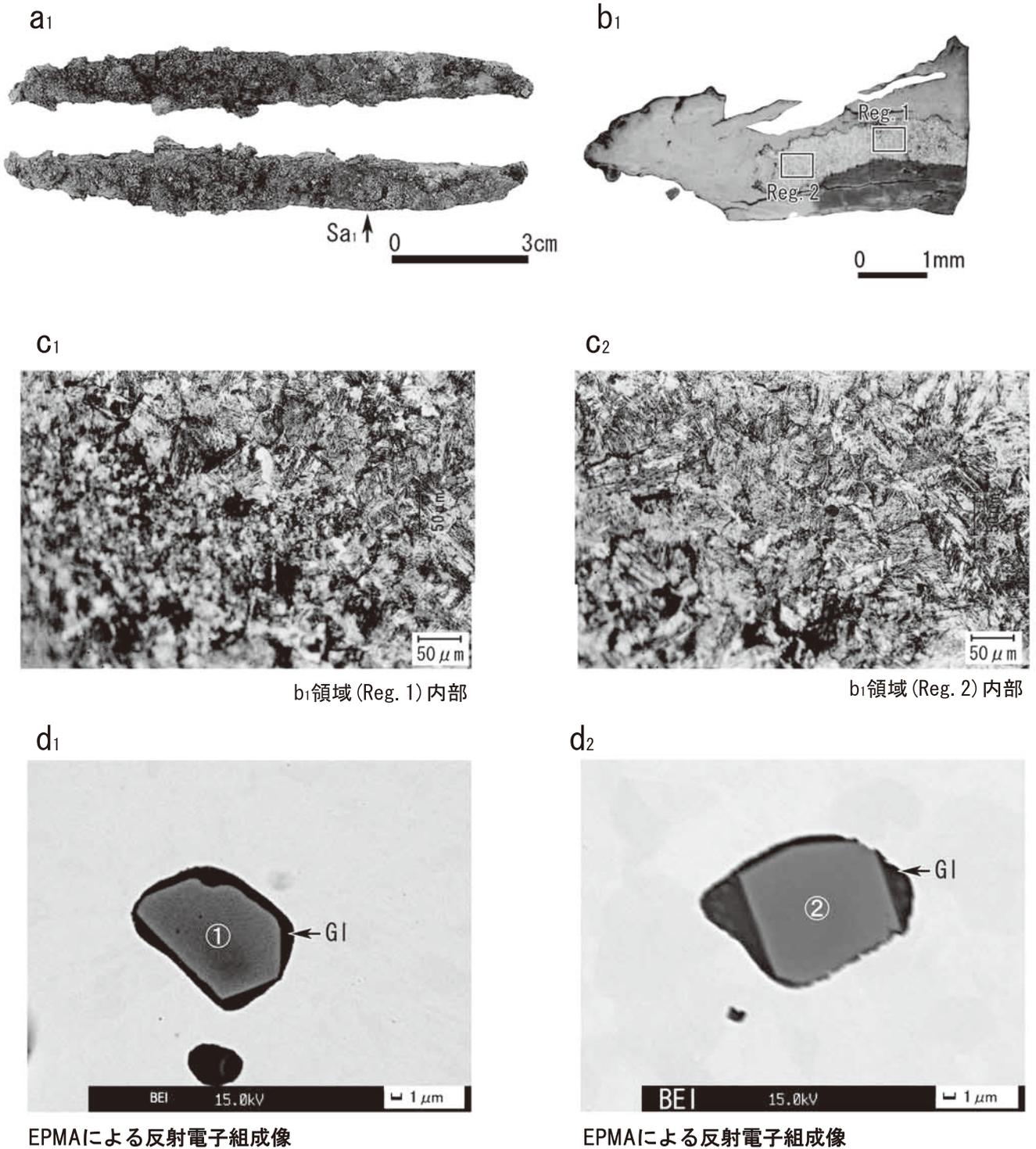
1) 第2表ではTi₂O₃、V₂O₃と標記したが、これはあくまで便宜的なもので、TiおよびVの価数については、状態分析を行うなどして確かめる必要がある。

2) 古代の鋼製造法については複数の方法が提案されている。製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄に分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、鋼製鉄器が製作されたとする見方がある。製錬炉で直接に鋼がつくり出されるという意味でこの方法は、近世たたら吹製鉄における鋤押法によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている）〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶と呼ばれている。古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので（溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2mass%の鋼を溶融するためには少なくとも炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述の事情によるものと推察される。

夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の普及が示すように、遅くとも9世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち炉内で生成した銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていた、とする見方が提示されている。得られた銑鉄を溶融し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法に位置づけられる。

引用文献

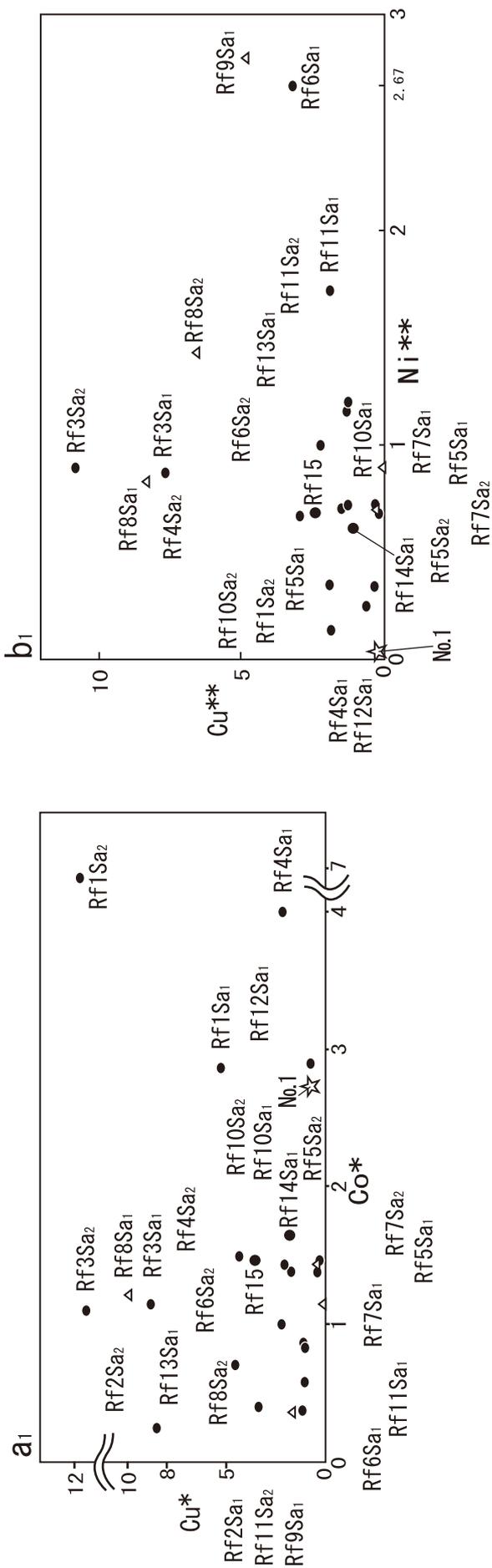
- 赤沼英男 2009『東北地方北部および北海道出土刀剣類の形態と組成からみた日本刀成立過程』岩手県立博物館、pp.22-59
- 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫 2000「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、pp.553-576
- 赤沼英男・福田豊彦 1997「鉄の生産と流通からみた北方世界」国立歴史民俗博物館研究報告、72、pp. 1-40
- 佐藤知雄編 1968『鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社
- 佐々木稔、村田朋美 1984「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、pp.27-33
- 東北大学金属材料研究所編 1953『金属顕微鏡組織』



EPMAによる反射電子組成像

EPMAによる反射電子組成像

a₁: 外観。矢印は試料摘出位置。b₁: 摘出した試料のマクロエッチング組織。エッチングはナイトールによる。c₁₋₂: それぞれb₁領域Reg. 1およびReg. 2内部のミクロエッチング組織。d₁₋₂: メタル中に検出された非金属介在物のEPMAによる反射電子組成像(BEI)。①・②は定量分析位置(表2に対応)。Gl=ガラス質ケイ酸塩。



Co** = (mass% Co) / (mass% Ni), Cu** = (mass% Cu) / (mass% Ni), Ni** = (mass% Ni) / (mass% Co), Cu** = (mass% Cu) / (mass% Co)。No.1：新田塚2号墳出土刀子。Rf1-6：茨城県稲敷市東大沼7号墳石棺内出土刀剣類（6世紀後半～7世紀代）、Rf7・8：茨城県稲敷市福田6号墳主体部出土刀剣類（古墳時代後期）、Rf9：茨城県稲敷市水神峰古墳主体部箱式石棺内出土（6世紀後半から7世紀代）、茨城県土浦市高崎山西支群第2主体部出土（6世紀前半）、茨城県つくば市中台遺跡21号墳析出土刀子（6世紀後半から7世紀前半）、Rf14：群馬県太田市（旧新田郡新田町）新田遺跡出土藤手刀（7世紀代）、Rf15：群馬県伊勢崎市（旧佐波郡赤堀町）下触牛伏1号墳主体部出土藤手刀（7世紀中葉～7世紀後半）。星（☆）= 非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された試料、黒丸（●）= 非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった試料、白三角（△）= 非金属介在物に見出されなかった試料。Sa1, Sa2はそれぞれ刀剣の刃部および棟部から抽出した試料。

第100図 抽出した試料に含まれるNi・Co・Cu三成分比

第2表 非金属介在物中に混在する鉱物相のEPMAによる定量

鉱物相	図番号	化学組成 (mass%)										合計		
		Na ₂ O	FeO	MgO	CaO	MnO	Al ₂ O ₃	Ti ₂ O ₃	ZrO ₂	V ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃		P ₂ O ₅	
①	1c1	0.04	43.1	12.3	0.17	<0.01	13.3	26.6	<0.01	0.16	3.30	0.37	0.05	99.39
②	1c2	<0.01	0.02	42.0	12.8	0.18	<0.01	14.3	24.8	0.03	3.96	0.44	<0.01	98.58

第3表 調査試料の化学組成 (mass%)

T, Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	As	S	Cu・Ni・Co三成分比			
														Co * (Co/Ni)	Cu** (Cu/Ni)	Ni** (Ni/Co)	Cu** (Cu/Co)
82.24	0.018	0.026	0.071	0.003	0.03	0.016	<0.01	0.021	0.005	0.010	0.002	<0.01	0.02	2.73	0.69	0.37	0.25

第7章 調査のまとめ

2つの遺跡は、7工区、8工区を合わせると長さが700 mにも及び、台地を北西から南東の方向に横断している。西には荻窪川が南下し、恵まれた環境にあるといえる。周囲には、第2章で詳述したように遺跡が多い。

『勢多郡誌』によれば、調査区の付近には縄文時代の遺跡が多くあり上泉字新田塚遺跡のほか、「群馬県看護協会」付近が上泉保養所前遺跡、「たやの家」から西側が上泉字風袋遺跡である。調査ではトレンチで掘り抜いたか、接したような位置関係にあたるのではないだろうか。地形上境界となるものはなく、線を引いて区別するのはむずかしい状況である。群馬県文化財情報システムには、上泉唐ノ堀遺跡が前橋市 00774、上泉新田塚遺跡群が同 00775 と表示されている。上武道路の調査がもとである（第5図参照）。

検出された遺構・遺物は、旧石器時代から近代にまで多岐にわたる。中では、縄文時代前期の資料が充実している。特に二ツ木式期は、上泉新田塚遺跡群で6軒の住居が環状にめぐり集落の中心部を明らかにしたとみられる。その後の動向としては、道や堀のように遺跡の枠を越すものも現れるが、遺構の数が少ない上に台地の縁辺部に集まりがちで、低地とのつながりの強かったことが分かる。しかし重複がないことから、ただちに集落の縁辺部とみてよいのかとなると評価の分かれるところである。また肝心の低地の調査を欠いたことは、今後課題を残したといえよう。

上泉唐ノ堀遺跡については7工区分と合わせて、第1節、第2節で遺跡の変遷と特徴、第3節、第4節で縄文時代の石器、第5節で黒色安山岩の原産地について述べ、まとめとする。

第1節 上泉唐ノ堀遺跡の変遷と特徴

縄文時代 7工区では黒浜式期から諸磯b式期の住居15軒、掘立柱建物6棟、土坑200基あまりが検出され、台地平坦部と斜面寄りという、占地を異にした2群のことが分かっている（群埋文2010）。これに諸磯b式

期住居1軒、土坑9基を追加することができた。7工区の集落の西縁辺部とみたのは、1号住居が7工区に最も近い調査区の南端にあるからで、調査区の北西寄りにある土坑とは距離を置く。別の一群があるとみたのは、土坑の分布状況と、その中で251号土坑が住居の可能性を持つからで、別の一群とすれば土坑が1号住居から離れているのもうなずける。7工区では、16号住居が加曾利E3式期であった。調査区外の隣接地には、中期加曾利E式土器が散布している。新田塚古墳の北東には新田塚沼がある支谷が伸びてきている。別の一群は、これに面しているのではないか。

奈良・平安時代 7工区では、北と南に分かれて住居群のあることが明らかにされている。8世紀第2四半期から後半にかけて継続し、9世紀前半には調査区内から遺構が姿を消している。ただ隣接する荻窪南田遺跡の低地ではAs-B直下で水田が検出されていて、これに対応する時期の集落が至近距離にあるものとみられている（群埋文2008）。

調査の関心は、7工区での成果から8工区で遺構がどう展開するのかにあった。しかし第4章で詳述したとおり遺構はなく、あったのは7工区内の台地縁辺部だけで、ここに集中する状況の特徴づけることとなった。では、上泉新田塚遺跡群まで続く台地の中央はどんな状況であったのか。畠をイメージしたいが、先述したようにこれに関係した遺構は検出されていない。土地改良で削平されたからというのでもない。見た目以上の高低差があるために利用を避けたか、現代と同じように水が泣き所であったのか。加えて7世紀代までの墓域に近いことも理由のひとつとしてあげられるだろう。

第2節 上泉新田塚遺跡群の変遷と特徴

ここでも台地縁辺部に遺構が集中していて、状況は東と似ている。違うのは遺構の時期で、東と西で往復でもしていたかのように入れ替わっている。縄文時代は、先行して前期前葉～中葉に集落の最盛期を迎えている。東

で空白だった7世紀には、住居だけでなく古墳が築造されている。『上毛古墳総覧』（以下総覧）によれば、荻窪川沿いには後期の円墳が30基ほどある。調査できた新田塚古墳は、その中でも象徴的な存在である。8世紀はなくて、9世紀になると前半から中頃に再び住居が作られている。集落の縁辺部であったのか住居の数は少なく、重複もない閑散とした様子である。

台地の中央はどうであったのかといえば、変化の兆しがAs-Bの降下前から表れている。居住の場だった所が閑散となるのに代わって、何もなかった台地中央を道や堀が通過する。期待した畠はない。3号住居と4号住居の上面にAs-Bが堆積したままであるのをみると、不向きというわけではないが開墾とは無縁の場であったのだろう。開墾が継続するのは近世になって、2号溝などが区画の跡である。中世の遺構が抜け落ちているのはなぜなのか。出土した遺物もなく、気になるところである。

道は、台地の中央に繰り返し作られている。区画の基準であったのか直線というのが共通の特徴で、硬化面が盛んに利用されていたことを物語っている。調査区付近には「三夜沢道」があったと教示されたが、桂萱村耕地図には複数の道があり確定することができなかった。むしろ、直線で水の流れた形跡がない2号堀に、その可能性を指摘しておきたい。見解は分かれたが耕地図の筆境と全く一致していないところに古さがあるように感じられる。それに対して1号堀は、水の流れた跡が歴然としている。As-B降下後に掘削されたもので、女堀まで通じていたのではないかと思わせる。

以上、台地上での成果があるのに、西側の低地では調査がされていない。これが課題で、居住域と墓域に対応する生産の場はどこにあったのか、目の前の低地がどんな状況であったのかということである。当然水田を予想するところであるが、試掘調査ではその跡は認められなかった。台地の東側、荻窪南田遺跡ではAs-B直下で水田を検出できたものの、プラント・オパール分析の結果は低い数値である。それ以前のの水田となると、可能性はあるというだけで遺構として検出できたわけではない。継続して開墾しているようにはみえない。

これは広瀬川低地帯が主たる生産域で、本遺跡が面するような細々とした谷地は耕地拡大の時にだけ利用される、二次的な所であったことを意味しているのであろう

か。現在のところ、低地イコール水田とみるのは誤りで、隣り合っていないながら谷地の一方だけを水田として開墾している鳥取福蔵寺遺跡もある（前橋市文化財調査団1998）。また、適地と思われたのに水田がないという端氣着帳遺跡もある（前橋市教育委員会1983）。本遺跡も、この例に漏れない。畠も8工区の沿線では報告がないのが実情である。生産域の解明は、この地域が抱える課題であるといえる。

1号堀とカラノボリ

検出したのは南北約60mだけであるが、伝承のカラノボリである。水の流れた跡があり、最大幅は5mを超している。単なる空の堀ではないらしいことが明らかとなった。実在したことで、流路、掘削年代が課題となる。As-B降下後と考えた掘削年代は、テフラ分析の結果（未掲載2006）を踏まえたもので、覆土の最下層128層には「As-Bに由来する可能性が高い軽石が検出されたこと」（報告書から引用）を理由としている。女堀に関係があるのかとしたのも、この年代観によっている。

名称にはトウノボリ、カラノホリの二者があり、遠ノ堀、空ノ堀などの字があてられている。伝承のとおりなら、「旧大胡町滝窪で寺沢川から分水し、本遺跡に至るまで途中いくつかの沼を経由して、上泉町赤坂に通じていた」という（荻窪町故青木博久氏教示）。水の確保には苦しんだ土地柄だけに、大正用水が通じるまでの水利慣行を、こんな風にして伝承してきたのではないか。

山崎一氏は、塔ノ堀の字をあて荻窪城の一部、遠構えとみている（1971）。説明はないが、城との位置関係がおもな理由だったのではないか。耕地図の細い帯は、調査地点からみて谷地をはさんだ北側から主要地方道渋川大胡線手前までの間、約500mである。大きく6期に分けた埋没過程からは、最後に幅が1m程度になるまでの変遷が分かる。この間の一時期が城の構えに利用され、そこだけ耕地図に残ったとしておきたい。

新田塚古墳と荻窪川沿いの古墳

『総覧』には、上泉町だけで42基が登載されている。そのうちの30基あまりが上武道路の通過する荻窪川をはさんで東西の台地上にある。しかし、そのほとんどは土地改良等で削平されて詳細が分からない。近くでは曹

洞宗了覚寺と周囲に桂萱村 40 号～50 号の 11 基があったが、全て更地となっている。唯一残っていたのが前橋市指定史跡新田塚古墳で、『綜覧』記載漏れ古墳 1 基とともに調査することができた。

新田塚古墳は、地権者等によればかつては石室が開いていて漬物樽を保管したこともあり、中では小学生が立つことができたという。石室は南開口の横穴式、玄室内の高さが小学生の背丈程度とみてよいだろう。

調査の結果、周堀の存在することが明らかとなり、全周する可能性が強い。史跡は墳丘だけで指定の範囲に検討が必要であろう。出土した土器からは、7 世紀中頃という築造年代の手掛かりを得ることができた。周堀は、これまでも予測されていたが、違ったのは位置が外側だったことで、墳丘との間には地山を採掘した跡がある(第 74 図参照)。周堀と採掘坑との間に時差はなく、採掘したのは八崎軽石層で石室の被覆や、墳丘の構築のためだったと考えられる。

石室の前庭を一度掘り下げ、埋め戻すことは、これまでも知られている(加部 1999)。それらにくらべ前庭よりも左寄りにあって、深すぎる上に規模が大きい。壁の中段に横穴を掘って坏を納めたようにしてあるのは、祭祀でよいのか。これも完掘されていないために、疑問の残る所である。

主体部について、参考となるのが 2 号墳である。地域にとっては貴重な調査例であった。『綜覧』記載漏れ、直径が約 25 m の円墳で、築造は前庭から出土した土器の特徴から 7 世紀中頃と判断した。主体部は南に開口する横穴式で、自然石を使用している。地山への掘り込みは浅くローム層の上面までである。南東向きの斜面を利用して作られ、新田塚古墳とは前後に縦列する位置関係にある。ともに 7 世紀中頃で、文字通り相次いで作られたとみられる。また調査中に寄せられた情報では、なお 1 基あったとのことである。候補地は 2 基の間と、その北東斜面である。隣接地では、今後の注意が必要である。なお、東の低地、荻窪南田遺跡側からみて上り詰めた位置になることから、台地の西側とは別、寺沢川流域の一支群の可能性のあることを付記しておきたい。

縄文時代前期の集落

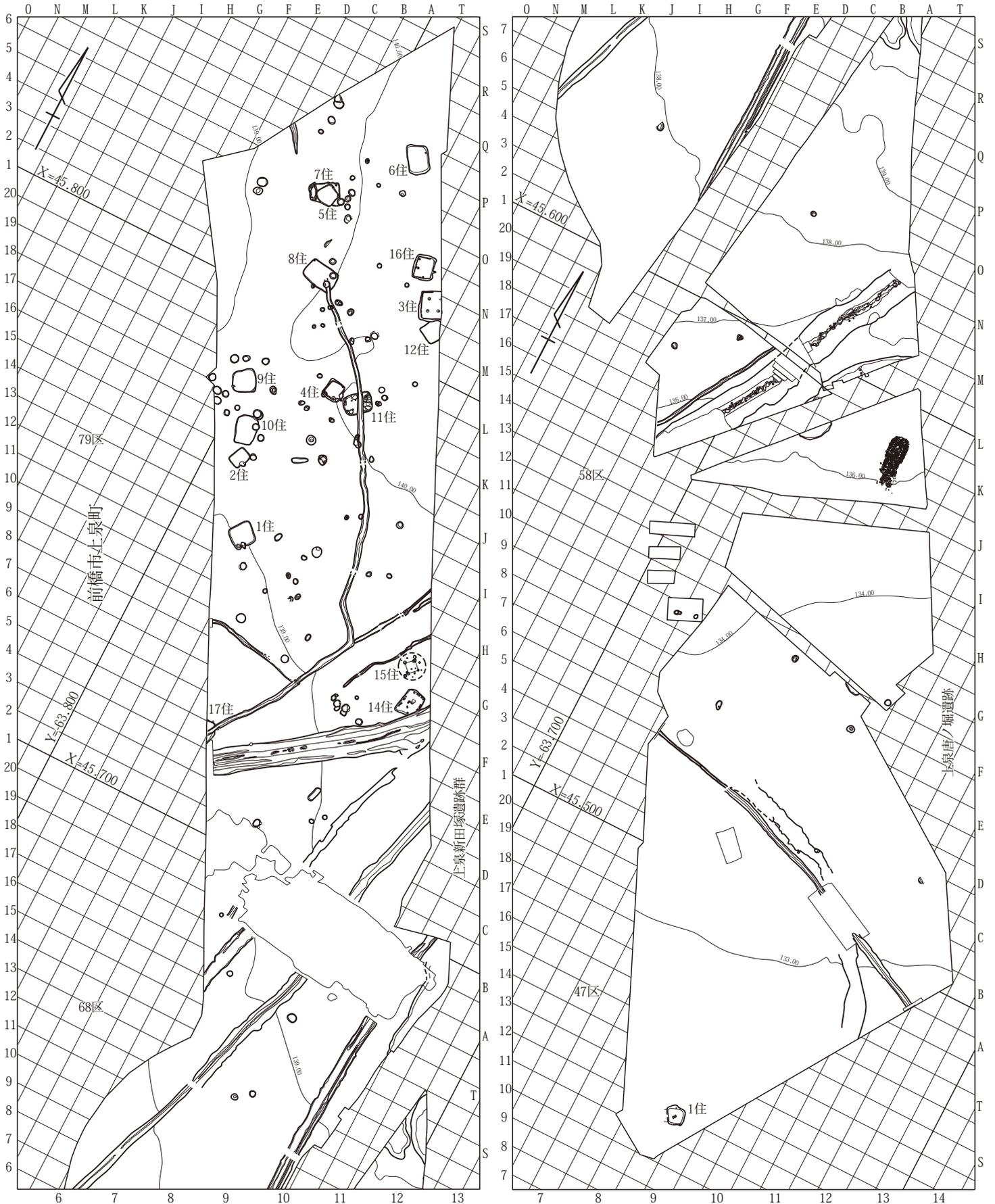
二ツ木式期が主体で、住居が 6 号・7 号、8 号・10 号・

11 号・12 号の 6 軒ある。関山 I 式期が 14 号住居、関山 II 式期が 17 号住居、黒浜式期が 5 号住居、諸磯 b 式期が 9 号住居と継続している。台地の西側直径にして 30 m ほどの範囲に集中している。関山式期の 2 軒だけが台地の中央寄りにあって、集中する範囲外にある。これは群馬看護協会付近まで続く埋没谷と関係しているのだろう。5 号住居と 7 号住居が重複しているだけで、土坑との重複も少ない。住居プランは、関山式期までが長方形から方台形、そして黒浜式期から隅が丸い方形となる。炉は、石組みに土器を埋設した複式構造である。前期前半～中葉の特徴で、芳賀東部団地などでみることができる(前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1990)。本遺跡では、底面にまで石を敷き、10 号住居では土坑も伴う。

土坑は、台地の中央にまで分布している。住居の周りに多いのは 9 号住居で、10 基近い数が取り囲んでいる。7 工区で見たのと同じ傾向で、前期の中でも中葉以降の傾向といえるのだろうか。台地の中央にまであるのは、15 号住居に関係した中期のものが混在すると考えられたが、形状で区別することはできなかった。陥し穴は、343 号土坑など 3 基だけで、傾向をつかむことができない。狩猟の対象から外れた場所であったということになるのか。

参考文献

- 『勢多郡誌』1958
『上野国郡村誌 3』勢多郡 1972
『上毛古墳綜覧』1933
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第 420 集『荻窪南田遺跡・亀泉西久保 II 遺跡』2008
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第 510 集『上泉唐ノ堀遺跡』2010
前橋市教育委員会『端気遺跡群 I』1983
前橋市埋蔵文化財発掘調査団『芳賀東部団地遺跡 III』芳賀団地遺跡群第 3 巻 1990
前橋市埋蔵文化財調査団『鳥取福蔵寺遺跡』1998
山崎 一『群馬県古城址の研究』上巻 1971
『火山灰分析委託報告書 - 群馬県上武道路地域上泉唐ノ堀遺跡 - 』株式会社古環境研究所 2006
加部 二生「横穴式石室の前庭について」『国立歴史民俗博物館研究報告書』第 82 集 1999



第101図 遺構全体図 (1:1,000)

第3節 上泉新田塚遺跡群出土石器 について

1 出土量・器種組成

掲載したのは、遺構 316 点、包含層 192 点、合わせて 508 点である。石斧類 107 点 (21.1%)、石鏃等狩猟具類 18 点 (3.5%)、剥片製加工具類 72 点 (14.2%)、磨石等製粉具類 121 点 (23.8%) である。この他には、石製品類 (垂飾・軽石製品)・石製研磨具が特徴的である。器種組成は、11 号住居にまとまりを見ることができる。

出土量は、非掲載の剥片等と合わせると 2094 点である。表 4 は、石器と石材の関係を示したものである。表 5 は、住居出土石器一覧である。

2 剥片系石器

341 点を掲載した。打製石斧類が 107 点と多数を占め、石鏃等狩猟具は 18 点 (5.3%) と少ない。石匙・石錐等も 9 点、10 点と 3% 前後で、打製石斧の比率が突出している。削器は 52 点が出土している。加工痕ある剥片 126 点の相当数が削器類の作出を意図しており、剥片系石器類の半数以上は削器類が占めている。点数としても打製石斧類を上回る数である。石材構成は、黒色頁岩が主体 (72.4%) で打製石斧から削器、小型石器の石匙、石錐、石鏃まで幅広く採用されている。チャート・黒曜石が石鏃等の小型石器に限られているのは、対照的な傾向である。

3 礫石器類

167 点を掲載した。凹石 58 点、磨石 48 点と、この 2 つの器種が礫石器類の半数以上 (63.5%) を占めている。このほかには、石皿 15 点、台石 9 点、敲石 13 点がある。さらに石製品 7 点、石製研磨具 12 点の存在が特徴的である。石製品は、滑石製の装身具類で太い棗玉状 (第 27 図 9 住 13、第 54 図 181 坑 4) をした作り方に特徴がある。ほかには、軽石製の摘み付き蓋状石製品 (第 17 図 5 住 40) や有孔石製品 (第 58 図 688 坑 3) もあって多様である。石製研磨具としたものは、小型の棒状礫の側縁に線条痕を有するもので、特に黒色・緻密質の石

材では器軸に直交する線条痕が明らかである。多孔石は 2 点が出土。1 点は、二ツ木式期 10 号住居からの出土 (第 30 図 10 住 27) で、当該期多孔石としては稀な存在ではないか。石材構成は、126 点が粗粒輝石安山岩と主体 (75.4%) で、ひん岩、石英閃緑岩、石英斑岩等の利根川起源の石材が主体である。

4 包含層

① 打製石斧の形態的特徴

68 点が出土した。内訳は、短冊型 59 点、撥型 7 点、不明 1 点である。短冊型は、側縁形態等の特徴で a～c の 3 つに細分した。短冊 a (側縁が平行) 31 点、短冊 b (幅の狭い装着部に幅広の機能部が付く) 5 点、短冊 c (側縁が弱く直線的に開く) 12 点である。破損例を除いた平均的サイズは、短冊 a (長さ 10.4cm、幅 4.3cm、重さ 75.3 g)、短冊 b (11.6cm、6.5cm、150.7 g)、短冊 c (12.5cm、5.3cm、137.8 g) となり、短冊 a と短冊 b・c 間に倍近い重量差が指摘できそうである。大部分は完成状態にあり、未成品の占める比率は低い。刃部摩耗・着柄部摩耗痕 (捲縛痕) 等が観察され、刃部再生も顕著である。

石材選択は、黒色頁岩 34 点、細粒輝石安山岩 25 点が多用されていて、少量のホルンフェルス、灰色安山岩、黒色安山岩、珪質頁岩が加わる。細粒輝石安山岩が多く選択されるのは、前橋市東部・荒砥地区周辺域では中期以降、分銅型の石斧素材と認識してきたが、地域を異にするのか差が生じている。ただし、本遺跡では中期の遺構として 15 住のほか土坑も検出されているので、前期と中期が混在している可能性も否定できない。

② 打製石斧加工の特徴

短冊 a～c の側縁は、交互剥離および錯向剥離により側縁中央に作出されている。いずれも刃部摩耗を顕著に伴い、打製石斧は土堀具としての要素を備えている。撥型としたものは 7 点出土している。少数のために細分は不安であるが、側縁が直線的に開くタイプと (第 68 図遺構外 19) と幅の狭い装着部に大きく開いた刃部が付くタイプ (第 68 図遺構外 18) がある。破損例や再生例が多くて不明であるが、側縁は短冊型としたもののように潰されていたものはなく、エッジはシャープである。

刃部摩耗は1点（未掲載）だけで、これも剥離面は新鮮である。石鍬様としたそれ（第68図遺構外21）は、器体の上半を挟み幅広の身が付くタイプである。弥生時代の可能性もあるだろうが、積極的な根拠に乏しい。

③石斧所見

住居出土の打製石斧（5住30・31・32、6住23・27、8住34・35・40、11住50・51・52、12住44・45、14住12、17住5）は撥型状を呈するものが多い。このうちで、特に8住34・35・40、11住52、12住44・45、17住5の刃部は削器的であり、ヘラ状石器に近い。ヘラ状石器は、前期初頭花積下層式期の伊勢崎市清水田遺跡（群埋文1993）に典型例がある。裏面側を浅く剥離、表面側を厚く剥離することで側縁形状が裏面側に偏るといった特徴を持ち、素材のエッジを刃部としてそのまま用いることが多い。刃部加工するものは刃部の形状修正が目的か、刃部再生目的とするのが妥当と考えているが、刃部摩耗が少ないことも特徴のひとつである。

上泉新田塚遺跡群の石斧側縁は、裏面側に偏る例（5住30、8住35・40、11住52）もあるようであるが、大部分は交互剥離か錯向剥離様の剥離を加え、器体の中央付近に側縁を作出している。刃部は側縁加工後に作出されるという特徴が指摘できそうである。これに対して、土坑と包含層から出土した石斧は刃部摩耗を有するものが多く、典型的な短冊タイプであることが多い。土坑出土の石斧は、前期諸磯b式期や、中期加曾利E3・4式期に帰属するようであり、いずれも刃部摩耗を伴う短冊タイプのものである。包含層出土の石斧には、撥状が3点（遺構外18・19・未掲載）のみである。通常の縄文時代の遺跡では、これだけ前期二ツ木式期の住居があるならば、もう少し包含層から同種の石器が出土してもよさそうであるが、数は意外なほどに少ない。その理由は明らかではない。

④石鍬

凹基式無茎鍬が3点出土した。このほかに未成品1点（未掲載）がある。住居、土坑にくらべて包含層からの出土量は少ない。

⑤磨石類

凹石を含めて19点が出土した。敲打痕の有無で分別されるものであるが、磨石としたものにも打痕があり、漏斗状の凹部のあるものを除けば両者に機能的な差は見出し難い。表裏面の打痕は円礫タイプのもは中央に、楕円形タイプのもは礫中央部からやや外れた2箇所に見られることが多い。磨石類が前期前葉期から多出する傾向は、渋川市上白井西伊熊遺跡（群埋文2010）で確認されており、堅果類の積極的利用を裏付けている。

⑥石製研磨具

4点が出土した。棒状礫、偏平礫を用いている。主な使用面は側縁で、表裏面の平坦面にも線条痕がある。線条痕は、使用石材が細粒輝石安山岩、珪質変質岩のため不明瞭だが、側縁には弱い稜が形成されており研磨具としての使用は確実である。線条痕は、黒色緻密石材では確認が容易であるが、それ以外の石材では確認が難しい。これと同サイズの礫が縄文時代の遺跡から出土することは明らかであり、注意が必要である。弥生時代以後の遺跡でも出土することはあるであろうが確認はしていない。

⑦石製品

滑石製装身具類のほか、軽石製の蓋状石製品（5住40）、有孔石製品（668坑3）が出土している。蓋状石製品は前期黒浜式期5号住居から出土した。5号住居は、前期二ツ木式期7号住居と重複している。帰属時期は不明であるが、住居炉跡に重複して床レベルから出土している。状況的には5号住居に帰属すると見てよいのではないか。有孔石製品は、磨石、石核に囲まれるように出土した。縄文時代のものであることは確実で、包含層出土土器類の時期別分布、遺構の帰属時期から判断しても前期～中期である可能性が高い。この有孔石製品は、いわゆる環状石斧の仲間と理解されている環石と見られ、その時期的・地域的分布が注目される。石器の特徴その他については、本文81頁に記載している。

5 住居出土の礫

①調査所見

前期前葉二ツ木式期住居覆土から多量の小礫が出土し

た。礫の集中出土（8住E-E'・F-F'）および形状の斉一性から、石つぶてではないかという指摘がされた。

②8号住居出土の礫

198点が出土した。このうち取り上げナンバー付の104点について礫のサイズ、破損の有無、ススの付着を観察した。完形礫の平均サイズは、長さ5.6cm、幅4.1cm、重さ81.9g、最大長は12.2cm、最小長は1.7cmで、長さ5～8cmのものが多用されている。重さは1点(496.6g)を除いて、すべて200g未満である。破損状態は、104点中、完形礫51点、うち22点にススが付着。破損礫53点、うち24点にススが付着。

③11号住居出土の礫

428点が出土した。このうち取り上げナンバー付の357点について礫のサイズ、破損の有無、ススの付着を観察した。完形礫の平均サイズは、長さ5.1cm、幅3.9cm、重さ63.9g、最大長17.5cm、最小長1.2cmで、長さ3～7cm、幅2～6cmのものが多用されている。重さは300g台、400g台が各1点で、これ以外は150g未満である。破損状態は、357点中、完形礫277点、うち71点にススが付着。破損礫80点、うち21点にススが付着。

④12号住居出土の礫

117点が出土した。このうち取り上げナンバー付の84点について礫のサイズ、破損の有無、ススの付着を観察した。完形礫の平均サイズは、長さ4.9cm、幅3.8cm、重さ80.4g、最大長は6.6cm、最小長は3.3cmで、すべて150g未満である。破損状態は、84点中、完形礫15点、うち4点にススが付着。破損礫69点、うち39点にススが付着。

⑤礫についての総括

8号住居での礫の出土状態を見る限り、次のことが特徴としてあげられる。住居全体に分布しているように見えること。土器・石器と混在していること。ススの付着が多く、またひび割れているものも少量あること。共存している石器類もススの付着しているものがあることから、集石等の構成礫としての要素が強い。礫は円礫と

亜円礫があり、通常集石で見られるものよりは小さい。礫の採取地については、南2kmを流れていた旧利根川が遺跡の西を流れている荻窪川が想定される。調査区に隣接する畑では耕作で地山から掘り出された輝石安山岩類の亜円礫～角礫状態のものを多数見ることができる。採取地には、川に面した近くの露頭でも採取することが可能かとみられる。

第4節 上泉唐ノ堀遺跡の出土石器について

98点が出土した。石斧類4点、石鏃1点、剥片加工具類13点、磨石1点、スタンプ形1点、石核2点、剥片75点である。石材は、黒色頁岩81点、珪質頁岩2点、黒色安山岩5点、灰色安山岩1点、細粒輝石安山岩2点、粗粒輝石安山岩1点、ホルンフェルス2点、黒曜石1点、石英閃緑岩1点、チャート1点である。上泉新田塚遺跡群と同じく、黒色頁岩が多用されている。

礫は、円礫と亜円礫があり、破片が7点、熱を受けているものが6点ある。ほかに石核、磨製石斧とみられるものが各1点ある。重量は、最大が337.9g、最小が磨製石斧の破片かもしれないもので1.2gである。石材は、粗粒輝石安山岩が11点、赤碧玉、変輝緑岩、黒色頁岩、変質安山岩が各1点である。

以上のように、黒色頁岩、粗粒輝石安山岩が多用される傾向は7-2工区と同じである。

参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第144集『五日牛清水田遺跡』1993
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第487集『上白井西伊熊遺跡 - 縄文時代以降編 - 』2010
 飯島静男「石関西田Ⅱ遺跡の河道礫について」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第306集『石関西田Ⅱ遺跡』2002
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第510集『上泉唐ノ堀遺跡』2010

第4表 上泉新田塚遺跡群 出土石器石材一覧表（加工痕ある剥片は加工剥片と省略）

石材・器種	石鏃	石匙	削器	加工剥片	石核	剥片	打製石斧	磨製石斧	凹石	磨石	蔽石	台石	石皿	多孔石	石製品	砥石	研磨具	合計
黒色頁岩	8	6	9	48	102	11	1232	62				2					2	1482
粗粒輝石安山岩							5		55	35		7	9	13	2		4	132
珉質頁岩	3		1	3	6		80	5										
細粒輝石安山岩							59	29				1					2	93
チャート	5	1			8	3	69											86
黒色安山岩	1	1	1	1	3	2	52	1										59
黒曜石	1	1				2	51											55
灰色安山岩					3		7	6										16
ホルンフェルス					1		7	3									1	12
頁岩							9	1									1	11
砂岩							8											8
ひん岩					1					4								6
石英閃緑岩									2	3								5
滑石															4			4
変質安山岩							1			2		1						4
緑色片岩														2				2
変玄武岩							3											3
流紋岩							1			1								2
褐色碧玉							2											2
蔽石															1			1
溶結凝灰岩									1									1
牛伏砂岩												1					1	1
珉化凝灰岩																		1
変輝緑岩							1			1								2
赤碧玉																		1
閃緑岩										1								1
石英質頁岩										1								1
凝灰質砂岩																	1	1
珉質変質頁岩																	1	1
砂質頁岩							1											1
雲母片岩							1											1
合計	18	9	10	52	126	16	1589	107	1	58	48	13	9	15	7	2	12	2094

第5表 上泉新田塚遺跡群 住居出土石器一覧表（数量は掲載と非掲載を合わせた数である。加工痕ある剥片は加工剥片と省略）

住居番号	時期	石鏃	石匙	削器	加工剥片	石核	打製石斧	凹石	磨石	蔽石	台石	石皿	多孔石	石製品	砥石	研磨具	剥片	
5号	黒浜式				6	8	6	3		2	1			1		2	42	
6号	二ツ木式			1	2	7	4	3	2	4	1					2	97	
7号	二ツ木式				1	1											2	
8号	二ツ木式	3		1	4	1	2	2	2	6	2	1	1	1	1	2	245	
9号	諸磯b式				1	3				1				1			12	
10号	二ツ木式				1	1			5	4	1	1	1	1			38	
11号	二ツ木式	3		5	3	7	1	8	16	11	4	1	5			1	235	
12号	二ツ木式	1	2	1	5	8	2	3	3	5	1	1	2	2		1	67	
14号	関山I式		1	1	4	5		2	2	2	2	1					69	
15号	加曾利E式																	
17号	関山II式	1			4			1									1	11
合計		8	3	9	31	41	9	25	35	29	13	8	10	4	1	9	818	

第5節 黒色安山岩製石器の原産地分析

はじめに

黒色安山岩は県内旧石器遺跡の主要石材であり、縄文期・弥生期の遺跡でも多出することから、典型的な在地石材として認識されてきた。近年、黒色安山岩の原産地分析（井上・桜井 1999、津島・桜井・井上 2001 ほか）が進み、河川資源としての黒色安山岩供給に変動があり、旧石器時代から縄文時代にかけて基本的には減少する方向にあることが指摘できる（津島・岩崎 2010）。ここでは、こうした状況を踏まえ、縄文期遺跡出土の黒色安山岩製石器の原産地分析を行い、黒色安山岩の供給実態・変動実態を探ろうとするものである。

分析資料

分析資料は帰属時期が明らかな自然面が残る剥片類で、同一母岩に偏らないように配慮して、28点を分析資料とした。自然面が残る剥片類を選択した理由は、As-BP 降下前後を境に、網目状の礫面から平滑化した礫面に変わるという予測があるからである（津島・岩崎 2010）。分析資料は2遺跡から出土したもので、時期的には縄文時代前期の竪穴住居や土坑から出土した剥片類である。

一つの資料に対して、直交する二方向の薄片を作成し偏光顕微鏡により通常観察した。

観察結果

28点の資料は5タイプ(A～E)に分類された。次に、それぞれのタイプについて記載する。

Aタイプ 15点がこのタイプに帰属する（第6表）。斑晶量は少なく比較的きれいである。斜長石は集斑状のものが認められる。鉄鋳物、楕円状の輝石が少量認められる。石基部分は細粒である。一方の薄片では、石基部分の流理構造が比較的明瞭であり輝石が粒状であるが、直交方向の薄片では、明瞭な流理構造は認められず輝石が棒状である。

三和工業団地 I 遺跡（井上・桜井 1999）、今井道上・道下遺跡（津島 2003）、下触牛伏遺跡（津島 2007）、上武道路・旧石器時代遺跡群（津島 2008a、2010a）、白井十二遺跡（津島 2008b）、波志江西宿遺跡・天ヶ堤遺跡（津島 2009）、上白井西伊熊遺跡（津島 2010b）、旧利根川礫層から採取した試料（津島・岩崎 2010）において、それぞれAタイプ（武尊山産）とされたものと同じ特徴を

有する。ここでAタイプと分類された15点は武尊山産と考えられる。

Bタイプ 1点がこのタイプに帰属する。斑晶量は少なく比較的きれいである。斑晶と石基部分の中間的な大きさの斜長石に関して特徴が認められる。一方の薄片では、長柱状で結晶の縁に細かな粒子が重なり石基部分との境界が不明瞭となる。それと直交方向の薄片では、長柱状と方形の二種が混在する。石基部分には針状と方形の斜長石があり、弱いながら一定方向に配列する。

三和工業団地 I 遺跡の分析でFタイプ（八風山産）とされた資料（井上・桜井 1999）、八風山溶岩から採取した試料（津島・桜井・井上 2001）、下触牛伏遺跡でBタイプ（八風山産）とされた資料（津島 2007）、上武道路・旧石器時代遺跡群の中でBタイプ（八風山産）とされた資料（津島 2008a、2010a）、白井十二遺跡でBタイプ（八風山産）とされた資料（津島 2008b）、波志江西宿遺跡・天ヶ堤遺跡でBタイプ（八風山産）とされた資料（津島 2009）と同じ特徴を有する。よって、ここでBタイプと分類された1点は八風山産と考えられる。

Cタイプ 4点がこのタイプに帰属する。斑晶量は少なく、斜長石はわずかな汚れを含む。斜長石の斑晶は、累帯構造を示すものが認められる。石基部分は細粒であり、斜長石は弱いながら一定方向に配列する。薄片の作成方向による差は認められない。

武尊山周辺の原産地試料の中で「水上高原スキー場上位溶岩」「セビオス岳の極角礫」「玉原スキー場溶岩下の極角礫」として分類された一群（津島・桜井・井上 2001）と同じ特徴をもつ。また、三和工業団地 I 遺跡でBタイプとされた資料（井上・桜井 1999）、今井道上・道下遺跡でBタイプとされた資料（津島 2003）、上白井西伊熊遺跡でCタイプとされた資料（津島 2010b）も同じ特徴をもつ。このタイプに関しては、長野・新潟県境付近の信濃川中流域で産出する黒色安山岩の一部と同じ特徴をもつことが判明している（津島・井上 2004）。

Dタイプ 7点がこのタイプに帰属する。斑晶量は少なく、斜長石の斑晶は内部がわずかに汚れている。石基部分は粗流であり、粒状の石器が比較的多く認められる。薄片の作成方向による違いは認められない。

このタイプの黒色安山岩は、これまで観察してきた原産地試料と遺物資料のどちらにも観察されたことがなかった。

Eタイプ 1点がこのタイプに帰属する。斑晶量は少なく斜長石は集斑状のものがみられ、わずかな汚れを含む。斑晶と石基との中間的な大きさの斜長石が多く認められる。石基部分の斜長石は棒状～針状であり、方向性

第7章 調査のまとめ

のある配列は認められない。薄片の作成方向による差は認められない。

武尊山周辺の原産地試料の中で「水上高原ゴルフ場溶岩下の極角礫」「タキガ沢の角礫」として分類された一群（津島・桜井・井上 2001）と同じ特徴をもつ。また、上白井西伊熊遺跡でBタイプとされた資料も同じ特徴をもつ。ここでEタイプと分類された1点は武尊山産と考えられる。

まとめ

分析資料28点のうち、Aタイプ（15点）とEタイプ（1点）は武尊山産と考えられる。Bタイプ（1点）は八風山産と考えられる。Cタイプ（4点）については、武尊山あるいは信濃川中流域のどちらかの原産であることが指摘できる。Dタイプ（7点）については、現在のところ原産地は不明である。

参考文献

井上昌美・桜井美枝 1999「第4文化層出土黒色安山岩の分析」『三和工業団地I遺跡（1）旧石器時代編 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第246集』
 津島秀章・桜井美枝・井上昌美 2001「黒色安山岩の原産地試料」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』19 139～156頁
 津島秀章・井上昌美 2004「信濃川中流域の黒色安山岩試料」『財

団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』22 21～30頁
 津島秀章・岩崎泰一 2010「武尊山産黒色安山岩の消長—石材資源の動的理解に向けて」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』28 1～32頁
 津島秀章 2003「石器石材の運用について」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』21 1～11頁
 津島秀章 2007「二立散石 - 石器原産地分析からみた勘定ブロック群の構造」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』25 1～14頁
 津島秀章 2008a「上武道路・旧石器時代遺跡群の黒色安山岩製石器の原産地分析」『上武道路・旧石器時代群（1）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第418集』395～399頁
 津島秀章 2008b「白井十二遺跡出土黒色安山岩製石器の産地推定」『白井十二遺跡 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第427集』293～294頁
 津島秀章 2009「集合と分散 - 石器原産地分析からみた中型環状ブロック群の構造」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』27 1～16頁
 津島秀章 2010a「上武道路・旧石器時代遺跡群の黒色安山岩製石器の原産地分析」『上武道路・旧石器時代群（2）財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第478集』436～439頁
 津島秀章 2010b「上白井西伊熊遺跡の黒色安山岩製石器の原産地分析」『上白井西伊熊遺跡 - 旧石器時代編 - 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第480集』491～492頁

第6表 黒色安山岩礫の薄片観察結果

資料番号	遺跡名	出土位置	斑晶								石基				タイプ	原産地	
			斜長石	最大mm	単斜輝石	最大mm	斜方輝石	最大mm	鉄鉱物	最大mm	組織	斜長石	輝石	不透明鉱物			ガラス
1	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	7住フク	○	0.3	△	0.2	△	0.2	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	C	武尊山?
2	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	8住 s110	△	0.3	△	0.3	×	—	×	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	A	武尊山
3	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	10住 s1332	△	0.4	×	—	△	0.1	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	D	不明
4	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	14住 1土	△	0.5	△	0.3	×	—	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
5	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	18住フク	○	0.4	×	—	△	0.2	△	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	D	不明
6	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	19住 p119	○	0.5	△	0.3	×	—	△	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
7	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	19住	○	0.4	△	0.3	△	0.2	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	C	武尊山?
8	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	19住フク	○	0.4	×	—	×	—	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	○	△	A	武尊山
9	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	23住フク	△	0.5	×	—	△	0.2	△	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	D	不明
10	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	23住フク	○	0.3	△	0.2	△	0.2	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
11	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住フク	○	0.4	△	0.3	△	0.2	△	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	○	△	D	不明
12	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住 s12	○	0.5	△	0.3	△	0.1	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	C	武尊山?
13	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住フク	○	0.4	△	0.4	×	—	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	E	武尊山
14	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住 s204	○	0.6	×	—	△	0.2	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	A	武尊山
15	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住 s68	○	0.4	△	0.3	△	0.1	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
16	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住フク	○	0.3	△	0.3	×	—	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	D	不明
17	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	25住 s241	○	0.2	△	0.3	×	—	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	A	武尊山
18	上泉唐ノ堀遺跡72Ⅱ区	7住 s547	△	0.4	×	—	×	—	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	△	D	不明
19	上泉唐ノ堀遺跡8Ⅱ区	3区2トレ	△	0.5	×	—	△	0.2	△	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	○	△	D	不明
20	上泉唐ノ堀遺跡8Ⅱ区	51区表土	○	0.4	△	0.3	△	0.3	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
21	上泉唐ノ堀遺跡8Ⅱ区	47-L-19	○	0.3	△	0.4	△	0.1	△	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	C	武尊山?
23	上泉新井家遺跡群	180 土坑フク土	○	0.4	×	—	△	0.2	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	A	武尊山
24	上泉新井家遺跡群	685 土坑No.13	○	0.5	△	0.3	△	0.1	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	△	A	武尊山
25	上泉新井家遺跡群	包含層	○	0.4	△	0.3	×	—	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
26	上泉新井家遺跡群	包含層(用地No.34表土)	○	0.4	△	0.4	×	—	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
27	上泉新井家遺跡群	包含層(西側Ⅷ層)	○	0.4	×	—	△	0.2	×	—	ガラス基流晶質	◎	○	○	○	A	武尊山
28	上泉新井家遺跡群	包含層(西側Ⅷ層)	△	0.5	△	0.4	△	0.2	△	0.2	ガラス基流晶質	◎	○	○	△	B	八風山
29	上泉新井家遺跡群	包含層(西側Ⅷ層)	○	0.5	×	—	△	0.2	△	0.3	ガラス基流晶質	◎	○	△	○	A	武尊山

◎非常に多い ○多い △少ない ×観察できない

第7表 上泉唐ノ堀遺跡 石器観察表
1号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量(g)	図版写真
2	削器	横長剥片。剥片端部に粗い剥離で弧状の刃部を作出。	細粒輝石 安山岩	6.0	8.2	53.1	11 28
3	使用痕ある剥片	幅広剥片。剥片端部に小剥離痕が連続。	黒色頁岩	8.7	8.1	146.6	11 28
遺構外							
番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量(g)	図版写真
18	打製石斧	短冊。未成品。剥離面が新鮮で、摩耗等は見られない。下半を欠損。	黒色頁岩	(8.2)	4.3	88.3	13 28
19	打製石斧	短冊。完成状態。刃部は装着部から撥状に大きく開く。刃部は未加工で、刃こぼれ状の小剥離痕が連続。	黒色頁岩	8.6	4.5	56.3	13 28
20	打製石斧	分銅型。完成状態。刃部摩耗・捲縛痕あり。刃部再生の他、捲縛痕を大きく切り取る剥離があり、側縁再生も著しい。	黒色頁岩	9.5	6.1	126.0	13 28
21	打製石斧	短冊か。剥離が粗く断定は困難だが、形態的な特徴から石斧未成品と判断。	ホルン フェルス	22.8	9.3	1529.2	13 28
22	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。表裏面に一次剥離面を大きく残す。	黒色安山 岩	2.2	(2.0)	1.5	13 28
23	石核	幅広剥片。素材打面部を除いた各辺で小形剥片を、裏面側の上下両辺で幅広剥片を剥離。石斧未成品の可能性あり。	黒色頁岩	10.2	14.5	787.1	13 28
24	磨石	偏平円礫。表裏面に摩耗するほか、側面に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石 安山岩	8.6	9.1	460.6	13 28
25	スタンプ形石器	棒状礫。分割面に摩耗痕、底面部周辺の側縁に不規則な剥離痕が連続。	石英閃緑 岩	11.9	7.6	670.8	13 28
26	使用痕ある剥片	幅広剥片。偏平礫の小口部を割り取り得た剥片の端部に小剥離痕が連続。	黒色頁岩	5.5	8.4	107.4	13 28

第8表 上泉新田塚遺跡群 石器観察表
5号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量(g)	図版写真
30	打製石斧	撥型。完成状態か。刃部加工が最終。刃部リダクションは明らかで、大きく変形。	細粒輝石 安山岩	11.5	7.2	202.8	17 29
31	打製石斧	撥型。完成状態。剥離面の稜は新鮮で、未使用。側縁に潰れ。	頁岩	8.2	5.8	65.7	17 29
32	打製石斧	撥型。完成状態か。粗い側縁加工を施す。刃部摩耗痕等不明。	黒色頁岩	8.4	5.3	79.3	17 29
33	削器	横長剥片。加工は粗く、未成品レベルにあり、製作目的は不明。幅が狭く、石槍様の未成品にも見える。	黒色頁岩	8.9	3.2	53.3	17 29
34	加工痕ある剥片	幅広剥片。右辺・裏面側を粗く加工。	黒色頁岩	10.2	6.0	183.8	17 29
35	凹石	円形偏平礫。表裏面にロート状の凹部2・摩耗痕。側縁に打痕・摩耗痕。これにより右辺は稜の形成が顕著。	粗粒輝石 安山岩	11.5	9.4	620.8	17 29
36	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側面に打痕。	粗粒輝石 安山岩	12.4	6.6	428.1	17 29
37	敲石	楕円偏平礫。両側縁に打痕。裏面側は平坦で、摩耗。	細粒輝石 安山岩	(10.0)	5.5	256.3	17 29
38	凹石	楕円偏平礫。表面側に打痕・摩耗痕、裏面側に摩耗痕。小口部先端には打痕。	粗粒輝石 安山岩	10.5	6.6	356.7	17 29
39	敲石	棒状偏平礫。小口部に打痕が集中。石材は細粒緻密で、石製研磨具とされるものに近い。線条痕等は見られない。	黒色頁岩	9.6	4.5	175.8	17 29
40	石製品	蓋状。略楕円形。中央付近に2cm大の摘み部が付く。破損して全貌は不明だが、不定形で実用具には見えない。	軽石	(5.5)	(5.9)	11.5	17 29
41	石製研磨具	棒状礫。表裏面に器体の長軸に直交する線条痕。小口部には長軸方向の線条痕があり、稜を形成。表裏面に被熱剥離。	頁岩	6.1	1.9	19.3	17 29
42	石製研磨具	棒状礫。側縁に器体の長軸に直交する線条痕があり、器面に顕著な光沢。表裏面に斜位の線条痕。	粗粒輝石 安山岩	5.0	2.5	33.5	17 29

6号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量(g)	図版写真
22	打製石斧か	短冊。完成状態か。表面側・刃部右に摩耗。これを研磨と見れば、磨製石斧の未成品ということになる。	細粒輝石 安山岩	12.2	5.6	260.1	19 30
23	打製石斧	撥型。完成状態。風化して不明瞭だが、刃部・側縁が弱く摩耗。刃部は直線的。	細粒輝石 安山岩	12.8	7.2	273.0	19 30

遺物観察表

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
24	打製石斧か	撥型。完成状態か。稜側縁を粗く加工。刃部は直刃的で、裏面側から微細な剥離。摩耗痕等は不明。	黒色頁岩	9.4	4.5	56.7	19 30
25	石匙	縦型。完成状態。摘み部を除き、背面側から浅い剥離を施す。	黒色頁岩	6.4	2.4	14.7	19 30
26	石核	剥片。上下両辺で小型・幅広剥片を剥離。	黒色頁岩	3.9	5.5	37.3	19 30
27	石核	剥片。上下両端で幅広剥片を剥離。剥離面構成からみて両極剥離を適用か。	チャート	4.5	3.5	24.6	19 30
28	凹石	楕円偏平礫。表面側に打痕・摩耗痕、裏面側に摩耗痕。小口部に敲打痕。	溶結凝灰岩	11.8	6.4	393.3	19 30
29	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁は打痕が優位。	粗粒輝石安山岩	10.3	7.5	555.2	19 30
30	磨石	円礫球形。表裏面に摩耗。側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩	7.3	6.5	325.8	19 30
31	磨石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩	13.2	10.0	921.6	19 30
32	石製研磨具	棒状偏平礫。側縁に研磨、稜を形成。光沢を帯びる。線条痕は不明瞭。	黒色頁岩	6.2	3.4	36.6	19 30
33	石製研磨具	棒状偏平礫。風化して線条痕は不明瞭だが、側縁には研磨作業に起因する稜が形成。	細粒輝石安山岩	8.2	3.9	97.3	19 30
34	台石	偏平礫。背面側上半部に打痕。裏面側に浅い凹部。	粗粒輝石安山岩	22.6	25.0	6003.7	19 30

7号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
8	加工痕ある剥片	横長剥片。剥片端部を部分的に粗く加工。	黒色頁岩	5.4	10.9	118.6	20 30
9	削器	縦長剥片。左側縁に刃部を作出。	黒色頁岩	4.1	7.1	31.9	20 30

8号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
34	打製石斧	撥型。完成状態。側縁加工が刃部加工に先行。刃部は若干弧状を呈し、削器的な機能も想定可能。	黒色頁岩	8.0	6.0	97.7	23 31
35	打製石斧	短冊b。完成状態。刃部加工が製作工程の最終段階で、へら状石器に近い。剥離面は新鮮で、未使用か。	黒色頁岩	8.6	5.5	76.9	23 31
36	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。裏面側に縦長剥片の素材面を残す。	黒色頁岩	(2.7)	(1.8)	1.0	23 31
37	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。やや粗雑な剥離で、製作工程の最終段階で破損した可能性も否定できない。	珪質頁岩	(2.1)	1.7	0.8	23 31
38	石鏃	不明。未成品。幅広剥片の周辺を粗く加工。先端部を欠損。	黒色頁岩	(2.6)	2.2	2.4	23 31
39	石匙	横型。完成状態。押圧剥離様の剥離が入り込み、表裏面に剥離で覆われる。乳白色を呈し、軟質石材に見える。	珪質頁岩	3.6	(5.0)	5.6	23 31
40	削器か	幅広剥片。左辺側縁の裏面側を薄く平坦剥離、右辺側縁を粗く加工して厚い弧状の弧状を作出。刃部の摩耗は見られない。	黒色頁岩	10.8	6.7	87.4	23 31
41	石核	河床礫。打面と作業面を交互に入れ換え、幅広剥片を剥離。原石サイズは拳大程度。	黒色頁岩	6.7	9.5	367.3	23 31
42	加工痕ある剥片	幅広剥片。表裏面を剥離、その在り方は石槍に近い。剥離は粗く、途中で加工を放棄。	珪質頁岩	11.9	4.0	101.9	23 31
43	石核	板状か。表裏面で小型剥片を剥離。裏面側に節理面を残す。	チャート	4.8	5.5	57.7	23 31
44	凹石	楕円形。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。小口部は摩耗が優位で、面を形成。	粗粒輝石安山岩	10.6	7.3	575.0	24 31
45	凹石	楕円偏平礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に顕著な打痕。	粗粒輝石安山岩	9.1	7.2	388.1	24 31
46	磨石	楕円形。表裏面に摩耗痕。側縁に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩	16.8	(7.9)	1041.6	24 31
47	磨石	楕円形。側縁に打痕・摩耗痕、稜を形成。小口部に打痕。穀擦石か。	ひん岩	16.7	8.1	989.5	24 31
48	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗痕。側縁に敲打痕。先端部は破損。	粗粒輝石安山岩	(10.2)	7.7	453.6	24 31
49	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗。特に、側縁の摩耗は著しく、微弱な稜を形成。磨石サイズより小型、細粒石材使用。石製研磨具の類か。	粗粒輝石安山岩	9.9	5.7	257.4	24 31
50	磨石	楕円礫。表裏面に摩耗。小口部・側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩	13.2	7.2	664.9	24 31

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
51	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗。特に側縁側の摩耗が著しい。礫サイズは小型で、細粒石材を使用。敲打具として分類可能。	粗粒輝石 安山岩	9.4	6.1	270.6	24 31
52	石皿	無縁。表面側に浅い機能部を2ヶ所に持つ。表裏面に浅いロート状の凹部を有する。	粗粒輝石 安山岩	(13.0)	(21.0)	1372.3	24 31
53	敲石	棒状礫。小口部・小口に近い側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	11.1	5.3	313.3	24 32
54	砥石	偏平礫。表裏面に弱く摩耗。表面側に幅が5mm程度、平行して複数の浅い筋状の窪み。	牛伏砂岩	(6.3)	(3.4)	44.9	24 32
55	台石か	偏平礫。表裏面に摩耗。側縁に敲打痕。裏面側は石皿上縁様に見えるが、表面とした礫面は平坦で、石皿の裏面とするには無理がある。	粗粒輝石 安山岩	(10.5)	(6.0)	294.8	24 32
56	石製研磨具	棒状偏平礫。小口部・両側縁に顕著な摩耗痕・線条痕。線条痕は器体の短軸方向に一致。	黒色頁岩	10.8	4.3	151.7	25 32
57	玉	小玉。表裏両面を欠損。	滑石	(1.2)	(0.9)	0.5	24 32

9号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
10	削器	縦長剥片。右側縁・裏面側に粗い刃部を作出。	黒色頁岩	(6.3)	4.8	42.2	27 32
11	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁・小口部に打痕。被熱か。	粗粒輝石 安山岩	11.3	6.3	442.7	27 32
12	磨石	不定形。小口部に打痕・研磨痕。特に上端の研磨痕が著しい。小口部を意図的に使用、敲打具として分離が可能。	ひん岩	10.3	7.6	665.8	27 32
13	玉	未成品。略円柱状。側面は面取り整形が顕著。底面には幅1mm程度の太い線条痕、中央に回転穿孔の痕跡。	滑石	3.7	2.6	39.2	27 32

10号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
20	削器	縦長剥片。左側縁に粗く直線的な刃部を作出。	黒色頁岩	6.6	3.7	19.7	30 32
21	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。小口部・側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	16.9	8.2	930.5	30 32
22	凹石	楕円偏平礫。表裏面にロート状の凹部2・摩耗痕。小口部に打痕。	粗粒輝石 安山岩	10.6	7.5	364.8	30 32
23	凹石	楕円偏平礫。ロート状の凹部が表面側に1、裏面側に2。側縁・小口部に打痕。	粗粒輝石 安山岩	9.8	5.2	189.3	30 33
24	凹石	楕円礫。表裏面にロート状の凹部が各2・摩耗痕。側縁・小口部に打痕。被熱か。	粗粒輝石 安山岩	10.8	6.3	349.0	30 33
25	敲石	棒状礫。小口部・上下両端に打痕。	珪化凝灰 岩	14.2	5.0	439.8	30 33
26	石皿	有縁。搔き出し口を有するタイプで、石皿左辺側の破片。	粗粒輝石 安山岩	(19.5)	(10.2)	1316.1	30 33
27	多孔石	楕円礫。表裏面にロート状の凹部を穿つ。	粗粒輝石 安山岩	20.5	18.5	4474.9	30 33
28	台石	円形偏平礫。表裏面に打痕・微弱な摩耗痕。打痕は点在、摩耗が優先しており、石皿として捉えるべきか、被熱。	粗粒輝石 安山岩	23.9	20.8	2959.6	30 33
29	石製品	楕円礫か。表裏面に礫の中央に径3cmの凹部。凹部は敲打により作出。環状石斧の未成品に類似か。	粗粒輝石 安山岩	3.9	6.6	99.6	30 33

11号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
50	打製石斧	撥型。未成品か。刃部を作出しているが、全般的に加工は粗い。素材は被熱剥片か。	黒色頁岩	8.9	5.9	113.1	34 34
51	打製石斧か	撥型。未成品か。幅広剥片を横位に用い、周辺を粗く加工。打製石斧様の形態だが削器の可能性も否定できない。	黒色頁岩	8.5	6.1	66.1	34 34
52	打製石斧	撥型。完成状態。刃部を最終的に作出。急な刃部角で石斧とは異なり、ヘラ状石器に近い。裏面側の刃部に摩耗痕が残る。	黒色頁岩	7.8	5.4	55.2	34 34
53	打製石斧	短冊。完成状態。右側縁に顕著な潰れ。頭部破片。	灰色安山 岩	5.4	(3.8)	29.4	34 34
54	打製石斧	短冊。完成状態。刃部に顕著な摩耗。刃部破片。	灰色安山 岩	(5.0)	5.8	61.7	34 34
55	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。細身の長身で、優品。	珪質頁岩	2.3	1.5	0.5	34 34
56	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。先端部を僅かに欠損。	チャート	(2.0)	1.6	0.6	34 34

遺物観察表

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
57	石匙	斜めタイプ。幅広剥片の打面側に摘み部を作出。刃部は弧状。	黒色頁岩	5.9	7.0	28.5	34 34
58	石匙	横型。剥片端部に摘み部を作出。直線的な刃部で、素材は縦位破損した幅広剥片と見られる。	黒色頁岩	3.8	5.5	8.0	34 34
59	石匙	斜めタイプ。縦位破損した幅広剥片の打面側に摘み部を作出。右辺の加工は形状修正的で、剥片端部に粗い刃部を作出。	黒色頁岩	6.1	8.4	38.7	34 34
60	削器	横長剥片。裏面側・剥片端部に直線的な刃部を作出。	黒色頁岩	5.3	11.4	106.7	34 34
61	削器	幅広剥片。左側縁裏面側を薄く剥離するほか、右側縁を加工。	珪質頁岩	6.3	5.3	40.0	34 35
62	石核	剥片。上端・左辺から小型剥片を剥離。下端部は削器的で、石核から転用している可能性が大。	黒色頁岩	8.2	14.5	458.7	35 35
63	凹石	楕円偏平礫。表面側にロート状の凹部2。表裏面に摩耗・側縁に敲打。	粗粒輝石 安山岩	11.4	8.2	631.8	35 35
64	凹石	楕円礫。表裏面に摩耗。より平坦な裏面側には打痕。側縁は打痕・摩耗痕により稜を形成。	粗粒輝石 安山岩	15.6	8.7	931.1	35 35
65	凹石	楕円偏平礫。表裏面に打痕・摩耗痕。右辺側縁に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石 安山岩	12.7	8.3	545.6	35 35
66	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁・小口部の先端側に打痕・摩耗痕、稜を形成。	粗粒輝石 安山岩	14.6	7.4	692.3	35 35
67	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	15.3	9.3	665.0	35 35
68	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕・摩耗痕。小口部の破損は使用時の可能性が大。	粗粒輝石 安山岩	13.8	8.0	620.3	35 35
69	凹石	楕円礫。表裏面に摩耗痕。側縁に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩	11.5	7.1	557.8	35 35
70	磨石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。小口部に打痕。	粗粒輝石 安山岩	13.6	7.4	600.4	35 35
71	磨石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩	12.8	8.8	887.6	35 35
72	磨石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。小口部に敲打痕。摩耗は顕著。	粗粒輝石 安山岩	10.5	8.4	656.5	35 35
73	磨石	楕円礫。表裏面に摩耗。右辺側縁に打痕・摩耗痕、稜を形成。	粗粒輝石 安山岩	16.9	7.8	1117.3	35 35
74	磨石	円形偏平礫。表裏面に摩耗、側縁にノッチ状の凹部。被熱して裏面側は大きく剥落。	粗粒輝石 安山岩	15.1	12.2	938.5	35 35
75	敲石	棒状礫。小口部に近い右辺側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	12.9	4.4	256.9	36 35
76	敲石	楕円偏平礫。小口部先端に打痕・剥落痕。	粗粒輝石 安山岩	(5.6)	6.1	119.5	36 35
77	石皿	無縁。表面側の中央に打痕があるほか、全面摩耗。被熱。	粗粒輝石 安山岩	25.8	22.8	4167.2	36 35
78	石皿	有縁か。板状礫を用いる。激しく使い込まれ、摩耗が凹部の外側にも及ぶ。	粗粒輝石 安山岩	(14.2)	(15.5)	967.3	36 35
79	石皿	無縁。表面側摩耗部は弱く窪む。裏面側は打痕が優位。	緑色片岩	28.8	25.2	3078.9	36 35
80	石皿	有縁。機能部中央に複数の打痕、裏面側にロート状の凹部を穿つ。	粗粒輝石 安山岩	54.2	27.8	16240.0	36 35
81	石皿	有縁。礫サイズに比べ、機能部としての凹部が小さい。研磨痕は凹部の外側にも広がる。裏面側には、わずかに摩耗した部分と、ロート状の凹部1がある。	粗粒輝石 安山岩	50.4	31.2	11100.0	36 36
82	台石	偏平礫。表面側に打痕・弱い摩耗。	粗粒輝石 安山岩	(14.7)	(14.3)	1348.2	36 35
83	石製研磨具か	棒状偏平礫。表裏面に摩耗。側縁に稜を形成。石材が粗く、線条痕は見られない。礫サイズからみて研磨具と捉えた。	粗粒輝石 安山岩	8.6	4.4	130.3	36 35

12号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
44	打製石斧	撥型。未成品。左辺のみ側縁加工を施す。刃部加工は裏面側に施され、弧状の刃部を作出。刃部に摩耗等は見られない。	黒色頁岩	9.1	5.5	69.9	40 37
45	打製石斧	撥型。完成状態。裏面側から角度の厚い剥離を施す。刃部は弧状を呈し、製作工程の最終段階。刃部に摩耗なし。	黒色頁岩	9.1	5.9	82.1	40 37
46	打製石斧か	不明。未成品か、左辺の剥離は製作工程の最終段階であるのに対して、右辺の剥離は粗い。裏面側に被熱剥離の痕跡。	黒色頁岩	6.6	5.7	55.8	40 37
47	石鏃	凹基無茎鏃。未成品。加工は粗く、遺跡内製作か、先端欠損。	チャート	(2.1)	2.3	1.5	40 37

遺物観察表

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
48	石匙	横型。石核底面の平坦面を石器刃部に取り込み、裏面側を粗く加工。	黒色頁岩	4.4	7.8	23.7	40 37
49	石錐	完成状態。刃部の先端・摘み部を欠損。刃部側剥離面の稜は摩耗傾向。	黒色頁岩	(2.0)	(0.5)	2.3	40 37
50	石錐か	完成状態。先端部の摩耗は顕著で、稜が磨滅。	黒色頁岩	2.6	0.6	0.7	40 37
51	石核	大型剥片。上面・左辺の礫面から小型剥片を剥離。	黒色頁岩	8.8	6.1	240.0	40 37
52	凹石	楕円礫。表裏面に集合打痕・摩耗痕。小口部に打痕。	粗粒輝石 安山岩	10.7	5.9	401.7	40 37
53	凹石	棒状偏平礫。表裏面に敲打痕・摩耗痕。側縁に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩	11.5	5.6	285.6	40 37
54	凹石	棒状礫。表裏面に集合打痕。左側縁側に顕著な摩耗。	粗粒輝石 安山岩	9.7	4.8	210.7	40 37
55	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗痕、側縁に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩	15.5	9.1	785.2	40 37
56	磨石	楕円礫。表裏面に摩耗痕、側縁・小口部に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩	13.6	7.2	620.3	40 37
57	敲石	偏平棒状礫。小口部に近い両側縁に打痕・打撃に伴う剥離痕が存在。	黒色頁岩	11.2	4.7	179.4	40 37
58	石製研磨具 か	棒状礫。礫の中央右側を主体に微弱な摩耗。線条痕は不明瞭。	粗粒輝石 安山岩	8.3	3.9	155.7	40 37
59	石皿	無縁。機能部は平坦で、摩耗。被熱破損か。	粗粒輝石 安山岩	(14.1)	(17.7)	1570.5	41 37
60	石皿	無縁。表面側は平坦で、弱く摩耗。被熱か。	粗粒輝石 安山岩	44.0	22.4	10800.0	41 37
61	台石	楕円礫。表面側は平坦で摩耗面が優位、裏面側中央側の稜には複数の浅く小さな凹みがある。	粗粒輝石 安山岩	(29.6)	28.4	9640.0	41 37

14号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
11	打製石斧	不明。未成品。大型で、左辺にノッチ状の凹部があり、石鏃様石器の製作意図が読み取れる。	ホルン フェルス	17.3	8.1	813.7	43 38
12	打製石斧	短冊c。完成状態。剥離面の稜は新鮮で、摩耗痕等は不明。刃部は弧状を呈し、機能的には削器か。	黒色頁岩	9.4	5.1	66.1	43 38
13	石匙	縦型。完成状態。剥片端部には礫面が残る。	黒色頁岩	8.6	3.6	18.5	43 38
14	石錐か	未成品。先端形状は石鏃様だが、残る側縁の形状は石鏃から大きく逸脱。製作途中で石鏃から石錐に変更か。	黒色頁岩	3.4	1.7	2.8	43 38
15	削器	幅広剥片。剥片端部を粗く加工。	黒色頁岩	6.0	9.6	65.3	43 38
16	凹石	楕円偏平礫。表面側にロート状の凹部・打痕、裏面側は集合打痕。上下両端を欠損。被熱。	粗粒輝石 安山岩	(10.0)	7.9	471.2	43 38
17	凹石	楕円偏平礫。表裏面にロート状の凹部2・摩耗痕。	粗粒輝石 安山岩	12.2	9.2	697.6	43 38
18	磨石	楕円偏平礫。表裏面・側面に弱い摩耗痕。	ひん岩	12.3	6.5	442.0	43 38
19	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗。側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	13.7	6.6	378.2	43 38
20	石皿	無縁。表裏面に摩耗痕・打痕。	粗粒輝石 安山岩	22.4	20.5	2464.6	43 38
21	台石	楕円礫。表裏面に礫中央に打痕。	粗粒輝石 安山岩	27.9	22.4	6007.5	43 38

17号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
5	打製石斧	撥型。完成状態。刃部加工は製作工程の最終的剥離。剥離面は新鮮で、未使用である可能性が高い。	珪質頁岩	10.2	6.8	161.4	46 38
6	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。製作の最終段階で左辺・返し部を欠損か。	チャート	3.9	(1.6)	1.8	46 38
7	削器	幅広剥片。左右両側縁を厚く錯向剥離、下端に刃部を作出。	黒色頁岩	7.5	8.2	76.2	46 38
8	削器	幅広剥片。剥片端部の石核裏面・分割面を取り込む。刃部は剥片端部裏面を加工して作出。	黒色頁岩	7.0	(6.5)	58.0	46 38
9	凹石	楕円偏平礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	9.5	6.8	200.4	46 38

遺物観察表

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
10	石製研磨具	棒状礫。表裏面・側面に多方向の線条痕。小口側両側縁に打痕。	ホルンフェルス	(4.1)	2.4	24.8	46 38

土坑

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
109坑1	石錐	完成状態。上端に近い左側縁をノッチ状に加工、摘み部の作出を意図。	黒曜石	3.4	0.9	1.5	53 39
117坑7	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。左辺返し部を欠損。	黒色頁岩	2.7	(2.0)	2.1	54 39
156坑3	石匙	縦型。完成状態。左側縁は背面側から、右側縁は腹面側から剥離して刃部を作出。	黒色頁岩	3.0	1.1	7.1	54 39
156坑4	打製石斧か	撥型。両側縁を加工後、直線的な刃部を作出。側縁加工は石斧様ではなく、ヘラ状石器に近い。機能的には削器か。	黒色頁岩	8.4	5.1	69.5	54 39
156坑5	削器	幅広剥片。厚い上端側を表裏面から剥離、端部に弧状の刃部を作出。	黒色頁岩	4.7	8.1	74.8	54 39
156坑6	凹石	楕円偏平礫。表裏面に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩	12.0	6.5	448.0	54 39
172坑4	打製石斧	短冊。未成品か。剥離面の稜は新鮮。上下両端を欠損。	珪質頁岩	(4.7)	(4.3)	26.6	54 39
172坑5	石鏃	凹基無茎鏃。未成品。石鏃側縁破片を再加工。側縁加工は微細でも装着部を作出せず、製作を放棄。	黒色安山岩	2.8	1.9	2.8	54 39
181坑4	玉	未成品。略円柱状。表面側には横位・斜位の線条痕が残り、面取り整形が顕著。裏面側が破損後、破損面を研磨。	滑石	2.2	(2.3)	7.9	54 40
214坑8	石鏃	不明。未成品。加工状態は粗く、表裏面に素材面を残す。	黒曜石	1.9	2.1	2.6	55 40
255坑2	打製石斧	短冊 a。完成状態。エッジは新鮮で、未使用の可能性。	珪質頁岩	10.0	3.9	67.9	55 40
256坑6	打製石斧	短冊 a。完成状態。刃部摩耗。刃部の再生使用は明らか。上半部を欠損。	黒色頁岩	(7.8)	4.9	72.0	55 40
256坑7	打製石斧	短冊 a。完成状態。刃部摩耗。捲縛痕不明。	黒色頁岩	10.1	4.3	81.8	55 40
259坑3	打製石斧	短冊 a。完成状態。刃部摩耗・捲縛痕あり。刃部を再生時に破損か。	細粒輝石安山岩	(7.3)	4.7	102.1	56 40
259坑4	凹石	楕円礫か。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩	(6.5)	(4.9)	170.0	56 40
302坑8	磨石	円形偏平礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩	12.9	12.1	689.1	56 40
336坑4	打製石斧	撥型。完成状態。刃部に微弱摩耗。捲縛痕不明。	黒色頁岩	10.2	5.2	66.9	56 41
340坑2	打製石斧	撥型。完成状態。剥離面は新鮮で未使用のようにも見えるが、刃部は微弱摩耗。	黒色頁岩	11.0	5.9	102.6	57 41
561坑1	磨石か	不明。側縁の打痕・摩耗が顕著で、稜を形成。表面には打痕・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩	(5.8)	(4.7)	39.5	57 41
660坑1	凹石	楕円礫。表面側にロート状の凹部1・裏面側集合打痕。被熱。	粗粒輝石安山岩	12.8	9.4	997.8	57 41
685坑3	凹石	楕円偏平礫。表裏面にロート状の凹部2。側縁に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石安山岩	13.2	7.1	457.6	58 41
687坑10	打製石斧	短冊 c。完成状態。側縁加工は石斧というよりヘラ状石器様で、裏面側剥離は浅く、表面側は深い。摩耗痕等不明。	黒色頁岩	8.3	4.3	59.1	58 42
687坑11	打製石斧	短冊。完成状態。頭部破片だが、側縁は開き気味。	黒色頁岩	(5.4)	(4.0)	36.9	58 42
687坑12	石鏃	凹基無茎鏃。未成品。加工が粗く、形態的にも対称性に欠ける。	黒色頁岩	2.3	1.5	1.0	58 42
687坑13	石錐か	左辺が直線的だが、右辺中央は突出気味。形態的に見て上下両端に機能部を作出した可能性が高い。	黒色頁岩	2.4	0.7	0.9	58 42
688坑1	石核	分割礫。表面側では礫面から、裏面側は打面と作業面を入れ替え、小型剥片を剥離。	黒色頁岩	5.6	7.8	201.9	58 42
688坑2	凹石	楕円礫。表裏面に集合打痕・摩耗痕。両端を欠損。	粗粒輝石安山岩	(9.2)	7.3	323.5	58 42
688坑3	有孔石製品	球形凹礫。礫中央に略方形(4cm)状の孔を両面穿孔。孔の最小径は1cm前後。孔は敲打後、平滑に整形、この整形面を縦位の条痕が切る。孔上端は摩耗しているように見える。	粗粒輝石安山岩	10.4	9.8	405.3	58 42

2号集石

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
2	凹石	楕円偏平礫。表裏面に打痕・摩耗痕。小口部・側縁に打痕。	粗粒輝石安山岩	12.1	(7.2)	437.8	60 42

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量(g)	図版写真
3	敲石	不定形。小口部両端に打痕。	粗粒輝石 安山岩	9.0	6.9	404.8	60 42

遺構外

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量(g)	図版写真
1	打製石斧	短冊a。完成状態か。側縁は捲縛痕様に微弱摩耗。刃部は新鮮。	黒色頁岩	10.9	4.8	67.9	68 47
2	打製石斧	短冊a。完成状態。刃部摩耗痕・捲縛痕あり。	細粒輝石 安山岩	11.4	4.4	92.1	68 47
3	打製石斧	短冊a。完成状態。刃部摩耗痕・捲縛痕あり。	細粒輝石 安山岩	11.0	4.1	66.5	68 47
4	打製石斧	短冊c。完成状態。刃部摩耗痕。右辺側縁リダクションは明らか。	黒色頁岩	13.9	4.9	123.4	68 47
5	打製石斧	短冊a。完成状態。剥離面を構成する稜は新鮮で、未使用か。刃部破損。	黒色頁岩	(10.6)	(5.1)	92.9	68 47
6	打製石斧	短冊a。完成状態か。剥離面は新鮮で、製作の最終段階で刃部を破損か。	細粒輝石 安山岩	(9.7)	(4.7)	78.1	68 47
7	打製石斧	短冊a。完成状態か。剥離面は新鮮で、製作の最終段階での破損か。	黒色頁岩	(9.0)	(3.7)	38.8	68 47
8	打製石斧	短冊a。完成状態か。剥離面は新鮮で、製作の最終段階で破損した可能性が高い。頭部破片。	黒色頁岩	(6.0)	(4.5)	51.8	68 47
9	打製石斧	短冊a。完成状態か。上下両端に欠損。側縁加工は丁寧、摩耗痕は見られない。	珪質頁岩	(8.0)	(5.1)	109.1	68 47
10	打製石斧	短冊a。完成状態。刃部の摩耗が顕著。使用時の破損か。	細粒輝石 安山岩	(6.2)	5.5	50.4	68 47
11	打製石斧	短冊a。完成状態。刃部摩耗あり。刃部破片だが刃部再生の痕跡は見られない。	細粒輝石 安山岩	(4.7)	4.4	44.2	68 47
12	打製石斧	短冊b。完成状態。刃部リダクションは明らか。側縁再生加工か。	細粒輝石 安山岩	12.1	8.0	187.7	68 47
13	打製石斧	短冊c。完成状態。刃部に摩耗・捲縛痕。裏面側に刃部再生あり。	黒色頁岩	9.4	4.8	64.1	68 47
14	打製石斧	短冊c。完成状態。刃部摩耗・側縁に微弱摩耗。	細粒輝石 安山岩	10.5	5.1	78.7	68 47
15	打製石斧	短冊c。完成状態。刃部摩耗・刃部再生あり。裏面側の側縁には大きな剥離があり、側縁整形がなされたことを示唆。	黒色頁岩	(8.7)	5.9	111.9	68 47
16	打製石斧	短冊c完成状態。刃部摩耗・捲縛痕は不明瞭。剥離面は比較的新鮮で、未使用の可能性あり。	黒色頁岩	14.0	5.8	225.6	68 47
17	打製石斧	短冊c。完成状態。刃部摩耗・捲縛痕あり。	細粒輝石 安山岩	14.5	6.1	197.6	68 47
18	打製石斧	撥型。完成状態。刃部を最終的に作出。形状はヘラ状石器に近い。刃部摩耗・捲縛痕等は見られない。	黒色頁岩	9.1	5.0	64.5	68 47
19	打製石斧	撥型。完成状態。左辺側縁・裏面を薄く平坦剥離、右辺側縁・裏面をトリミング様に剥離。刃部角は薄い。	黒色頁岩	9.1	5.1	61.2	68 47
20	打製石斧	撥型か。完成状態。側縁加工の後、裏面側から刃部作出。加工は粗く、直刃様の刃部。裏面側中央の稜に微弱摩耗痕か。	黒色頁岩	7.9	5.2	68.9	68 47
21	打製石斧	石鏃か。完成状態。側縁に捲縛痕。上半部に括れ部を有し、幅広の身が付くタイプ。刃部はリダクションを受け変形。	灰色安山岩	15.3	8.6	271.3	68 47
22	磨製石斧	乳房状。完成状態。刃部は表裏面とも剥落後に研磨。	変輝緑岩	5.9	6.8	139.1	68 47
23	石鏃	凹基無茎鏃。完成状態。薄身で優品。	チャート	2.3	1.7	0.8	68 47
24	石鏃	凹基無茎鏃。未成品。加工は粗く、遺跡内製作か。	黒色安山岩	2.4	2.6	2.4	68 47
25	石匙	斜めタイプ。浅く小さな剥離を裏面側に施す。	黒色頁岩	3.0	5.2	7.6	68 47
26	石鏃	幅広剥片の打面側に摘み、剥片端部裏面に刃部作出。	黒色頁岩	(5.3)	5.8	19.2	68 47
27	石鏃	未成品か。刃部を構成する剥離面の稜線は新鮮。	黒色頁岩	(2.5)	(0.9)	1.4	69 47
28	石鏃	素材を載ち切るブランディング様の加工を施し、機能部作出。	チャート	(1.4)	(1.4)	0.5	69 47
29	削器	横長剥片。剥片端部に浅い剥離を施し、直線的刃部を作出。	黒色頁岩	4.2	8.0	21.4	69 47
30	削器	幅広剥片。裏面側の側縁に刃部を作出。	黒色頁岩	5.5	10.8	149.0	69 47
31	削器	幅広剥片。左右両側縁を粗く加工、刃部を作出。	黒色頁岩	5.3	7.5	32.3	69 47

遺物観察表

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
32	石核	剥片。上面・左辺で小型剥片を剥離。石鏃未成品の可能性もあり、加工痕ある剥片とすべきかもしれない。	黒曜石	2.8	3.1	7.5	69 48
33	原石	亜角礫。表裏面には剥離面があり、弱く風化。剥離面は複数個所にあり、割割としての評価は難しい。	黒曜石	7.9	7.2	177.9	69 48
34	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。表面側打痕は先端側に偏り、敲石的使用による所産か。側面に打痕・摩耗痕が顕著。	粗粒輝石 安山岩	(12.6)	9.2	902.6	69 48
35	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。小口部に打痕。両端の破損理由は不明。	粗粒輝石 安山岩	(12.6)	8.6	736.5	69 48
36	凹石	亜円礫。表面1・裏面2のロート状の凹部。小口部に打痕。	粗粒輝石 安山岩	8.4	6.8	488.6	69 48
37	凹石	不定形。表裏面にロート状の凹部1。側縁に敲打痕。	粗粒輝石 安山岩	(7.6)	(9.5)	319.9	69 48
38	凹石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕・摩耗痕が顕著。稜を形成。	石英閃緑 岩	14.2	8.8	1024.9	69 48
39	凹石	楕円偏平礫。表裏面にロート状の凹部2・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	(11.5)	9.5	535.2	69 48
40	凹石	円形偏平礫。表裏面に摩耗痕・中央に集合打痕。側縁に打痕全周。	石英閃緑 岩	10.5	9.4	696.3	69 48
41	磨石	楕円礫。表裏面に摩耗。小口部に打痕。	粗粒輝石 安山岩	14.6	9.2	1084.7	69 48
42	磨石	楕円礫。表裏面に打痕・摩耗痕。側縁に打痕。	粗粒輝石 安山岩	11.2	8.0	647.7	69 48
43	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗痕。右側側縁に打痕・摩耗痕。	粗粒輝石 安山岩	13.4	7.8	688.4	70 48
44	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗痕・小口部に打痕。細粒石材で、やや大型だが、石製研磨具の可能性も否定できない。	変質安山 岩	12.0	5.2	247.8	70 48
45	磨石	円形偏平礫。表裏面に摩耗痕。側縁は被熱して剥落。	石英閃緑 岩	9.8	9.0	61.1	70 48
46	磨石	円形偏平礫。表裏面に摩耗痕。右側側縁に打痕・摩耗痕。	石英閃緑 岩	10.9	9.8	690.9	70 48
47	磨石	楕円偏平礫。表裏面に摩耗痕。側縁に打痕。	石英閃緑 岩	16.3	11.9	969.7	70 48
48	敲石	楕円偏平礫。風化して器面全体が荒れ、打痕等は不明瞭。表裏面に打撃に伴う剥落あり。	ひん岩	8.3	5.1	143.0	70 48
49	敲石	不定形。表面側稜部・小口部先端に打痕。	変質安山 岩	10.6	6.1	516.5	70 48
50	敲石	棒状礫。小口部に近い側縁に打痕。打撃時に先端部を破損。	粗粒輝石 安山岩	(9.0)	5.4	280.1	70 48
51	多孔石	不定形。ロート状の凹部を表面・側面・裏面に穿つ。表面側に浅い条線あり。	粗粒輝石 安山岩	19.0	14.0	4363.2	70 48
52	玉	未成品。背面側は平坦で、横位・斜位に線条痕が付く。背面側・右辺際は面取り整形され、断面形状は略扁平を呈する。裏面側破損面は摩耗。破損は穿孔時か。	滑石	2.0	(2.1)	5.1	70 48
53	石製研磨具	楕円偏平礫。風化して不明瞭だが礫面には線条痕が残り、側縁には弱い稜の形成がある。	細粒輝石 安山岩	5.9	4.7	68.4	70 48
54	石製研磨具	棒状礫。白色石材で線条痕等は不明瞭だが、側縁は研磨による面の形成が明らか。	珩質変質 岩	7.3	3.7	95.8	70 48
55	石製研磨具	棒状礫。各面とも器体の長軸に斜位・平行する線条痕。	細粒輝石 安山岩	10.5	3.4	187.7	70 48
56	石製研磨具	棒状礫。側縁は研磨され、稜を形成。表裏面に多方向の線条痕。小口部に打痕。	細粒輝石 安山岩	6.7	2.7	45.3	70 48
57	砥石	偏平礫か。砥石としての研磨面は不明瞭だが、両側縁に平滑面があり、研磨面として認定。断面四角形状。	凝灰質砂 岩	(7.0)	5.4	93.3	70 48

2号墳

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
11	砥石	手持ち。裏面側は凹状に窪む。両側縁の使用は部分的。上下両端を欠損。	砥沢石	(6.6)	4.2	70.4	81 50
12	砥石	手持ち。両側面にノコギリ状の工具痕が残る。上下両端を欠損。	砥沢石	(7.4)	2.7	44.6	81 50

4号住居

番号	器種	製作・使用状況	石材	長さ	幅	重量 (g)	図版写真
12	砥石	手持ち。左側面を除く表裏、右側面を使用。上端側破損後に、径9mmの孔を両面穿孔。	砥沢石	9.6	5.7	195.0	88 51
13	石製品	楕円礫。表面側中央にロート状の凹部。裏面側は平坦で、摩耗。	二ツ岳軽 石	7.8	5.9	97.8	88 51

第9表 上泉唐ノ堀遺跡 縄文土器観察表

1号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴～底部	粗砂、白色粒	にぶい 橙	ふつう	底径10.2cm、現存器高25.8cm。キャリパー状器形の頸部以下の部位。浮線による構成で胴部に1帯の幅広の文様帯を作成、文様帯内に渦巻状モチーフを施す。文様帯の上下には刻みを付さない浮線で目の字状のモチーフを横位に連ねる。地文にRL横位施文。	諸磯b式	11	28

遺構外

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	黒褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	二ツ木式	12	28
2	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、石英	橙	ふつう	口縁が内折。浮線により幾何学モチーフを施す。	諸磯b式	12	28
3	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい 黄橙	ふつう	浮線を横位にめぐらす。	諸磯b式	12	28
4	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい 黄橙	良好	菱形の集合沈線を施す。地文に無節LRを横位施文。	諸磯b式	12	28
5	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	橙	良好	横位平行沈線を施し、沈線間に連弧状の平行沈線を充填する。	諸磯b式	12	28
6	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	赤褐	良好	RLを地文とし、横位集合沈線を施す。	諸磯b式	12	28
7	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒	橙	良好	口縁が緩く内湾。縦位鋸歯状の集合沈線を施して、口縁部に貼付文を付す。	諸磯c式	12	28
8	深鉢	胴部片				No. 9と同一個体。屈曲部下の部位。屈曲部下は縦位展開する集合沈線を施す。	諸磯c式	12	28
9	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、石英	明赤褐	良好	縦位、斜位の集合沈線を施す。	諸磯c式	12	28
10	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	明赤褐	良好	無節LRを横位施文する。	前期後葉	12	28
11	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	明赤褐	良好	無節LRを横位施文する。	前期後葉	12	28
12	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒	赤褐	良好	無節LRを横位施文する。	前期後葉	12	28
13	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい 褐	良好	結節縄文を縦位施文する。	中期初頭	12	28
14	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	赤褐	ふつう	沈線による懸垂文、縦位撚糸文を施す。	加曾利E2式	12	28
15	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい 黄橙	ふつう	沈線による懸垂文、横位鋸歯状文を施す。地文にLR縦位施文。	加曾利E2式	13	28
16	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、石英	赤褐	ふつう	沈線により縦位楕円状モチーフを描き、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式	13	28
17	深鉢	口縁部片	粗砂	にぶい 黄橙	ふつう	口縁部に3条の沈線をめぐらす。口唇内折、口縁内面に1条の隆線をめぐらす。	加曾利B1式	13	28

第10表 上泉新田塚遺跡群 縄文土器観察表

5号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい 橙	良好	くの字状に外屈する器形。RL、LRを羽状施文する。	黒浜式	16	28
2	深鉢	口縁部片				No. 1と同一個体。	黒浜式	16	28
3	深鉢	胴部片				No. 4と同一個体。くの字状に外屈する。	黒浜式	16	28
4	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明黄褐	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	黒浜式	16	28
5	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい 赤褐	ふつう	口縁が緩く内湾。RL、LRを羽状施文し、連続爪形文を横位にめぐらす。内面研磨。	黒浜式	16	28
6	深鉢	口縁部片				No. 5と同一個体。	黒浜式	16	28
7	深鉢	胴部片				No. 5と同一個体。屈曲部下の部位。上位の連続爪形文下に繊細な爪形刺突を2段ほどめぐらす。	黒浜式	16	28
8	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	にぶい 褐	ふつう	口縁が緩く内湾。横位集合沈線、C字状刺突を施す。	黒浜式	16	28
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 赤褐	ふつう	連続爪形文を横位、斜位に施す。	有尾式	16	28
10	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	くの字状に外屈する器形。連続爪形文を横位多段に施す。	有尾式	16	28
11	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい 橙	ふつう	口縁が緩く内湾。LRを横位施文し、平行沈線による波状文を横位施文する。	黒浜式	16	28

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
12	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黄褐	ふつう	L Rを横位施文する。	黒浜式	16	28
13	深鉢	胴部片				No.12と同一個体。	黒浜式	16	29
14	深鉢	胴部片				No.12と同一個体。	黒浜式	16	29
15	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R Lを横位施文する。	黒浜式	16	29
16	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	L R、R Lを羽状施文する。	黒浜式	16	29
17	深鉢	胴部片	粗砂、片岩、繊維	にぶい橙	ふつう	頸部ですぼまる器形。R Lを横位施文する。	黒浜式	16	29
18	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	16	29
19	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	外屈する器形。R Lを横位施文する。	黒浜式	16	29
20	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい橙	ふつう	附加条1種L R+Rを横位施文する。	黒浜式	16	29
21	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、繊維	橙	良好	矢羽根状沈線を横位多段に施す。	前期前葉	16	29
22	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口唇尖頭状で刻みを付す。R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	16	29
23	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	端部結節の結節縄文を横位施文する。	前期前葉	16	29
24	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	ループ縄文を羽状施文する。	前期前葉	16	29
25	深鉢	底部片	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	推定底径7.8cm。上げ底。0段多条R Lを横位施文する。	前期前葉	16	29
26	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	推定底径6.0cm。L R、R Lを羽状施文する。	黒浜式	16	29
27	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	推定底径9.0cm。R Lを横位施文する。	黒浜式	16	29
28	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	灰黄褐	ふつう	連続爪形文により幾何学モチーフを描く。地文にR L横位施文。	諸磯b式	16	29
29	深鉢	胴～底部	粗砂	にぶい赤褐	良好	底径6.8cm。附加条2種L+Lを横位施文する。	諸磯b式	17	29

6号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条L Rを横位施文し、刻み隆帯をめぐらす。	二ツ木式	18	29
2	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	刺切文状の短沈線を施す。口唇部に刺突を付す。	前期前葉	18	29
3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	縦位の短沈線を多段に施す。	前期前葉	18	29
4	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	C字状刺突を多段に施す。	前期前葉	18	29
5	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	口唇尖頭状。L Rを横位施文する。	前期前葉	18	29
6	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く外反。結節縄文を横位施文する。	前期前葉	18	29
7	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	18	29
8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	灰黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	18	29
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	18	29
10	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	18	29
11	深鉢	胴部片	細砂、繊維	明赤褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	18	29
12	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	18	29
13	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	R L、L Rの菱形構成。	黒浜式	18	30
14	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	18	30
15	深鉢	底部片				No.14と同一個体。底径11.6cm。R L、L Rの菱形構成。	黒浜式	19	30
16	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	推定底径7.8cm。L Rを横位施文する。	黒浜式	18	30

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
17	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい 褐	ふつう	連続爪形文をめぐらせ、縦位の細沈線を施す。	浮島式	19	30
18	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒	にぶい 黄橙	ふつう	R Lを地文とし、連続爪形文をめぐらす。	諸磯b式	19	30
19	深鉢	胴部片				No.20と同一個体。	諸磯b式	19	30
20	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	赤褐	良好	浮線による横帯構成。地文にL R横位施文。	諸磯b式	19	30
21	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	にぶい 赤褐	ふつう	R Lを横位施文する。	諸磯b式	19	30

7号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、 繊維	にぶい 黄褐	ふつう	波状口縁で口縁に沿って2条の刻み隆帯を施す。文様帯内に刺切文がみられる。	二ツ木式	20	30
2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 褐	ふつう	波状口縁。L Rを横位施文する。器壁6mmと薄手。	前期前葉	20	30
3	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	20	30
4	深鉢	胴部片	粗砂、石英、 繊維	灰黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	20	30
5	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	灰黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	20	30
6	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	ループ縄文を横位施文する。	前期前葉	20	30
7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	ループ縄文を横位施文する。	前期前葉	20	30

8号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、 繊維	にぶい 黄褐	ふつう	口縁に沿って2条の刻み隆帯を貼付。文様帯内に撚糸側面圧痕、ハイガイと思われる貝殻背圧痕を施す。	二ツ木式	22	30
2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 褐	ふつう	波状口縁。口縁に沿って2条の刻み隆帯を貼付。文様帯内に波頂部下弧状隆帯、円形刺突を施す。	二ツ木式	22	30
3	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	波状口縁。口縁に沿って1条の刻み隆帯を貼付し、波頂部下に刻み隆帯による円状モチーフを施す。地文に0段多条L R、R Lの結束羽状縄文を横位施文する。	二ツ木式	22	30
4	深鉢	胴部片		橙	ふつう	No. 3と同一個体。0段多条L R、R Lの結束羽状縄文を施し、口縁部文様帯を画すと思われる2条の刻み隆帯をめぐらす。	二ツ木式	22	30
5	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、 繊維			No. 3と同一個体。	二ツ木式	22	30
6	深鉢	胴部片				No. 3と同一個体。	二ツ木式	22	30
7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 橙	ふつう	縦位の短沈線を多段に施す。上下に縄文帯があるようだ。	前期前葉	22	30
8	深鉢	胴部片				No. 7と同一個体。	前期前葉	22	30
9	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	口唇内削ぎ。0段多条L R、R Lを羽状施文する。	前期前葉	22	30
10	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	22	30
11	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 橙	ふつう	波状口縁。L R、R Lを羽状施文する。	前期前葉	22	30
12	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 黄褐	ふつう	波状口縁。口縁下に刺突列を1条めぐらせ、複節R L Rを横位施文する。口唇部に刻みを付す。	前期前葉	22	30
13	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。口唇部にも縄文を施文。	前期前葉	22	30
14	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	波状口縁。R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	22	30
15	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	橙	ふつう	口縁が緩く内湾。網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	22	30
16	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	22	30
17	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	底部に近い部位。網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	22	30
18	深鉢	胴部片	細砂、繊維	灰黄褐	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	22	30
19	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黄灰	ふつう	網代状の附加条縄文（附加条3種R L + R、L）を横位施文する。	前期前葉	22	30
20	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、 繊維	にぶい 黄褐	ふつう	胴下半が膨らみ、頸部ですばまって口縁が開く器形。結節縄文を横位施文する。胴下位は羽状構成顕著。	前期前葉	23	31
21	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	口縁が緩く外反。結節縄文を横位施文する。	前期前葉	23	31

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
22	深鉢	胴部片				No.21と同一個体。胴下半の膨らむ部位。	前期前葉	23	31
23	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	網代状の附加条縄文（附加条3種RL+R、L）を横位施文する。	前期前葉	23	31
24	深鉢	胴部片				No.25と同一個体。	前期前葉	23	31
25	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	灰黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	23	31
26	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文（附加条3種RL+R、L）を横位施文する。	前期前葉	23	31
27	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	推定底径7.0cm。上げ底。結節縄文を横位施文する。底面にも施文。	前期前葉	23	31
28	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	底径6.8cm。若干上げ底。RL、LRを施す。底面にも施文。No.69と同一個体と思われる。	前期前葉	23	31
29	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	明赤褐	ふつう	附加条1種RL+L、LR+Rを羽状施文する。	黒浜式	23	31
30	深鉢	胴部片				No.29と同一個体。	黒浜式	23	31
31	深鉢	胴部片				No.29と同一個体。	黒浜式	23	31
32	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄褐	ふつう	くの字状に外屈する器形。RLを横位施文する。	黒浜式	23	31
33	深鉢	口縁部片	細砂	浅黄橙	ふつう	連続爪形文により幾何学モチーフを描く。	諸磯b式	23	31

9号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	底部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	底径11.8cm。RLを横位施文する。	黒浜式	27	32
2	深鉢	胴部片	粗砂	灰黄褐	ふつう	浮線を横位にめぐらす。地文にRL横位施文。	諸磯b式	27	32
3	深鉢	口縁部片				No.2と同一個体。口縁が緩く内湾。口縁下に2条の浮線をめぐらす。	諸磯b式	27	32
4	深鉢	口縁部片				No.2と同一個体。	諸磯b式	27	32
5	深鉢	胴部片				No.2と同一個体で、胴下位の膨らむ部位。	諸磯b式	27	32
6	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	半截竹管内皮による刺突を横位多段に施す。上位にLR横位施文。	前期前葉	27	32
7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明黄褐	ふつう	くの字状に外屈する器形。連続爪形文を横位、斜位に施す。	有尾式	27	32
8	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、石英	にぶい橙	ふつう	結節沈線をめぐらせて文様帯を区画、文様帯内は平行沈線によるモチーフを施す。結節沈線間に斜位の刻みを付す。	浮島式	27	32
9	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	ロッキングを施す。	浮島式	27	32

10号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴部片	細砂、繊維	橙	ふつう	横位、斜位、渦巻状の擦糸側面圧痕を施し、間隙に刺切文を施す。剥落しているが、刻み隆帯で横位区画される。	二ツ木式	29	32
2	深鉢	口縁～胴部	細砂、繊維	にぶい橙	ふつう	推定口径33.4cm。複合口縁で、4単位と思われる小突起を付す。複節0段多条RLを横位施文する。肥厚部下に刺突をめぐらす。	前期前葉	29	32
3	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	29	32
4	深鉢	胴部片				No.3と同一個体。	前期前葉	29	32
5	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	29	32
6	深鉢	胴部片				No.7と同一個体。	前期前葉	29	32
7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	29	32
8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	29	32
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	30	32
10	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	RLを横位施文する。	前期前葉	30	32
11	深鉢	胴部片				No.10と同一個体。RL、LRを羽状施文。	前期前葉	30	32
12	深鉢	口縁部片	細砂、黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	30	32
13	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	30	32
14	深鉢	胴部片	細砂、黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	30	32
15	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	30	32

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
16	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい赤褐	ふつう	口唇内削ぎ。半截竹管による平行沈線、コンパス文を施し、貼付文を付す。	関山I式	30	32
17	深鉢	胴部片	細砂、繊維	明黄褐	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文し、幅狭なループ縄文を多段に施す。	関山I式	30	32
18	深鉢	胴部片				No.17と同一個体。	関山I式	30	32
19	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	LR、前々段合撫を羽状施文する。	前期前葉	30	32

11号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁～胴下位	粗砂、細礫、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口径30.7cm。胴下位が膨らみ、口縁が緩く外反する器形。ループ縄文を横位多段に施す。口唇部にも施文。口縁内面研磨。	二ツ木式	32	33
2	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄褐	ふつう	推定口径30.8cm。口縁が緩く外反する器形。全面に結節縄文を横位施文し、口縁部文様帯を区画するように幅広い刻み隆帯を2条ずつめぐらす。	二ツ木式	33	33
3	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	波状口縁。口縁に沿って2条、波頂部下に弧状の刻み隆帯を付す。文様帯内は擦糸側面圧痕、円形刺突、刺切文を施す。	二ツ木式	32	33
4	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい赤褐	ふつう	波状口縁。口縁に沿って刻み隆帯を2条貼付し、文様帯内に擦糸側面圧痕によるワラビ手文、円形刺突、刺切文を施す。	二ツ木式	32	33
5	深鉢	口縁部片				No.4と同一。	二ツ木式	32	33
6	深鉢	口縁部片	細砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。口縁に沿って刻み隆帯を貼付し、文様帯内に刺切文を施す。	二ツ木式	32	33
7	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。剥落しているが、口縁に沿って刻み隆帯が貼付されていた痕跡がある。波頂部下に弧状の刻み隆帯を貼付し、内部に刺切文を充填施文する。	二ツ木式	32	33
8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	No.3と同一。擦糸側面圧痕、刻み隆帯を2条ずつめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は擦糸側面圧痕、刺切文を施す。文様帯下は幅狭なループ縄文を施文。	二ツ木式	33	33
9	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	橙	ふつう	波状口縁。口縁に沿って刻み隆帯を2条貼付。波頂部下に2条の刻み隆帯による円状モチーフを施し、間隙に刺切文を施す。	二ツ木式	33	33
10	深鉢	口縁部片				No.11と同一個体。		33	33
11	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	結節縄文を全面に施文。口縁部文様帯を区画するように刻み隆帯を2条ずつめぐらす。刻みは半截竹管内皮による。	二ツ木式	33	33
12	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に2条の刻み隆帯を貼付し、0段多条RL、LR縄文を横位施文する。	二ツ木式	33	33
13	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。口縁に沿って2条の刻み隆帯を貼付し、0段多条RL、LRを羽状施文する。	二ツ木式	33	33
14	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	口縁下に2条の細隆線をめぐらせ、口縁から円形刺突を4段施す。刺突列下はRL、LRを羽状施文する。	二ツ木式	33	33
15	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	細隆線2条、円形刺突を施す。No.132と同一個体と思われるが、部位は異なるようだ。胴上位に同様の施文域があるのか。	二ツ木式	33	33
16	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい赤褐	ふつう	口縁が緩く外反。半截竹管による平行沈線により対弧状モチーフを描き、間隙にC字状刺突を充填施文する。	前期前葉	33	33
17	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	緩く外反する器形。網状の附加条縄文を横位施文する。屈曲部に2条の刻み隆帯をめぐらす。	二ツ木式	33	33
18	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	刻み隆帯を3条めぐらせて区画。0段多条RL、LRを羽状施文する。	二ツ木式	33	33
19	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい橙	ふつう	1本書きの梯子状沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は荒れて判然としないが刺切文が見られる。文様帯下はLRを横位施文。	二ツ木式	33	33
20	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	明赤褐	ふつう	RL、LRの結束羽状縄文を横位施文し、縄文帯間に円形刺突を施す。	二ツ木式	33	33
21	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。縄文帯間にハイガイと思われる貝殻背圧痕を充填施文する。	二ツ木式	33	33
22	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	0段多条LR、RLを羽状施文する。	前期前葉	33	33
23	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、繊維	灰黄褐	ふつう	RL、LRを羽状施文する。口唇部にも施文。	前期前葉	33	34
24	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	0段多条LR、RLを羽状施文する。	前期前葉	33	33
25	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	橙	良好	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	33	34
26	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	33	34
27	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	複節RLRを横位施文する。	前期前葉	33	34
28	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で口縁が緩く外反する器形。縄文を施すが、原体不明。	前期前葉	33	34

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
29	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。0段多条RL、LRの結束羽状縄文を横位施文する。口唇部にも縄文を施文。	前期前葉	33	34
30	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	RL、LRの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	33	34
31	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	浅黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。網代状の附加条縄文（附加条3種RL+R、L）を横位施文する。	二ツ木式	33	34
32	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	34	34
33	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	34	34
34	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	緩く外反する器形。網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	34	34
35	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶい黄褐	ふつう	緩く外反する器形。網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	34	34
36	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文（附加条3種RL+R、L）を横位施文する。8住No.26と同一個体。	二ツ木式	34	34
37	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	橙	ふつう	口縁が緩く外反。結節縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
38	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	口縁が緩く外反。結節縄文を横位施文するようだが、施文が浅く判然としない。	前期前葉	34	34
39	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
40	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。8住No.24、25と同一個体と思われる。	前期前葉	34	34
41	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
42	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
43	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、石英、白・黒色粒、繊維	橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
44	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
45	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	ループ縄文を横位施文する。	前期前葉	34	34
46	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	底径7.7cm。上げ底。結節縄文を横位施文する。底面にも施文。	前期前葉	34	34
47	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。上端に横位平行沈線がみられる。	黒浜式	34	34
48	ミニチュア	口縁部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	推定口径5.1cm。波状口縁。RLを横位施文する。波頂部口唇部に赤色塗彩の痕跡あり。	前期前葉	34	34
49	ミニチュア	胴部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	無文。	前期前葉	34	34

12号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	全面にRL、LRの結束羽状縄文を横位施文し、刻み隆帯をめぐらす。隆帯の両脇に刺突を沿わせる。	二ツ木式	38	36
2	深鉢	口縁部片				No. 1と同一個体。複合口縁。肥厚部にも縄文を施文。	二ツ木式	38	36
3	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。	二ツ木式	38	36
4	深鉢	口縁～胴部	粗砂、細礫、繊維	にぶい黄橙	ふつう	推定口径34.8cm。胴下位が膨らみ、口縁が開く器形。RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	38	36
5	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	複合口縁。縄文を施すが、原体不明。内面縦位、斜位のナデ痕顕著。	前期前葉	38	36
6	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口縁に沿って1条の刻み隆帯をめぐらせ、文様帯内に刺切文を施す。	二ツ木式	38	36
7	深鉢	口縁部片				No. 8と同一個体。	二ツ木式	38	36
8	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	橙	ふつう	波状口縁。口縁に沿って刻み隆帯を2条貼付し、文様帯内に撚糸側面圧痕によるワラビ手文、円形刺突、刺切文を施す。	二ツ木式	38	36
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口縁付近の部位で波状口縁と思われる。隆帯を4条めぐらせ、隆帯間に幅広のペン先状刺突を施す。隆帯下は結節縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
10	深鉢	胴部片				No. 9と同一個体。	前期前葉	39	36
11	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	刻み隆帯をめぐらせて区画し、文様帯内に刺切文を施す。	二ツ木式	39	36
12	深鉢	胴部片	細砂、繊維	にぶい赤褐	ふつう	円形刺突を横位多段に施す。	前期前葉	39	36
13	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、石英、繊維	にぶい黄褐	ふつう	C字状刺突を横位多段に施し、ループ縄文?を横位施文する。	前期前葉	39	36

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
14	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	橙	ふつう	口縁が緩く外反。R Lを横位施文する。	前期前葉	39	36
15	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	波状口縁で口縁が緩く外反。0段多条R L、L Rを羽状施文する。口唇部にも施文。	前期前葉	39	36
16	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	39	36
17	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい赤褐	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	39	36
18	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	39	36
19	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	39	36
20	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	39	36
21	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	39	36
22	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄褐	ふつう	0段多条R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
23	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	灰黄褐	ふつう	口縁が緩く外反。R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。口唇部に刻みを付す。	前期前葉	39	36
24	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、繊維	灰黄褐	ふつう	口唇尖頭状。R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
25	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口唇が外に張り出す。0段多条R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
26	深鉢	口縁部片				No.25と同一個体。	前期前葉	39	36
27	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に結節縄文の施文域を作出し、以下、0段多条R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
28	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
29	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	灰黄褐	ふつう	外反する器形。0段多条R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	39	36
30	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	褐	ふつう	口縁が緩く外反。網代状の附加条縄文を横位施文する。附加縄は0段。	二ツ木式	39	36
31	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	前期前葉	39	37
32	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	39	37
33	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	暗灰黄	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	39	37
34	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	波状口縁で波頂部に円形刺突を施す。結節縄文を横位施文する。	前期前葉	39	37
35	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	39	37
36	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	明黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	39	37
37	深鉢	胴部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。上位を磨り消している。	前期前葉	39	37
38	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	ループ縄文を横位施文する。	前期前葉	40	37
39	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	橙	ふつう	ループ縄文を横位施文する。	前期前葉	40	37
40	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	推定底径8.2cm。上げ底。網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	40	37
41	深鉢	底部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	底径11.0cm。高さのある上げ底。結節R L、L Rを羽状施文する。台内面にも施文。	前期前葉	40	37
42	深鉢	底部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	底径6.5cm。上げ底。結節縄文を横位施文する。底面に斜格子目状の沈線を施す。	前期前葉	40	37
43	深鉢	底部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	底径9.5cm。上げ底。0段多条L Rを横位施文する。底面にも施文。	前期前葉	40	37

14号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口唇尖頭状。波状口縁で口縁が緩く外反する器形。平行沈線による菱形文、コンパス文を施し、貼付文を付す。	関山I式	42	38
2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	口唇内削ぎ。平行沈線をめぐらせて幅狭な口縁部文様帯を区画、文様帯内は平行沈線による鋸歯状文を施し、刻みを付す。区画内に楕円状文、逆V字状文を施す。文様帯下は縄文を施文。	関山I式	42	38

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	明赤褐	良好	ループ縄文を幅狭施文、0段多条RL、LRを羽状施文する。	関山I式	42	38
4	深鉢	胴部片				No. 5と同一個体。	関山I式	42	38
5	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条RL、LRの結束羽状縄文を横位施文する。	関山I式	42	38
6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条LR、ループ縄文を横位施文する。	関山I式	42	38
7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	ループ縄文を異間隔、羽状施文する。	関山I式	42	38
8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	足長のループ縄文を羽状施文する。	関山I式	43	38
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	43	38
10	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい橙	ふつう	0段多条RL、LRの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	43	38

17号住居

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁～胴部	粗砂、黒色粒、繊維	明赤褐	ふつう	推定口径20.0cm。胴下位が膨らみ、口縁が緩く開く器形。口縁に4個の角状突起を付し、突起下にコンパス文を施文。半截竹管による梯子状沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は梯子状沈線による鋸歯状を基調としたモチーフを施す。間隙に半円形の沈線を施す。文様帯下は足長ループ縄文を菱形施文し、コンパス文をめぐらす。	関山I式	46	38
2	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。	関山I式	46	38
3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	幅狭なループ縄文を横位多段に施す。	関山I式	46	38
4	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。	関山I式	46	38

土坑

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
61-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	黒褐	ふつう	波状口縁。口縁に沿って、また横位に2条の刻み隆帯を施し、区画内に刺切文を施す。	二ツ木式	53	38
61-2	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。文様帯下に網代状の附加条縄文を横位施文する。附加縄はL1条のみ。	二ツ木式	53	38
61-3	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。	二ツ木式	53	38
61-4	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	53	38
61-5	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、繊維	にぶい赤褐	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	53	38
61-6	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	53	38
63-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で緩く外反する器形。撚糸側面圧痕によるワラビ手状文、円形刺突、刺切文を施す。口縁下の刻み隆帯はない。	二ツ木式	53	39
63-2	深鉢	胴部片	細砂、繊維	橙	ふつう	撚糸側面圧痕をめぐらせて文様帯を区画、文様帯内に刺切文を施す。	二ツ木式	53	39
63-3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	良好	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	53	39
63-4	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	53	39
63-5	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄褐	ふつう	地文にRL、LRの羽状縄文を施し、2条の連続爪形文で文様帯を区画、文様帯内に斜格子目沈線を施す。	諸磯b式	53	39
63-6	深鉢	胴部片				No. 5と同一個体。	諸磯b式	53	39
64-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	橙	良好	連続爪形文を横位、弧状に施す。	諸磯b式	53	39
64-2	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	浮線を横位にめぐらす。地文にRL、LRの結束羽状縄文を横位施文する。	諸磯b式	53	39
64-3	深鉢	胴部片				No. 2と同一個体。	諸磯b式	53	39
64-4	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい赤褐	良好	浮線を横位にめぐらす。地文にRL、LRの結束羽状縄文を横位施文する。	諸磯b式	53	39
64-5	深鉢	胴部片				No. 2と同一個体。	諸磯b式	53	39
65-1	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、石英、繊維	にぶい橙	良好	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	53	39
65-2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい褐	ふつう	LRを横位施文する。	前期前葉	53	39
74-1	深鉢	口縁部片	粗砂	にぶい赤褐	ふつう	口縁に小突起を付す。連続爪形文を横位にめぐらせ、爪形文間に斜位の刻みを充填施文する。	諸磯b式	53	39

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
74-2	深鉢	口縁部片	粗砂	にぶい 橙	ふつう	波状口縁で内湾する器形。浮線により渦巻文など幾何学モチーフを施す。内面研磨。	諸磯b式	53	39
74-3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい 褐	ふつう	浮線を横位多段にめぐらせ、浮線間に横位の短浮線を付す。地文にR L、L Rの結束羽状縄文を横位施文。	諸磯b式	53	39
74-4	深鉢	胴部片				No. 6と同一個体。	諸磯b式	53	39
74-5	深鉢	胴部片				No. 6と同一個体。	諸磯b式	53	39
74-6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	灰黄褐	ふつう	くの字状に緩く外屈する器形。屈曲部に横位集合沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は平行沈線による斜格子目文を施す。文様帯下はR L、L Rの結束羽状縄文を横位施文。	諸磯b式	53	39
99-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 橙	ふつう	外反する器形。附加条2種(R L+R、R)、(L R+L、L)を羽状施文する。	黒浜式	53	39
99-2	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 赤褐	ふつう	口縁下に縦位短沈線を施し、連続爪形文を横位にめぐらす。	黒浜式	53	39
99-3	深鉢	底部片	粗砂、細礫、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	底径8.8cm。0段多条L Rを横位施文する。	黒浜式	53	39
117-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒 色粒、石英、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	口縁が緩く外反。口縁下に2条、文様帯内に弧状のC字状刺突を施す。	前期前葉	54	39
117-2	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	54	39
117-3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	54	39
117-4	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 赤褐	ふつう	L Rを横位施文する。内面研磨。	黒浜式	54	39
117-5	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	良好	R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期後葉	54	39
117-6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい 橙	ふつう	浮線による横帯構成。浮線上にR L施文。	諸磯b式	54	39
118-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒 色粒、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	54	39
118-2	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、 繊維	にぶい 褐	ふつう	L Rを横位施文する。	前期前葉	54	39
118-3	深鉢	底部片	粗砂、細礫、 繊維	にぶい 褐	ふつう	推定底径6.4cm。上げ底。R Lを横位施文する。底面にも施文。	前期前葉	54	39
156-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	灰黄褐	ふつう	口唇内削ぎ。平行沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山I式	54	39
156-2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 褐	ふつう	ループ縄文を横位施文する。	関山I式	54	39
172-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	暗灰黄	ふつう	口縁に突起を付す。複節R L Rを施文する。	加曾利E3式	54	39
172-2	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒、石英	灰黄	ふつう	条線を縦位施文する。内面塗彩痕あり。	加曾利E3式	54	39
172-3	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒	にぶい 黄橙	ふつう	条線を縦位施文する。	加曾利E3式	54	39
179-1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	赤褐	ふつう	R L、L Rを羽状施文し、連続爪形文を横位にめぐらす。内面研磨。	黒浜式	54	39
179-2	深鉢	胴部片	粗砂、片岩	橙	良好	多截竹管状工具による沈線で幾何学モチーフを描く。地文にR L横位施文。	諸磯b式	54	39
179-3	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、 片岩	橙	良好	口縁下でくびれる器形。無節L rを縦位、横位施文する。	前期後葉	54	39
179-4	深鉢	胴部片				No. 3と同一個体。	前期後葉	54	39
179-5	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒	褐	ふつう	R Lを横位施文する。	前期後葉	54	39
179-6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 石英	赤褐	良好	結節縄文を横位施文する。	前期後葉	54	39
180-1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい 黄褐	ふつう	浮線を横位、斜位に施す。内面研磨。	諸磯b式	54	39
181-1	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	無節L rを横位施文する。No.289と同一個体を思われる。	前期後葉	54	39
181-2	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。	前期後葉	54	39
181-3	ミニ チュア	口縁部片	粗砂	にぶい 黄橙	ふつう	推定口径3.5cm。無文。	前期後葉?	54	39
183-1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	54	39
183-2	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 石英	橙	ふつう	沈線により懸垂文を施し、R Lを縦位施文する。	加曾利E3式	54	39

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
190-1	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	浅黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	54	40
191-1	深鉢	胴部片	細砂、繊維	橙	ふつう	R L、L Rの結束羽状縄文を横位施文する。	前期前葉	54	40
191-2	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英、繊維	橙	ふつう	R Lを横位施文する。	前期前葉	54	40
191-3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい赤褐	ふつう	L Rを横位施文する。	黒浜式	54	40
201-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	橙	良好	横位集合沈線を施す。地文にR L横位施文。	諸磯b式	55	40
214-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	褐	ふつう	口縁に小突起を付す。幅狭な口縁部文様帯内に刻みを鋸歯状に充填施文し、以下、幅狭なループ縄文を横位多段に施す。波頂部にも刻みを付す。	関山I式	55	40
214-2	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	赤褐	ふつう	口唇内削ぎ。平行沈線、コンパス文を横位にめぐらせ、間隙に刻みを鋸歯状に充填施文、貼付文を付す。	関山I式	55	40
214-3	深鉢	胴部片				No. 2と同一個体。横位平行沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内にコンパス文、鋸歯状刻み、貼付文を施す。文様帯下はループ縄文を横位施文。	関山I式	55	40
214-4	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい橙	ふつう	0段多条R L、ループ縄文を異間隔施文し、コンパス文をめぐらす。	関山I式	55	40
214-5	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	No. 4と同一個体。足長のループ縄文による菱形構成。	関山I式	55	40
214-6	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい褐	ふつう	くの字状に外屈する器形。屈曲部に2条の連続爪形文をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は連続爪形文により菱形モチーフを描く。文様帯下はR L、L Rによる菱形構成。	有尾式	55	40
214-7	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい橙	ふつう	横位平行沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は平行沈線を斜位に充填施文し、貼付文を付す。文様帯下は足長ループ文による菱形構成。	関山I式	55	40
219-1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	55	40
219-2	深鉢	胴部片				No. 1と同一個体。	黒浜式	55	40
222-1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	55	40
243-1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	55	40
243-2	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、繊維	にぶい黄褐	ふつう	口縁に沿って連続爪形文を施す。	黒浜式	55	40
243-3	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白色粒、繊維	にぶい橙	ふつう	ループ縄文を羽状施文する。	関山I式	55	40
243-4	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	黄褐	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	55	40
243-5	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	無節R 1、附加条縄文を羽状施文する。	黒浜式	55	40
243-6	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄褐	ふつう	くの字状に外屈する器形。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	55	40
243-7	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄褐	ふつう	R Lを横位施文する。	黒浜式	55	40
243-8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	55	40
243-9	深鉢	底部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	推定底径11.0cm。R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	55	40
255-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	黒褐	ふつう	隆線により楕円状区画を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E3式	55	40
256-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい赤褐	良好	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	55	40
256-2	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	55	40
256-3	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白色粒、石英	にぶい黄橙	良好	口縁が内湾。隆線により楕円状区画を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E3式	55	40
256-4	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	黒褐	ふつう	条線を縦位施文する。	加曾利E3式	55	40
256-5	深鉢	胴部片				No. 4と同一個体。	加曾利E3式	55	40
259-1	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文する。	加曾利E3式	56	40
259-2	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、石英	灰黄	ふつう	隆線を1条めぐらせて口縁部無文帯を作出、隆帯下は沈線により楕円状モチーフを描き、R Lを充填施文する。	加曾利E3式	55	40
290-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁が内湾。沈線を1条めぐらせて口縁部無文帯を作出、沈線下はR Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	56	40
302-1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄褐	ふつう	連続爪形文を弧状に施す。	有尾式	56	40

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
302-2	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	黄灰	ふつう	R L、L Rを羽状施文し、連続爪形文を横位にめぐらす。	黒浜式	56	40
302-3	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	56	40
302-4	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白色粒、繊維	灰黄褐	ふつう	くの字状に外屈する器形。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	56	40
302-5	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白色粒、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	56	40
302-6	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄褐	ふつう	附加条縄文を横位施文する。	黒浜式	56	40
302-7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	56	40
312-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、L Rを横位施文する。	加曾利E3式	56	41
324-1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	良好	平行沈線を斜位に施し、貼付文を付す。地文に直前段合捺を横位施文する。	関山I式	56	41
329-1	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	56	41
336-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	56	41
336-2	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄褐	ふつう	波状口縁。隆線により楕円状区画を施し、R Lを充填施文する。256号土坑No. 1と同一個体と思われる。	加曾利E3式	56	41
336-3	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	底径5.0cm。沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	56	41
337-1	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	赤褐	ふつう	0段多条L Rを横位施文する。	黒浜式	56	41
338-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文（附加条3種R L+R、L）を横位施文する。	二ツ木式	56	41
338-2	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による楕円状区画、沈線による懸垂文を施し、L Rを充填施文する。	加曾利E3式	56	41
338-3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、石英	にぶい橙	ふつう	隆線により楕円状区画を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E3式	56	41
338-4	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	56	41
338-5	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい赤褐	良好	口縁が緩く内湾。R Lを施文する。	加曾利E式	56	41
338-6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	明赤褐	良好	L Rを縦位充填施文する。	加曾利E式	56	41
340-1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	明赤褐	良好	浮線により幾何学モチーフを描く。地文にR L横位施文。	諸磯b式	57	41
374-1	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	57	41
538-1	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で口縁が内湾。口縁に沿って1条の沈線をめぐらせ、以下、楕円状区画を施し、L Rを充填施文する。	加曾利E3式	57	41
538-2	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄褐	ふつう	口縁が緩く内湾。沈線により楕円状モチーフを描き、縄文を充填施文する。No.382と同一個体と思われる。	加曾利E3式	57	41
538-3	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄	ふつう	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下に条線を縦位施文する。	加曾利E3式	57	41
538-4	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	暗灰黄	ふつう	沈線による懸垂文、楕円状モチーフを施し、L Rを充填施文する。	加曾利E3式	57	41
542-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	口縁に角状突起を付す。平行沈線、梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山I式	57	41
543-1	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、繊維	橙	ふつう	波状口縁で口唇内削ぎ。梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山I式	57	41
543-2	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	良好	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E3式	57	41
543-3	深鉢	口縁部～胴部	粗砂、白・黒色粒	にぶい橙	ふつう	推定口径25.5cm。口縁が緩く内湾。沈線により楕円状モチーフを描き、L Rを充填施文する。	加曾利E3式	57	41
557-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	浅黄橙	良好	R Lを横位施文する。	加曾利E3式	57	41
560-1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	良好	ループ縄文を羽状、異間隔施文し、コンパス文をめぐらす。	関山I式	57	41
670-1	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	0段多条R L、L Rを羽状施文する。	前期前葉	57	41
678-1	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、繊維	明赤褐	ふつう	無節L rを横位施文する。	黒浜式	57	41
678-2	深鉢	胴部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	にぶい褐	ふつう	無節L rを横位施文する。	黒浜式	57	41
678-3	深鉢	胴部片	粗砂、石英、白色粒、繊維	にぶい赤褐	ふつう	無節L rを横位施文する。	黒浜式	57	41

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
678-4	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	浮線を横位にめぐらす。地文にRL、LRの結束羽状縄文を横位施文。	諸磯b式	57	41
678-5	深鉢	胴部片	粗砂、石英	橙	良好	平行沈線を横位施文する。地文にRL横位施文。	諸磯b式	57	41
682-1	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、繊維	明赤褐	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	黒浜式	57	41
684-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	波状口縁で口縁に沿って2条の刻み隆帯を貼付。文様帯内は斜位、弧状の刻み隆帯を貼付し、隙間に刺切文を施す。	二ツ木式	57	41
684-2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい赤褐	ふつう	口唇尖頭状。口縁下に幅狭な無文帯を設け、結節沈線をV字状に施す。	前期前葉	57	41
684-3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	明赤褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	57	41
685-1	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	赤褐	ふつう	胴下位が膨らみ、口縁に向かって開く器形。集合沈線による横帯構成で、上位の幅広の文様帯内には対弧状の集合沈線を施す。地文にLR横位施文。	諸磯b式	57	41
685-2	深鉢	口縁～胴部	粗砂、白・黒色粒	にぶい橙	良好	推定口径30.0cm。波状口縁で胴中に膨らみをもち、口縁が緩く外反する器形。横位結節沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は平行沈線を横位、斜位に充填施文する。文様帯下は幅狭な無文帯を空け、入組状の沈線、附加条縄文を施す。口唇部、結節沈線間に斜位の刻みを付す。	浮島式	58	41
686-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい褐	ふつう	波状口縁。口縁に沿って刺突を1条めぐらせ、複節RLRを横位施文する。口唇部に刻みを付す。8住No.12と同一個体。	二ツ木式	58	42
686-2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	58	42
686-3	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	58	42
686-4	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつう	RL、LRの菱形構成。	黒浜式	58	42
686-5	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	橙	ふつう	RL、LRの菱形構成。	黒浜式	58	42
686-6	深鉢	胴部片	粗砂、片岩、繊維	にぶい黄橙	ふつう	0段多条RLを横位施文する。	前期前葉	58	42
686-7	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	灰黄褐	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	黒浜式	58	42
686-8	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい褐	ふつう	連続爪形文を横位、斜位に施す。	有尾式	58	42
686-9	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	赤褐	ふつう	連続爪形文を横位、斜位に施す。	有尾式	58	42
687-1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄褐	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	58	42
687-2	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	58	42
687-3	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい橙	ふつう	緩く外反する器形。結節縄文を施す。	前期前葉	58	42
687-4	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	58	42
687-5	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	浅黄	ふつう	平行沈線、連続爪形文を横位施文する。内面研磨。	有尾式	58	42
687-6	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	RL、LRを羽状施文し、連続爪形文を横位にめぐらす。	黒浜式	58	42
687-7	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	LRを横位施文し、平行沈線による波状文を施す。	黒浜式	58	42
687-8	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	RLを横位施文する。内面研磨。	黒浜式	58	42
687-9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい褐	ふつう	RLをまばらに施す。	黒浜式	58	42

2号集石

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	遺構外No.42と同一個体。双頭の波状口縁で波頂部が内湾。梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山I式	60	42

遺構外

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
1	深鉢	口縁部片	粗砂	明赤褐	良好	口縁が緩く外反。外反部に無文帯を残し、撚糸文Lを縦位施文する。口唇部にも施文。外反部に指頭痕が1ヶ所見られる。	井草II式	61	42
2	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい橙	良好	撚糸文Rを縦位施文する。	夏島式	61	42
3	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	刻み隆帯を口縁下に2条めぐらせ、文様帯内に撚糸側面圧痕による弧状モチーフ、円形刺突、刺切文を施す。	二ツ木式	61	42

遺物 番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の 特徴等	備考	図版 番号	写真 番号
4	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	口縁下に2条の刻み隆帯を貼付。文様帯内は刺切文を施す。	二ツ木式	61	42
5	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、 繊維	橙	ふつう	口縁下に2条の刻み隆帯を貼付。文様帯内は弧状の刻み隆帯、刺切文を施す。	二ツ木式	61	42
6	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 赤褐	ふつう	波状口縁。口縁に沿って刻み隆帯、擦糸側面圧痕を2条ずつ施し、文様帯内は刺切文を施す。	二ツ木式	61	42
7	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄褐	ふつう	刻み隆帯をめぐらせて文様帯を区画、文様帯内は擦糸側面圧痕による曲線モチーフ、刺切文を施す。	二ツ木式	61	42
8	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	大ぶりの刻み隆帯を2条めぐらす。結節縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	42
9	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	大ぶりの刻み隆帯を2条めぐらせ、擦糸側面圧痕を沿わせる。隆帯下は0段多条LRを横位施文する。	二ツ木式	61	42
10	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	大ぶりの刻み隆帯を1条めぐらす。結節縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	42
11	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	口縁下に隆帯を2条めぐらせ、円形刺突を横位多段に施す。	二ツ木式	61	42
12	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 橙	ふつう	円形刺突帯を作出し、以下、縄文を施すが原体不明。区画文は施されない。	二ツ木式	61	42
13	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、 石英、繊維	橙	ふつう	波状口縁。半截竹管内皮による刺突を口縁下に2条めぐらせ、文様帯内にも同様の刺突で幾何学モチーフを施す。	前期前葉	61	42
14	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	連続爪形文、平行沈線を横位にめぐらせて文様帯を区画、文様帯内は平行沈線による幾何学モチーフを描き、余白にC字状刺突を充填施文する。	前期前葉	61	42
15	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	波状の複合口縁。結節縄文を横位施文する。肥厚部下に刺突をめぐらす。	前期前葉	61	42
16	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 橙	ふつう	波状の複合口縁。結節縄文を横位施文する。	前期前葉	61	42
17	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	灰黄褐	ふつう	複合口縁。結節縄文を横位施文する。	前期前葉	61	42
18	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、 繊維	橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	61	42
19	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	黒褐	ふつう	RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	61	42
20	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	61	42
21	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、 繊維	橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	61	42
22	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	61	42
23	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、 繊維	橙	良好	0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	61	43
24	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	43
25	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 褐	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	43
26	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	43
27	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒、石英、 繊維	橙	ふつう	網代状の附加条縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	43
28	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	橙	ふつう	底部に近い部位。上位に網代状の附加条縄文、下位に結束羽状縄文を横位施文する。	二ツ木式	61	43
29	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒 色粒、石英、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	2条巻きの擦糸文Lを横位、斜位施文する。	黒浜式	61	43
30	深鉢	口縁部片				No.29と同一個体。	黒浜式	61	43
31	深鉢	胴部片				No.29と同一個体。	黒浜式	61	43
32	深鉢	胴部片				No.29と同一個体。	黒浜式	61	43
33	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、 繊維	にぶい 橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	62	43
34	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、 黒色粒、繊維	にぶい 橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	62	43
35	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	62	43
36	深鉢	底部片	粗砂、細礫、 繊維	橙	ふつう	推定底径8.7cm。RL、LRを羽状施文する。底面にも施文。	前期前葉	62	43
37	深鉢	底部片	粗砂、石英、 繊維	橙	ふつう	底径6.2cm。上げ底。網代状の附加条縄文を横位施文する。底面にも施文。	二ツ木式	62	43
38	深鉢	胴部片	粗砂、石英、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	62	43

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
39	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英、繊維	にぶい黄橙	ふつう	結節縄文を横位施文する。	前期前葉	62	43
40	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	橙	ふつう	ループ縄文を等間隔帯状施文する。	二ツ木式	62	43
41	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	明赤褐	良好	口唇内削ぎ。平行沈線を浅く弧状に施して刻みを沿わせ、貼付文を付す。口唇外端に刻みを付す。	関山Ⅰ式	62	43
42	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	双頭の波状口縁で緩く内湾する。梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山Ⅰ式	62	43
43	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	No.42と同一個体。梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。文様帯下に幅狭なループ縄文を横位多段に施文。	関山Ⅰ式	62	43
44	深鉢	口縁部片				No.43と同一個体。	関山Ⅰ式	62	43
45	深鉢	胴部片				No.43と同一個体。	関山Ⅰ式	62	43
46	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	双頭の波状口縁で緩く内湾する。梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山Ⅰ式	62	43
47	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、繊維	にぶい黄橙	ふつう	No.46と同一個体。文様帯下にループ縄文を横位施文する。	関山Ⅰ式	62	43
48	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	平行沈線により鋸歯状文を施し、刻みを沿わせる。円形刺突を施した貼付文を付す。	関山Ⅰ式	62	43
49	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で波頂部が内湾。口縁に白歯状突起を付す。波頂部から環状突起を伴う隆線を垂下、梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。	関山Ⅰ式	62	43
50	深鉢	口縁部片	細砂、繊維	黒褐	ふつう	平行沈線をめぐらせて幅狭な口縁部文様帯を区画。文様帯内は鋸歯状の沈線を施し、貼付文を付す。間隙に部分的に刻みを付す。文様帯下は幅狭なループ縄文を横位多段に施文。	関山Ⅰ式	62	43
51	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	口唇内削ぎで口縁に白歯状の突起を付す。口縁下に2条の梯子状沈線をめぐらせ、文様帯内に梯子状沈線による入組文を施し、貼付文を付す。文様帯下端を画す区画文は施されないが、白歯状突起の位置に貼付文を並列させる。文様帯下は幅狭なループ縄文を横位多段に施し、波長の長いコンパス文を施す。	関山Ⅰ式	62	43
52	深鉢	口縁部片				No.53と同一個体。	関山Ⅰ式	62	43
53	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、石英、繊維	橙	ふつう	口縁に白歯状の突起を付す。平行沈線によりワラビ手文や鋸歯状文など幾何学モチーフを描き、貼付文を密に付す。	関山Ⅰ式	62	43
54	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	にぶい赤褐	ふつう	平行沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は平行沈線による幾何学モチーフを描き、間隙に刻みを付す。区画文上に貼付文を並列させる。文様帯下はループ縄文を横位施文。	関山Ⅰ式	62	43
55	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	平行沈線により鋸歯状文を施し、貼付文を付す。文様帯下にループ縄文を羽状施文する。	関山Ⅰ式	62	43
56	深鉢	胴部片				No.55と同一個体。	関山Ⅰ式	62	43
57	深鉢	胴部片				No.55と同一個体。	関山Ⅰ式	62	43
58	深鉢	胴部片				No.55と同一個体。	関山Ⅰ式	62	43
59	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	外反する器形。平行沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、一部沈線間に刻みを付す。文様帯下はループ縄文を異間隔施文する。	関山Ⅰ式	62	43
60	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	明赤褐	ふつう	緩く外反する器形。梯子状沈線をめぐらせて口縁部文様帯を区画、文様帯内は梯子状沈線により幾何学モチーフを描き、貼付文を付す。文様帯下はループ縄文による菱形構成。	関山Ⅰ式	62	43
61	深鉢	胴部片	粗砂、石英、繊維	明赤褐	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文、ループ縄文を施す。	関山Ⅰ式	62	43
62	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文し、コンパス文をめぐらす。	関山Ⅰ式	62	43
63	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	0段多条RL、LRを羽状施文、ループ縄文を施す。	関山Ⅰ式	62	43
64	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	ループ縄文を異間隔、菱形に施文する。	関山Ⅰ式	62	43
65	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、繊維	明赤褐	ふつう	直前段合燃を菱形施文、コンパス文をめぐらす。	関山Ⅰ式	62	43
66	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい黄橙	ふつう	附加条2種		62	43
67	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明黄褐	ふつう	外反する器形。直前段合燃を羽状施文する。	関山Ⅰ式	62	43
68	深鉢	底部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	底径8.4cm。上げ底。0段多条RL、LRを羽状施文する。	前期前葉	62	43
69	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	明赤褐	ふつう	波状口縁。口縁下に縦位平行短沈線帯を作出、連続爪形文、平行沈線により菱形モチーフを描く。	有尾式	63	43
70	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	赤褐	ふつう	口唇内削ぎ。横位平行沈線を多段にめぐらせ、連続爪形文を互い違いになるように施す。爪形文下は縄文を施文。	有尾式	63	43
71	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	波状口縁。平行沈線、連続爪形文を横位多段にめぐらす。	黒浜式	63	43
72	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、繊維	明赤褐	ふつう	口縁下に連続爪形文をめぐらす。	黒浜式	63	43
73	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	橙	ふつう	連続爪形文を横位にめぐらせて文様帯を区画、文様帯内は連続爪形文、平行沈線により幾何学モチーフを描く。	有尾式	63	43

遺物 番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の 特徴等	備考	図版 番号	写真 番号
74	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	横位、斜位に連続爪形文をめぐらす。	有尾式	63	43
75	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	L Rを横位施文し、連続爪形文を2条めぐらす。	黒浜式	63	43
76	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒、繊維	橙	ふつう	R Lを横位施文し、連続爪形文を横位にめぐらす。内面研磨。	黒浜式	63	43
77	深鉢	口縁部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	無節L Rを横位施文する。	黒浜式	63	43
78	深鉢	口縁部片	粗砂、黒色粒、 繊維	にぶい 黄橙	ふつう	くの字状に緩く外屈する器形。L Rを横位施文する。内面研磨。	黒浜式	63	43
79	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 繊維	橙	ふつう	無節L rを横位施文する。	黒浜式	63	44
80	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	無節R l、L rを羽状施文する。	黒浜式	63	44
81	深鉢	胴部片				No.78と同一個体。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	63	44
82	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明黄褐	ふつう	くの字状に外屈する器形。R L、L Rを羽状施文する。	黒浜式	63	44
83	深鉢	胴部片	粗砂、繊維	明黄褐	ふつう	附加条R L + R 2条を横位施文する。	黒浜式	63	44
84	深鉢	底部片	粗砂、繊維	にぶい 黄橙	ふつう	底径10.6cm。L Rを横位施文する。	黒浜式	63	44
85	深鉢	口縁部片	粗砂	にぶい 黄橙	ふつう	口唇外端肥厚。鋸歯状文を挟んだ横位集合沈線帯を多段に施す。地文にR L横位施文。	諸磯a式	63	44
86	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	良好	R Lを横位施文し、斜位楕円状の平行沈線、円形刺突を施す。	諸磯a式	63	44
87	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒 色粒	にぶい 黄橙	ふつう	連続爪形文を横位多段に施す。地文に無節L r横位施文。	諸磯b式	63	44
88	浅鉢	口縁部片	粗砂、細礫、 白色粒	橙	ふつう	口縁が強く内湾する器形。斜位の刻みを付した浮線をめぐらせて2帯の文様帯を区画。文様帯内は平行沈線によりワラビ手文や三角形状などの幾何学モチーフを描き、内部にL Rを充填施文する。平行沈線間には部分的に爪形文を充填施文する。	諸磯b式	63	44
89	深鉢	底部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	No.90と同一個体。底部際に斜位の刻みを付した浮線を2条めぐらす。文様帯内は平行沈線による三角形状など幾何学モチーフを描き、爪形文を沿わせる。平行沈線は片側のみ強く引かれる。	諸磯b式	63	44
90	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	平行沈線により弧状モチーフを描き、爪形文を沿わせる。	諸磯b式	63	44
91	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒	明赤褐	良好	斜位の連続爪形文、円形刺突を施す。	諸磯b式	63	44
92	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒	にぶい 黄橙	ふつう	連続爪形文により弧状モチーフを描く。爪形文間に斜位の刻みを付す。	諸磯b式	63	44
93	深鉢	胴部片	粗砂、黒色粒、 片岩	橙	良好	連続爪形文を横位にめぐらす。爪形文間に斜位の刻みを付す。地文にL R横位施文。	諸磯b式	63	44
94	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 石英	にぶい 橙	ふつう	連続爪形文により対弧状モチーフを描く。	諸磯b式	63	44
95	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、 黒色粒	橙	良好	連続爪形文を弧状に施し、爪形文間に斜位の刻みを充填施文する。	諸磯b式	63	44
96	浅鉢	胴部片	粗砂、細礫、 白色粒	橙	ふつう	No.88と同一個体で、88の下に続く部位。文様帯下はL R横位施文。	諸磯b式	63	44
97	深鉢	胴部片	粗砂	明赤褐	ふつう	連続爪形文を横位、斜位に施す。	諸磯b式	63	44
98	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、 石英	にぶい 黄橙	ふつう	連続爪形文により曲線モチーフを描く。爪形文間に斜位の刻みを付す。	諸磯b式	63	44
99	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい 橙	ふつう	口縁が緩く内湾。浮線による横帯構成で、口縁部に浮線による幾何学モチーフを描く。口唇部に刻みを付さない浮線を鋸歯状に施す。	諸磯b式	63	44
100	深鉢	口縁部片				No.99と同一個体。	諸磯b式	63	44
101	深鉢	口縁部片	粗砂	明赤褐	良好	口縁が緩く内湾。浮線による横帯構成で、口縁部に浮線による幾何学モチーフを描く。口唇部に刻みを付す。	諸磯b式	63	44
102	深鉢	口縁部片				波状口縁で波頂部に複数の突起をもつと思われる。	諸磯b式	63	44
103	深鉢	胴部片				No.101と同一個体。地文に端部結節のR L、L R結束羽状縄文を横位施文。	諸磯b式	63	44
104	深鉢	胴部片				No.105と同一個体。	諸磯b式	63	44
105	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、 白・黒色粒	橙	ふつう	浮線による横帯構成。浮線には斜位の刻みを付すが、一部大きく鋸歯状に施す。地文にR L横位施文。	諸磯b式	63	44
106	深鉢	胴部片				No.105と同一個体。	諸磯b式	63	44
107	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	橙	ふつう	浮線による横帯構成。浮線には粗い斜位の刻み、一部R Lを施す。地文にR L横位施文。	諸磯b式	63	44
108	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒 色粒	にぶい 黄橙	ふつう	浮線により幾何学モチーフを描く。	諸磯b式	63	44

遺物観察表

遺物 番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版 番号	写真 番号
109	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	浮線による横帯構成。地文にRL横位施文。	諸磯b式	63	44
110	深鉢	底部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	底径11.8cm。浮線による横帯構成。地文にRL横位施文。	諸磯b式	63	44
111	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、黒色粒	明赤褐	良好	波状口縁。横位集合沈線を施す。地文にRL横位施文。	諸磯b式	64	44
112	深鉢	口縁部片				No.111と同一個体。	諸磯b式	64	44
113	深鉢	胴部片	粗砂、石英	にぶい黄橙	良好	靴先状の波状口縁。平行沈線により幾何学モチーフを描く。	諸磯b式	64	44
114	深鉢	胴部片	粗砂、片岩	明赤褐	良好	強く外反する器形。多載竹管状工具による沈線で幾何学モチーフを描く。地文にRL横位施文。	諸磯b式	64	44
115	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄褐	ふつう	多載竹管状工具による平行沈線を横位、斜位に施す。	諸磯b式	64	44
116	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい黄橙	ふつう	多載竹管状工具による平行沈線を横位に施す。地文にRL横位施文。	諸磯b式	64	44
117	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	良好	平行沈線による波状文を横位多段に施す。地文にRL横位施文。	諸磯b式	64	44
118	深鉢	口縁部片	粗砂、片岩	明赤褐	良好	口縁が緩く内湾。RLを横位施文する。口唇部に斜位の刻みを付す。	前期後葉	64	44
119	深鉢	口縁部片				No.118と同一個体。	前期後葉	64	44
120	深鉢	胴部片	粗砂	明赤褐	良好	RLを横位施文する。	前期後葉	64	44
121	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	RLを横位施文する。	前期後葉	64	44
122	深鉢	胴部片	粗砂、石英	にぶい黄橙	ふつう	端部結節RLを横位施文する。	前期後葉	64	44
123	深鉢	胴部片	粗砂	橙	良好	RLを横位施文する。	前期後葉	64	44
124	浅鉢	胴部片	粗砂	赤褐	良好	屈曲部下の部位。無文。	諸磯b式	64	44
125	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい黄橙	ふつう	内部に斜位の刻みを充填施文した結節沈線、入組状の沈線をめぐらす。	浮島式	64	44
126	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒、石英	赤褐	良好	結節浮線を横位多段にめぐらせ、浮線間に鋸歯状素浮線をめぐらす。	前期末葉	64	44
127	深鉢	口縁部片	粗砂、石英	明赤褐	良好	口縁内湾で小突起を付す。横位、斜格子目沈線を施す。	中期初頭	64	44
128	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、片岩	明赤褐	良好	口縁下に1条の沈線をめぐらせ、平行沈線により楕円状区画を施し、区画内に斜格子目沈線を充填施文する。	中期初頭	64	44
129	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、片岩	橙	良好	波状口縁。平行沈線を横位にめぐらせ、平行沈線により楕円状区画を施し、区画内に斜格子目沈線を充填施文する。	中期初頭	64	44
130	深鉢	口縁部片	粗砂、石英	赤褐	良好	口唇内削ぎで内端肥厚。横位、斜位の平行沈線を施す。	中期初頭	64	44
131	深鉢	口縁部片	粗砂、石英	赤褐	良好	平行沈線により鋸歯状、楕円状区画を施し、区画内に縦位沈線を充填施文する。間隙に印刻を施す。	中期初頭	64	44
132	深鉢	口縁部片	粗砂	にぶい黄橙	良好	口縁が緩く内湾。横位、縦位の沈線を施す。口縁内面に隆線を1条めぐらせ、口唇部に刻みを付す。	中期初頭	64	44
133	深鉢	胴部片				No.134と同一個体。間隙に印刻を施す。	中期初頭	64	44
134	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	にぶい赤褐	良好	半隆起線により楕円状区画を施し、区画内に斜位、斜格子目の半隆起線を充填施文する。	中期初頭	64	44
135	深鉢	胴部片	粗砂、石英、雲母	明赤褐	良好	多載竹管状工具による平行沈線で幾何学モチーフを描き、内部に斜格子目沈線を充填施文する。	中期初頭	64	44
136	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	にぶい黄橙	良好	端部結節縄文を縦位施文する。	中期初頭	64	44
137	深鉢	胴部片	粗砂、細礫	橙	良好	端部結節縄文を縦位施文する。	中期初頭	64	44
138	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、石英、雲母	橙	良好	ヒダ状文を施す。	阿玉台式	64	44
139	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	口縁部文様帯内に隆帯による渦巻文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	44
140	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。隆帯により横位楕円状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曾利E3式	64	44
141	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。隆帯により横位楕円状モチーフを描き、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	44
142	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に横位沈線をめぐらせ、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	44
143	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	隆帯による横位楕円状モチーフを施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	45
144	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。隆帯により楕円状モチーフを描き、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	45
145	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に1条の沈線。隆帯により曲線モチーフを施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	45
146	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆帯により口縁部楕円状区画を施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式	64	45

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
147	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、黒色粒	明赤褐	良好	波状口縁で波頂部が外反。沈線により横位楕円状モチーフを描き、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	64	45
148	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。隆帯による楕円状モチーフを描き、懸垂文を施す。R Lを充填施文。	加曽利E3式	64	45
149	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	浅黄橙	ふつう	波状口縁。隆帯により曲線モチーフを描き、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	65	45
150	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、石英	暗灰黄	ふつう	波状口縁で波頂部が外反。隆帯によるモチーフ、沈線による懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	65	45
151	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。沈線により渦巻状モチーフを描き、R Lを充填施文する。波頂部下内面にも沈線を施文。	加曽利E3式	65	45
152	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白・黒色粒	灰黄	ふつう	波状口縁で口縁内面が肥厚。波頂部下に沈線による渦巻文を施し、R Lを横位施文する。	堀之内1式	65	45
153	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。口縁に沿って沈線を1条めぐらす。R Lを充填施文した楕円文を口縁部に配し、懸垂文を施す。	加曽利E3式	65	45
154	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	浅黄	ふつう	口縁下に横位沈線を1条めぐらせる。沈線による口縁部楕円文を施してR Lを充填施文、以下、沈線による懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	65	45
155	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	R Lを充填施文した横位楕円状沈線区画、懸垂文を施す。	加曽利E3式	65	45
156	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄褐	ふつう	R Lを充填施文した横位沈線区画、懸垂文を施す。	加曽利E3式	65	45
157	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	隆帯により口縁部楕円状モチーフを施し、L Rを充填施文、以下、沈線による懸垂文を施し、L Rを充填施文する。	加曽利E3式	65	45
158	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	橙	良好	口縁部に隆帯による弧状モチーフ、以下、沈線による懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	65	45
159	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	良好	横位沈線により口縁部文様帯を区画、以下、沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	65	45
160	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	浅黄橙	ふつう	隆帯により口縁部楕円状モチーフを施し、R Lを充填施文、以下、沈線による懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	65	45
161	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい褐	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	65	45
162	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	隆帯による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	65	45
163	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文する。	加曽利E3式	65	45
164	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	65	45
165	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	65	45
166	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白・黒色粒	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	45
167	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄褐	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	45
168	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	明赤褐	ふつう	隆帯による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	45
169	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	45
170	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	灰黄褐	ふつう	帯状隆線により弧状モチーフを施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	66	45
171	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R L、条線を縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	46
172	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	46
173	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	46
174	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	帯状隆線により曲線モチーフを施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	66	46
175	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆帯によりワラビ手文を施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	66	46
176	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	帯状隆帯により曲線モチーフを施し、L Rを充填施文する。	加曽利E3式	66	46
177	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	底径6.0cm。沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。底部際に横位のケズリ。	加曽利E3式	66	46
178	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	底径8.5cm。沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	46

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考	図版番号	写真番号
179	深鉢	胴～底部	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	底径9.2cm。隆帯による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	66	46
180	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	浅黄	ふつう	口縁が内湾。口縁下に沈線を1条めぐらせ、以下、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	66	46
181	深鉢	口縁部片				No.143と同一個体。	加曽利E3式	66	46
182	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。口縁下に横位沈線をめぐらせ、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	66	46
183	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。沈線により縦位楕円状モチーフを描き、区画外に複節L R Lを充填施文する。	加曽利E3式	66	46
184	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	浅黄橙	ふつう	口縁が内湾。口縁下に横位隆帯をめぐらせ、さらに垂下させる。R Lを縦位充填施文。	加曽利E3式	67	46
185	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、石英	にぶい黄褐	ふつう	口縁が内湾。沈線により縦位楕円状モチーフを描き、内部にR Lを縦位施文する。	加曽利E3式	67	46
186	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	赤褐	ふつう	波状口縁。沈線による縦位楕円状モチーフを描き、R Lを縦位充填施文する。楕円区画内に蛇行沈線を垂下させる。無文部、内面研磨。	加曽利E3式	67	46
187	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。口縁下に沈線を1条めぐらせ、带状沈線により曲線モチーフを描き、区画外にR Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
188	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁が内湾。口縁下に横位沈線をめぐらせて口縁部無文帯を作出、以下、带状沈線により曲線モチーフを描き、区画外にR Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
189	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒、石英	灰黄褐	ふつう	口縁が緩く内湾。带状沈線により楕円状モチーフを描き、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
190	深鉢	胴部片				No.189と同一個体。胴中位でくびれる器形でモチーフが上下に分かれる。	加曽利E3式	67	46
191	深鉢	口縁部片	粗砂	明黄褐	良好	口縁が緩く内湾。沈線による懸垂文、縦位楕円状モチーフを描き、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
192	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁が緩く内湾。口縁下に円形刺突をめぐらす。沈線により曲線モチーフを描き、内部にR Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
193	両耳壺	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	良好	口縁の無文部。	加曽利E3式	67	46
194	両耳壺	口縁部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	口縁がくの字状に外屈。口縁部は無文帯とし、隆帯によるモチーフを施す。	加曽利E3式	67	46
195	両耳壺	口縁部～胴部	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	推定口径16.5cm。隆帯を1条めぐらせて口縁部無文帯を作出、隆帯下は沈線により楕円状モチーフを描き、R Lを充填施文する。橋状把手の痕跡あり。	加曽利E3式	67	46
196	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	橋状把手。把手部に縦位楕円文を施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
197	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	沈線により縦位楕円状モチーフを描き、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
198	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	浅黄橙	ふつう	口縁に近い部位。沈線により縦位楕円状モチーフを描き、内部に懸垂文を充填。外部にR Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	46
199	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	橙	ふつう	くびれを境に沈線による縦位楕円状モチーフを上下2段施し、内部にR Lを充填施文。モチーフ間に懸垂文を施す。	加曽利E3式	67	46
200	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	くびれ部に横位沈線を1条めぐらせ、円形刺突を施す。沈線を境に上下2段に沈線による縦位楕円状モチーフを施し、R Lを充填施文する。	加曽利E3式	67	47
201	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	带状沈線を垂下させ、区画外にR Lを縦位充填施文する。	加曽利E3式	67	47
202	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆帯により曲線モチーフを施す。	加曽利E3式	67	47
203	深鉢	口縁部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	口縁が緩く内湾。口縁下に円形刺突をめぐらせて蛇行条線を縦位施文する。	加曽利E3式	67	47
204	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	円形刺突を2段めぐらせ、蛇行する条線を縦位に施す。	加曽利E3式	67	47
205	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	浅黄橙	ふつう	口縁部楕円状モチーフを施し、条線を縦位施文する。	加曽利E3式	67	47
206	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	蛇行する条線を縦位に施す。	加曽利E3式	67	47
207	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	黒褐	ふつう	蛇行する条線を縦位に施す。	加曽利E3式	67	47
208	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒	橙	ふつう	条線を縦位に施す。	加曽利E3式	67	47
209	深鉢	胴部片	粗砂、白・黒色粒、石英	灰黄褐	ふつう	条線を縦位に施す。	加曽利E3式	67	47
210	深鉢	底部片	粗砂、白・黒色粒、石英	にぶい黄橙	ふつう	底径6.8cm。残存部は無文。	加曽利E式	67	47

第11表 上泉新田塚遺跡群 遺物観察表

1号住居

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土 焼成	色調	形・成調整等	図版 写真
1	須恵器 椀	1/8~1/4	(14.3) — —	南側隅部 +2	A 黄灰 還元		器高やや高く、口縁部外反。高台は接合部から欠損。高台内右回転糸切痕残る。	84 50
2	土師器 甕	1/3	(18.9) — —	南側隅部 -7~+13	D 橙 良好		口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、屈曲部外面と肩部境外面は強い横ナデ。口縁部中位外面型肌痕残る。体部外面篋削り。体部内面篋撫で。体部内面下位接合痕残る。	84 50
3	土師器 甕	体部下位 片	— — —	埋没土	D 橙 良好		外面縦位篋削り。内面上半の器表摩滅。内面下半、刷毛目に近い篋撫で。	84 50
4	土師器 甕	1/3	21.8 — —	南側隅部 +7~8	D 橙 良好		口縁部「コ」の字状。口縁部横撫でで、外面屈曲部と肩部境に強い横ナデ。外面上位と中位、成形時の凹凸残る。口縁部上位外面接合痕残る。体部外面横位篋削り。体部内面篋撫で。	84 50

3号住居

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土 焼成	色調	形・成調整等	図版 写真
1	土師器 坏	完形	10.2 — 2.8	中央部 +15	D 橙 良好		口縁部下位は外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。片岩含むか。	72 49
2	土師器 坏	完形	10.4 — 3.2	北西隅部 +70	D 橙 良好		器表摩滅し、内面の調整痕不明。口縁部外面横撫で。底部外面の篋削り単位不明稜。	72 49
3	土師器 坏	1/2	(11.0) — 3.6	南東隅部 +7	D 橙 良好		体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	72 49
4	土師器 坏	1/6	(10.9) — 2.9	埋没土	D 橙 良好		口縁部の器壁やや薄く、外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	72 49
5	土師器 坏	1/6	(12.0) — —	埋没土	D 明褐 良好		口縁部外反し、外面下位にゆるい段をなす。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	72 49
6	土師器 坏	1/4	(12.0) — —	埋没土	D 橙 良好		口縁部外反し、外面下位にゆるい段をなす。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	72 49
7	土師器 坏	1/4	(14.9) — —	南東周溝内 -3・-4	D 明赤褐 良好		口縁部短く、外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	73 49
8	土師器 坏	1/3	(15.0) — —	P2内 -3・+2	D 橙 良好		内外面の器表剥離部分多い。口縁部小さく内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削りであろうが単位と方向不明。	73 49
9	須恵器 瓶類	体部片	— — —	埋没土	D 灰 還元		袋状の体部に円盤状粘土で蓋をした部分が残る。外面叩き目状の痕跡が僅かに残る。	73 49
10	土師器 甕	下半部	(5.0) — —	P1内 -6・+5	A にぶい褐 良好		体部中位縦位篋削り、体部下位斜位篋削り。内面篋撫でで、接合痕残る。	73 49
11	土師器 甕	3/4	20.2 — —	東部 +22~+24	A 黄橙 良好		頸部屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁部横撫で。口縁部外面下位は、強い横ナデにより低い段をなす。体部外面斜位篋削り。体部内面撫でか。体部内面接合痕残る。	73 49
12	土師器 甕	上半部	21.3 — —	中央部 -2~-4	A にぶい褐 良好		口縁部大きく開き、端部付近ほぼ水平。口縁部横撫で。体部外面縦位篋削り。体部内面篋撫で。体部内面下半器表摩滅。	73 49
13	土師器 甕	1/4	(20.7) — —	埋没土	B 橙 良好		口縁部器壁厚い。口縁部横撫で。体部外面、やや幅の狭い縦位篋削り。体部内面横位篋撫で。	73 49
14	土師器 甕	1/4	(20.7) — —	西部 -4	D 橙 良好		内面の器表摩滅し、調整痕不明。口縁部の外反はゆるい。口縁部外面横撫でで、中位に接合痕残る。体部外面縦位篋削り。	73 49
15	土師器 甕	下半部	7.7 — —	中央部 -2~+3	C にぶい黄橙 良好		体部外面篋削りの後撫で。体部外面下位の篋削りは撫で消さない。内面篋撫で。	73 49
16	土師器 甕	ほぼ完形	21.4 8.8 33.3	中央~西南部 -9~+4	B にぶい黄橙 良好		最大径は体部下位にあり、口縁部はあまり開かない。口縁部横撫で。体部外面上半縦位篋削り。体部外面下半篋削り後撫で。底部付近外面横位篋削り。体部内面斜位篋撫で。	73 49

遺物観察表

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土色調 焼成	形・成調整等	図版 写真
17	土師器 甕	口縁部 完、体部 3/4	21.0 — —	P 1 内 —6～床直	D にぶい橙 良好	頸部が肩部側に落ち込むように変形した箇所があり、頸部が屈曲する箇所と外湾する箇所とがある。歪みがなければ、屈曲せずに口縁部に至る。口縁部横撫で、端部強い横撫で。口縁部外面接合痕明瞭に残る。体部外面篋削り。体部内面篋撫で丁寧だが、接合痕部分的に残る。	73 49

4号住居

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土色調 焼成	形・成調整等	図版 写真
1	須恵器 坏	ほぼ完形	10.3 4.5 4.3	南東隅部 床直	A にぶい橙 酸化焰	内面篋磨き。内面黒色処理。底部右回転糸切無調整。体部外面逆位の「楓」墨書	87 50
2	須恵器 坏	口縁部一 部、底部 完	(12.2) 5.0 4.6	埋没土	A にぶい橙 酸化焰	内面篋磨き。内面黒色処理。底部右回転糸切無調整。体部外面逆位の「楓」墨書	87 50
3	須恵器 坏	口縁部一 部、底部 1/4	(12.4) (5.5) 3.6	埋没土	A 灰白 還元焰	口縁部付近小さく外反。底部右回転糸切無調整。	87 50
4	須恵器 坏	1/5	(12.8) (6.5) 3.8	埋没土	A 灰白 還元焰	口縁部付近小さく外反。轆轤回転方向不明。	87 50
5	須恵器 坏	1/6	(13.8) — —	西側周溝内 +3	A 灰白 還元焰	口縁部付近小さく外反。轆轤回転方向不明。	87 50
6	須恵器 坏	1/5	(13.2) — —	埋没土	D 灰 還元焰	長い面幅の狭い轆轤目。口縁部付近外反。右回転轆轤調整。	87 50
7	須恵器 甕	体部片	— — —	南側周溝内 +4	C 灰 還元焰	外面格子状叩き目。内面当て具痕かるく撫で消す。	87 50
8	須恵器 甕	体部片	— — —	南西隅部+1	C 灰 還元焰	外面格子状叩き目。内面当て具痕撫で消す。	88 50
9	土師器 甕	口縁部 完、体部 一部	20.5 — —	南東隅部 —2～+8	A 明褐 良好	口縁部「コ」の字状。口縁部横撫で、屈曲部外面と肩部境外面は強い横ナデ。口縁部中位外面接合痕明瞭に残る。体部外面篋削り。体部内面篋撫で。	88 51
10	土師器 甕	1/2	— 3.3 —	埋没土	D 明褐 良好	体部外面篋削り。内面篋撫で、底部付近は刷毛目に近い。	88 51
11	土師器 甕	1/8	17.2 — —	南側周溝内 +5	D 明赤褐 良好	口縁部「く」の字状に外反するが、横ナデや内面形状はいわゆる「コ」の字状口縁である。口縁部横撫で。体部外面横位篋削り。体部内面篋撫でか撫で。	88 51

16号住居

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土色調 焼成	形・成調整等	図版 写真
1	土師器 坏	1/3	(12.2) — —	埋没土	D 橙良 好	口縁部短く、内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	90 51
2	土師器 甕	ほぼ完形	17.0 (4.9) 27.5	中央部・カマ ド内 床直～+9	B 黄橙 良好	頸部の屈曲弱く、口縁部ゆるく外反。口縁部横撫で。体部外面縦位篋削り。底部外面篋削り。体部内面篋撫で。	90 51
3	土師器 甕	口縁部 1/2、体 部完	(20.2) — —	東部カマド内 床直	A 橙 良好	頸部外湾し、口縁に至る。口縁部横撫で。口縁部外面、2段の接合痕残る。体部外面篋削り。体部外面下位接合痕残る。体部内面篋撫で、接合痕残る。	90 51
4	土師器 甕	口縁～体 部下位	20.4 — —	東部カマド前 +3～+17	A 明褐 良好	頸部の屈曲弱く、口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面縦位篋削り。体部内面、斜位篋撫でか撫で。	90 51
5	土師器 甕	1/4	(21.8) — —	中央部 床直	A にぶい橙 良好	口縁部強く外反。口縁部横撫で。体部外面横位から斜位篋削り。体部内面篋撫で後、細い棒状工具による撫で？が3条認められる。	90 51
6	土師器 甕	1/3	(21.7) — —	中央部 床直	A にぶい橙 良好	口縁部器壁やや厚い。口縁部強く外反。口縁部横撫で。口縁部端部強い横撫でにより、内面小さく凹む。体部外面縦位篋削り。体部内面篋撫で。	90 51
7	土師器 甕か甗	1/4	(16.8) — —	東部カマド前 +7	A にぶい黄橙 良好	口縁部下端、横撫でにより凹線状に凹む。口縁部ゆるく外反。体部張らず、底部に向かって先細りとなる。口縁部横撫で。口縁部外面中位接合痕残る。体部外面縦位篋削り。体部内面篋撫で、接合痕僅かに残る。	90 51
8	須恵器 甕	体部小片	— — —	埋没土	D 灰 還元焰	外面平行叩き目。体部の内湾部分のため、内面当て具痕周縁部が深く入り込む。	90 51

1号墳

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土 焼成	色調	形・成調整等	図版 写真
1	土師器 坏	完形	10.8 — 3.4	周溝内 床直	A	明赤褐 良好	口縁部内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面細かい篋削り。底部外面、部分的に型肌痕残る。	74 49

2号墳

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土 焼成	色調	形・成調整等	図版 写真
1	土師器 坏	完形	10.8 — 3.4	前庭部 床直	D	にぶい褐 良好	口縁部内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。	81 49
2	土師器 坏	1/2	10.8 — 3.6	前庭部 床直	A	明黄褐 良好	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で、撫で上げ部残るが、外面は残存部に認められない。底部外面やや細かい篋削り。	81 49
3	須恵器 平瓶	体部から 頸部	— — —	前庭部 床直	D	灰白 還元焰	焼き締まりない。体部外面篋削り。肩部外面カキ目の後、頸部貼り付け。体部正面円盤状粘土で塞ぐ。体部から肩部は叩き成形。内面当て具痕を轆轤調整でほとんど消す。	81 50
4	須恵器 瓶類	体部片	— — —	埋没土	D	灰黄 還元焰	外面横線を巡らし、轆轤回転の中央部内面に円盤状粘土での塞ぎ痕残る。残存部に頸部屈曲部が認められないことから体部とした。	81 50
5	須恵器 瓶類	体部上位 片か	— — —	埋没土	D	灰 還元焰	外面カキ目の後、下部篋削り。	81 49
6	須恵器 甕	体部小片	— — —	前庭部 床直	D	褐灰 還元焰	外面横線を2段に巡らす。内面当て具痕残る。	81 50

2号溝

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土 焼成	色調	形・成調整等	図版 写真
1	土師器 坏	1/2	(12.3) (7.6) 4.2	埋没土	B	明褐 良好	体部下位外反し、口縁部下で内湾。口縁部小さく外反。体部内面から口縁端部外面横撫で。体部外面成形時の撫で、凹凸残る。底部外面器表摩滅。底部外面篋削りか。底部内面篋撫で。	95 51

遺構外

遺物番号	器種	残存	法量	出土位置	胎土 焼成	色調	形・成調整等	図版 写真
1	土師器 坏	1/4	(14.5) — (4.2)	埋没土	D	にぶい橙 やや不良	口縁部短く、内湾。内面器表摩滅。口縁部横撫で。底部外面篋削り。	98 51

第12表 上泉新田塚遺跡群 金属製品観察表

2号墳

遺物番号	器種	残存	法量	形・成調整等	図版 写真
7	銭貨	完形	長径24.33mm 短径24.18mm 孔径0.76～0.88mm 重量1.70g	銅銭寛永通宝新、背文なし	81 50
8	銭貨	完形	長径25.12mm 短径24.57mm 孔径0.83～0.97mm 重量2.12g	銅銭寛永通宝新、背文	81 50
9	刀子	完形	長さ11.3cm 幅1.2cm 厚さ0.2cm	両関、研ぎ減りしている	81 50
10	鉄鏃	鏃身部	長さ3.9cm 幅1.1cm 厚さ0.2cm	先端は薄く片刃か	81 50

4号住居

遺物番号	器種	残存	法量	形・成調整等	図版 写真
14	鎌	着柄部分	長さ4.7cm 幅2.5cm 厚さ0.1cm	錆で劣化が進んでいる	88 51

上泉新田塚遺跡群の胎土

須恵器

- A：夾雑物は少ないが、夾雑物中では白色鈳物粒がやや目立つ。灰色粒含む。
- C：白色鈳物粒と透明鈳物粒多く含む。黒色鈳物粒少量含む。両者含む岩片微量含む。
- D：微細な鈳物粒を多く含む。

土師器

- A：鈳物粒含む。輝石か角閃石と考えられる黒色鈳物粒多く含む。
- B：鈳物粒含むが、透明鈳物粒や黒色鈳物粒は目立たない。赤色粒多く含む。白色鈳物粒少量含む。
- C：透明鈳物粒と黒色鈳物粒多く含む。赤色粒含む。
- D：鈳物粒含む。薄く剥がれ、光を反射する雲母状の小片含む。

遺構一覧表

第13表 上泉新田塚遺跡群 住居一覧表（長軸・短軸・深さの単位はcm、カッコ付きは残存値）

No.	グリッド位置	時期	形状	長軸・短軸・深さ	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	周溝	主軸方位	備考
1	78-QR-11・12	平安時代	正方形	466・456・53	なし	南東	南東隅	なし	N-132°-S	
2	78-ST-14・15	平安時代	長方形	370・286・23		南東			N-116°-S	
3	88-0P-2・3	古墳時代	矩形or正方形	420・390・80	3				N-64°-E	12号住居と重複、建替1回
4	78-QR-18・19	平安時代	方形	380・320・78	なし	東	南東隅	全周	N-101°-S	
5	89-A-5	縄文時代	不整形	383・380・26		埋設土器			N-31°-S	7号住居と重複
6	88-RS-7・8	縄文時代	長方形	610・408・38	1	石敷き炉		なし	N-35°-S	
7	89-AB-5・6	縄文時代	梯形	590・443(300)・25					N-59°-S	5号住居と重複
8	88-ST-2・3	縄文時代	長方形	660・420・40		石敷き炉			N-100°-S	686坑・687坑と重複
9	78-T-17・79-A-17	縄文時代	不整形	460・456・28		埋設土器			N-25°-E	埋設土器
10	78-ST-15・16	縄文時代	梯形	570・420・28		石敷き炉			N-18°-W	
11	78-PQ-18・19	縄文時代	長方形	570・400・37		埋設土器			N-48°-E	
12	88-0-2・3	縄文時代	推定長方形	410+・384・34	2	石敷き炉		なし	N-29°-E	埋設土器併設、3号住居と重複
13	欠番									
14	78-I-8・9	縄文時代	梯形	545・438・90		石敷き炉			N-4°-E(東壁)	
15	78-IJ-10・11	縄文時代	推定円形	推定径530					計測不可	
16	88-PQ-4・5	奈良時代	長方形	470・385・68		東		全周	N-78°-E(南壁)	
17	78-0P-4	縄文時代	推定長方形	424+・250+・125		石敷き炉		なし	炉の長軸で N-5°-W	北東部を検出

二ツ木式期6・7・8・10・11・12号、関山I式期14号、関山II式期17号、黒浜式期5号、諸磯b式期9号、加曾利E式期15号

第14表 上泉新田塚遺跡群 土坑一覧表（長軸・短軸・深さの単位はcm、カッコ付きは残存値）

No.	位置	時代	形状	長軸・短軸・深さ	備考
1a	58-B-20		不整形	120・102・24	
34	58-D-18		円形	115・110・26	33・35号土坑と重複
56	88-T-3		推定円形	180・(54)・30	
61	88-T-5	前期	円形	(130)・136・40	土器あり
63	88-T-5	前期前葉	円形	150・132・80	土器あり
64	88-T-6	前期	円形	140・118・40	土器あり
65	88-T-6	前期前葉	円形	94・84・32	土器あり
73	88-S-6		円形	76・70・21	
74	88-T-7	前期	円形	91・72・37	土器あり
99	89-B-8	黒浜式	円形	158・132・36	土器あり
100	89-B-7		円形	96・85・23	
109	89-CD-4	前期	円形	200・178・29	土器あり
110	89-CD-4		円形	182・144・33	
117	88-T-5	前期前葉	円形	133・131・60	7号住居と重複、土器あり
118	88-T-5	前期前葉	円形	125・106・60	土器あり
156	78-N-8	関山I式	円形・袋状	145・142・52	土器あり
157	78-Q-12		楕円形	171・107・26	
172	78-S-14・15	加曾利E4式	方形	118・118・70	土器あり
178	78-T-16・79-A-15・16		方形	101・100・24	
179	79-A-16	前期後葉	円形	(158)・135・76	袋状、土器あり
180	79-A-16	諸磯b式	円形	130・125・29	土器あり
181	78-T-16	前期後葉	円形	103・100・45	土器あり
183	78-S・T-16	中期	円形	161・160・93	土器あり
187	78-S-15		円形	134・126・56	
190	78-S・T-17	前期前葉	楕円形	164・126・39	土器あり
191	78-T-18	前期前葉	円形・袋状	133・132・73	土器あり
201	88-S-1	諸磯b式	円形	81・80・51	土器あり
213	78-P-10		円形	92・75・22	
214	78-Q-10・11	関山I式	円形	124・121・65	フラスコ状、土器あり
219	78-S-20	黒浜式	円形	72・60・35	土器あり

No.	位置	時代	形状	長軸・短軸・深さ	備考
222	78-S-20	黒浜式	円形	75・65・33	土器あり
227	88-S- 1	前期	不整形	92・89・30	
230	88-S- 1	前期	楕円形	150・97・25	
235	88-R- 1		不整形	131・113・24	
239	78-Q・R-20		楕円形	119・79・20	
243	88-Q- 1	前期	円形	139・111・84	フラスコ状、土器あり
255	78-P-19	加曾利E3式	円形	113・111・49	土器あり
256	78-O・P-19	中期	円形	118・104・69	土器あり
259	78-O-20	中期	円形	94・93・15	土器あり
273	78-P-17		楕円形	220・75・29	272・313号土坑と重複
313	78-O・P-17		円形	121・(98)・13	272・273号土坑と重複
290	78-L・M-15	加曾利E4式	円形	132・127・43	土器あり
300	88-Q- 1		円形	105・90・23	
301	78-Q-17		楕円形	109・79・44	
302	88-R- 3・4	黒浜式	円形・袋状	80・77・56	土器あり
304	88-Q- 3		円形	84・78・20	
309	78-Q-16	平安時代	円形	190・180・380	1号井戸に変更
312	78-OP-16・17	加曾利E3式	楕円形	118・88・18	土器あり
316	78-M-13		楕円形	105・84・29	
317	78-L-13		円形	100・90・23	
322	78-N-14		円形	100・86・36	
323	78-O-14		円形	88・73・26	
324	78-O-12・13	関山 I 式	円形	200・190・42	土器あり
325	78-O-12		楕円形	108・85・22	
326	78-P-11		楕円形	110・78・40	
327	78-O-11		円形	108・95・26	
328	78-O-10・11		楕円形	123・83・24	
329	78-O-10	前期前葉	不整形	(85)・88・30	土器あり
330	78-P・Q-15・16		不整形	195・160・24	
334	78-N- 9		楕円形	136・86・48	陥し穴
335	78-P・Q- 9		円形	182・174・14	
336	78-O・P-18・19	加曾利E3式	不整形	103・93・52	土器あり
337	78-R-18・19	黒浜式	円形	98・73・31	
338	78-Q・R-18	中期	円形	113・98・67	土器あり
340	78-S-15・16	諸磯 b 式	円形	132・127・30	10号住居と重複、土器あり
341	78-I- 5		推定楕円形	(174)・115・73	
343	78-K- 4	前期	楕円形	305・110・96	陥し穴
344	78-J- 3		円形	88・88・15	
345	78-J- 3		円形	98・81・26	346号土坑と重複
354	78-L・M- 2		楕円形	156・124・23	
368	78-Q-15・16		楕円形	317・105・32	陥し穴
374	78-R-17	前期	楕円形	117・80・13	土器あり
375	78-R-17	前期前葉	円形	94・87・14	
519	68-A- 5・6		円形	107・96・33	
538	78-K- 7	加曾利E4式	方形	(95)・118・18	540号土坑と重複
540	78-K- 7・8		円形	152・149・23	538号土坑と重複、石器あり
542	78-L- 8	中期	円形	145・140・25	543号土坑と重複、土器あり
543	78-L- 8	前期	楕円形	116・78・26	542号土坑と重複、土器あり
550	78-K- 8		円形	67・66・20	
557	78-J・K- 7	中期	円形	130・121・20	土器あり
560	78-L- 8	前期	楕円形	113・91・20	561号土坑と重複、土器あり
561	78-L- 8		楕円形	65・45・14	560号土坑と重複
625	68-H-12		円形	122・120・30	

遺構一覧表

No.	位置	時代	形状	長軸・短軸・深さ	備考
626	68-H-12		円形	134・120・40	
649	68-H-16		円形	182・161・31	
660	68-L-18		円形	77・75・11	石器あり
668	68-K-16		円形	115・112・26	
669	79-B-17		円形	153・140・13	
670	79-A-18	前期前葉	円形	166・160・24	土器あり
671	88-T-2		円形	80・70・69	8号住居と重複
673	88-T-3		円形	122・108・23	
678	88-R-6	前期	円形	120・112・31	土器あり
682	79-A-18	黒浜式	円形	138・114・52	土器あり
683	89-B-9		不整形	157・147・56	684号土坑と重複
684	89-B-9	前期前葉	楕円形	195・163・30	683号土坑と重複、土器あり
685	79-A-16	前期	円形	172・146・68	土器あり
686	88-S・T-2	前期前葉	円形・袋状	132・123・76	8号住居と重複、土器あり
687	88-S・T-2	前期	円形	130・116・96	8号住居と重複、土器あり
688	88-T-2・89-A-2		推定円形	20・20・14	8号住居に隣接、石製品あり

第15表 上泉新田塚遺跡群 溝・道・堀一覧表

No.	位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方向	備考
1号溝	57-S・T-19・20	28	50～72	21～28	N-28°-E	傾き 北端標高 136.63m
	58-A～D-15～19					南端標高 135.75m
2号溝	78-L～T-4～20	138	70～100	22～35	N-29°-W	傾き 北端標高 139.82m
	88-R～T-1～3					南端標高 138.12m
	89-A～D-3～7					
	北端部分		50～125	19～45		傾き 南端標高 139.21m
						北端標高 138.73m
3号溝	78-N～Q-7・8	20	55～80	11～23	N-80°-W	傾き 東端標高 138.814m
						西端標高 138.650m
4号溝	78-J～L-10～13	19	30～80	9～28	N-19°-E	傾き 北端標高 139.847m
				落ち込み66		南端標高 139.28m
5号溝	78-I～L-8～11	20	25～52	7～19	N-36°-E	傾き 北端標高 139.54m
						南端標高 139.17m
6号溝	78-J・K-12・13	4.5	40～70	6～13	N-29°-E	傾き 北端標高 139.866m
						南端標高 139.871m

No.	位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方向	備考
1号道	68-D・E-5～20	86	220～280		N-2°-E	
	78-D-1					
2号道	68-H～L-5～20	106	120～300	25～30	N-20°-E	
	78-F～H-1～6					
3号道	68-J・K-15～20	55	220～300		N-14°-E	
	78-H～J-1～6					
4号道	68-K・L-18	24	90～110	14	N-3°-E	

No.	位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方向	備考
1号堀	57-R～T-16～20	63	550～700	300～330	N-24°-E	傾き 北端標高 134.13m
	58-A～C-15～18					南端標高 133.42m
	67-P～S-1～5					
2号堀	78-H～O-3～9	44	510～550	140～160	N-53°-E	傾き 東端標高 138.03m

写真図版



上武道路 路線（１）上泉唐ノ堀遺跡～五代砂留遺跡群



上武道路 路線（２）芳賀東部団地遺跡～胴城遺跡



上武道路 路線(3) 堤遺跡～上細井五十嵐遺跡



上武道路 路線(4) 上細井・青柳・日輪寺地区



上武道路 路線(5) 上細井地区



上武道路 路線(6) 関根地区～国道17号地区



上泉唐ノ堀遺跡全景 南



上泉唐ノ堀遺跡 1号溝と1号道全景 南東



縄文確認調査全景



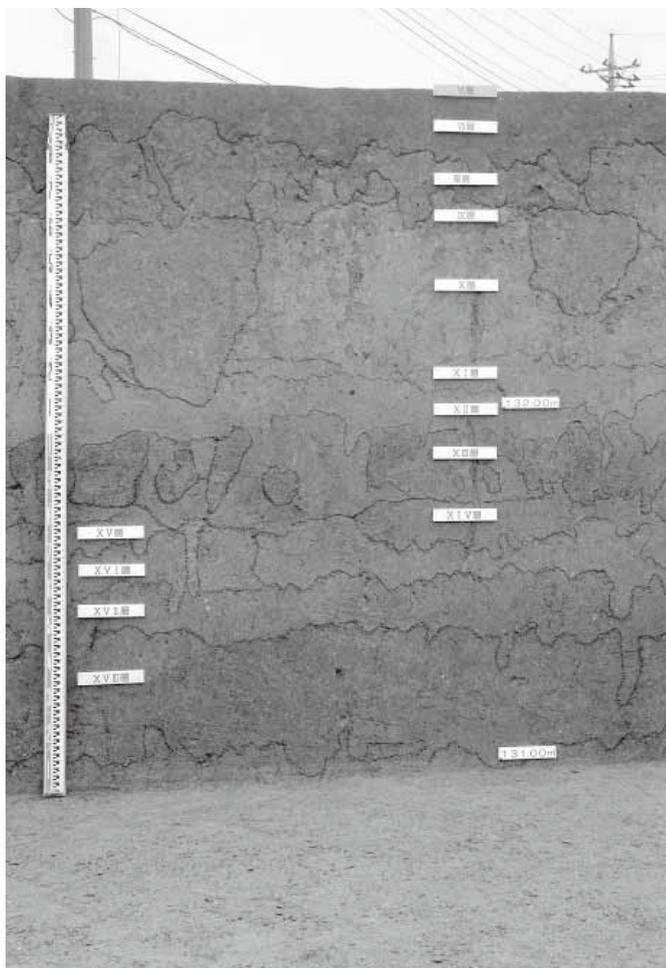
遺構の確認作業



住居の調査風景



堀調査の作業風景



47区 西壁土層断面 北東



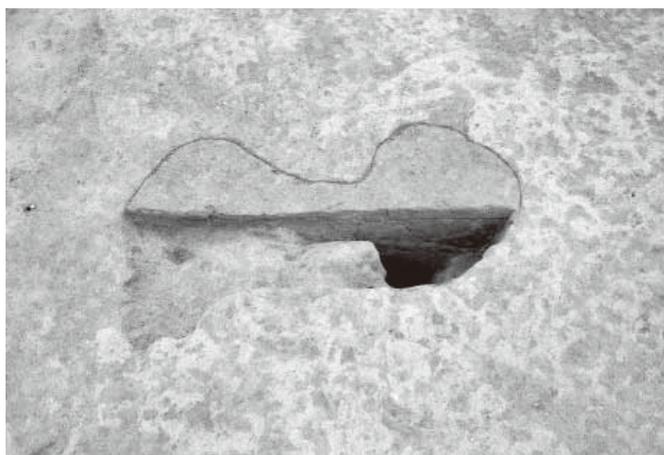
47区 北壁土層断面 南東



上泉唐ノ堀遺跡1号住居全景 南東



1号住居掘り方全景 南東



1号住居床下ピットセクション 南



58号土坑全景 北東



63号土坑全景 北東



67号土坑全景 北



133号土坑全景 北



180号土坑全景 北



251号土坑全景 北



252号土坑全景 南



253号土坑全景 南



1号溝及び1号道全景 南



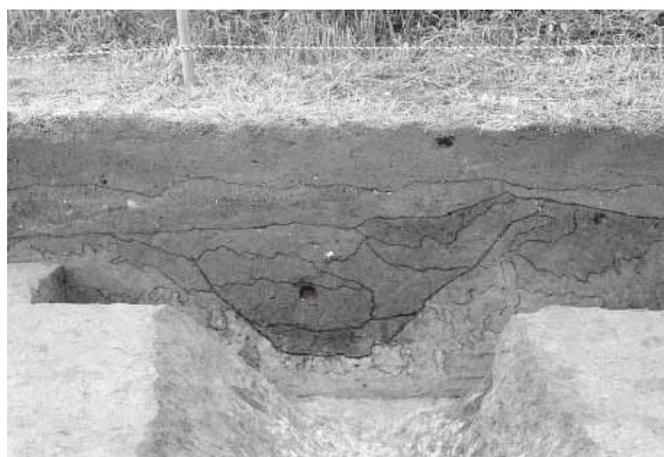
1号溝及び1号道全景 西



1号道西壁セクション 東



1号溝東壁セクション 西



1号溝西壁セクション 東



上泉新田塚遺跡群 22～37区全景 北西



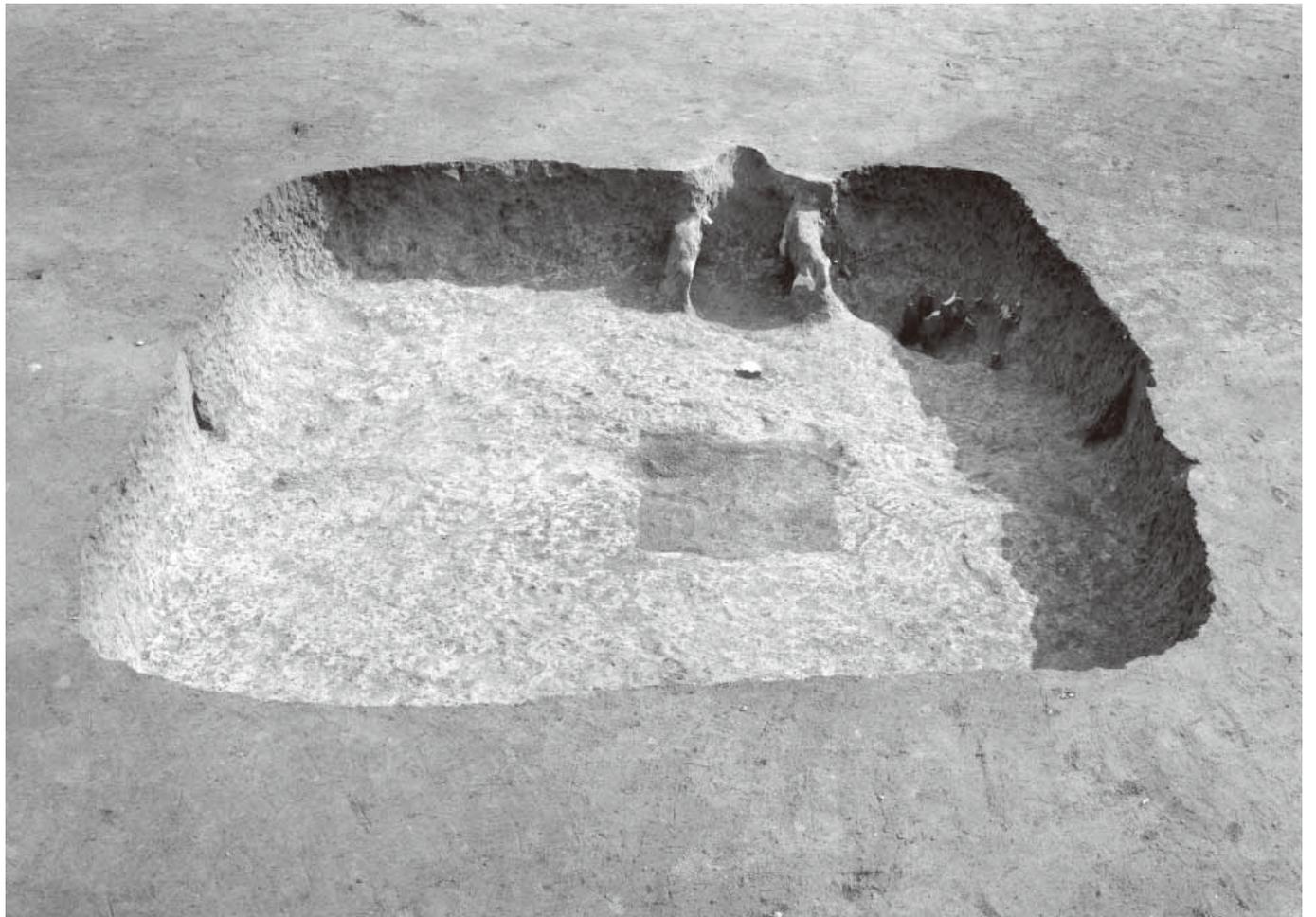
上泉新田塚遺跡群 1号堀と新田塚古墳 南西



上泉新田塚遺跡群 市道から西を望む 北東



上泉新田塚遺跡群 31～37区 南



1号住居全景 南西



1号住居確認状況 南西



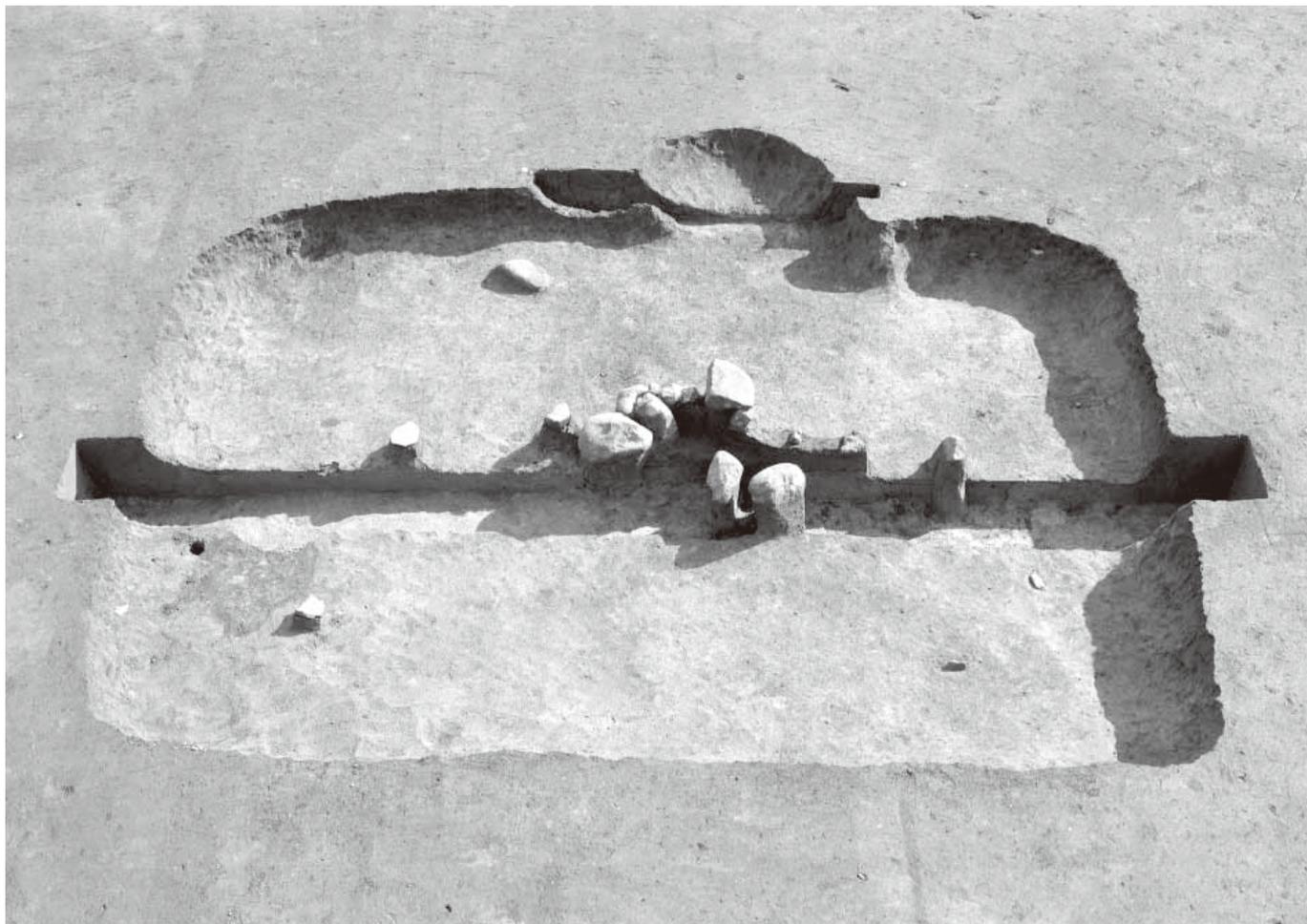
1号住居掘り方全景 南西



1号住居カマド全景 南西



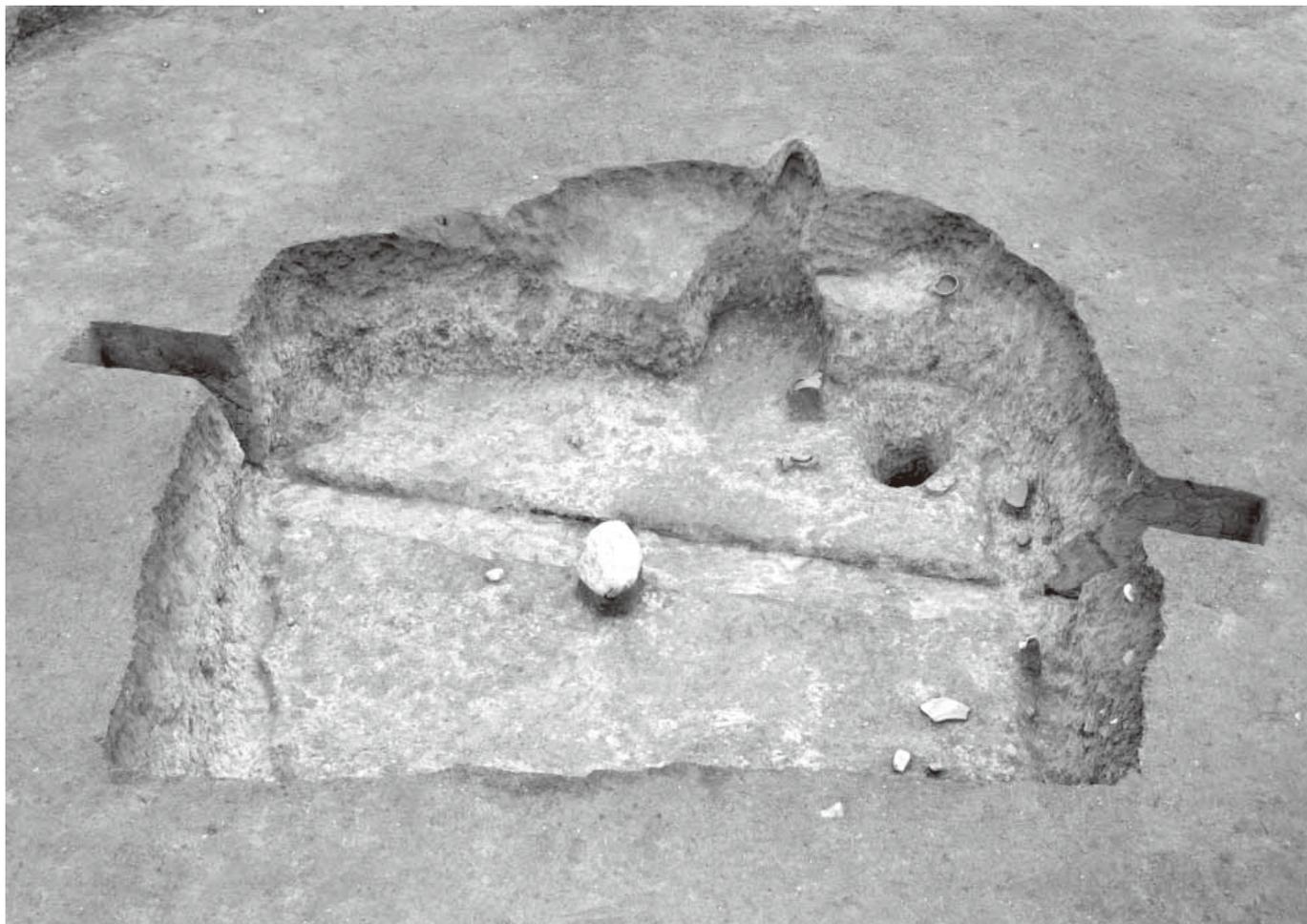
1号住居カマド掘り方全景 南西



2号住居全景 西



3号住居全景 西



4号住居全景 西



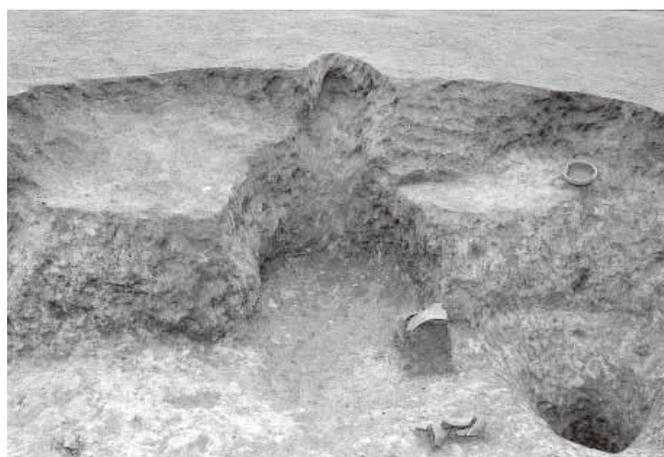
4号住居掘り方全景 西



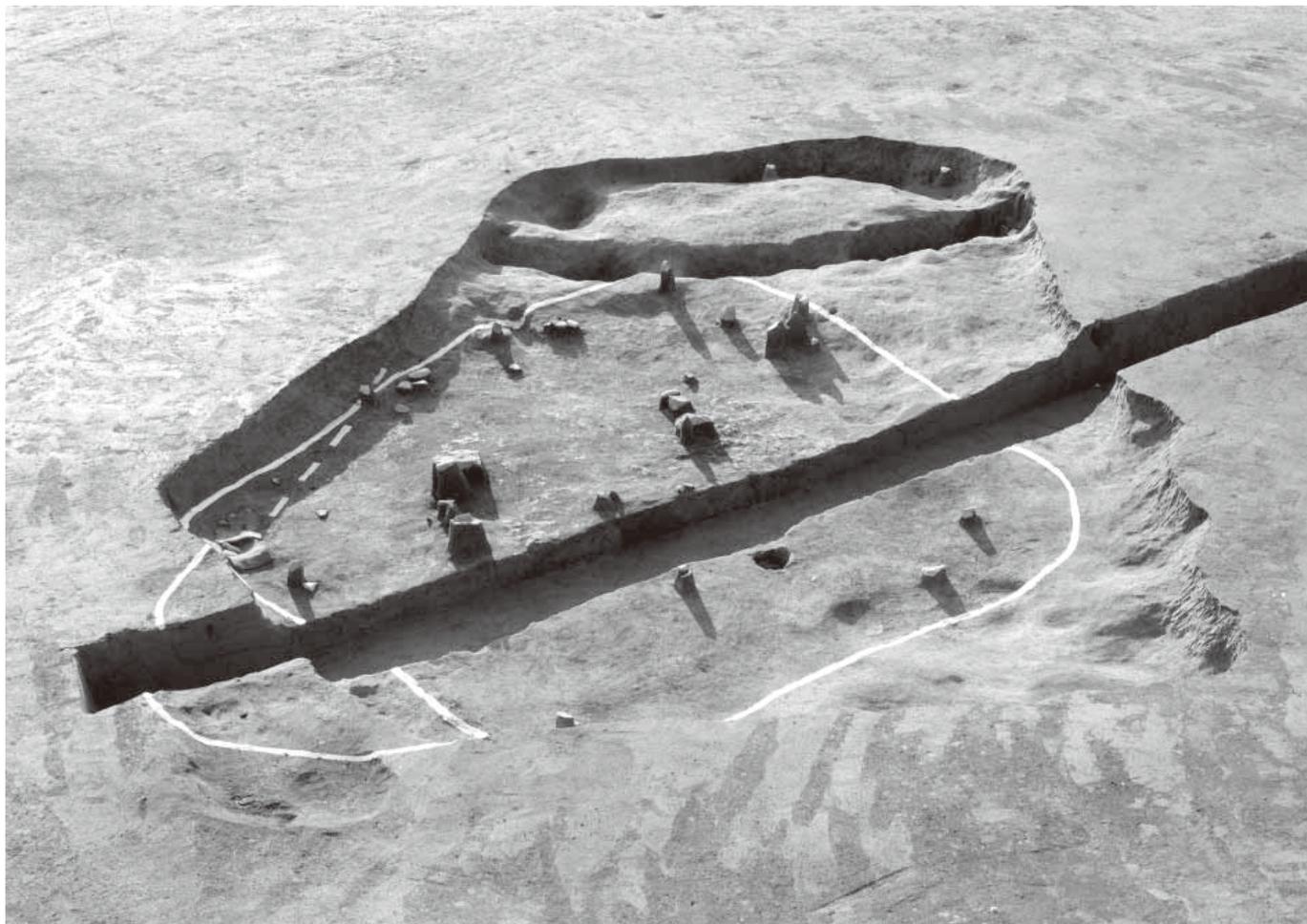
4号住居B-B'セクション 西



3号住居掘り方全景 西



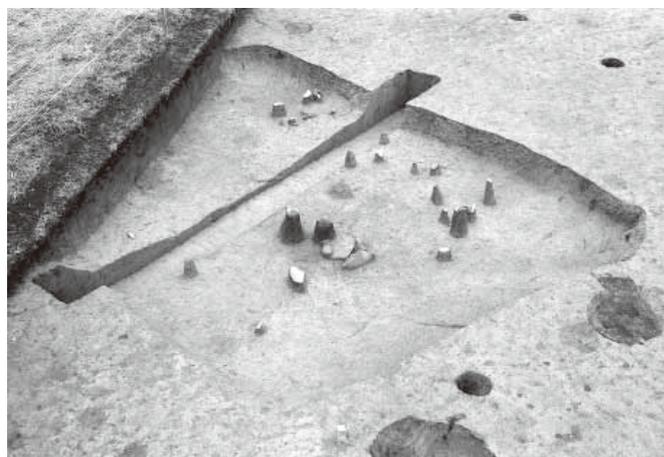
4号住居カマド掘り方全景 西



5・7号住居全景 北東



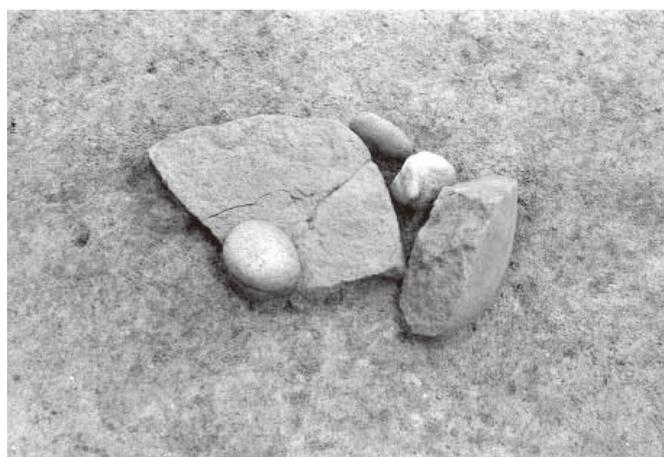
5号住居埋設土器断ち割り 南



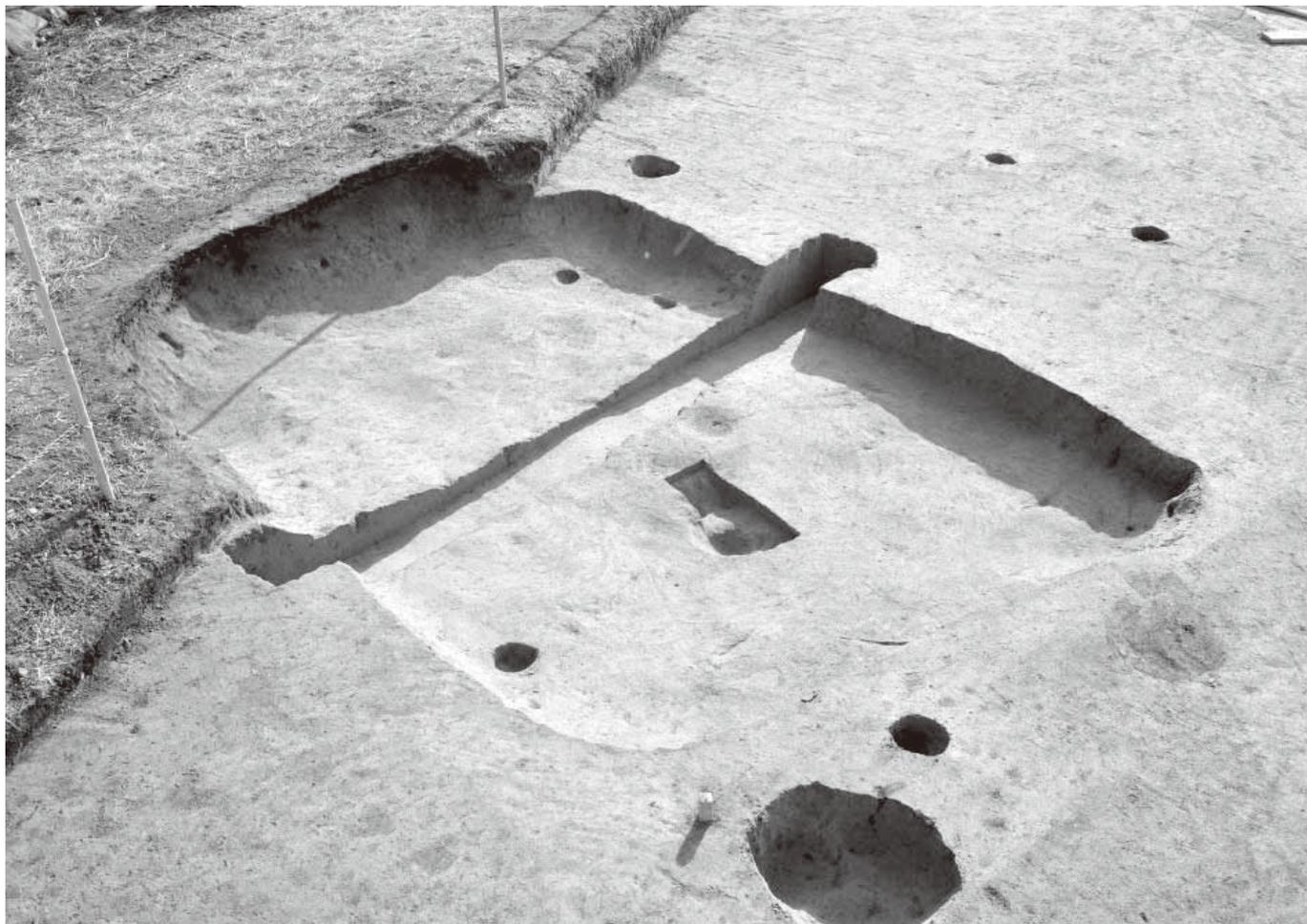
6号住居遺物出土状況 北西



8号住居掘り方全景 北



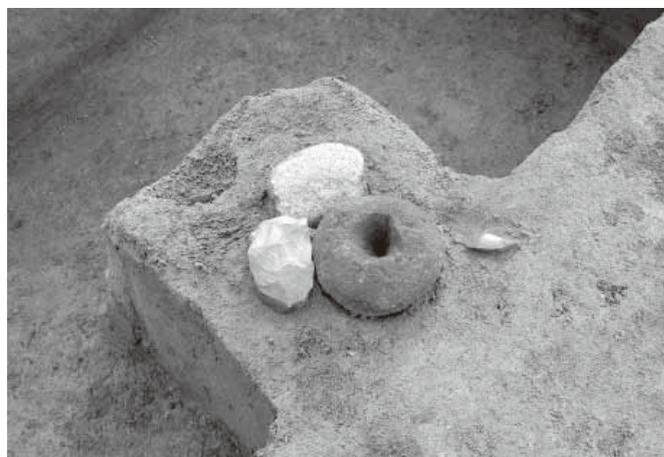
6号住居炉全景 北東



6号住居全景 南西



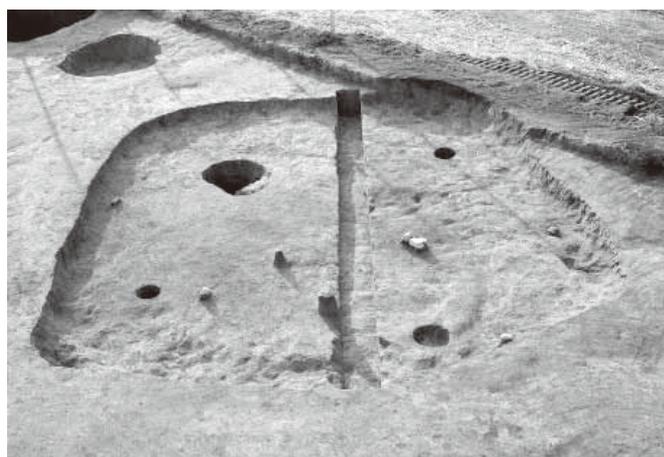
8号住居炉全景 東



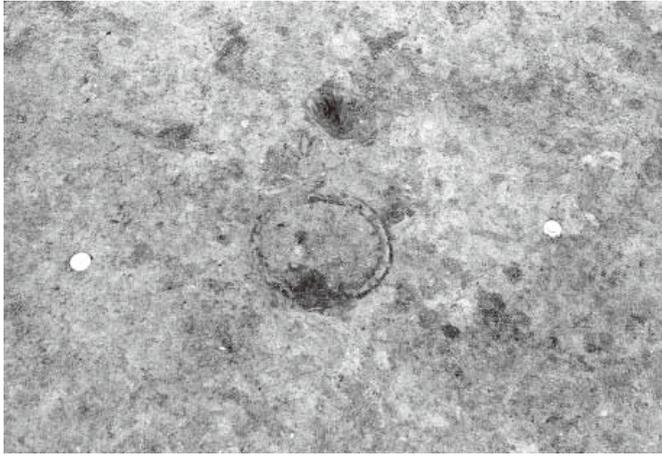
688号土坑遺物出土狀況 北東



8号住居遺物出土狀況 北



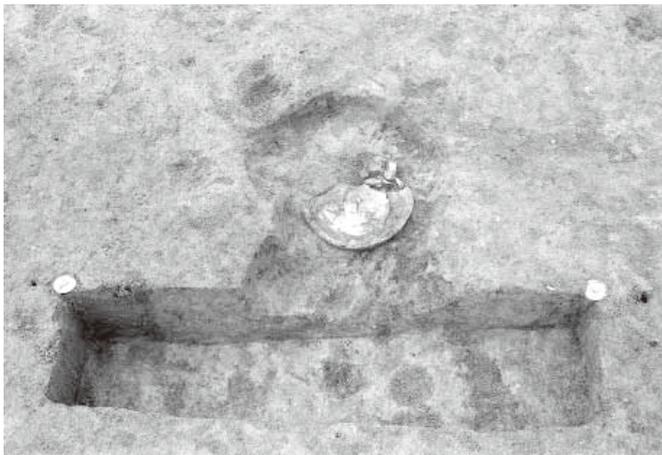
9号住居全景 南西



9号住居No.1 埋葬全景



9号住居No.3 埋葬断ち割り



9号住居No.4 埋葬断ち割り



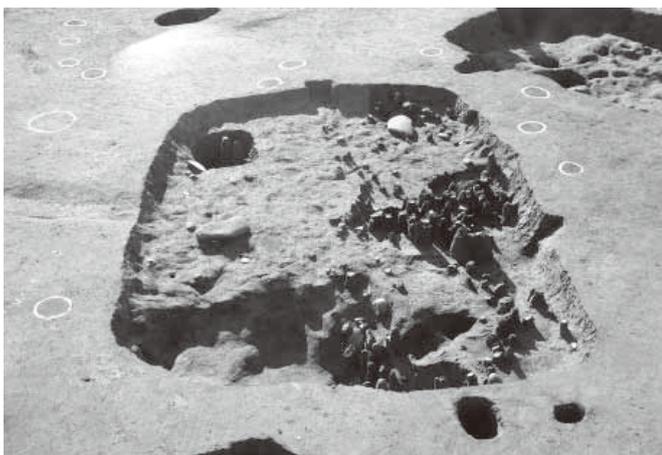
10号住居全景 南西



11号住居遺物出土状況 北東



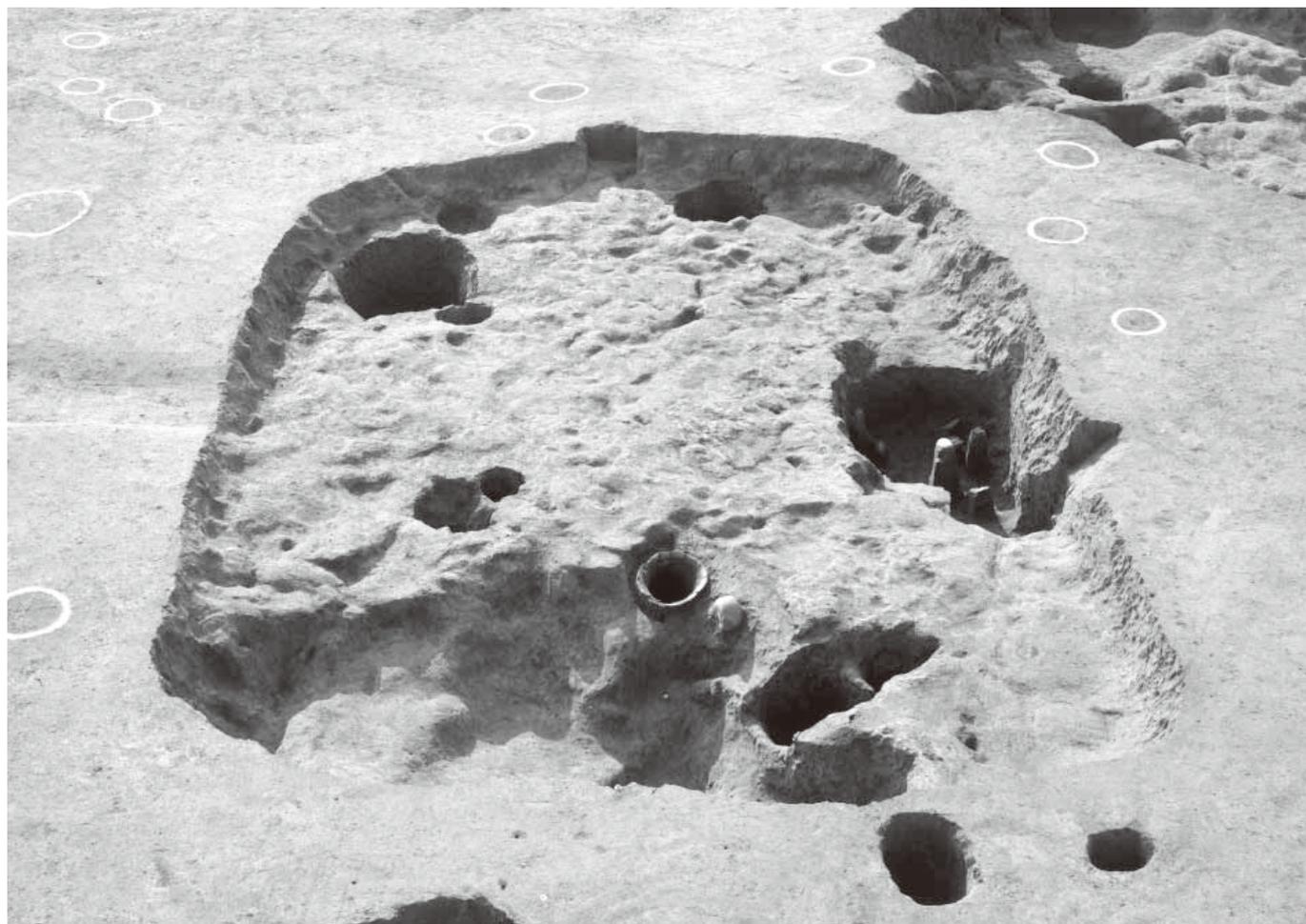
10号住居炉全景 南西



11号住居遺物出土状況 北東



11号住居遺物出土状況 東



11号住居全景 北東



11号住居埋葬出土状況 北東



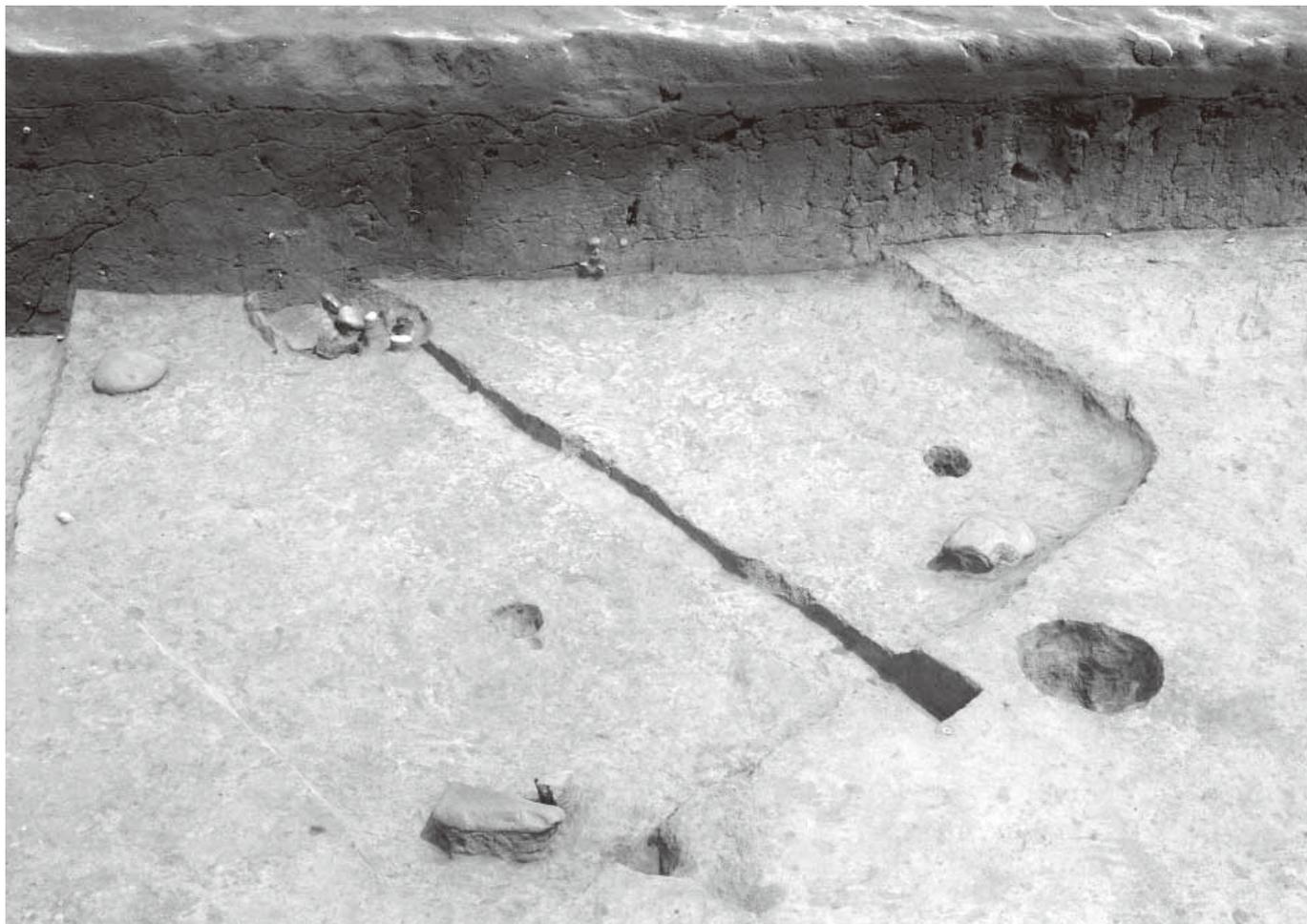
14号住居全景 北



12号住居遺物出土状況 西



12号住居炉全景 南



12号住居全景 南西



14号住居炉全景 北



14号住居炉遺物出土狀況 北



14号住居遺物出土狀況 南



15号住居全景 北



16号住居全景 北西



16号住居掘り方全景 北西



16号住居カマド全景 西



16号住居カマド全景 西



16号住居カマド掘り方全景 西



17号住居全景 北



1a号土坑全景 北



34号土坑全景 西



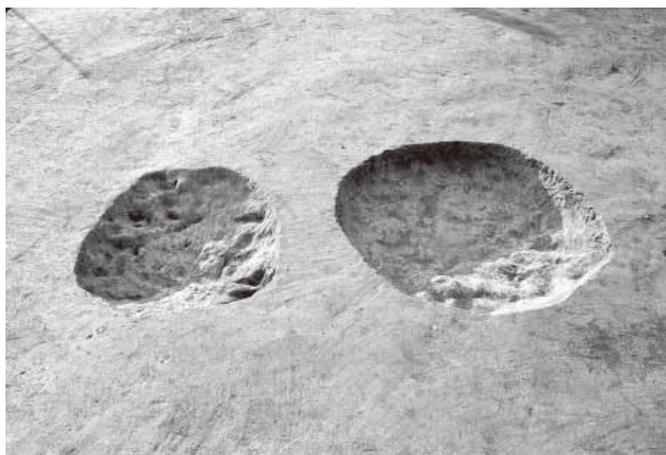
61号土坑全景 西



65号土坑全景 北



74号土坑全景 北



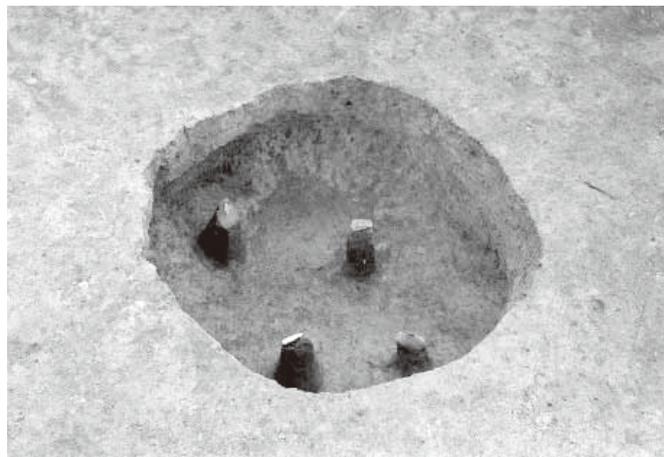
109·110号土坑全景 北



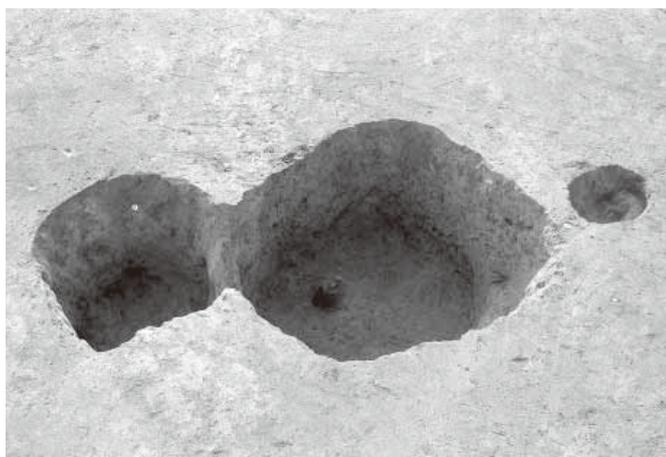
115号土坑全景 北



63·117·118号土坑全景 北



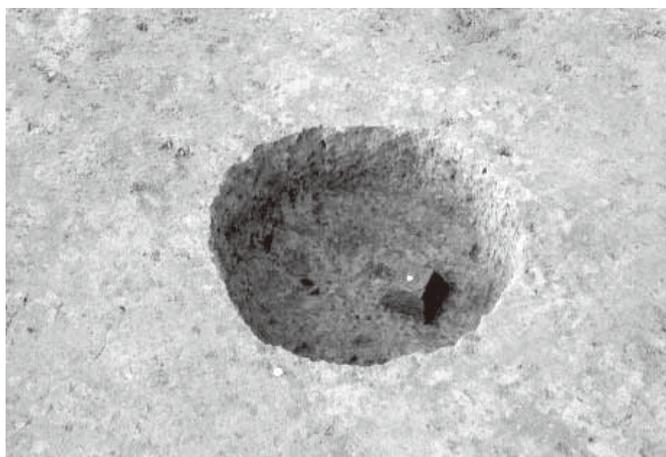
156号土坑全景 北



171·172·173号土坑全景 北東



180号土坑全景 北東



181号土坑全景 南東



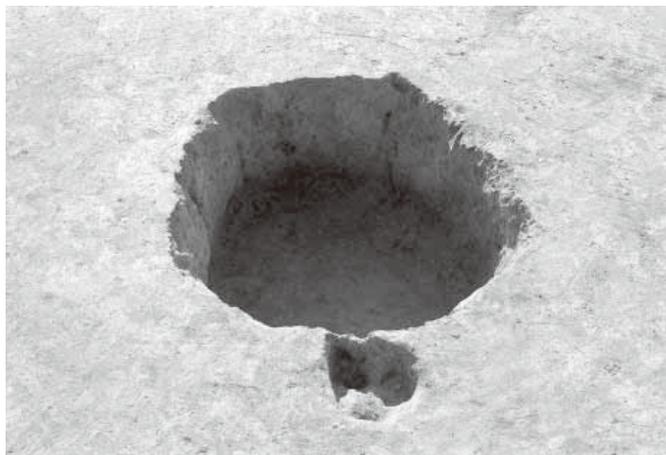
183号土坑遺物出土狀況 北



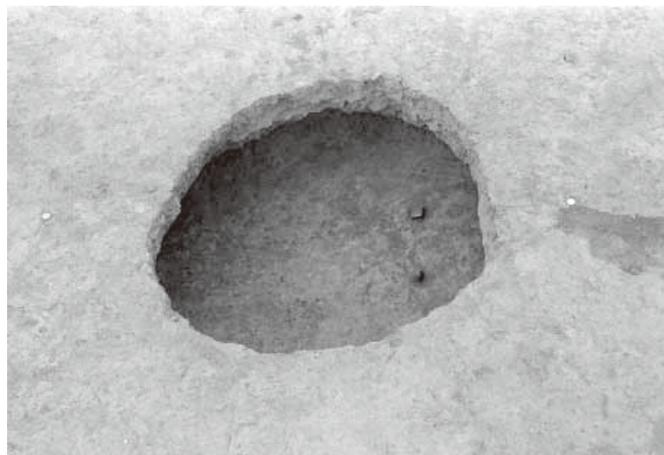
183号土坑全景 北



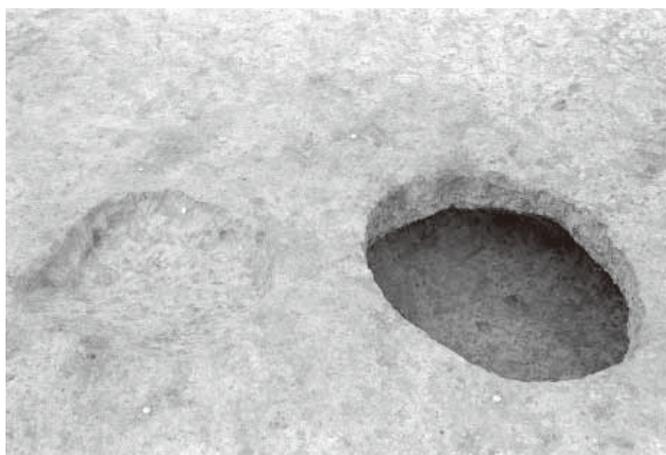
187号土坑全景 東



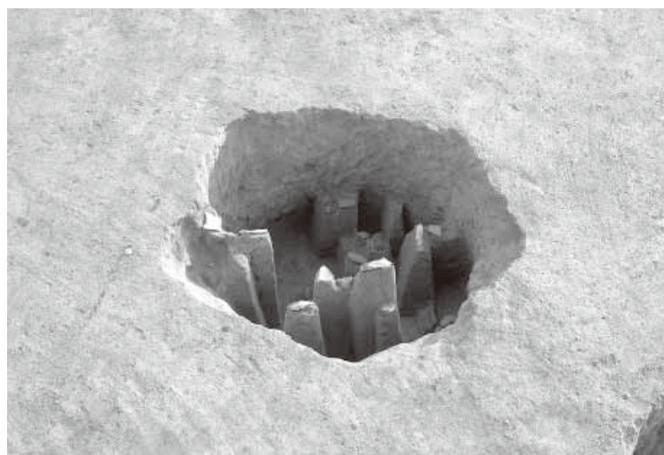
191号土坑全景 北東



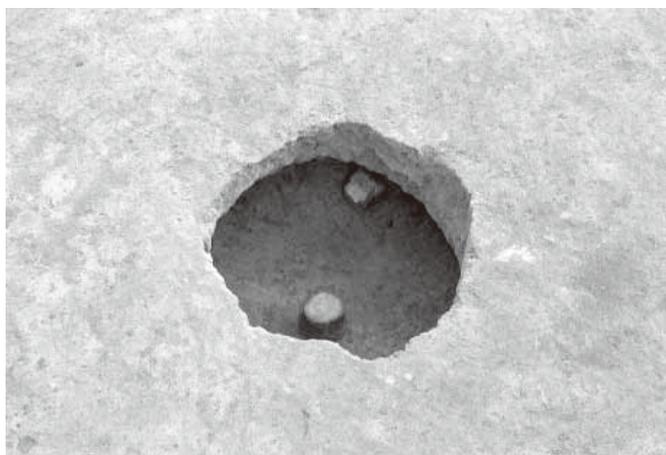
214号土坑全景 南東



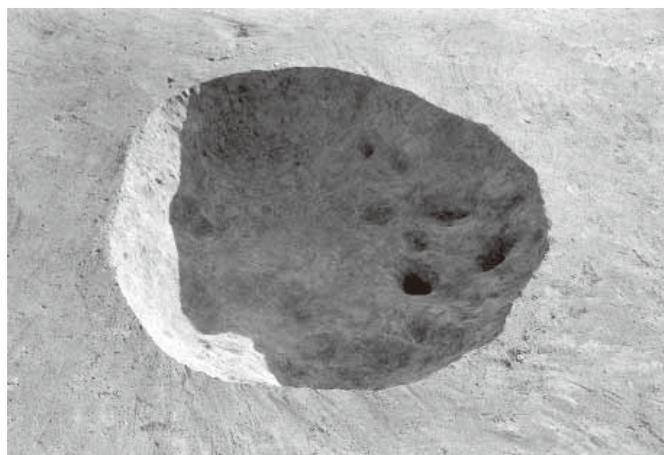
243・300号土坑全景 北



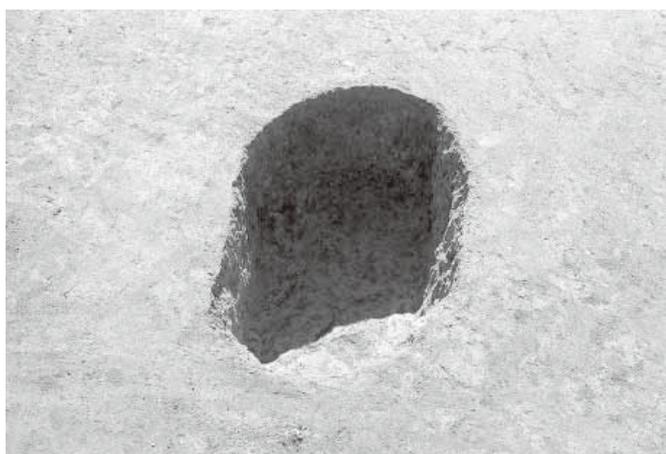
256号土坑全景 北



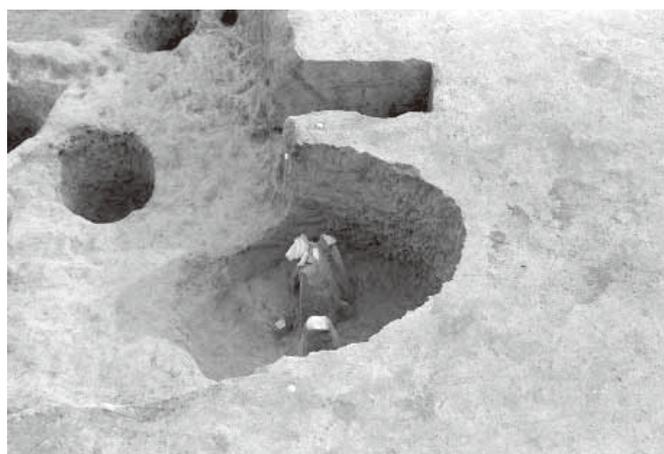
302号土坑全景 北



325号土坑全景 北



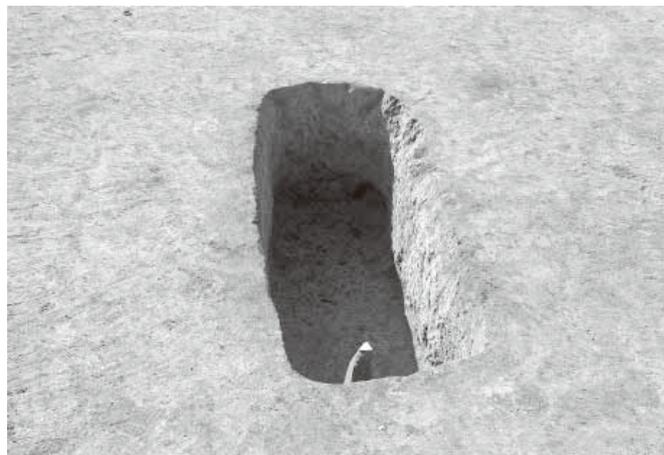
334号土坑全景 北



338号土坑全景 南西



340号土坑全景 東



343号土坑全景 北



670号土坑全景 北



682号土坑全景 北東



683・684号土坑全景 北東



685号土坑全景 北



1号井戸全景 南西



1号溝全景 南西



2号溝全景 北東



4・6号溝全景 南西



1号堀全景 南西



1号堀全景 南西



1号堀セクション 南西



2号堀を含む市道西全景 南



2号堀全景 南西



2号堀全景 北東



2号堀北セクション 南西



1号道全景 北



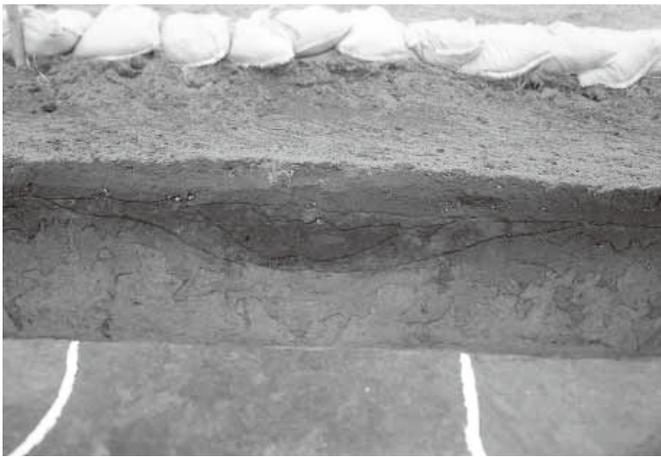
1号道全景 北



1号道全景 北



1号道C-C'セクション 南



2号道A-A'セクション 南



2号道全景 北



2号道全景 南



3号道全景 北



4号道全景 北



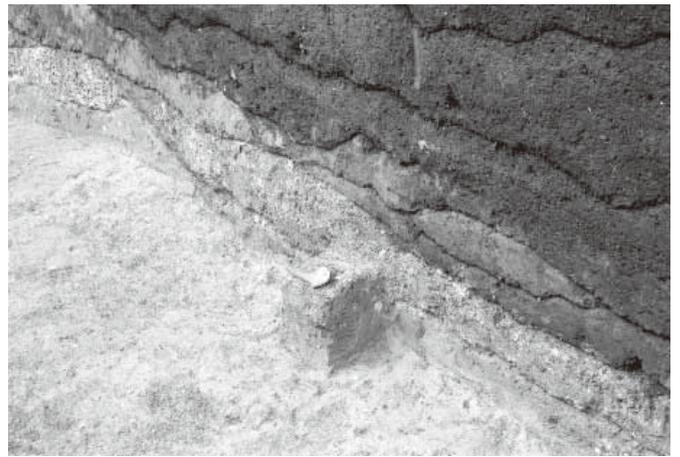
1号墳地山採掘坑全景 南



1号墳道路西周堀全景 南



1号墳地山採掘坑全景 北



1号墳地山採掘坑底面遺物出土状況 南西



1号墳地山採掘坑壁内遺物出土状況 北東



1号墳地山採掘坑セクション 南



1号墳地山採掘坑セクション 南西



1号墳地山採掘坑セクション 南西



1号墳地山採掘坑セクション 南東



1号墳地山採掘坑B-B'セクション 南東



2号墳全景 南



2号墳石室全景 南



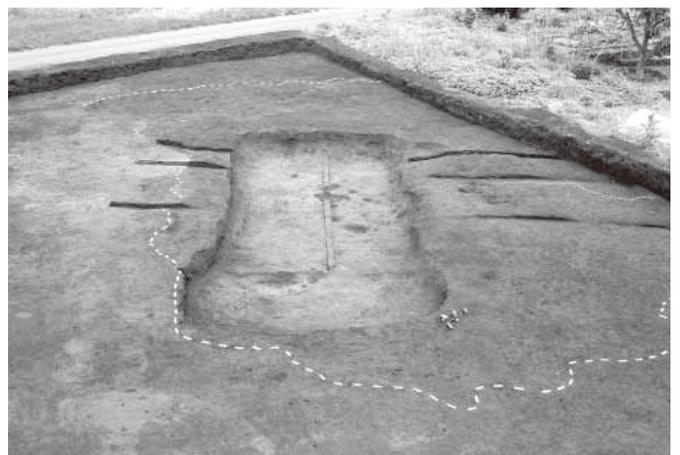
2号墳全景 南



2号墳全景 東



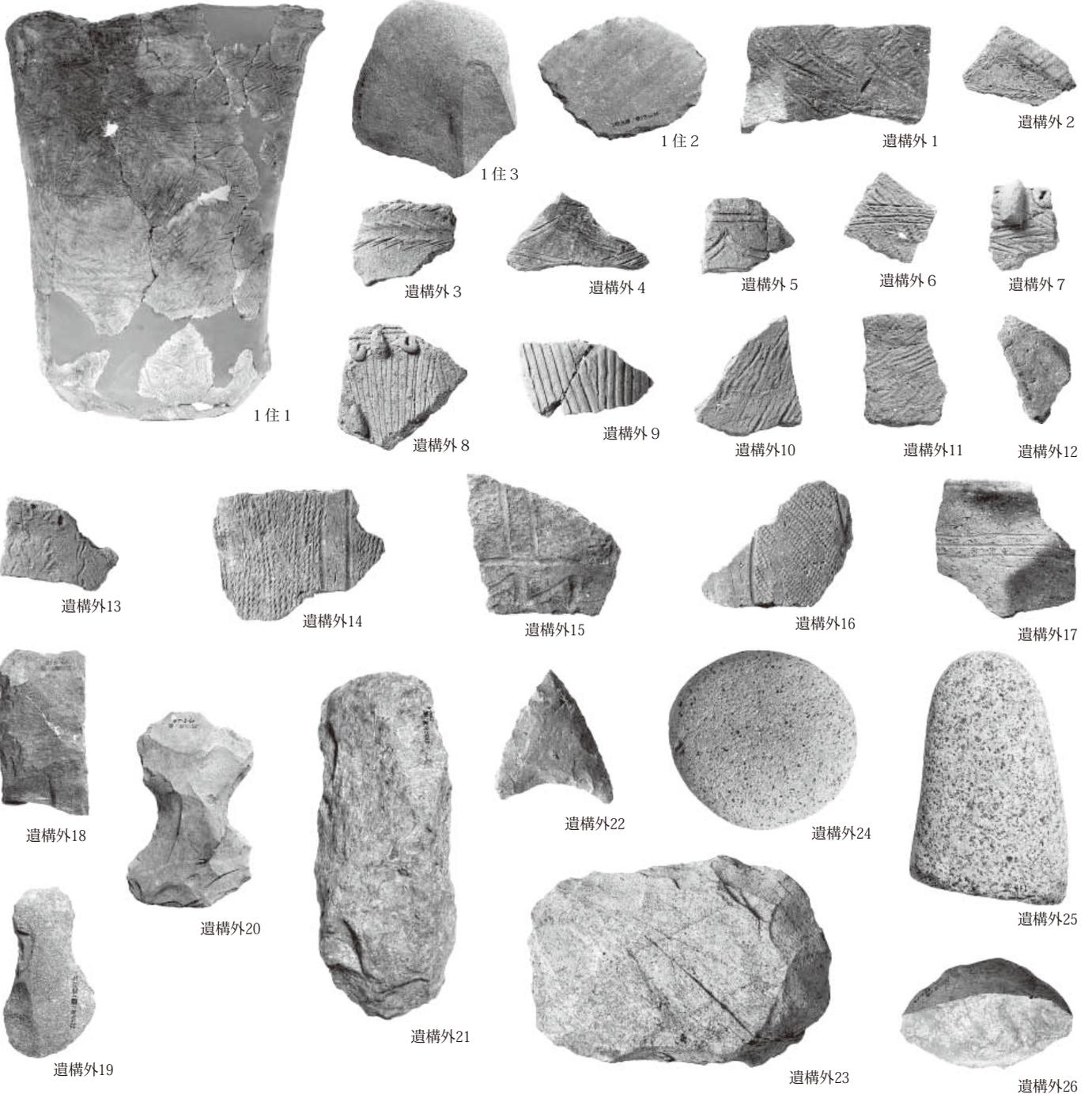
2号墳遺物出土状況 北



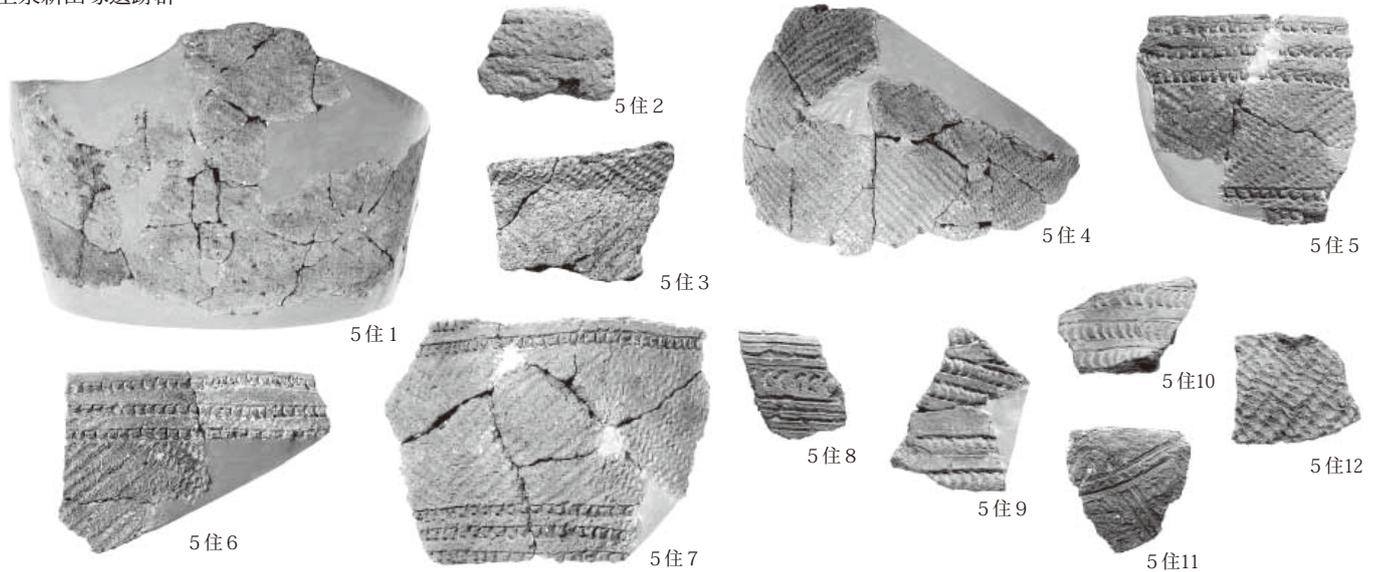
2号墳石室掘り方全景 南

PL.28

上泉唐ノ堀遺跡

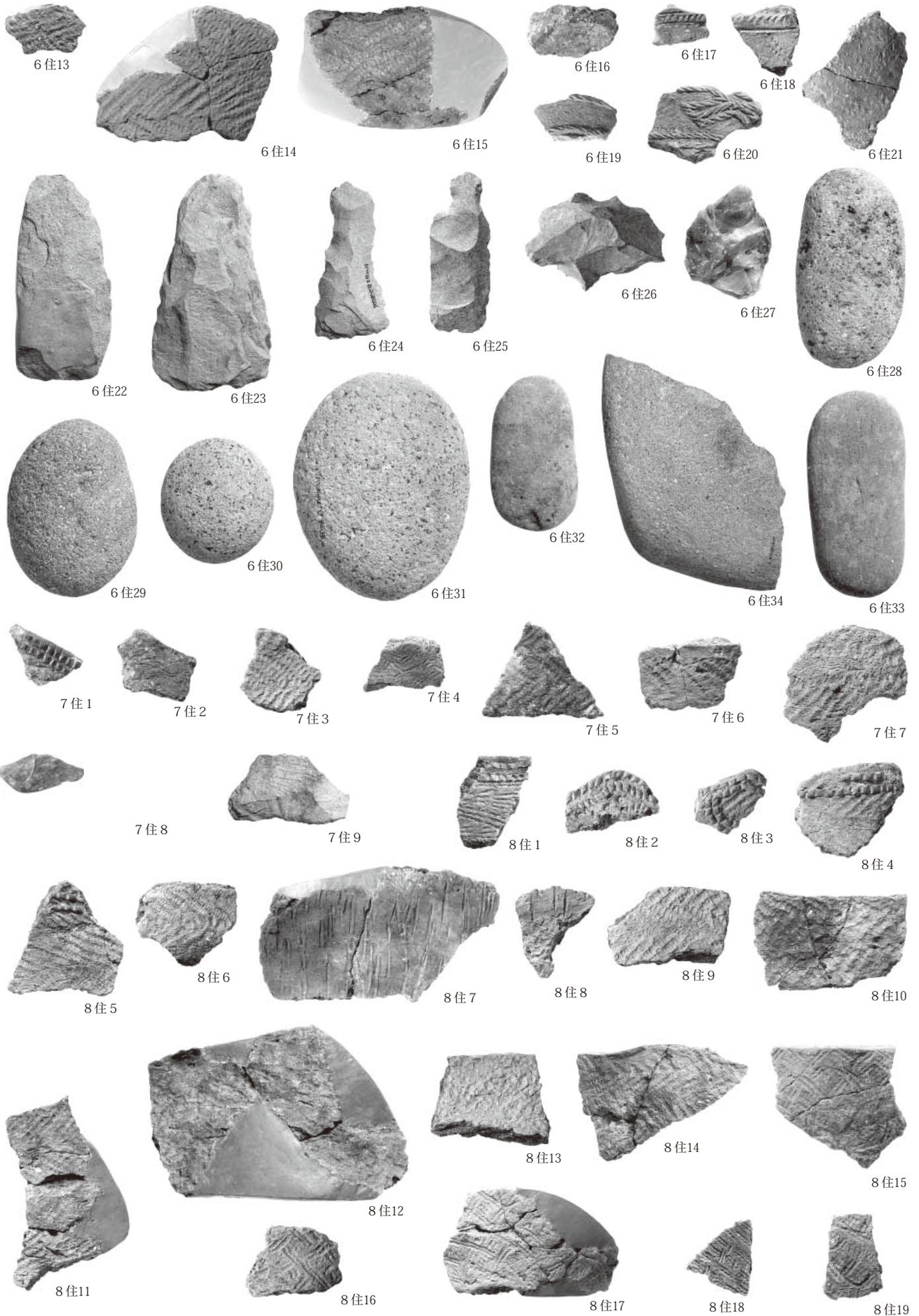


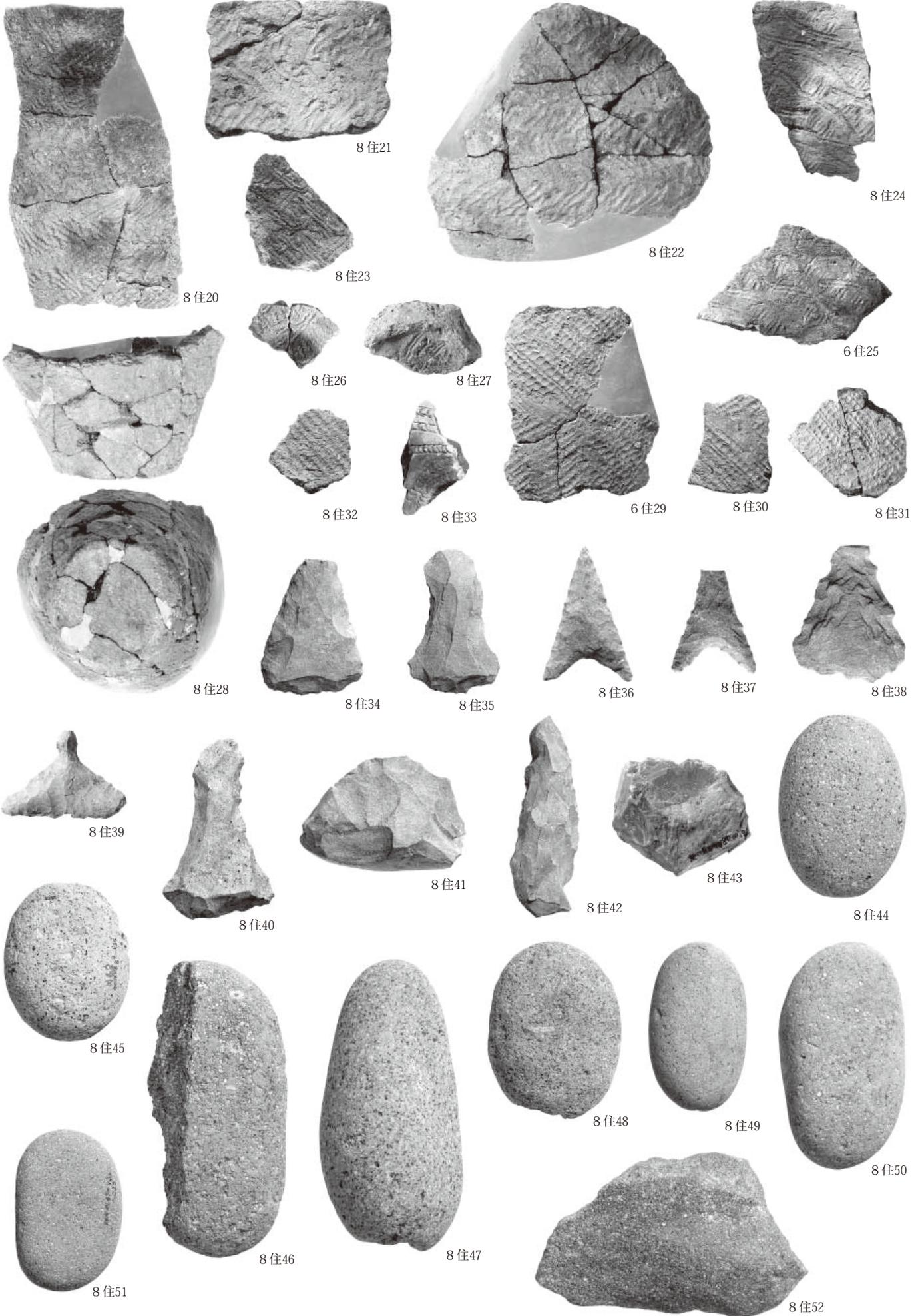
上泉新田塚遺跡群





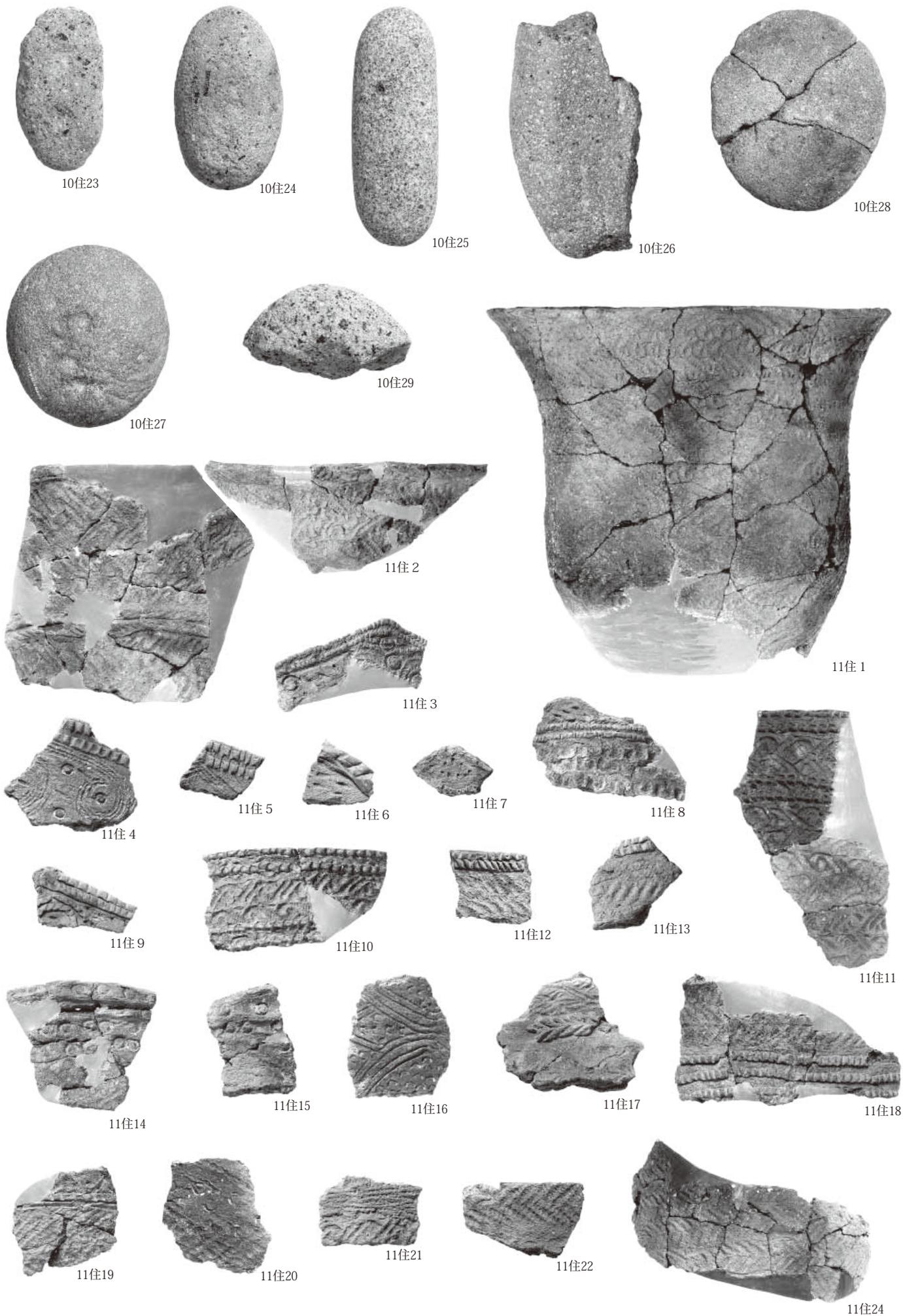
PL.30



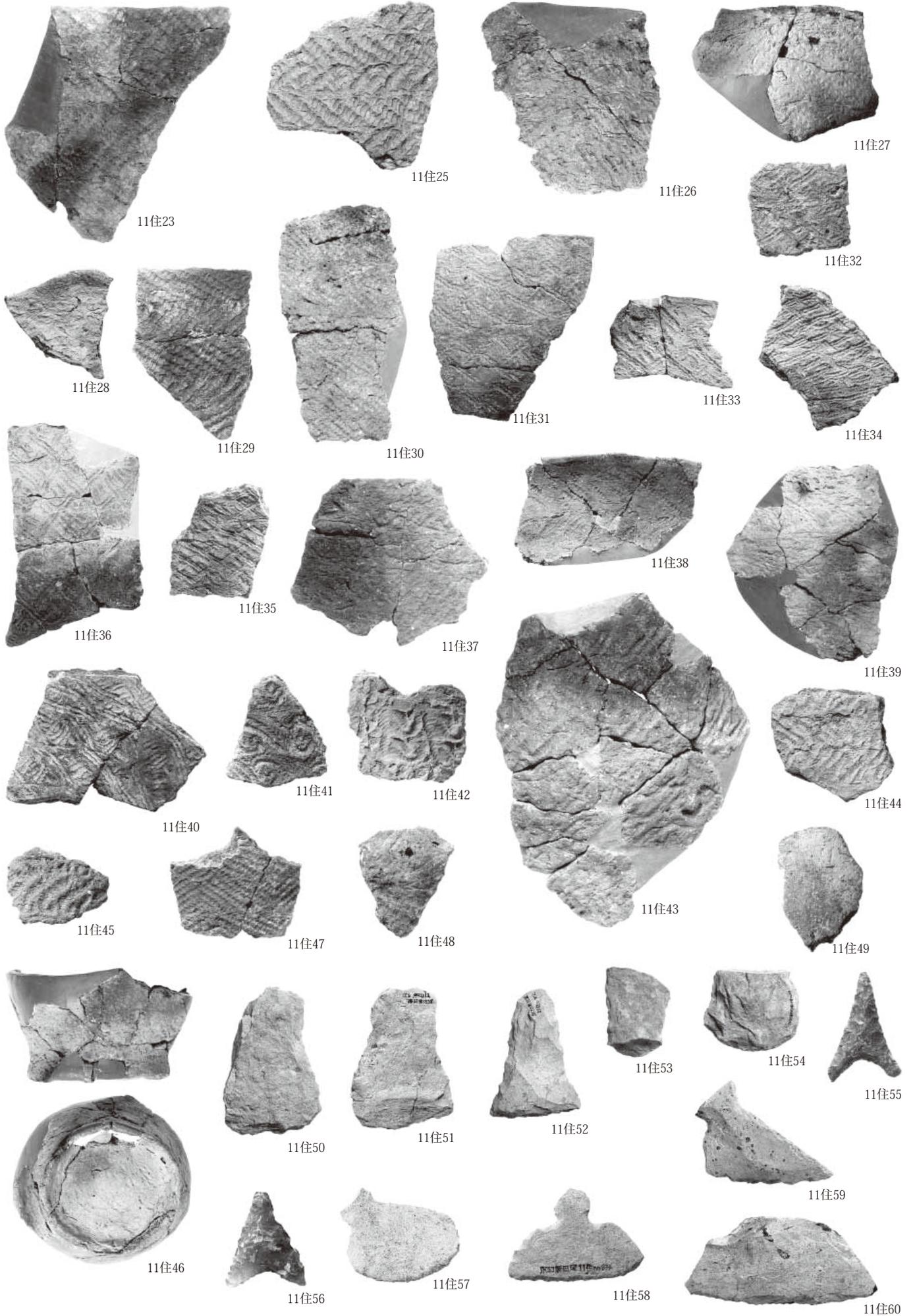


PL.32





PL.34





11住61



11住62



11住63



11住64



11住65



11住66



11住67



11住68



11住69



11住70



11住71



11住72



11住73



11住74



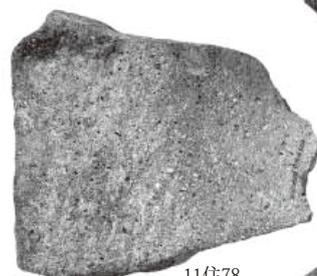
11住75



11住76



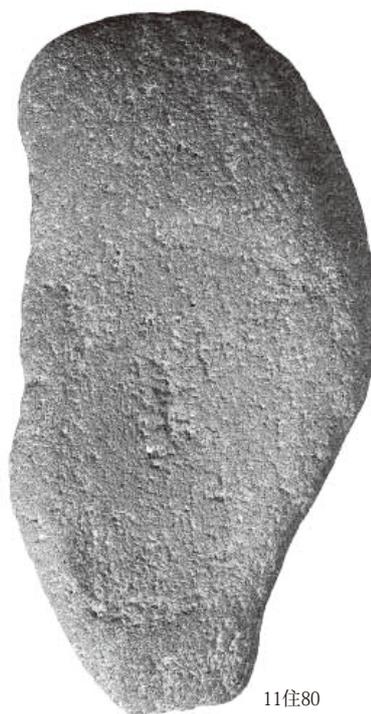
11住77



11住78



11住79



11住80



11住82



11住83



11住81



12住 1



12住 2



12住 3



12住 4



12住 5



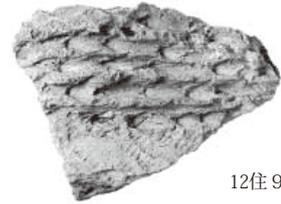
12住 6



12住 7



12住 8



12住 9



12住10



12住11



12住12



12住13



12住14



12住15



12住16



12住17



12住18



12住19



12住20



12住21



12住22



12住23



12住24



12住25



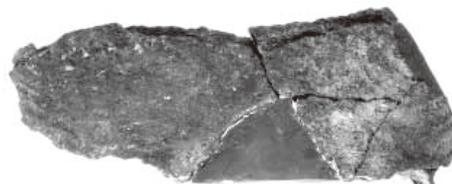
12住26



12住27



12住28



12住29



12住30



PL.38



14住1



14住2



14住3



14住4



14住5



14住6



14住7



14住8



14住9



14住10



14住12



14住13



14住14



14住15



14住16



14住11



14住17



14住18



14住19



14住20



14住21



17住1



17住2



17住3



17住4



17住7



17住8



14住9



17住10



17住5



17住6



61坑1



61坑2



61坑3



61坑4



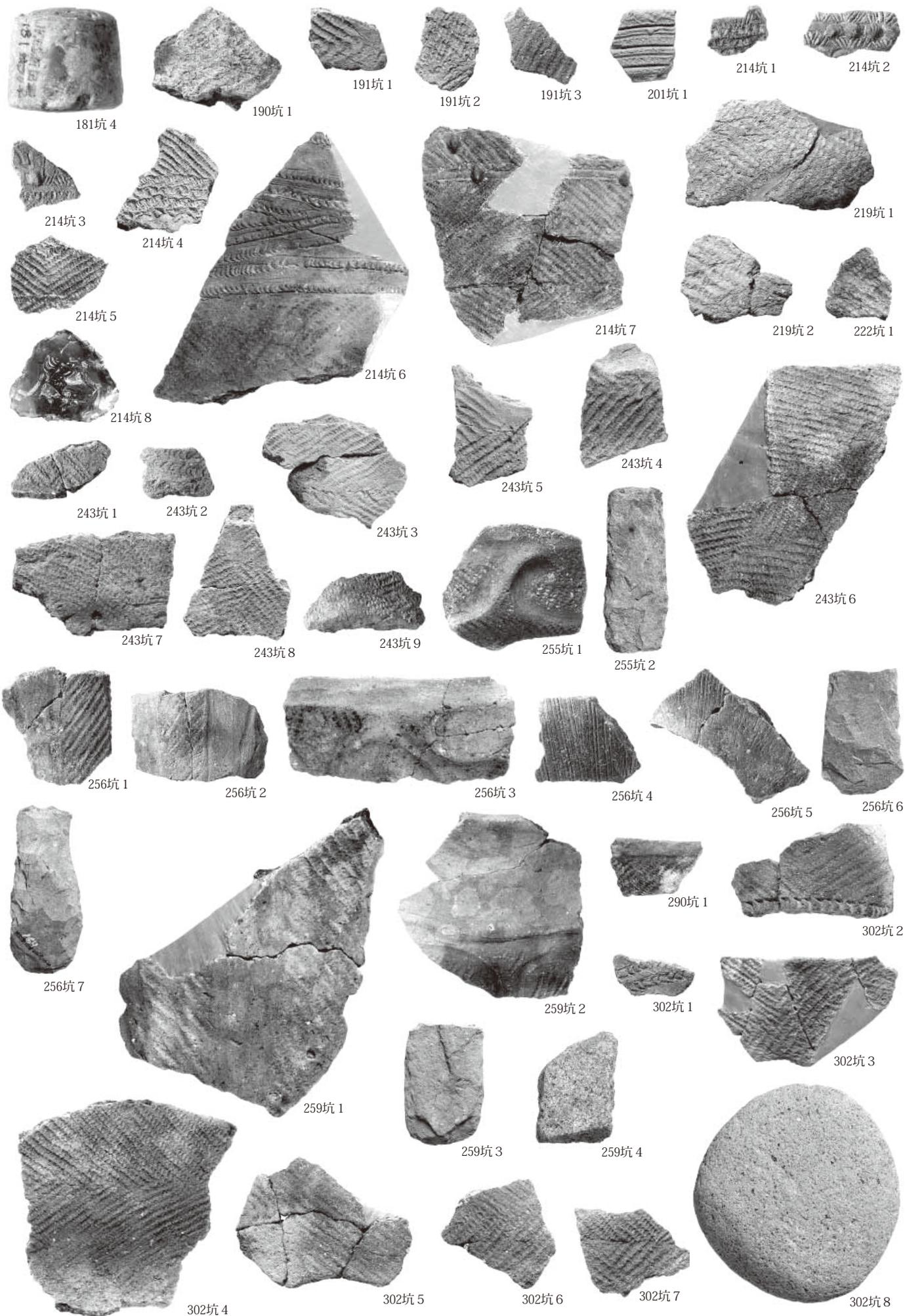
61坑5

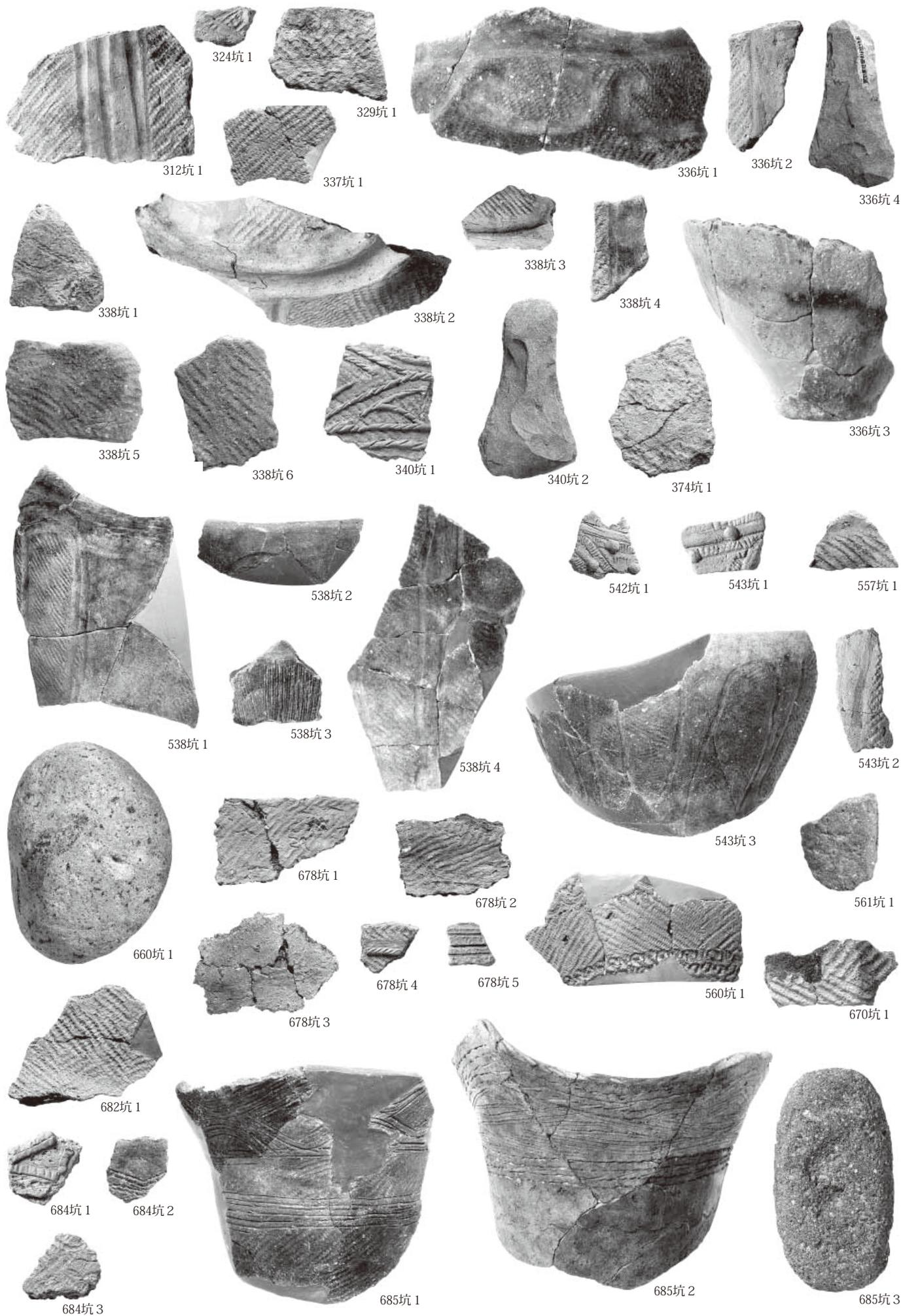


61坑6

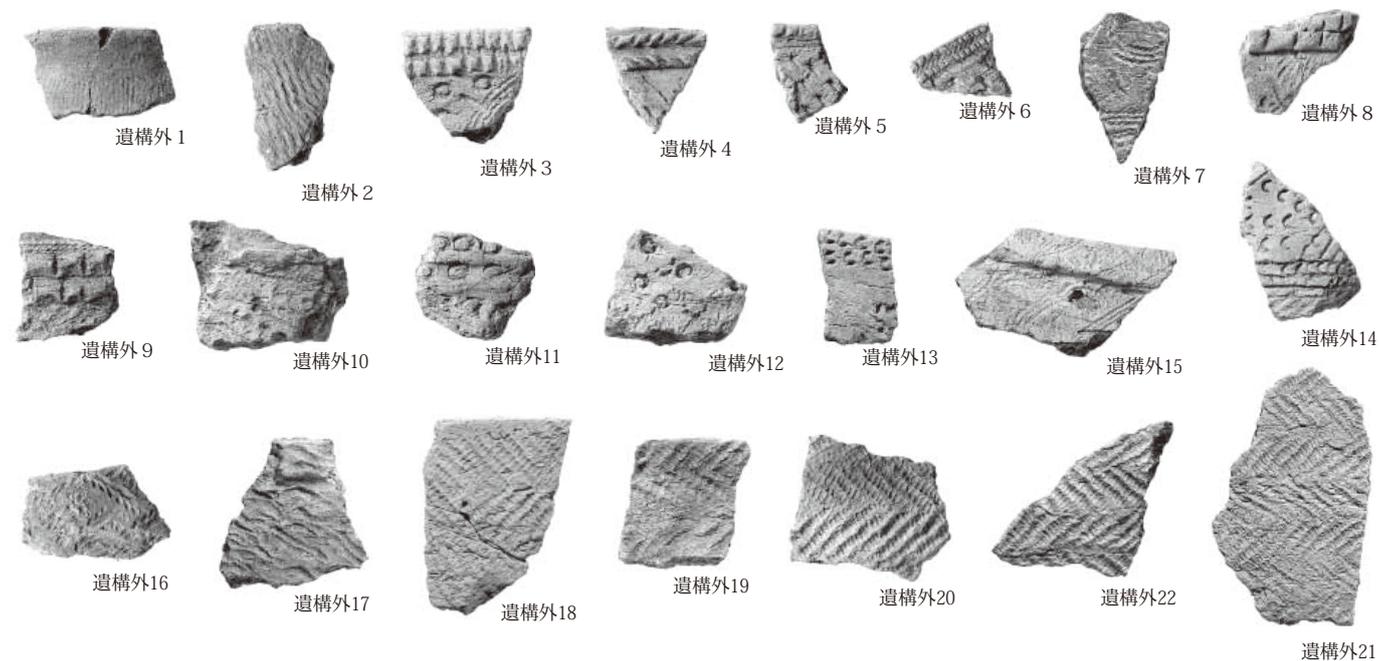
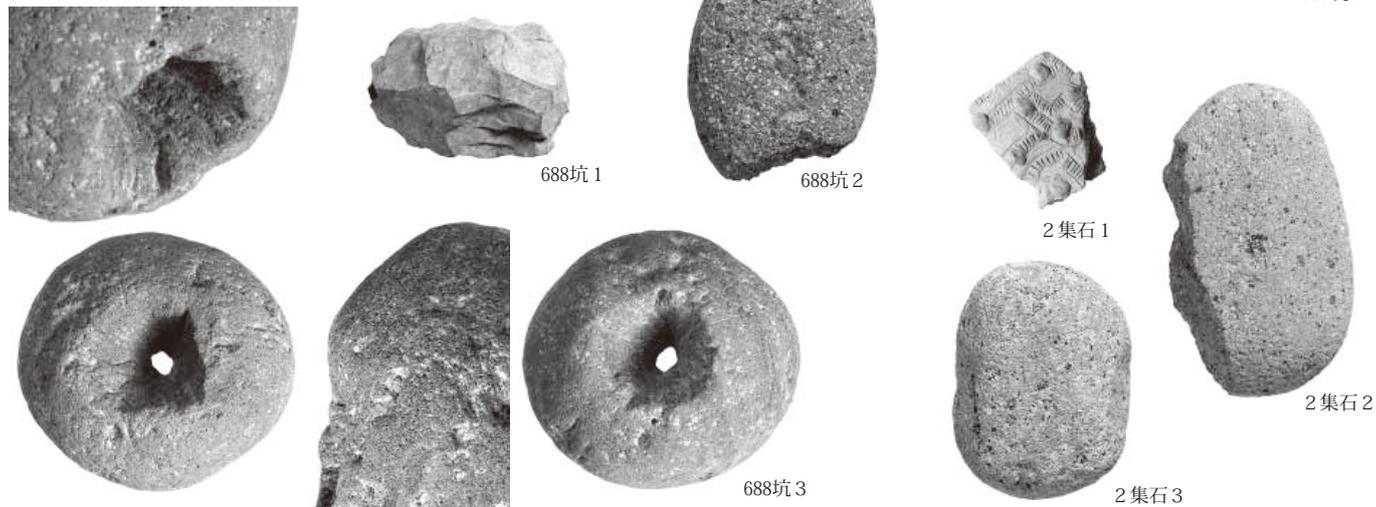
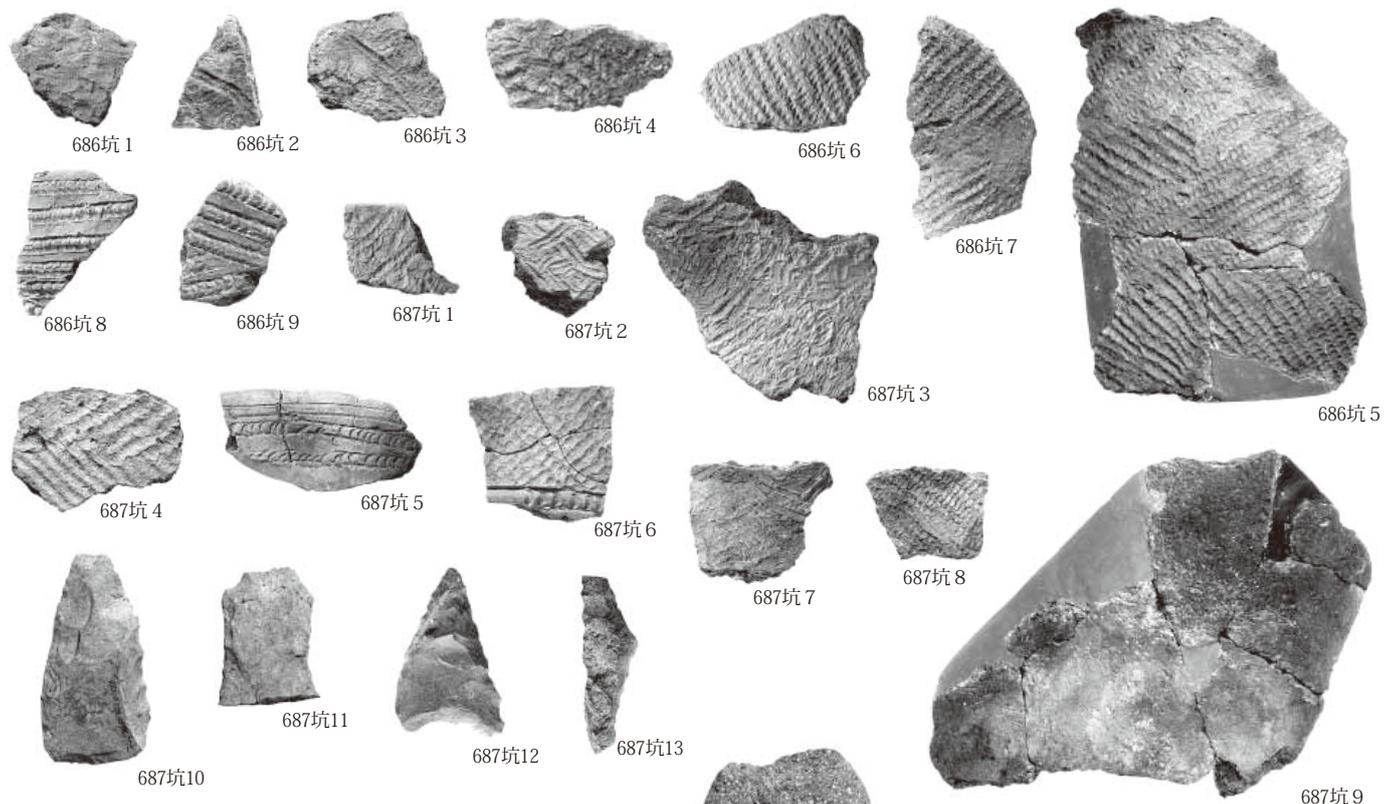


PL.40





PL.42

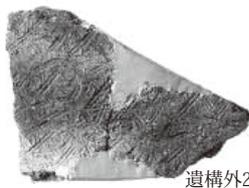




遺構外23



遺構外24



遺構外25



遺構外26



遺構外27



遺構外28



遺構外29



遺構外30



遺構外31



遺構外32



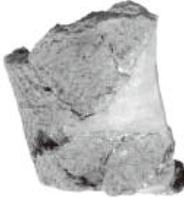
遺構外33



遺構外34



遺構外35



遺構外36



遺構外37



遺構外38



遺構外39



遺構外40



遺構外41



遺構外42



遺構外43



遺構外44



遺構外45



遺構外46



遺構外47



遺構外48



遺構外49



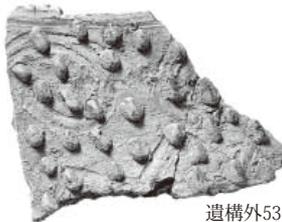
遺構外50



遺構外51



遺構外52



遺構外53



遺構外54



遺構外55



遺構外56



遺構外57



遺構外58



遺構外59



遺構外60



遺構外61



遺構外63



遺構外64



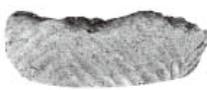
遺構外65



遺構外66



遺構外67



遺構外68



遺構外69



遺構外70



遺構外71



遺構外72



遺構外73



遺構外74



遺構外75

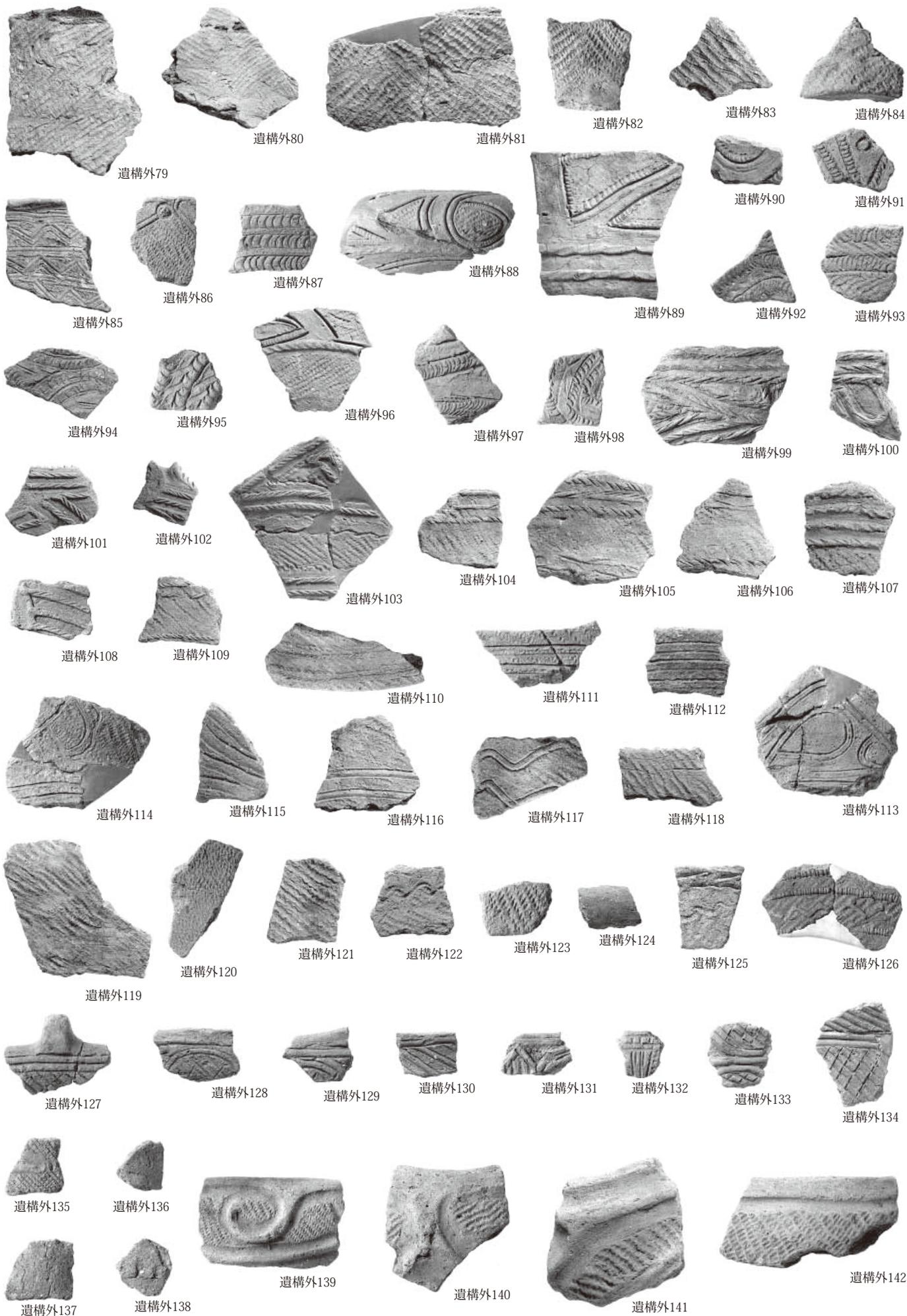


遺構外76



遺構外77

遺構外78





遺構外143



遺構外144



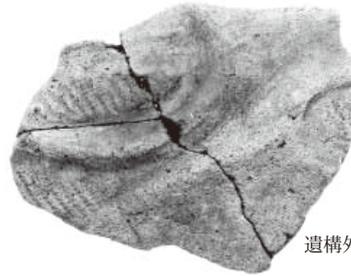
遺構外145



遺構外147



遺構外146



遺構外148



遺構外149



遺構外150



遺構外151



遺構外152



遺構外153



遺構外155



遺構外154



遺構外156



遺構外157



遺構外158



遺構外159



遺構外160



遺構外161



遺構外162



遺構外166



遺構外163



遺構外164



遺構外165



遺構外170



遺構外167



遺構外168



遺構外169



遺構外171



遺構外172



遺構外173



遺構外174



遺構外176



遺構外175



遺構外177



遺構外179



遺構外180



遺構外181



遺構外178



遺構外182



遺構外183



遺構外184



遺構外185



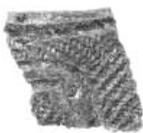
遺構外186



遺構外187



遺構外188



遺構外189



遺構外191



遺構外190



遺構外192



遺構外193



遺構外194



遺構外195



遺構外196



遺構外197



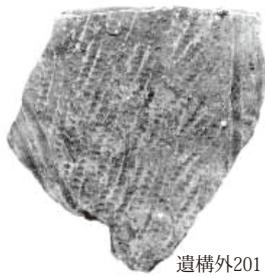
遺構外198



遺構外199



遺構外200



遺構外201



遺構外202



遺構外203



遺構外204



遺構外205



遺構外206



遺構外208



遺構外207



遺構外209



遺構外210



遺構外 1



遺構外 2



遺構外 3



遺構外 4



遺構外 5



遺構外 6



遺構外 7



遺構外 8



遺構外 9



遺構外10



遺構外11



遺構外12



遺構外13



遺構外14



遺構外15



遺構外16



遺構外17



遺構外18



遺構外19



遺構外20



遺構外21



遺構外22



遺構外23



遺構外24



遺構外26



遺構外25



遺構外27



遺構外28



遺構外29



遺構外30



遺構外31



遺構外32



遺構外33



遺構外34



遺構外35



遺構外36



遺構外37



遺構外38



遺構外39



遺構外40



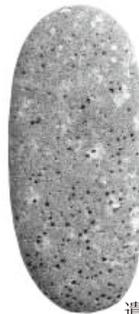
遺構外41



遺構外42



遺構外43



遺構外44



遺構外45



遺構外46



遺構外47



遺構外48



遺構外49



遺構外50



遺構外51



遺構外52



遺構外53



遺構外54



遺構外55



遺構外56



遺構外57



3住1



3住2



3住3



3住4



3住5



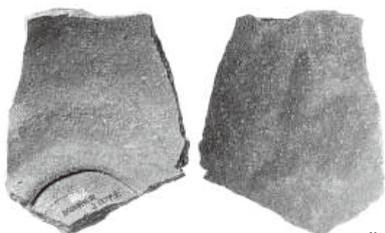
3住6



3住7



3住8



3住9



3住10



3住11



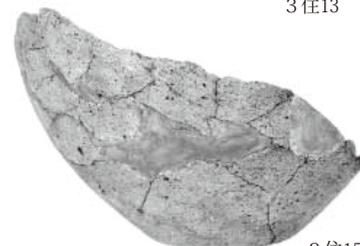
3住12



3住13



3住14



3住15



3住16



3住17



1墳1



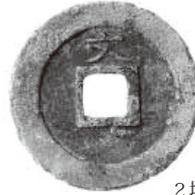
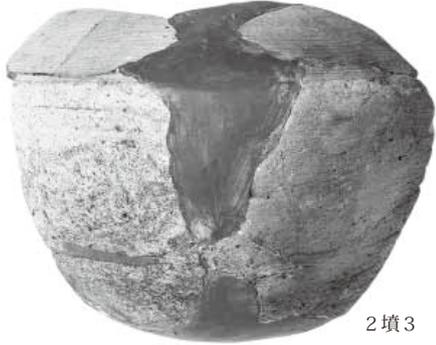
2墳1



2墳2



2墳5

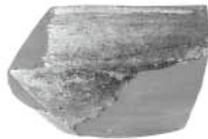


2墳3

2墳7

2墳8

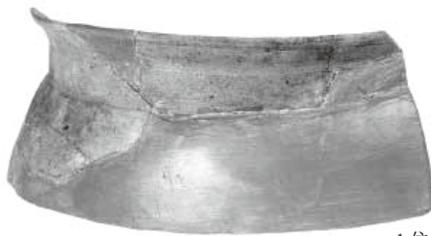
2墳12



1住1



1住3



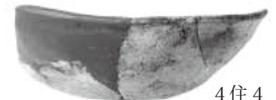
1住4



1住2



4住3



4住4



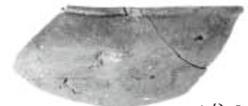
4住1



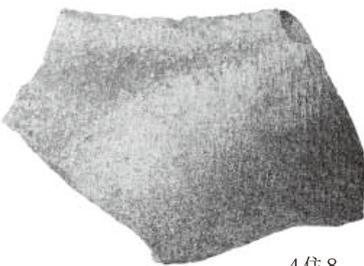
4住2



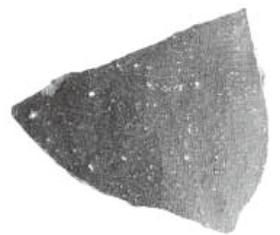
4住5



4住6



4住8



4住7



4住11



4住12



4住13



4住14



4住9



16住1



16住3



4住10



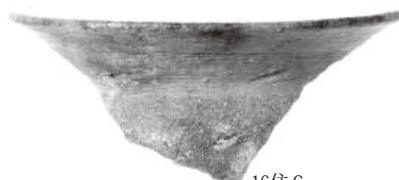
16住2



16住4



16住5



16住6



16住7



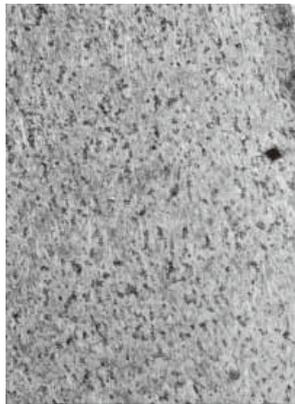
16住8



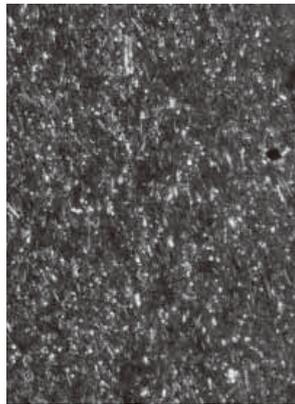
2溝1



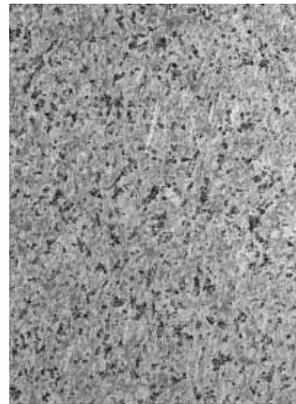
遺構外1



資料番号6 (Aタイプ) a



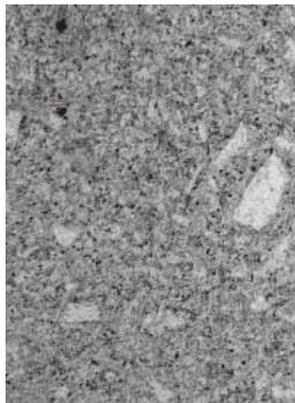
a'



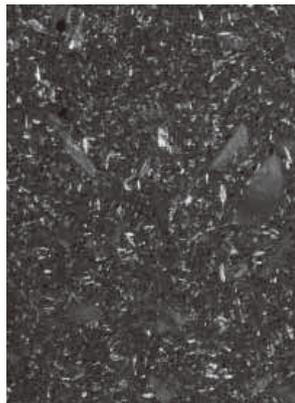
b



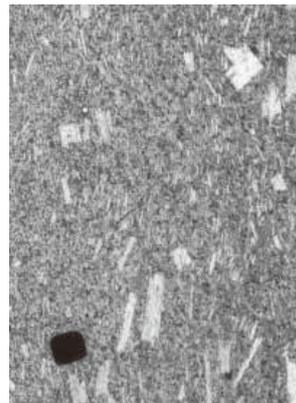
b'



資料番号28 (Bタイプ) a



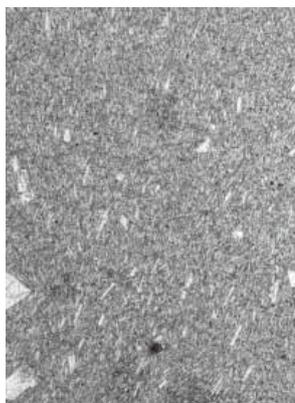
a'



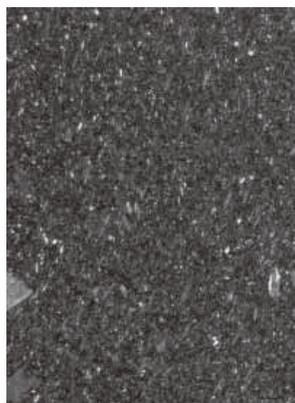
b



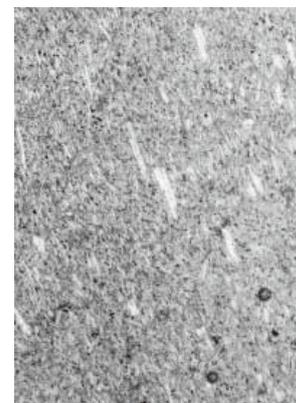
b'



資料番号1 (Cタイプ) a



a'



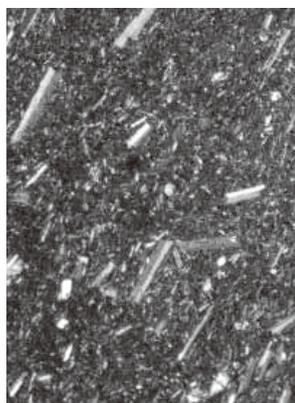
資料番号3 (Dタイプ) a



a'



資料番号13 (Eタイプ) a



a'

a, b : 平行ニコル
a', b' : 直交ニコル (× 50)

報告書抄録

書名ふりがな	かみいずみからのほりいせき・かみいずみにつたづかいせきぐん
書名	上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	522
編著者名	女屋和志雄 / 岩崎泰一 / 橋本淳 / 笹澤泰史 / 木津博明 / 神谷佳明
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20111130
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かみいずみからのほりいせき
遺跡名	上泉唐ノ堀遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみいずみまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上泉町
市町村コード	10201
遺跡番号	774
北緯(日本測地系)	362416
東経(日本測地系)	1390736
北緯(世界測地系)	362428
東経(世界測地系)	1390725
調査期間	20060701-20070331/20070401-20070531/20080401-20080630
調査面積	6,808.04
調査原因	道路建設工事
種別	集落その他
主な時代	縄文 / 平安 / 近世
遺跡概要	集落 - 縄文 - 住居1 + 土坑9 + 土器 + 石器 / 近世 - 溝1 + 道1 + 土器 + 石器 + 金属製品
特記事項	縄文時代前期の集落
要約	遺跡は、西の上泉新田塚遺跡群と東の7-2工区上泉唐ノ堀遺跡との間にある。同一の台地上にあって、両遺跡とは市道を境に区別する。縄文時代の集落は、諸磯b式期の住居1軒と同時期とみられる土坑からなる。7-2工区で検出された集落の西縁辺部にあたる。溝は3時期以上の変遷があり、最も新しい時期には道の側溝となっている。現在の筆境と一致する所もあり、区画をしていた名残りとみられる。

書名ふりがな	かみいずみからのほりいせき・かみいずみにつたづかいせきぐん
書名	上泉唐ノ堀遺跡・上泉新田塚遺跡群
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	522
編著者名	女屋和志雄 / 岩崎泰一 / 橋本淳 / 笹澤泰史 / 木津博明 / 神谷佳明
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20111130
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かみいずみにつたづかいせきぐん
遺跡名	上泉新田塚遺跡群
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかみいずみまち
遺跡所在地	群馬県前橋市上泉町
市町村コード	10201
遺跡番号	775
北緯(日本測地系)	362426
東経(日本測地系)	1390730
北緯(世界測地系)	362438
東経(世界測地系)	1390719
調査期間	20060701-20070331/20070401-20070531/20080401-20080630
調査面積	26,526.54
調査原因	道路建設工事
種別	集落 / 墳墓 / その他
主な時代	縄文 / 古墳 / 平安 / 近世
遺跡概要	集落 - 縄文 - 住居11 + 土坑97 + 集石2 + 土器 + 石器 / 古墳 - 住居1 + 古墳2 + 土器 + 金属製品 / 奈良・平安 - 住居4 + 道1 + 井戸1 + 土器 + 金属製品 / 中・近世 - 道3 + 溝6 + 堀2 + 土器 + 金属製品
特記事項	縄文時代前期二ツ木式～黒浜式の集落
要約	上泉唐ノ堀遺跡とは同じ台地にあり、市道を間にはさんで西に隣接する。旧石器時代～平安時代、中世、近世にまたがる複合遺跡。縄文時代の集落は、台地の西縁辺部寄りと中央部近くにある2群で構成されるとみられ、西縁辺部が先行している。古墳時代は、台地の中央部が墓域、西が居住域である。1号墳は上毛古墳総覧桂萱村第51号新田塚古墳で周堀とその内側で地山まで掘り込んだ採掘坑を検出した。2号墳は、上毛古墳総覧記載漏れ古墳で、直径が推定25m、南に開口する横穴式石室である。1号堀は、伝承のカラノボリで、As-B降下後に掘削されていて、数時期の変遷を経て埋没していることが判明した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第522集

上泉唐ノ堀遺跡
上泉新田塚遺跡群

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

平成23年(2011)11月22日 印刷

平成23年(2011)11月30日 発行

編集・発行/財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/上武印刷株式会社

